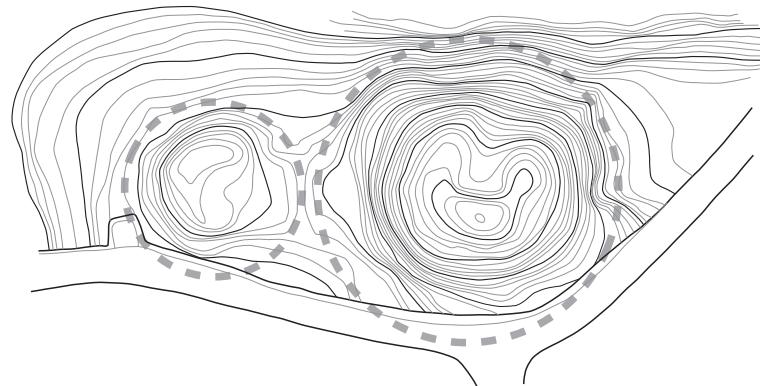


横尾遺跡 10

—大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2016
大分市教育委員会

横尾遺跡 10

－大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2016

大分市教育委員会

序 文

本報告書は、大分市横尾地区において平成3年度から行われた横尾土地区画整理事業に伴う第1次発掘調査から平成26年度の第153次発掘調査までのうち、16地点分の調査成果を収録したものです。

横尾遺跡は、大野川の分流、乙津川の左岸の鶴崎台地上にある、旧石器時代から明治時代までおよそ二万年間の横尾地区の歴史を物語る遺跡です。

今回報告する調査地点は、横尾遺跡の南に位置する有田古墳（第2次調査）とその北側の範囲を対象としたものです。有田古墳では、2基の円墳からなる古墳調査を実施しました。隣接する調査区からこれまでに墳丘が削平された2基の円墳が確認されており、「七塚」という古墳が群集していた事を示すと考えられる地元伝承との関連が注目されます。また、有田古墳の北側の調査区では、中世の在地領主の館と推定される一辺70m規模の堀で囲まれた方形館が確認されました。これまでの調査結果と合わせて、4ヶ所の方形館跡が確認された事から、有力者層が居住する重要な場所であったことなど、貴重な成果を得ることができました。

本書が地元の皆さんとともに多くの方々の文化財愛護への理解を深める一助となり、市民の皆さんに郷土の歴史学習資料として幅広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査事業の実施にあたり、ご配慮、ご協力くださいました横尾地区的皆さまをはじめ、関係各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成28年3月16日

大分市教育委員会

教育長 三浦 享二

例 言

- 1 本書は、大分市教育委員会が大分市大字横尾において、大分市横尾土地区画整理事業に伴い、平成3年度から平成26年度に調査を実施した横尾遺跡16地点の成果を記録した発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成3年度～24年度の15地点分に関しては大分市教育委員会文化財課が主体となり実施した。平成26年度の1地点(第153次調査)に関しては大分市教育委員会文化財課(監督員 塩地潤一)の委託を受け、株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者 三ツ股正明)が実施した。
- 3 調査担当は、第1表(調査地及び担当者一覧)のとおりである。
- 4 遺構の実測及び個別遺構の写真撮影を、各調査担当が行ったほか、株式会社文化財環境整備研究所(第64・65・66・74次調査)、株式会社埋蔵文化財サポートシステム(第97・81次調査)、株式会社九州文化財総合研究所(第153次調査)が大分市教育委員会文化財課の委託を受け行った。
- 5 各調査地点の全体写真撮影については、株式会社写測エンジニアリング(第63・64・65・66・74次調査)、九州航空株式会社(第79次調査)、株式会社埋蔵文化財サポートシステム(第81次調査)、株式会社九州文化財総合研究所(第153次調査)が大分市教育委員会文化財課の委託を受けて行った。
- 6 報告書に記載した出土遺物の実測・製図は、株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者 木村藍子)が大分市教育委員会の委託を受け行った。一部の遺物実測を、大分市教育委員会文化財課整理作業スタッフ(第I章に記す)が行った。
- 7 遺構配置図・全体遺構図・個別遺構図の製図は、株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者 木村藍子)が大分市教育委員会の委託を受け行った。また一部の遺構図の製図は永井美香(大分市教育委員会文化財課嘱託)が行った。総括図版の作成・製図作業は永井美香・留野優兵(大分市教育委員会文化財課嘱託)が行った。
- 8 遺物の写真撮影は、各担当者がおこなったほか、大分市教育委員会文化財課の委託を受け、株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者 木村藍子)がデジタル写真撮影を行った。
- 9 本書の執筆は、以下のとおりである。
第I章 永井美香(大分市教育委員会文化財課嘱託)
第II・III・IV章 木村藍子(株式会社九州文化財総合研究所)
- 10 本書の編集は、大分市教育委員会と株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者 木村藍子)の双方の企画の下、株式会社九州文化財総合研究所(業務責任者 木村藍子)が行った。
- 11 本報告書巻末の写真図版および掲載できなかった写真図版を付属のDVDに収容している。詳細はDVD内の「はじめにお読み下さい」を参照頂きたい。
- 12 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター(大分市大字田原337番地の5)に収蔵・保管している。
- 13 報告書の作成業務については、『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書作成指針』に基づき実施している。

凡 例

凡例

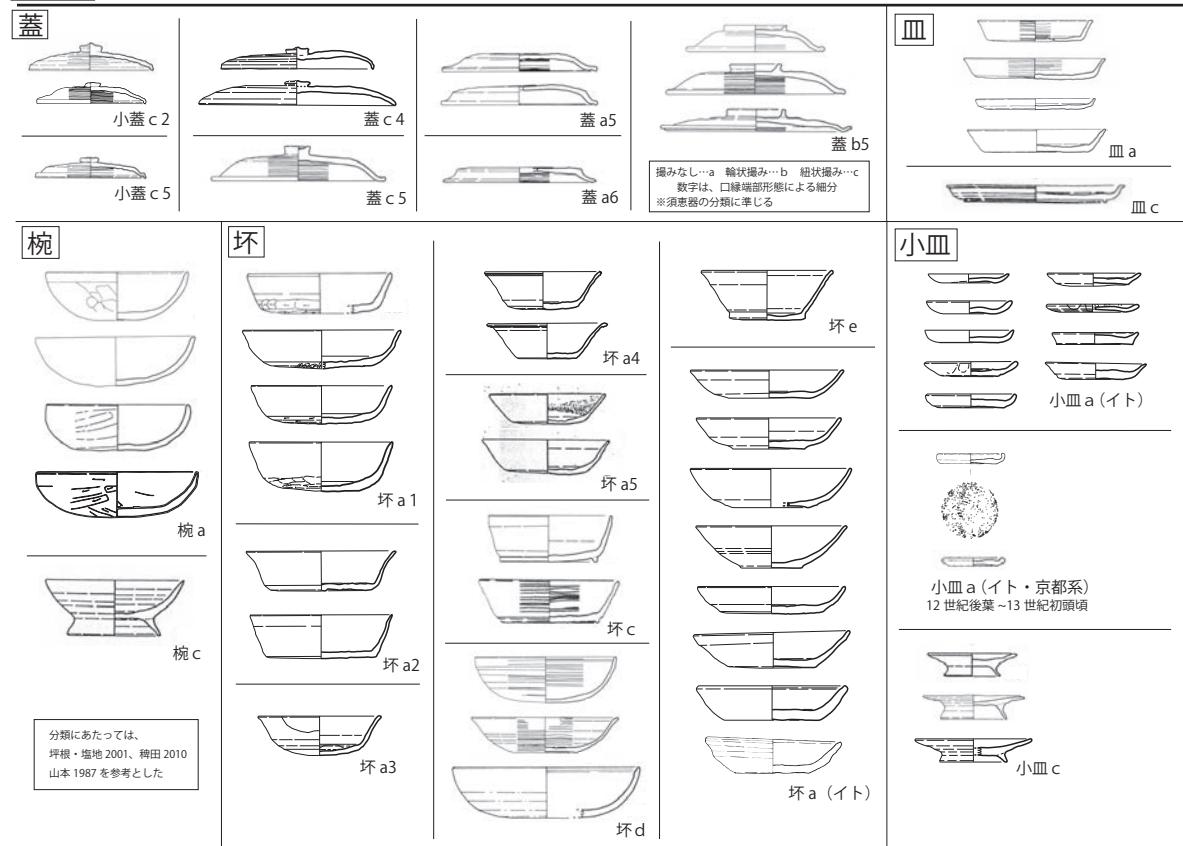
- 1 本書で用いた遺構略号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
SB:掘立柱建物跡 SK:土坑 ST:墓 SD:溝跡・溝状遺構 SF:道路状遺構
SJ:土器埋設遺構 SP:ピット・柱穴 SX:性格不明遺構
- 2 本誌に用いた方位はすべて座標北(G.N.)である。座標は、旧日本測地系の平面図直角座標2系(北緯33°0'、東経131°0')のX・Y座標を基点として標記している。
- 3 本書に掲載した遺構配置図の表記は、新旧関係を実践で示し、下位の遺構については点線、以下一点鎖線、二点鎖線の順で記している。また、標記上、遺構の新旧関係が不明瞭の場合は、矢印で補足している。
- 4 遺構の規模と深度の単位は原則としてメートル(m)で、遺物の法量はセンチメートル(cm)で表記している。
- 5 遺物の法量の内、器高と口径、底径、高台径は以下のとおりに計測している。
器高:底部を水平に置いた状態で、最も高い部分の高さ
口径:上記の状態で口縁端部外縁の最大径
底径:口縁部を水平に置いた状態で、底部と認識した部分の最大径
高台径:高台端部外縁の最大径
- 6 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。
 - ①遺物断面が黒塗りのもの…須恵器・陶器
 - ②遺物断面が灰色のもの…瓦質土器・瓦器・瓦
 - ③遺物平面の稜線と調整の変換点…実線
 - ④調整が同じでその単位が分かるもの…長破線
 - ⑤軸と付着物、黒斑等その範囲を示す必要があるもの…一点破線
- 7 本書に用いた出土土器の分類および年代観は次のページに掲げる分類資料図-1、分類資料図-2に示す標識資料との比較による。
なお、これらの資料が掲載された文献は分類資料図-2にある一覧表のとおりである。

土師器分類 (8世紀～13世紀までの土師器)

供膳具

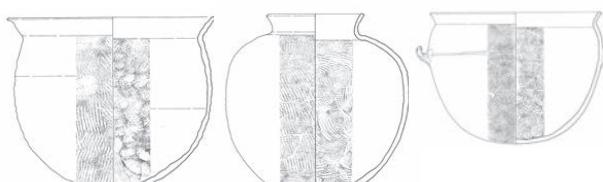
ミガキ a2 がある場合は各分類のあとに (ミガキ) を加える

ex: 皿 a (ミガキ)



煮炊具・貯蔵具

甕



甕 a (豊後型甕)

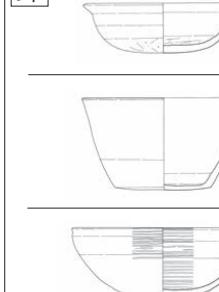
瓶



竈



鉢



移動式竈



甕 b (企救甕)



Aタイプ

Bタイプ

Cタイプ

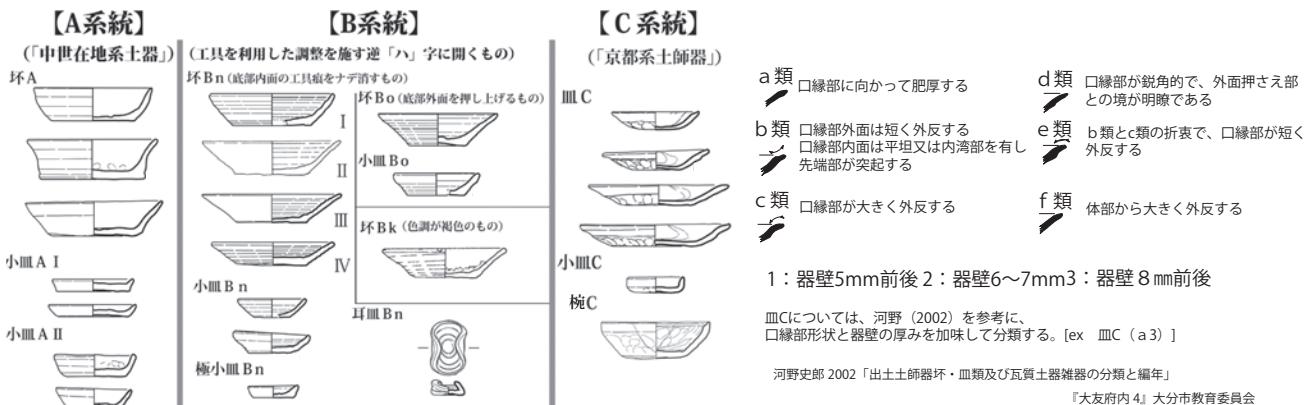


Dタイプ

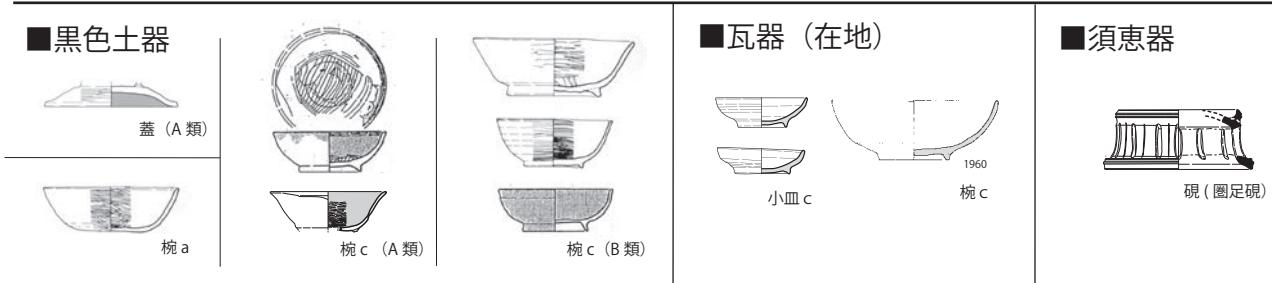
Eタイプ

Fタイプ

土師器分類 (14世紀～16世紀の土師器)



その他の土器分類



<分類にあたっての参考文献>

【縄文土器】

坂本嘉弘 1998「東九州の押型文土器研究の現状と課題」『九州の押型文土器－論改編－土器』縄文集成シリーズ3 九州縄文研究会

【弥生土器】

坪根伸也・佐藤良子 2010「弥生時代前期から中期の土器編年と概要」『下郡遺跡群VII』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第100集

坪根伸也 2010「弥生時代後期から古墳時代前期の土器による時期区分」『下郡遺跡群VII』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第100集

【土師器】

坪根伸也 1995「付章 羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題」『羽田遺跡II』大分市教育委員会

坪根伸也・塙地潤一 2001「豊後國の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会

坪根伸也 2010「古代の土師器について」『下郡遺跡群VII』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第100集

山本信夫・山村信榮 1997「中世食器の地域性 九州・南北諸島」『[共同研究] 中世食文化の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告 第71集

山本信夫 1987「付編・土器の分類」『大宰府条坊跡II』

林潤也・中西尚尚・今田しのぶ 2001「豊後ににおける都城系土師器について」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会

【瓦質土器】[土師質土器] [中世須恵器]

田中裕介 1996「6) 土師質小皿」『机張原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 大分県教育委員会

山本哲也 2009「豊前・豊後ににおける瓦質土器の初期様相」『中近世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会

河野史郎 2002「出土土師器環・皿類及び瓦質土器雑器の分類と編年」『大友府内4』大分市教育委員会

森田稔 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

<搬入品については、以下の文献による分類を使用>

【貿易陶磁器】

太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊XV-1陶磁器分類編』

小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

吉田寛 2003「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」『貿易陶磁研究』No. 23

【陶器類】

乗岡実 2005「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年 資料集』

藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 10

【近世陶磁器】

九州近世陶磁学会編 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 10周年記念

目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査経過	1
第2節 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 各地区の遺構と遺物	11
(1) 横尾遺跡第1次調査	11
(2) 横尾遺跡第2次調査	38
(3) 横尾遺跡第4次調査	48
(4) 横尾遺跡第14次調査	49
(5) 横尾遺跡第31次調査	50
(6) 横尾遺跡第33次調査	55
(7) 横尾遺跡第34次調査	56
(8) 横尾遺跡第63次調査	73
(9) 横尾遺跡第64次調査	84
(10) 横尾遺跡第65次調査	92
(11) 横尾遺跡第66次調査	95
(12) 横尾遺跡第74次調査	99
(13) 横尾遺跡第79次調査	106
(14) 横尾遺跡第81次調査	119
(15) 横尾遺跡第149次調査	129
(16) 横尾遺跡第153次調査	130
第Ⅳ章 総括	135
(1) 古墳時代	135
(2) 古代	135
(3) 中世	136

写真図版

報告書抄録

図版目次

第 1 図 調査範囲図 (1/60,000)	4	第 46 図 SB003 遺構実測図 (1/80)	52
第 2 図 横尾遺跡位置図 (1/400,000)	5	第 47 図 SD001・SD002 遺構実測図 (1/100・1/30)	53
第 3 図 横尾遺跡周辺地質図	6	第 48 図 第 31 次調査区出土遺物実測図 (1/3)	54
第 4 図 周辺遺跡位置図 (1/40,000)	8	第 49 図 第 33 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/200)	55
第 5 図 調査範囲図<北半分> (1/4,000)	10	第 50 図 第 34 次調査区遺構配置図 (1/300)	57
第 6 図 調査範囲図<南半分> (1/4,000)	10	第 51 図 第 34 次調査区全体遺構図 (1/300)	58
第 7 図 第 1 次調査区全体遺構図 (1/400)	11	第 52 図 SB001 遺構実測図 (1/80)	59
第 8 図 第 1 次調査区 A 区遺構配置図・全体遺構図 (1/300)	12	第 53 図 SB002・SB003 遺構実測図 (1/80)	60
第 9 図 SB001・SB002 遺構実測図 (1/80)	13	第 54 図 SB004・SB005 遺構実測図 (1/80)	61
第 10 図 SB003 遺構実測図 (1/80)	14	第 55 図 SB006・SB007 遺構実測図 (1/80)	62
第 11 図 SK001・SK002・SK004 遺構実測図 (1/40)	15	第 56 図 SK001 遺構実測図 (1/60)	63
第 12 図 SD001 遺構実測図 (1/20)	16	第 57 図 ST001 遺構実測図 (1/40)	63
第 13 図 第 1 次調査区 A 区出土遺物実測図① (1/3)	17	第 58 図 SD001・SD004 遺構実測図 (1/600・1/40)	64
第 14 図 第 1 次調査区 A 区出土遺物実測図② (1/3・1/4)	18	第 59 図 SD002・SD003 遺構実測図 (1/600)	
第 15 図 第 1 次調査区 A 区出土遺物実測図③ (1/3)	19	SD005 遺構実測図 (1/200・1/40)	65
第 16 図 第 1 次調査区 B・C 区遺構配置図・ 全体遺構図 (1/300)	20	第 60 図 SD006・SD007 遺構実測図 (1/150・1/40)	66
第 17 図 SD002 遺構実測図 (1/80・1/40)	21	第 61 図 第 34 次調査区出土遺物実測図① (1/3・1/4)	68
第 18 図 第 1 次調査区 B 区出土遺物実測図 (1/1・1/3)	22	第 62 図 第 34 次調査区出土遺物実測図② (1/3)	69
第 19 図 第 1 次調査区 D 区遺構配置図・全体遺構図 (1/200)	23	第 63 図 第 34 次調査区出土遺物実測図③ (1/3・1/4)	70
第 20 図 SB004・SB005 遺構実測図 (1/80)	24	第 64 図 第 34 次調査区出土遺物実測図④ (1/3)	71
第 21 図 SK013・SK014・SK015 遺構実測図 (1/40)	25	第 65 図 第 63 次調査区遺構配置図 (1/300)	74
第 22 図 SD002・SD003 遺構実測図 (1/200・1/80)	26	第 66 図 第 63 次調査区全体遺構図 (1/300)	75
第 23 図 SX001 遺構実測図 (1/80)	27	第 67 図 SB001・SB002 遺構実測図 (1/80)	76
第 24 図 第 1 次調査区 D 区出土遺物実測図① (1/3・1/4)	28	第 68 図 SB003・SB006 遺構実測図 (1/80)	77
第 25 図 第 1 次調査区 D 区出土遺物実測図② (1/3)	29	第 69 図 SB008・SB009 遺構実測図 (1/80)	78
第 26 図 第 1 次調査区 D 区出土遺物実測図③ (1/2・1/3・1/4)	30	第 70 図 SB010 遺構実測図 (1/80)	79
第 27 図 第 1 次調査区 D 区出土遺物実測図④ (1/3)	31	第 71 図 SD050・SD053 遺構実測図 (1/400・1/40)	80
第 28 図 第 1 次調査区 E 区・F 区遺構配置図・ 全体遺構図 (1/300)	32	第 72 図 SJ001・SP068 遺構実測図 (1/20)	80
第 29 図 SK019・SP149 遺構実測図 (1/20・1/30)	33	第 73 図 第 63 次調査区出土遺物実測図① (1/3)	82
第 30 図 SD003 遺構実測図 (1/40・1/80)	34	第 74 図 第 63 次調査区出土遺物実測図② (1/3・1/4)	83
第 31 図 第 1 次調査区 E 区出土遺物実測図① (1/3)	35	第 75 図 第 64 次調査区遺構配置図 (1/300)	84
第 32 図 第 1 次調査区 E 区出土遺物実測図② (1/3)	36	第 76 図 第 64 次調査区全体遺構図 (1/300)	85
第 33 図 第 2 次調査区 (有田古墳 1 号・2 号墳) 地形図 (1/300)	38	第 77 図 SB001・SB002 遺構実測図 (1/80)	86
第 34 図 第 2 次調査区 (有田古墳 1 号・2 号墳) トレンチ・ 葺石配置図 (1/250)	39	第 78 図 SB003・SK002 遺構実測図 (1/80・1/40)	87
第 35 図 1 トレンチ遺構実測図 (1/60)	40	第 79 図 SK004・SK008・SK012 遺構実測図 (1/80・1/40)	88
第 36 図 7 トレンチ遺構実測図 (1/60)	41	第 80 図 SD015 遺構実測図 (1/200・1/40)	89
第 37 図 2・3・4・5 トレンチ遺構実測図 (1/400・1/80)	42	第 81 図 第 64 次調査区出土遺物実測図 (1/3)	90
第 38 図 6・8・9・10 トレンチ遺構実測図 (1/400・1/80)	43	第 82 図 第 65 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/200)	92
第 39 図 4 トレンチ (石蓋土壙墓) 実測図 (1/40)	44	第 83 図 SB001 遺構実測図 (1/80)	
第 40 図 古墳復元図 (1/300)	45	SD010・SD011 遺構実測図 (1/300・1/40)	93
第 41 図 第 2 次調査区トレンチ出土遺物実測図 (1/1・1/3)	46	第 84 図 第 65 次調査区出土遺物実測図 (1/3)	94
第 42 図 第 4 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/100)	48	第 85 図 第 66 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/150)	96
第 43 図 第 14 次調査区遺構配置図 (1/200)	49	第 86 図 SF001・SD003～SD006 遺構実測図 (1/300・1/40)	97
第 44 図 第 31 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/200)	50	第 87 図 SF001・SD006・SK007 遺構実測図 (1/300・1/40)	98
第 45 図 SB001・SB002 遺構実測図 (1/80)	51	第 88 図 第 66 次調査区出土遺物実測図 (1/1・1/3)	98
		第 89 図 第 74 次調査区遺構配置図 (1/400)	99
		第 90 図 第 74 次調査区全体遺構図 (1/400)	100
		第 91 図 SD009・SD014 遺構実測図 (1/400・1/60)	101

第 92 図 SD008・SD010・SD011・SD015 遺構実測図 (1/400・1/60).....	102	第 111 図 SK050 遺構実測図 (1/40)	123
第 93 図 SD016 遺構実測図 (1/200・1/40)	103	第 112 図 SX022 遺構実測図 (1/20)	124
第 94 図 SX001・SX041 遺構実測図 (1/80・1/40)	104	第 113 図 SX054 遺構実測図 (1/40)	125
第 95 図 第 74 次調査区出土遺物実測図 (1/3).....	105	第 114 図 SD001・SD002・SD003・SD005・SD010 遺構実測図 (1/40・1/200).....	126
第 96 図 第 79 次調査区遺構配置図 (1/400).....	106	第 115 図 第 81 次調査区出土遺物実測図 (1/3).....	127
第 97 図 第 79 次調査区全体遺構図 (1/400).....	107	第 116 図 第 149 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/100)	129
第 98 図 SB100 遺構実測図 (1/80)	108	第 117 図 第 149 次調査区出土遺物実測図 (1/3)	129
第 99 図 SK070・SK105・SK130 遺構実測図 (1/30・1/40).....	109	第 118 図 第 153 次調査区遺構配置図 (1/200)	130
第 100 図 SK125・SK145・SK147 遺構実測図 (1/30・1/40)	110	第 119 図 第 153 次調査区全体遺構図 (1/200)	131
第 101 図 SK150・SK155・ST050 遺構実測図 (1/30).....	111	第 120 図 SB035・SB040 遺構実測図 (1/80)	132
第 102 図 SD040 遺構実測図 (1/150・1/50)	112	第 121 図 SK009・SK010・SK024 遺構実測図 (1/40)	133
第 103 図 SF185・SP135・SP140 遺構実測図 (1/400・1/20)	113	第 122 図 第 153 次調査区出土遺物実測図 (1/3)	134
第 104 図 SX090・SX160 遺構実測図 (1/80)	114	第 123 図 有田古墳周辺遺構配置図 (1/1,500)	136
第 105 図 第 79 次調査区出土遺物実測図① (1/1・1/3)	116	第 124 図 古代の遺構分布図 (1/1,000)	137
第 106 図 第 79 次調査区出土遺物実測図② (1/1・1/3・1/4)	117	第 125 図 中世の方形館分布図	138
第 107 図 第 81 次調査区遺構配置図 (1/300).....	119	第 126 図 中世の遺構分布図 (1/1,000)	138
第 108 図 第 81 次調査区全体遺構図 (1/300).....	120		
第 109 図 SB015・SB035 遺構実測図 (1/80)	121		
第 110 図 SB055・SK025 遺構実測図 (1/40・1/80)	122		

表 目 次

第 1 表 調査地及び担当者一覧	3	第 21 表 第 149 次調査区出土遺物観察表	147
第 2 表 横尾遺跡報告書掲載地点一覧	3	第 22 表 第 153 次調査区出土遺物観察表	147
第 3 表 第 1 次調査区出土遺物観察表①	139	第 23 表 第 1 次調査区遺構番号一覧表	148
第 4 表 第 1 次調査区出土遺物観察表②	140	第 24 表 第 2 次調査区遺構番号一覧表①	148
第 5 表 第 1 次調査区出土遺物観察表③	141	第 25 表 第 2 次調査区遺構番号一覧表②	149
第 6 表 第 2 次調査区出土遺物観察表①	141	第 26 表 第 14 次調査区遺構番号一覧表	149
第 7 表 第 2 次調査区出土遺物観察表②	142	第 27 表 第 31 次調査区遺構番号一覧表	149
第 8 表 第 31 次調査区出土遺物観察表	142	第 28 表 第 34 次調査区遺構番号一覧表	149
第 9 表 第 34 次調査区出土遺物観察表①	142	第 29 表 第 63 次調査区遺構番号一覧表①	149
第 10 表 第 34 次調査区出土遺物観察表②	143	第 30 表 第 63 次調査区遺構番号一覧表②	150
第 11 表 第 63 次調査区出土遺物観察表①	144	第 31 表 第 64 次調査区遺構番号一覧表	150
第 12 表 第 63 次調査区出土遺物観察表②	145	第 32 表 第 65 次調査区遺構番号一覧表①	150
第 13 表 第 64 次調査区出土遺物観察表	145	第 33 表 第 65 次調査区遺構番号一覧表②	151
第 14 表 第 65 次調査区出土遺物観察表	145	第 34 表 第 66 次調査区遺構番号一覧表	151
第 15 表 第 66 次調査区出土遺物観察表	145	第 35 表 第 74 次調査区遺構番号一覧表	151
第 16 表 第 74 次調査区出土遺物観察表	145	第 36 表 第 79 次調査区遺構番号一覧表①	151
第 17 表 第 79 次調査区出土遺物観察表①	145	第 37 表 第 79 次調査区遺構番号一覧表②	152
第 18 表 第 79 次調査区出土遺物観察表②	146	第 38 表 第 81 次調査区遺構番号一覧表	152
第 19 表 第 79 次調査区出土遺物観察表③	147	第 39 表 第 149 次調査区遺構番号一覧表	152
第 20 表 第 81 次調査区出土遺物観察表	147	第 40 表 第 153 次調査区遺構番号一覧表	152

写真図版目次

写真図版 1

- 1 横尾地区遠景(南より)
- 2 第2次(有田古墳)調査区全景(北東より)

写真図版 2

- 1 有田古墳群を望む(北より)
- 2 第2次(有田古墳)4トレンチ石蓋出土状況(西より)

写真図版 3

- 1 第34次調査区全景(北より)
- 2 第34次掘立柱建物群全景(西より)

写真図版 4

- 1 第63次調査区全景(南より)
- 2 第64次調査区全景(東より)

写真図版 5

- 1 第65次調査区完掘状況(南より)
- 2 第74次調査区全景(南より)

写真図版 6

- 1 第79次調査区全景(南より)
- 2 第81次調査区遠景(北より)

写真図版 7

- 1 第1次調査区全景(南より)
- 2 第1次 A区 完掘状況(西より)
- 3 第1次 B区 完掘状況全景(南より)
- 4 第1次 C区 完掘状況全景(南より)
- 5 第1次 D区 完掘状況全景(北東より)
- 6 第1次 E区 完掘状況全景(東より)
- 7 第2次(有田古墳) 1号墳 葦石出土状況(東より)
- 8 第4次 完掘状況(北より)

写真図版 8

- 1 第31次 調査区全景(東より)
- 2 第33次 調査区全景(北より)
- 3 第34次 ST001半截状況(北より)
- 4 第34次 SP027掘り下げ状況(北より)
- 5 第63次 SB001完掘状況(東より)
- 6 第63次 SB002完掘状況(東より)
- 7 第63次 SB003g(SP024)遺物出土状況(南より)
- 8 第63次 SB003完掘状況(東より)

写真図版 9

- 1 第63次 SB010完掘状況(北西より)
- 2 第63次 SJ001遺物出土状況(西より)
- 3 第64次 SB001完掘状況(北より)
- 4 第64次 SB002完掘状況(東より)
- 5 第74次 A区全景(南より)
- 6 第74次 B区全景(南より)
- 7 第79次 SB100完掘状況(南より)
- 8 第79次 ST050遺物出土状況(北より)

写真図版 10

- 1 第79次 ST050完掘状況(北より)
- 2 第79次 SF185完掘状況(東より)
- 3 第79次 SP135遺物出土状況(南東より)
- 4 第79次 SP140遺物出土状況(南西より)
- 5 第81次 SB035c遺物出土状況(東より)
- 6 第81次 SB035完掘状況(北より)
- 7 第81次 SX022集石出土状況(南より)
- 8 第153次 調査区全景(北西より)

写真図版 11

- 第13図-2/第13図-5/第13図-6
- 第14図-20/第14図-21/第14図-24
- 第18図-13/第24図-21/第26図-28
- 第26図-41/第41図-1/第41図-2
- 第41図-6/第41図-7/第41図-8
- 第41図-9/第41図-10/第41図-11

写真図版 12

- 第41図-12/第41図-13/第48図-1
- 第48図-3/第61図-13/第61図-16
- 第62図-33/第62図-34/第63図-49
- 第63図-51/第63図-53/第63図-55
- 第63図-56/第64図-63/第64図-64
- 第64図-66/第64図-76/第64図-78

写真図版 13

- 第73図-12/第73図-15~24/第73図-25
- 第74図-30/第74図-35~41/第81図-3
- 第81図-5/第81図-6/第81図-8
- 第81図-9/第81図-10/第88図-5
- 第95図-1/第105図-2/第105図-3
- 第105図-4/第105図-6~10/第105図-13

写真図版 14

- 第105図-14/第105図-25/第105図-26
- 第105図-28/第105図-32/第106図-40
- 第106図-42/第106図-43/第106図-44
- 第106図-47/第106図-49/第106図-50
- 第106図-52~54/第106図-57/第106図-62
- 第115図-22/第115図-23/第122図-11

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査経過

横尾遺跡は大分県大分市大字横尾に所在する埋蔵文化財包蔵地である。本遺跡が周知される範囲のほぼ全域の土地区画整理事業が平成2年度に認可され、横尾土地区画整理事業として市街地の整備が進められている。その施行面積は82.1ヘクタールである。この横尾土地区画整理事業に伴う横尾遺跡の発掘調査は、平成3年度より実施されており、平成28年3月において155地点の調査を完了している。当該地域に周知される5遺跡（横尾下組遺跡・多武尾遺跡・東中尾遺跡・有田遺跡・有田古墳）は、平成14年には総称して横尾遺跡という名称に変更されている。

平成12年度に縄文時代のドングリ貯蔵穴群の発見を機に、縄文時代早期以降の遺構が存在するという貴重な知見を得ることができた。平成17年度には事業計画の変更も認可され、自然と歴史など地域の特性を生かした魅力ある住環境整備が進められるなか、平成21年2月21日には横尾貝塚が国の史跡に指定される。

なお、本書に所収する発掘調査報告は、当地区の平成3年度から行われた土地区画整理事業の第1次調査及び第2次調査の有田古墳を含む、平成26年度まで行われた発掘調査のうち16地点の記録である。総調査面積は、10,775m²である。

第2節 調査組織

調査を実施した各年度の調査組織を列記する。職名等は調査当時のものである。

〈平成3年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	安東 裕	文化財室	主任技師	讃岐 和夫
大分市教育委員会社会教育課		課長	内田 悟	大分市都市計画部区画整理課	課長	幸 康美
		主幹	秦 政博	横尾土地区画整理事務所	所長	山口正一郎

〈平成6年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	清瀬 和弘	文化財室	技師	池邊千太郎
大分市教育委員会文化振興課		課長	内田 悟	大分市都市計画部区画整理課	課長	倉原 宗人
		参事	秦 政博	横尾土地区画整理事務所	所長	吉良 則生

〈平成9年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	清瀬 和弘	文化財室	主任技師	池邊千太郎
大分市教育委員会文化振興課		課長	野尻 政文	文化財調査員	林 潤也	
		参事	秦 政博		大藤 弥生	
		主幹	玉永 光洋	大分市都市計画部区画整理課	課長	大山 晴久
				横尾土地区画整理事務所	所長	首藤 孝信

〈平成10年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	清瀬 和弘	文化財室	主任技師	池邊千太郎
大分市教育委員会生涯学習課		課長	園田 裕彦	大分市都市計画部区画整理課	課長	矢野 貞夫
		参事	秦 政博	横尾土地区画整理事務所	所長	首藤 孝信
		主幹	玉永 光洋			

〈平成 12 年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	清瀬 和弘	技師	塩地 潤一
大分市教育委員会	文化財課	課長	秦 政博	嘱託	奥村 義貴
		課長補佐	帶刀 修一	嘱託	田中 貴
			主幹 玉永 光洋	大分市都市計画部区画整理課	課長 衛藤 道男
	文化財係	係長	讚岐 和夫	横尾土地区画整理事務所	所長 後藤 健男

〈平成 24 年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	足立 一馬	大分市都市計画部まちなみ整備課	課長 内田 寿
大分市教育委員会	教育部			庶務担当班	主幹 (グループリーダー) 温水 一徳
	文化財課	課長	福田 誠一		主査 吉野まゆみ
		特別顧問	玉永 光洋	企画調整担当班	参事 (グループリーダー) 吉田 実
		主幹	坪根 伸也	横尾土地区画整理事務所	参事兼所長 富永 好一
埋蔵文化財班	専門員 (グループリーダー)	高畠 豊		換地工務担当班	主幹 (グループリーダー) 柳井 宗彦
	専門員	塩地 潤一			

〈平成 26 年度〉

調査主体者	大分市教育委員会	教育長	足立 一馬	大分市埋蔵文化財保存活用センター	
大分市教育委員会	教育部			埋蔵文化財担当班	
	文化財課	課長	塔鼻 光司	参事補 (グループリーダー)	池邊千太郎
		参事	神田 洋	専門員	塩地 潤一
		参事	坪根 伸也	嘱託	永井 美香
		参事	栗田 博之	大分市都市計画部まちなみ整備課	課長 内田 寿
	特別顧問	玉永 光洋		参事	松川 正典
大分市歴史資料館	館長	武富 雅宣	庶務担当班	参事補 (グループリーダー)	温水 一徳
	副館長	久多羅岐 明		主査	水田 寿憲
	顧問	讚岐 和夫	横尾土地区画整理事務所	参事兼所長	田中 佳人
			工務担当班	参事補 (グループリーダー)	中村 清治
				専門員	由布 則秀

〈平成 27 年度〉

調査主体者	大分市教育委員会			大分市埋蔵文化財保存活用センター	
	教育長	足立 一馬	(～平成 27 年 5 月 13 日)	参事補 (グループリーダー)	池邊千太郎
	教育長	三浦 享二	(平成 27 年 5 月 14 日～)	参事補	河野 史郎
大分市教育委員会	教育部			(～平成 27 年 9 月 30 日)	
	文化財課	課長	塔鼻 光司	嘱託	永井 美香
		参事	長野 清尊	大分市都市計画部まちなみ整備課	課長 内田 寿
		参事	坪根 伸也	参事	松川 正典
	特別顧問	玉永 光洋	庶務担当班	参事補 (グループリーダー)	三重野尚子
大分市歴史資料館	館長	武富 雅宣		主査	水田 寿憲
	副館長	安東 俊昭	横尾土地区画整理事務所	参事兼所長	吉田 健二
	顧問	讚岐 和夫			

整理スタッフ (平成 6・9・12 年度)

太田 牧枝 佐藤 志信 町田ユカリ 平田美智子

第1表 調査地及び担当者一覧

調査年度	調査地点	調査担当者	調査面積	調査期間	種別	掲載年報
平成3年	1次	讃岐和夫	1,400m ²	19910501～19910930	区画	年報3
	2次(有田古墳)	讃岐和夫	1,095m ²	19910901～19911227	区画	
平成4年	4次	池邊千太郎	52m ²	19920521～19920526	区画	—
平成5年	14次	池邊千太郎	54m ²	19930519～19930521	区画	—
平成6年	31次	池邊千太郎	300m ²	19940602～19940707	区画	—
	33次	池邊千太郎	310m ²	19940715～19940801	区画	—
	34次	池邊千太郎	2,000m ²	19940711～19941025	区画	年報6
平成9年	63次	池邊千太郎・林潤也	915m ²	19970818～19971101	区画	年報9
	64次	池邊千太郎・大藤弥生	610m ²	19971015～19971211	区画	
	65次	池邊千太郎・林潤也	130m ²	19971217～19971222	区画	
	66次	池邊千太郎	200m ²	19980120～19980202	区画	
平成10年	74次	池邊千太郎	1,010m ²	19990216～19990331	区画	年報10
平成12年	79次	塩地潤一・奥村義貴・田中貴	1,700m ²	20000605～20000830	区画	年報12
	81次	塩地潤一・奥村義貴・田中貴	744m ²	20000930～20001102	区画	
平成24年	149次	塩地潤一	15m ³	20120820～20120821	区画	—
平成26年	153次	塩地潤一	240m ²	20150302～20150327	区画	—

*掲載年報

年報3	『大分市埋蔵文化財調査年報4 平成3年度』	大分市教育委員会1993
年報6	『大分市埋蔵文化財調査年報Vol.6 1994年度』	大分市教育委員会1995
年報9	『大分市埋蔵文化財調査年報Vol.9 1997年度』	大分市教育委員会1998
年報10	『大分市埋蔵文化財調査年報Vol.9 1998年度』	大分市教育委員会1999
年報12	『大分市埋蔵文化財調査年報Vol.12 2000年度』	大分市教育委員会2001

第2表 横尾遺跡報告書掲載地点一覧

横尾遺跡報告書掲載地点一覧表

報告書名	調査地点	報告書名	調査地点	報告書名	調査地点	報告書名	調査地点
横尾貝塚	82次-A区	横尾遺跡3	135次	横尾遺跡7	91次	横尾遺跡8	58次
	82次-B区		136次		92次		73次
	82次-C区		137次		94次		80次
	82-2次		138次		95次		151次
	82-3次		139-1次		96次		10次
	86次		139-2次		96-2次		62次
	87次		69次		97次		67次
	93次		134次		98次		68次
	100次		140次		99次		70次
	103次		141次		101次		71次
横尾遺跡	120次		142次		102次		72次
	122次	横尾遺跡5	143-1次	横尾遺跡8	104次	横尾遺跡9	75次
	112-2次		143-2次		105次		76次
	113次		143-3次		106次		77次
	114次		143-4次		107次		78次
	115次		143-5次		108次		150次
	116次		143-6次		109次		152次
	117次		143-7次		110次		1次
	118次		143-8次		111次		2次
	121次	横尾遺跡6	144次		112次	横尾遺跡10	4次
横尾遺跡2	123次		145次		県道法面立合調査		14次
	124次		146次		5次		31次
	125次		147次		16次		33次
	126次		148-1次		18次		34次
	127次		148-2次		20次		63次
	128次		148-3次		21次		64次
	129-1次		148-4次		22次		65次
	129-2次		148-5次		32次		66次
	129-3次	横尾遺跡7	43次	横尾遺跡8	37次	横尾遺跡10	74次
	130次		46次		45次		79次
	131次		83次		48次		79-2次
	132次		84次		49次		81次
横尾遺跡3	133-1次		88次		52次		149次
	133-2次		89次		53次		153次
2010	133-3次		90次		57次		



第1図 調査範囲図 (1/60,000)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

横尾遺跡は大分市域の中央部にあり、市街地より南東方向約7.5km地点の大分市大字横尾に位置する。大分の沖積平野を形作った県内最大河川である大野川と大分川に挟まれた下流域に広がる鶴崎台地上にあり、その東端、標高30m前後の台地上に遺跡が広く展開している。遺跡の東側には、大野川の分流である乙津川が流れ、南側には支流の中尾川が流れている（第2図）。天正年間に大野川下流部の改修が行われ、乙津川が分流されるまで大野川は鶴崎台地に近接して流れていたことが指摘されており^{（註1）}、本遺跡は県内最大河川の下流域に形成された遺跡である。

鶴崎台地は、標高165.3mの古城山を最高位に、平坦面が広く南北方向に広がり、台地の東部には段丘地形が顕著に発達する。

第3図の地質図に記した囲みの範囲が、本遺跡の立地する場所である。本地域では、中位Ⅰ段丘堆積物(tm1)、中位Ⅲ段丘堆積物(tm3)、低位Ⅰ段丘堆積物(tl1)が広く分布しており、それぞれが横尾面、城原面、松岡面に概ね対応すると考えられる^{（註2）}。

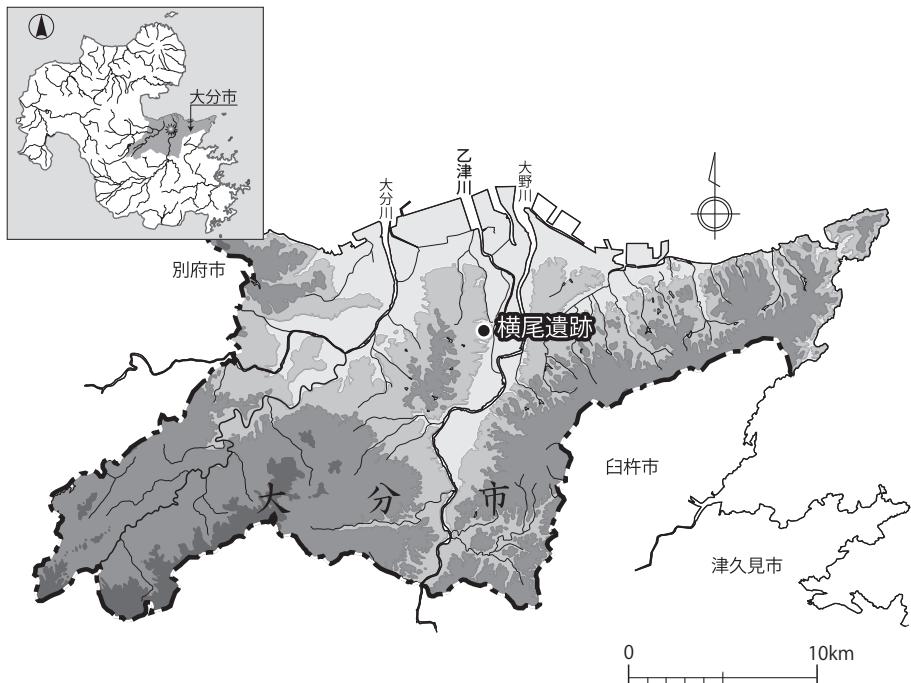
その中でも、遺跡が集中するのは中位Ⅲ段丘堆積物(tm3)が分布する城原面で、標高は31～39m地点に相当し、北側と東側に向けて谷が細かく開析しており、これらの地形を効率的に利用して弥生時代に環濠が掘削され、その内側の平坦面に集落が形成されている。

また、上記囲み内の、中位Ⅰ段丘堆積物(tm1)と中位Ⅲ段丘堆積物(tm3)の分布の境界、つまり横尾面から城原面に地形が変換する地点から東側の城原面にかけて白色粘土層が広く分布する。この粘土の採掘が弥生時代から行われており^{（註3）}、土器製作等に利用されたと推定される。

第3図の丸印は地下水が段丘崖から湧出している地点である。同図囲み部の低位Ⅰ段丘堆積物(tl1)が分布する地点にも地下水が伏流しており、その湧水地の場所が「古井戸(ふるいのこ)」と語り継がれ、現在に至っている。

第2節 歴史的環境

横尾遺跡周辺の歴史は、旧石器時代までさかのばる。大分県スポーツ公園建設事業に伴って調査された一方平Ⅰ遺跡では、旧石器時代後期の文化層中の礫群や土坑から、ナイフ形石器や削器などの石器とともに、縦長剥片や石核や流紋岩の原石が多量に出土している。旧石器時代に関する多くの接合資料が確認できたことから、原石が採取できる原産地遺跡と考えられ、石材供給の拠点遺跡として注目される^{（註4）}。また横尾遺跡をはじめ、鶴崎台地上に所在する多武尾遺跡や地蔵原遺跡などでも流



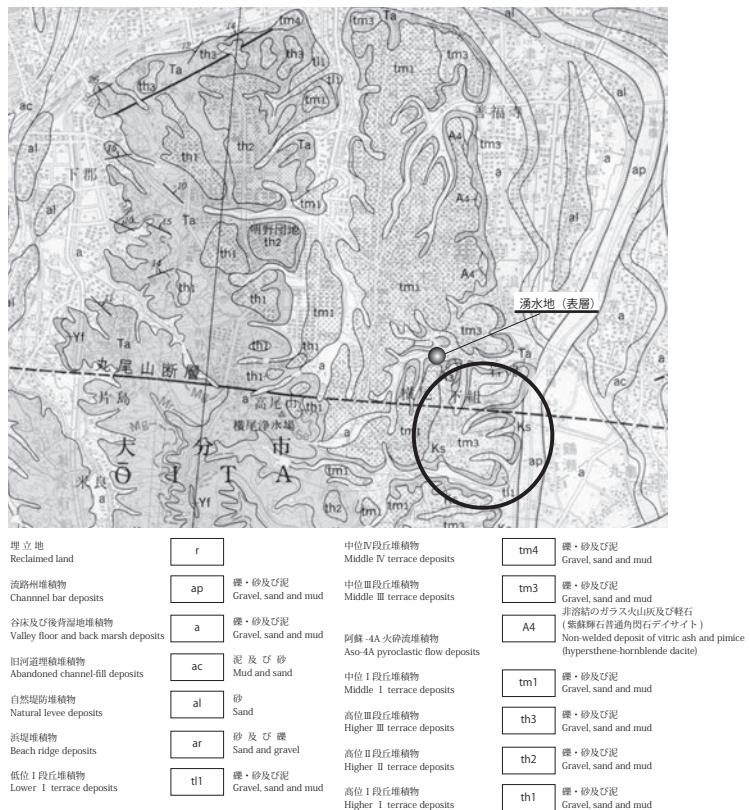
第2図 横尾遺跡位置図 (1/400,000)

紋岩を石材とした石器や剥片、石核などが出土しており、石材配給について遺跡の展開が窺える。

縄文時代は、横尾貝塚が知られている^(註5)。大野川支流乙津川左岸の低段丘先端部に立地し、本格的な発掘調査は、昭和 55 年から翌 56 年にかけて大分県教育委員会によって実施された。この調査により、縄文時代前期と中期の貝層が認められた。前期は汽水域に生息するヤマトシジミを主体とする貝層で、中期はハマグリを主体とする貝層であり、こうした点から時間経緯に伴う自然環境の変化が窺える。貝層からは、縄文土器とともに石鏃・石錐・石斧などの石器や釣針・モリなどの用途が考えられる骨角製の漁労具などが出土している。さらに貝層中・下位に造営された土壙墓から、手足の関節を強く折り曲げた屈葬姿勢や改葬状態を示す埋葬人骨 17 体が確認され、貝塚周辺に墓域が形成されていたことが判明した。近年の大分市教育委員会が貝塚の西側台地裾部を中心に行った遺跡の範囲確認調査では、後に貝塚となる場所の北西側の谷や丘陵部において、縄文時代早期から断続的に居住地として利用されていたことが判明している。横尾貝塚は、当時の居住域・貝塚・埋葬地が分かり、また当時の自然環境の変化を具体的に示す遺跡であることから、平成 21 年 2 月 12 日に国史跡に指定されている。

弥生時代は、早期から前期にかけての遺跡数は希薄であるが、一方平IV遺跡や尾崎遺跡から刻目凸帯文土器が出土している^(註6)。中期から後期に入ると大分平野部では遺跡数が増え、広範囲にわたる集落が形成されるようになるが、この段丘地帯においても同様である。当該期の集落遺跡としては多武尾遺跡、地蔵原遺跡、東中尾遺跡、岡原遺跡、松岡遺跡、二目川遺跡B地区などがあり、特に後期に入ると遺跡数が増加し、集落範囲の拡大が見られる。注目されるのは、後期後葉から末頃にかけての環濠集落として知られる多武尾遺跡である^(註7)。断面逆台形状の環濠の内側に防御と考えられる土塁の存在が指摘できる希少な遺跡であり、朝鮮式小銅鐸が環濠内から出土したことでも注目されている。さらに集落の縁辺部では、当該期の方形周溝遺構ならびに土壙墓なども確認されており、集落遺跡を解明する上で重要な発見が相次いでいる。また水分神社付近では銅矛が出土しており、集落祭祀に伴うものとして注目されている。

古墳時代では、横尾遺跡内にある古墳時代中期に比定されている有田古墳群が知られている^(註8)。小型の円墳2基と小児用の石蓋土壙墓1基で形成された墳墓群であったが、近年の確認調査で周溝を伴う古墳時代後期に比定される小型の円墳2基が新たに発見されている。集落については地蔵原遺跡で古式土師器を伴う古墳時代前



期の竪穴建物跡を検出し、また横尾遺跡の南方1km地点の毛井遺跡では古墳時代後期の竪穴建物跡約60基が、その付近から家形石棺の真萱石棺が発見されており、大野川流域の低地に当該期の集落が展開することが明らかになりつつある（註9）。

古代には、同台地上に、奈良時代や平安時代の官衙的性格をもった遺跡が出現する。横尾遺跡の北側に位置する地蔵原遺跡では、掘立柱建物跡約80棟や、コの字状に区画される溝が確認され、3点の円面硯が出土している^(註10)。また猪野新土井遺跡からは、南北60m、東西45mの溝で区画された空間の中に約20棟の掘立柱建物跡が確認され、「豊」と書かれた墨書き土器が出土している^(註11・12)。生産遺跡としては、横尾遺跡の南側に松岡古窯跡群^(註13)があり、8世紀中頃から後半にかけての須恵器を焼成した窯跡が発見されてい

る。同じく南側には8世紀末から9世紀代にかけての土師器の焼成土坑が確認された井ノ久保遺跡^(註14)、西側には包含層や遺構からフイゴの羽口や鉄滓が多数出土し、工人集落に比定されている二目川遺跡^(註15)などが所在する。これらの間に位置する横尾遺跡では、9～10世紀代の大型掘立柱建物跡、火葬墓の可能性が想定される方形周溝遺構や木棺墓も確認され^(註16)、出土した墨書き土器・刻書き土器や風字硯、綠釉陶器等から、地蔵原遺跡や猪野新土井遺跡同様、横尾遺跡においても官衙的要素をもった施設の展開が示唆される。また横尾遺跡の西南部一帯では、9～10世紀代を中心とする粘土採掘坑が300基以上確認されており、この周辺で継続的に土器生産が行われていたことが想定される^(註17)。

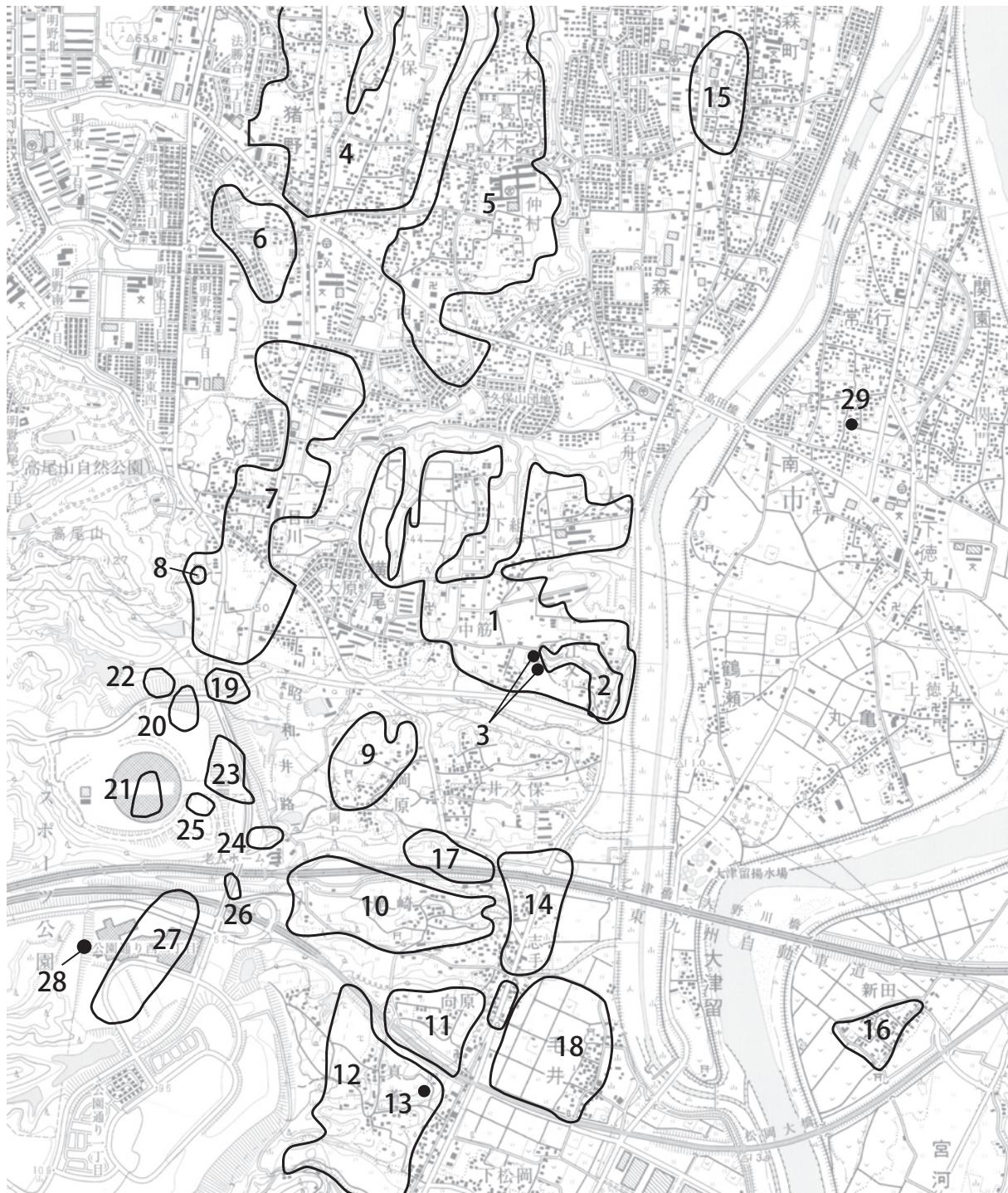
中世では、横尾遺跡において戦国期に比定される方形館跡が4基確認されている^(註18)。そのうちの1つは、約半町を超える(1辺約70m)規模の方形館跡で、16世紀後半～末頃まで存続していたことが確認されている。またここから北西へ約2.5km地点の猪野中原遺跡や猪野新土井遺跡からも戦国時代の方形館が確認され、これらの各遺跡から朝鮮王朝産陶磁器が出土している^(註19)。この鶴崎台地一帯は中世高田荘に比定されている地域であり、南北朝時代以降に大友氏の所領になった荘園にあたる。また大友氏はその所領を家臣への預置地として家臣団編成の手段に利用したとされ、これらの遺跡は大友家家臣によって構成された可能性が考えられる。

近世は、文禄二(1593)年に第22代の大友吉統(義統)が、朝鮮出兵での失態を理由に豊臣秀吉により、豊後国から除国される。その後は、豊臣秀吉の直轄地(蔵入地)となった豊後国は、複数の豊臣大名により七つに分国支配されるようになる。文禄三(1594)年の記録には、当該地は横尾村となり、周辺地域の猪野、小池原、森町、宮川内、大津留、毛井、二目川などとともに、江戸時代を通じて臼杵藩領に属していた。横尾村には村々から集めた年貢米の収納施設として、規模2間半×3間半の在蔵が設置された記録が残っている。ここで集められた年貢米は、臼杵城下に回送せずに、北側の森村、猪野村の日向道を向けて、家島の村にあった臼杵藩の蔵から大阪へ直送されていた^(註20)。横尾遺跡の発掘調査において、17世紀代の遺構については希薄であるが、18世紀以降になると横尾遺跡の西側では掘立柱建物跡や井戸跡などの集落遺構や、法雲寺周辺では近世墓群が認められるようになり、徐々に集落が形成されるようになる。また周辺の調査地点からは、釜場跡・洗い場跡・槽場跡・導水や排水溝などの溝状遺構・掘立柱建物跡など酒造に関連する遺構が確認されており、各遺構から出土した遺物や切り合い関係などから、19世紀前半から中頃の段階には酒造りを開始し、近現代に至るまで生産が行われていたことが分かっている^(註17)。

横尾村は、明治時代になると何度も行政単位の編成を経て、明治22(1889)年4月1日に施行された市制・町村制により、横尾を含めた周辺6カ村が合併して明治村となり、昭和29(1954)年3月31日には明治村を含めた4カ村が合併し、鶴崎市となった。次いで、昭和38(1963)年3月10日に大分市に編成され、現在に至っている。

【註】

- 註1 豊田寛三 1997「大野川下流域町・村の構造と舟運」『大野川』大分大学教育学部編・発行
 註2 竹村恵二 2008「横尾貝塚周辺の地質と地形、および横尾貝塚立地との関連」『横尾貝塚』大分市教育委員会
 註3 大分市教育委員会 2009「横尾遺跡第130次調査」『横尾遺跡2』大分市埋蔵文化財調査報告書第96集
 註4 大分県教育委員会 1999『スポーツ公園内遺跡発掘調査報告書(第4分冊)』大分県文化財調査報告書第103輯
 註5 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2012『横尾貝塚-県道鶴崎大南線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』
 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第59集
 註6 大分県教育委員会 2002『尾崎遺跡 清水遺跡 新田遺跡 川野遺跡 久木小野遺跡 平岩遺跡』
 東九州自動車関係埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
 註7 大分市教育委員会 1982『大分市多武尾遺跡調査概報』
 註8 大分市教育委員会 1992『有田古墳群』『大分市埋蔵文化財調査年報3』平成3年度
 註9 大分県教育委員会 2002『毛井遺跡B地区-国道197号大分南バイパス工事に伴う発掘調査報告書-』
 註10 大分市史編さん委員会 1987『地蔵原遺跡は語る』『大分市史 上巻』
 註11 大分市教育委員会 1996『猪野新土井遺跡第1・2次調査』『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.7 1995年度
 註12 大分市教育委員会 1997『猪野新土井遺跡(第3次調査)』『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.8 1996年度
 註13 大分市教育委員会 2000『松岡古窯跡群』『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.11 1999年度
 註14 大分市教育委員会 2000『井ノ久保遺跡発掘調査報告書-東九州自動車道及び併設市道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査-第1分冊-本文編-』
 註15 大分県教育委員会 2001『二目川遺跡-県道松岡日岡線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』
 大分県文化財調査報告書第122輯
 註16 大分市教育委員会 2010『横尾遺跡3-大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』
 大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第98集
 註17 大分市教育委員会 2014『横尾遺跡8-大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』
 大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第131集
 註18 大分市教育委員会 2013『横尾遺跡6 第144・145・146・147・148次調査-大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第123集
 註19 大分市教育委員会『猪野・中原遺跡』『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.8 1996年度
 註20 大分市史編さん委員会 1987『大分市史 中巻』



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	横尾遺跡	弥生～近世	11	向原遺跡	弥生	21	一方平Ⅲ遺跡	旧石器・縄文・奈良
2	横尾貝塚	縄文	12	真萱遺跡	古墳	22	一方平Ⅳ遺跡	旧石器・縄文・弥生
3	有田古墳	古墳	13	真萱石棺	古墳	23	九池遺跡	旧石器・弥生・古墳
4	猪野遺跡	弥生	14	清水遺跡	弥生	24	牧の内遺跡	旧石器・縄文
5	葛木遺跡	弥生	15	専想寺遺跡	中世	25	論出遺跡	縄文・弥生・古墳
6	米良草遺跡	弥生	16	新田遺跡	古墳	26	虫喰谷遺跡	旧石器・縄文・奈良
7	二目川遺跡	弥生	17	井ノ久保遺跡	平安	27	松岡古窯跡群	奈良
8	水分神社銅矛出土地	弥生	18	毛井遺跡	縄文～近世	28	上牧ノ内Ⅰ遺跡	奈良・平安
9	岡原遺跡	弥生	19	一方平Ⅰ遺跡	旧石器・縄文	29	毛利空桑墓	近世
10	松岡遺跡	弥生	20	一方平Ⅱ遺跡	旧石器・縄文			

第4図 周辺遺跡位置図 (1/40,000)

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の概要

本書で報告の対象となる調査は、大分市大字横尾において平成3～12年度および平成24・26年度に実施された横尾土地区画整理事業に伴う発掘調査の中で、16地点に及ぶ。そのうち12調査地点が、横尾遺跡の中央部に位置しており、大分市立大東中学校の南側一帯に密集して位置している。それらの調査区から南に約100m離れた地点に第2次調査地点（有田古墳1号墳・2号墳）が、北西に約220m離れた地点に第4次調査地点が、北に約350m離れた地点に第149次調査地点が、北北西に約460m離れた地点に第153次調査地点が所在している。

平成3年度から現在に至るまで、横尾地区では155次にわたる発掘調査が行われている。その調査によって、横尾地区には貝塚が発見された縄文時代の遺跡から、弥生時代の環濠集落、有田古墳群、中世の方形館跡、近世の道路状遺構跡などの幅広い年代の遺跡が存在していることが明らかになった。

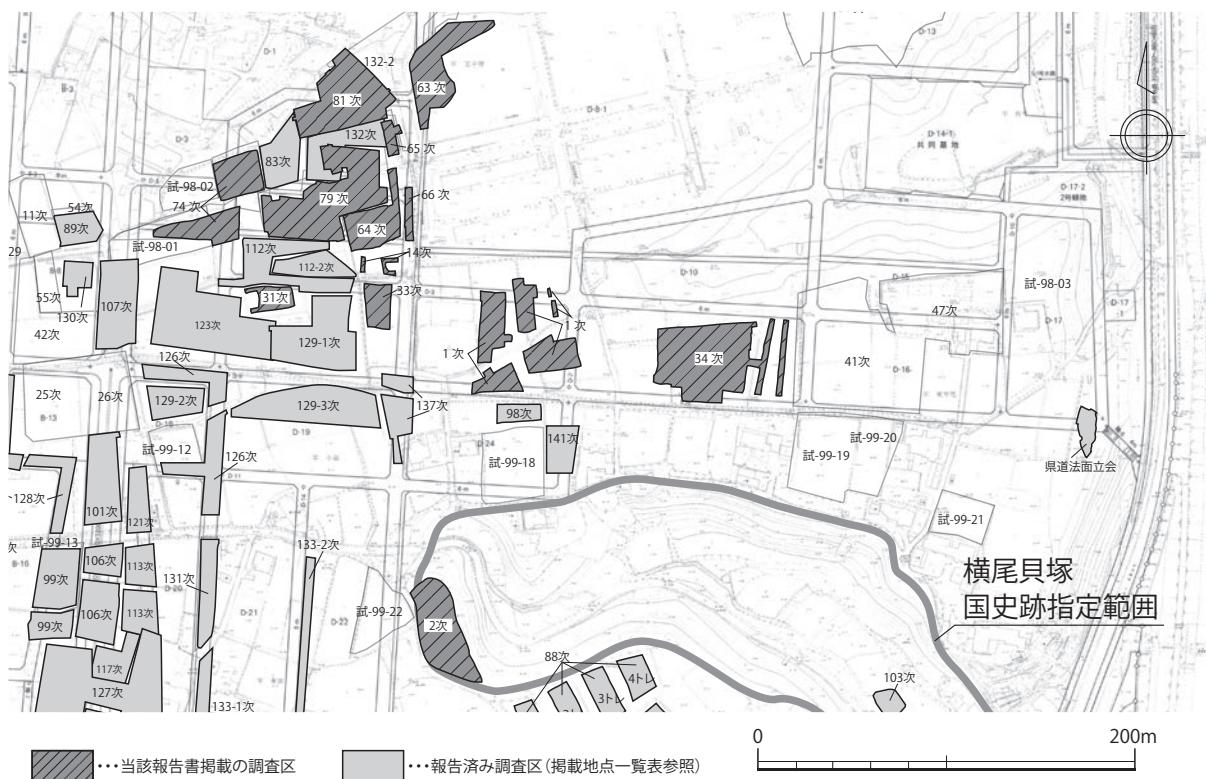
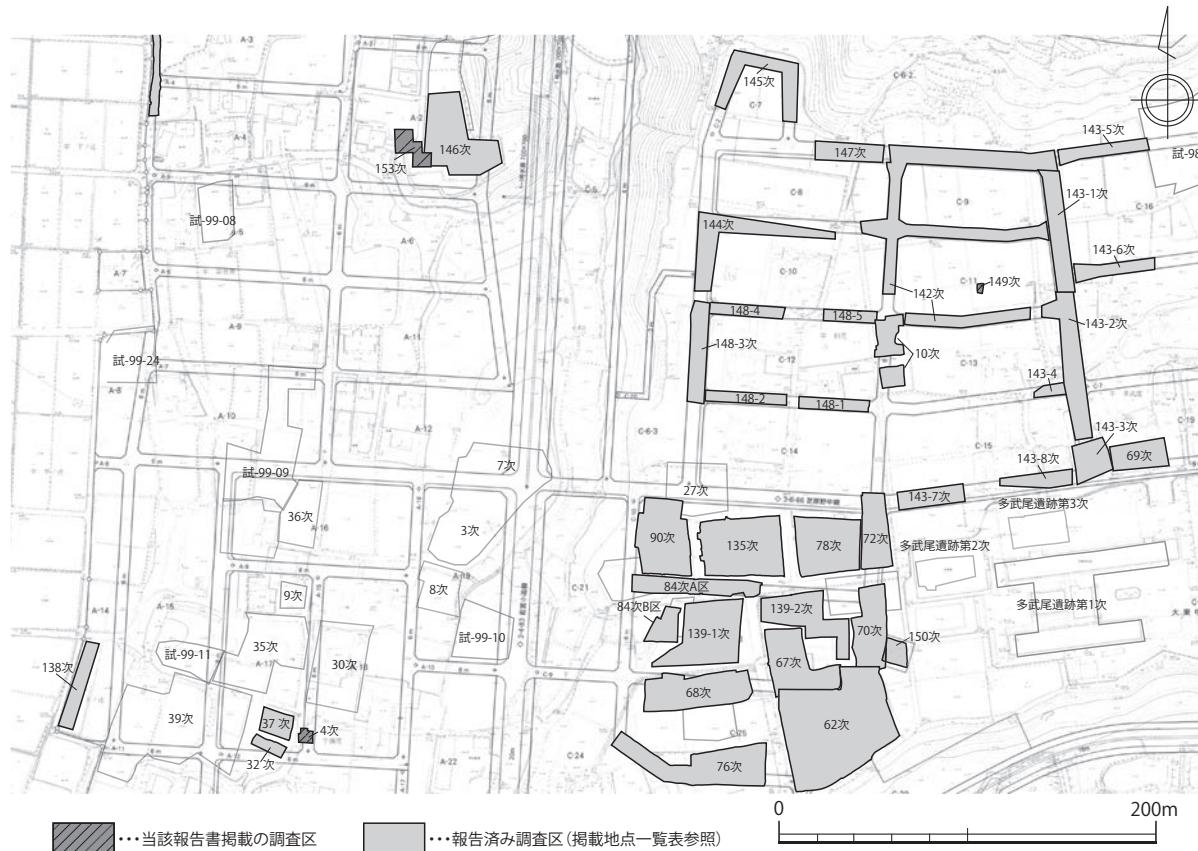
今回報告を行う調査区には、有田古墳の1号墳・2号墳、古代の道路状遺構、中世の大型方形館などの注目すべき遺構がある。

第2次調査地点（有田古墳1号墳・2号墳）は盛土の流出により当初1基の前方後円墳である可能性も想定されたが、調査により2基の円墳と判明した。盗掘被害を受け、石棺・副葬品の大半が失われた状態だったが、葺石の痕跡を確認することができた。また、2号墳の裾部からは石蓋土壙墓が検出された。

第79次調査地点で検出された古代の道路状遺構は、連続して連なった2列の柱穴列の空間を道路として使用したものである。道の分岐点となる地点の柱穴からは、土器が埋置された状態で出土した。これは、古代官道等の道路状遺構で見られる土器埋納行為と考えられる。

第14次調査地点・第63次調査地点・第64次調査地点・第65次調査地点・第66次調査地点・第74次調査地点・第79次調査地点・第81次調査地点が所在している地点は、横尾遺跡で確認された戦国期に比定される4つの方形館のうち、最も規模が大きく、約半町（1辺約70m）規模と考えられていた大型方形館の存在が認められている地点にあたる。各調査地点に隣接する第83次調査地点・第112次調査地点・第112-2次調査地点からは館の外郭施設である溝が検出されている。今回の報告で、その外郭施設と接続する溝状遺構が確認でき、方形館の全体像が明らかになった点は特筆すべき成果である。

以下、調査区ごとに成果を報告する。



第2節 各地区の遺構と遺物

(1) 横尾遺跡第1次調査

横尾遺跡第1次調査地点は、大分市大字横尾に所在する。本調査地点は、南に第98次調査地点が隣接し、そのさらに南に第141次調査地点、約50m東に第34次調査地点、約50m西には第33次調査地点と第137次調査地点が位置している。第98次調査地点では、9世紀前半以降の掘立柱建物跡が確認されている。第34次調査地点では、弥生時代の遺物が出土する土坑やピットなどが確認されているが、掘立柱建物跡などは確認されていない。第137次調査地点では、9世紀中頃～後半頃の柱穴群と16世紀末の東西溝が確認されている。今回の調査面積は全体で1,400m²となる。発掘調査は平成3年5月1日に開始し、同年9月30日に終了した。

各調査区の番号については、7ヶ所の調査区を設けて、A～Fまでの枝番号を付けた。本調査区は枝番号を含めた各調査区ごとに報告を行う。



第7図 第1次調査区全体遺構図(1/400)

A 区

1. 調査概要

第1次調査区の北西に位置する調査区で、調査面積は約453m²である。検出した主な遺構は掘立柱建物跡3棟、溝状遺構1条、廃棄土坑、ピット等である。調査区の東にB区、南にD区が隣接している。

2. 遺構

掘立柱建物跡

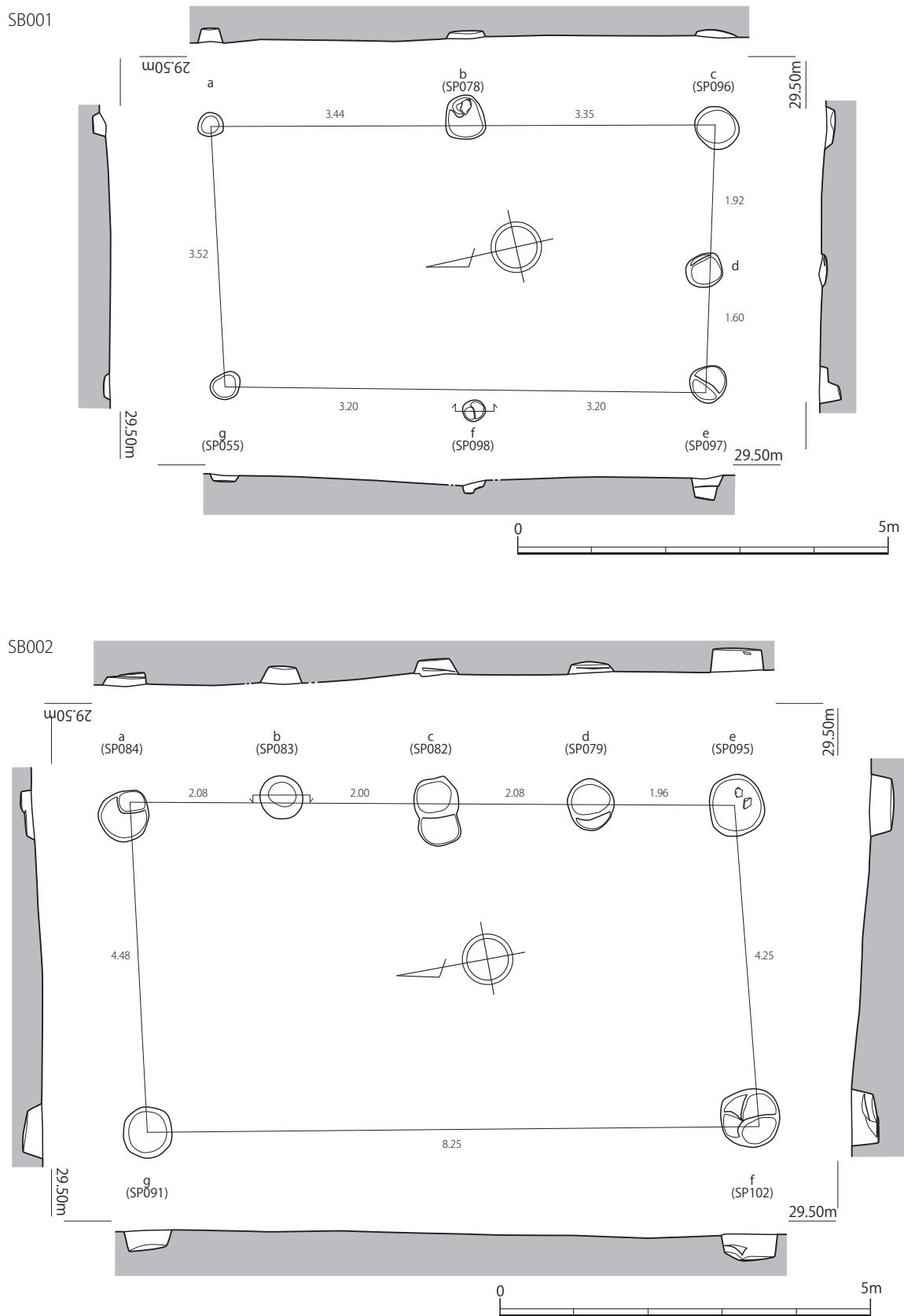
SB001(第9図)

調査区の中央で検出した、桁行2間×梁行2間、身舎面積23.9m²の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、建物の主軸方向はN-12°-Eである。柱穴の平面形状は円形もしくは不整橈円形を呈し、径0.3~0.6m、検出面からの深度は0.08~0.3mを測る。柱穴柱間は桁行が3.20~3.44m、南側の梁行で1.60~1.92mである。北側の梁行の中心には柱穴が確認されなかった。

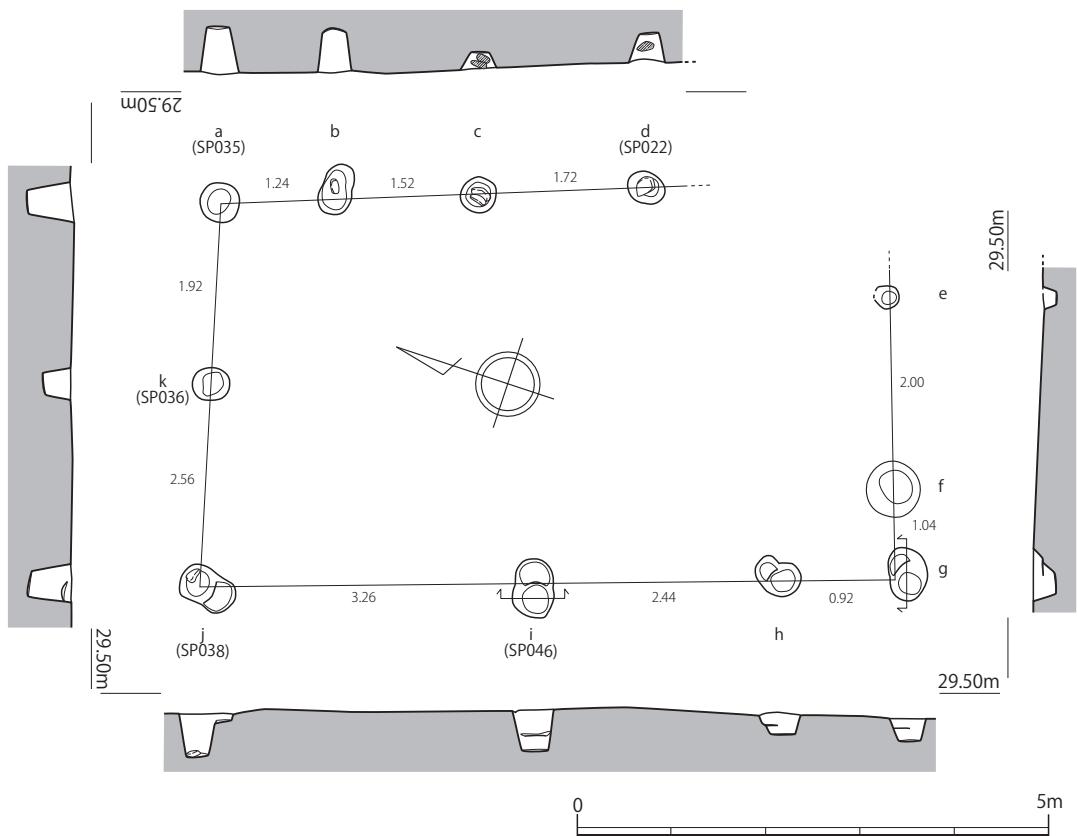
柱穴からは土師器片が出土しているが、小片のため時期は不明である。



第8図 第1次調査区A区遺構配置図・全体遺構図(1/300)



第9図 SB001・SB002 遺構実測図(1/80)



第 10 図 SB003 遺構実測図 (1/80)

SB002 (第 9 図)

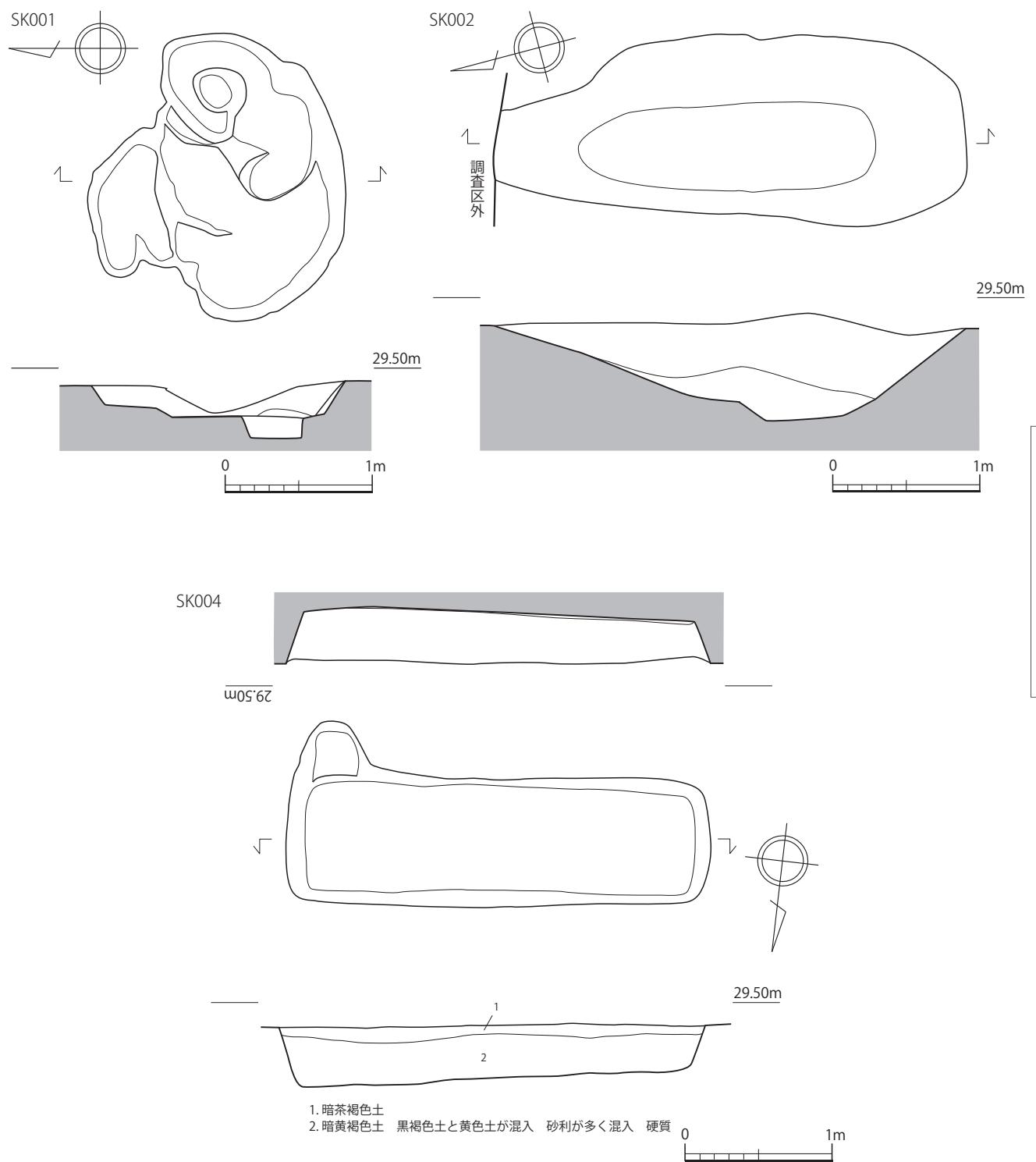
調査区の中央で検出した、桁行 4 間 × 梁行 1 間、身舎面積 35.6 m²の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、建物の主軸方向は N – 10° – E である。柱穴の平面形状は円形もしくは不整橢円形を呈し、径 0.5 ~ 0.8m、検出面からの深度は 0.16 ~ 0.35m を測る。柱穴柱間は東側の桁行で 1.96 ~ 2.08m、梁行が 4.25 ~ 4.48m である。西側の桁行の柱穴間には柱穴が確認されていない。

柱穴 c(SP082) から土師器坏片、柱穴 e(SP095) から土師器坏片と赤色塗彩の痕跡が残る土師器蓋、柱穴 f(SP102) と柱穴 g(SP091) から黒色土器 A 類の椀 c が出土しており、建物の時期は 10 世紀代と考えられる。

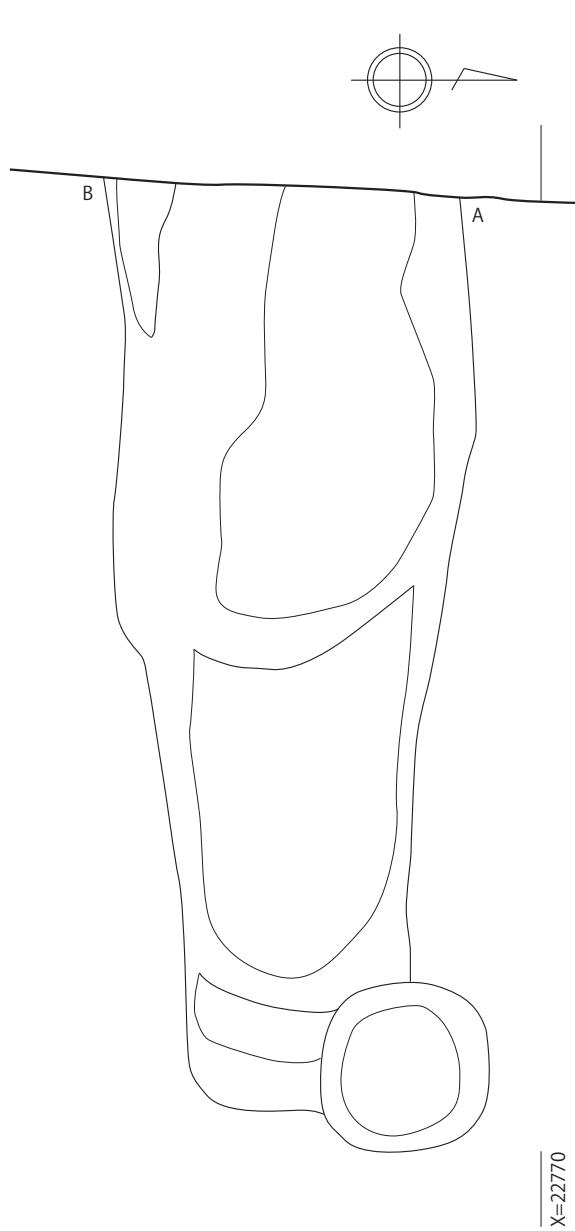
SB003 (第 10 図)

調査区の北東側で検出した、桁行 4 間以上 × 梁行 2 間以上、身舎面積約 31.2 m²の掘立柱建物跡である。建物の南東端は調査区外に展開している。東側の桁行は南東隅が調査区外にあるが、推定すると 5 間、西側の桁行は柱間が不規則であるが 3 間となっている。また、梁行も北側で 2 間、南側では 3 間となっており、不揃いである。建物は南北棟で、建物の主軸方向は N – 20° – W である。柱穴の平面形状は円形もしくは不整橢円形を呈し、径 0.25 ~ 0.65m、検出面からの深度は 0.13 ~ 0.5m を測る。柱穴柱間は桁行が 0.92 ~ 3.26m、梁行が 1.04 ~ 2.56m である。

柱穴 a(SP035) から 14 世紀後半～15 世紀前半の土師器坏、柱穴 d(SP022) から瓦質土器の鍋、柱穴 k(SP036) から土師器坏片が出土しており、建物の時期は 15 世紀代と考えられる。



第11図 SK001・SK002・SK004 遺構実測図 (1/40)



土坑

SK001 (第 11 図)

調査区の東側で検出した土坑である。平面形状は不整橿円形を呈し、長軸 1.96m、短軸 1.72m、検出面からの深度は 0.35m を測る。

遺構からは廃棄したものと思われる土師器壺、皿、甕、須恵器の大型甕や下郡遺跡で発見されたものと同型の移動式カマド等、多種多様な遺物が出土しており、遺物の年代から 8 世紀中頃～後半に比定され、廃棄土坑として使用されたと考えられる。

SK002 (第 11 図)

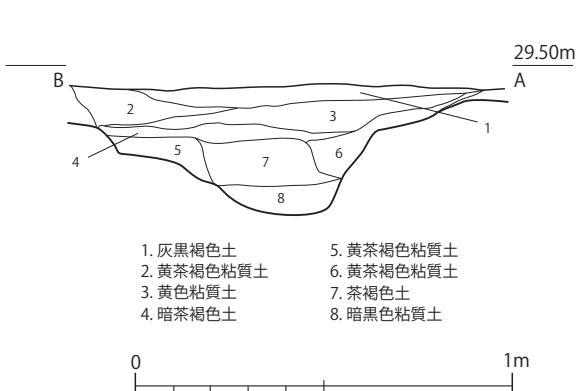
調査区の東側、SK001 の東側で検出した土坑である。平面形状は南北に延びる橿円形を呈し、長軸 3.2m、短軸 1.2m、検出面からの最大深度は 0.72m を測る。断面形状は舟底形をなす。

遺構からは中世の土師器壺や土師質土器鍋が出土している。

SK004 (第 11 図)

調査区の北西側で検出した土坑である。平面形状は東西に延びる隅丸長方形を呈し、長軸 2.88m、短軸 0.9m、検出面からの最大深度は 0.36m を測る。断面形状は逆台形をなす。埋土の上層は暗茶褐色土、下層は 0.3m 程の厚さの暗黄褐色土となっており、黒褐色土と黄色土が混入するなど、人為的に埋められたものと考えられる。

遺構からは 14 世紀代の青磁の蓮弁文碗片が出土している。木棺墓の可能性も考えられる。



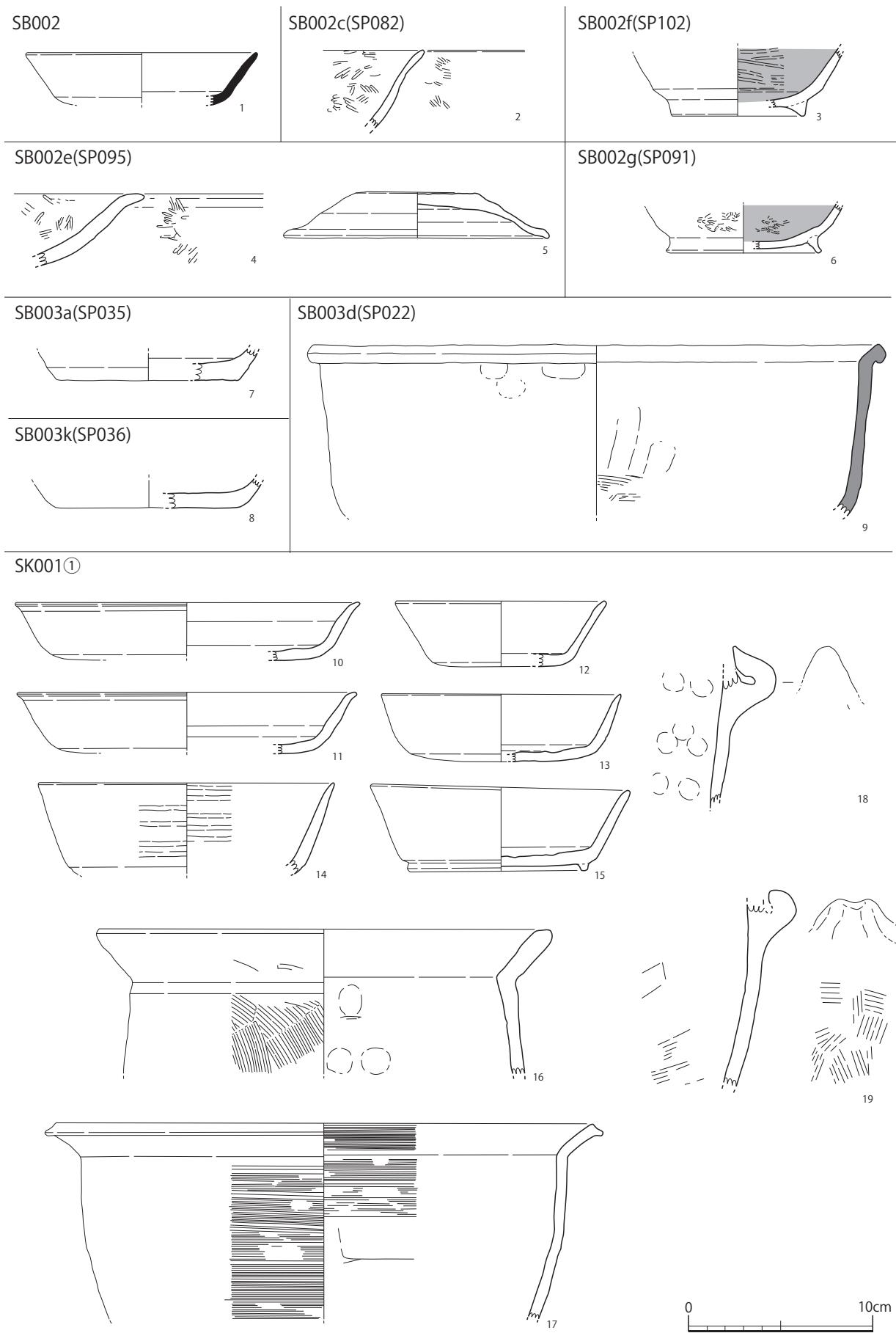
第 12 図 SD001 遺構実測図 (1/20)

溝状遺構

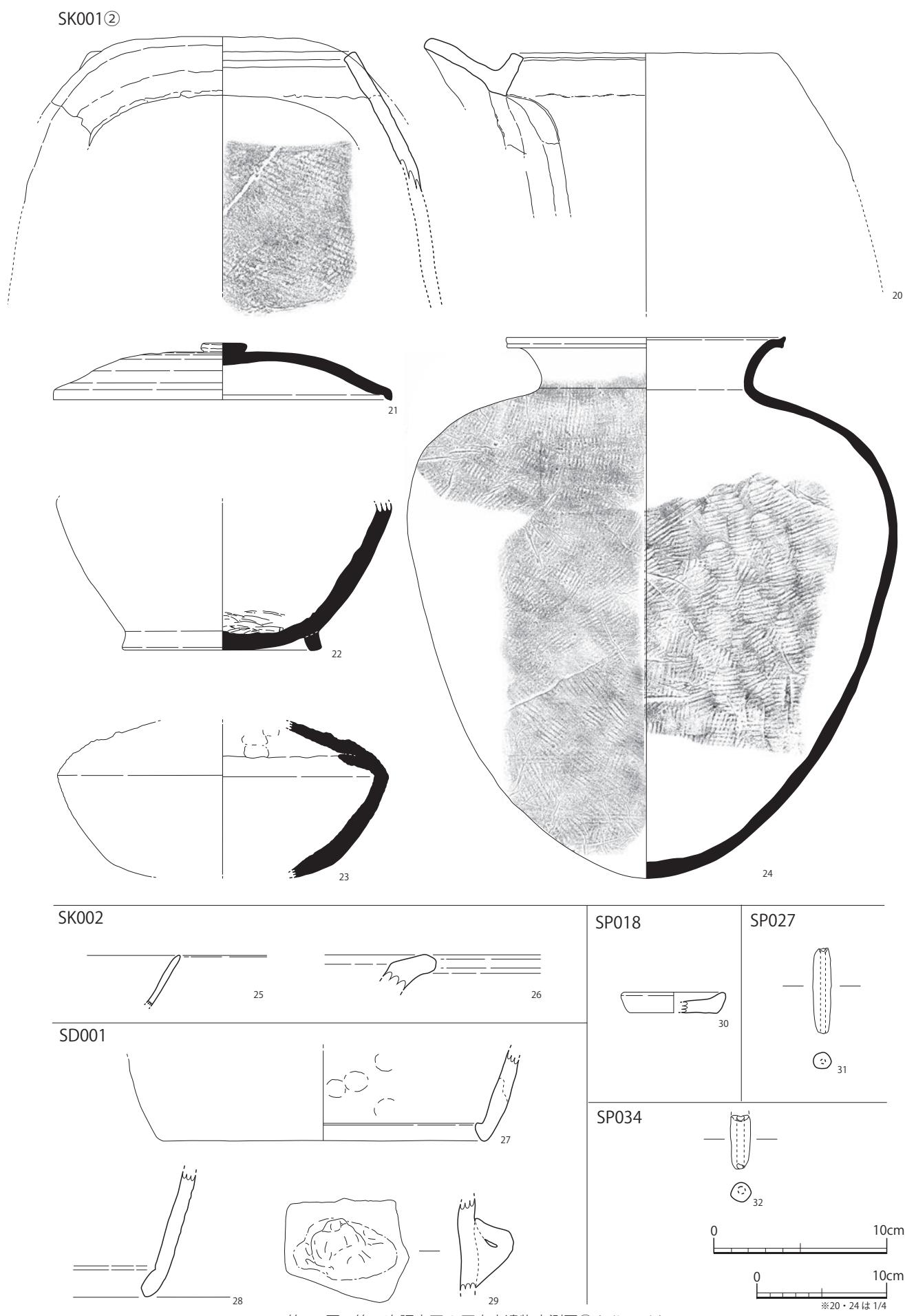
SD001 (第 12 図)

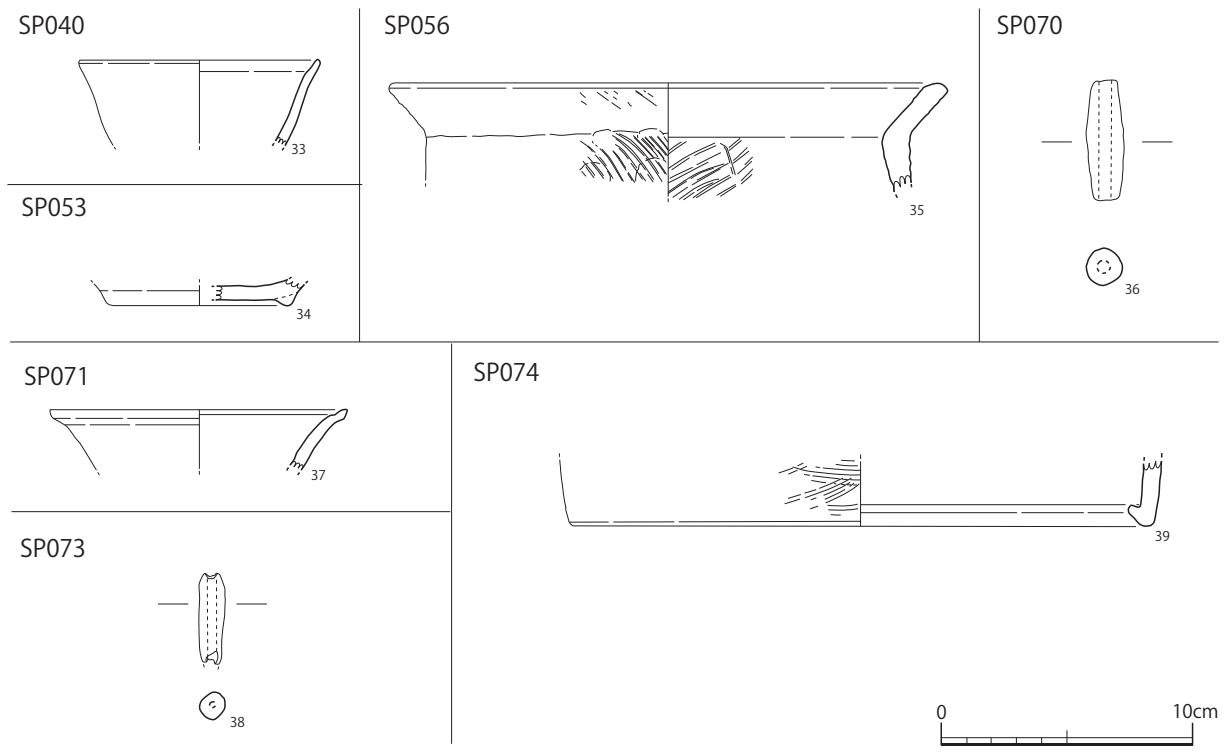
調査区の西側で検出した、東西方向に延びる溝状遺構である。遺構の西端は調査区外に延びており、現状で長さ 2.45m、幅 0.9m、検出面からの深度は最大で 0.3m 前後を測る。遺構の底部は西側に向かって段々と傾斜している。土層の観察から、少なくとも一回の掘り返しが行われた痕跡が認められる。

遺構からは土師器の甕や甌の破片が出土しており、溝の埋没時期は 8 世紀中頃～後半頃であると考えられる。



第13図 第1次調査区A区出土遺物実測図①(1/3)





第15図 第1次調査区A区出土遺物実測図③(1/3)

3. 小結

本調査では、10世紀の掘立柱建物跡1棟と、15世紀の掘立柱建物跡1棟、8世紀中頃～後半の土師器壺、甕、移動式カマドや須恵器の蓋、長頸壺などが出土した廃棄土坑が検出された。

SB001は遺物が出土していないが、方位や位置関係からSB002と近い年代の可能性が考えられる。8世紀中頃～後半代には、溝状遺構や廃棄土坑が点在する状況にあり、10世紀代は建物が建てられる状況に変わり、再び15世紀代にも建物が見られる。



第16図 第1次調査区B・C区遺構配置図・全体遺構図(1/300)

B区・C区

1. 調査概要

B区は第1次調査区の北東に位置する調査区である。西にA区、南にF区・E区が隣接している。調査面積は約240m²である。検出した主な遺構は溝状遺構1条、小型の土坑、ピットである。

C区はB区の更に東側に遺構の延びを確認するために設定したトレンチであり、2つの調査区に別れている。調査面積は北側の調査区が約11m²、南側の調査区が約30m²である。検出した主な遺構はB区から続く溝状遺構1条、小型の土坑である。

2. 遺構

溝状遺構

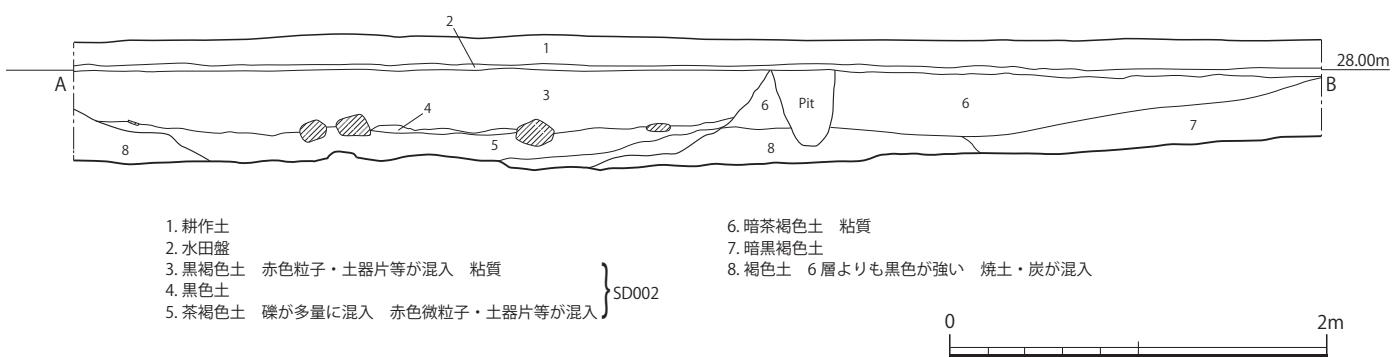
SD002(第17図)

B区の北東側で検出された東西方向に延びる溝状遺構である。遺構はC-1区でも確認でき、更に東側へと延びると考えられるため、遺構の規模は不明である。現状で検出された長さは10.5m、幅は最大で3.7m、検出面からの深度は東側で0.6m前後を測る。東側壁面の土層の観察から、最下層では南側から土の流れ込みが確認される。

溝内からは人頭大の礫石の他、土錘、8世紀～9世紀代の須恵器、土師器、黒色土器A類椀等が出土していることから、溝の埋没時期は8～9世紀代と考えられる。

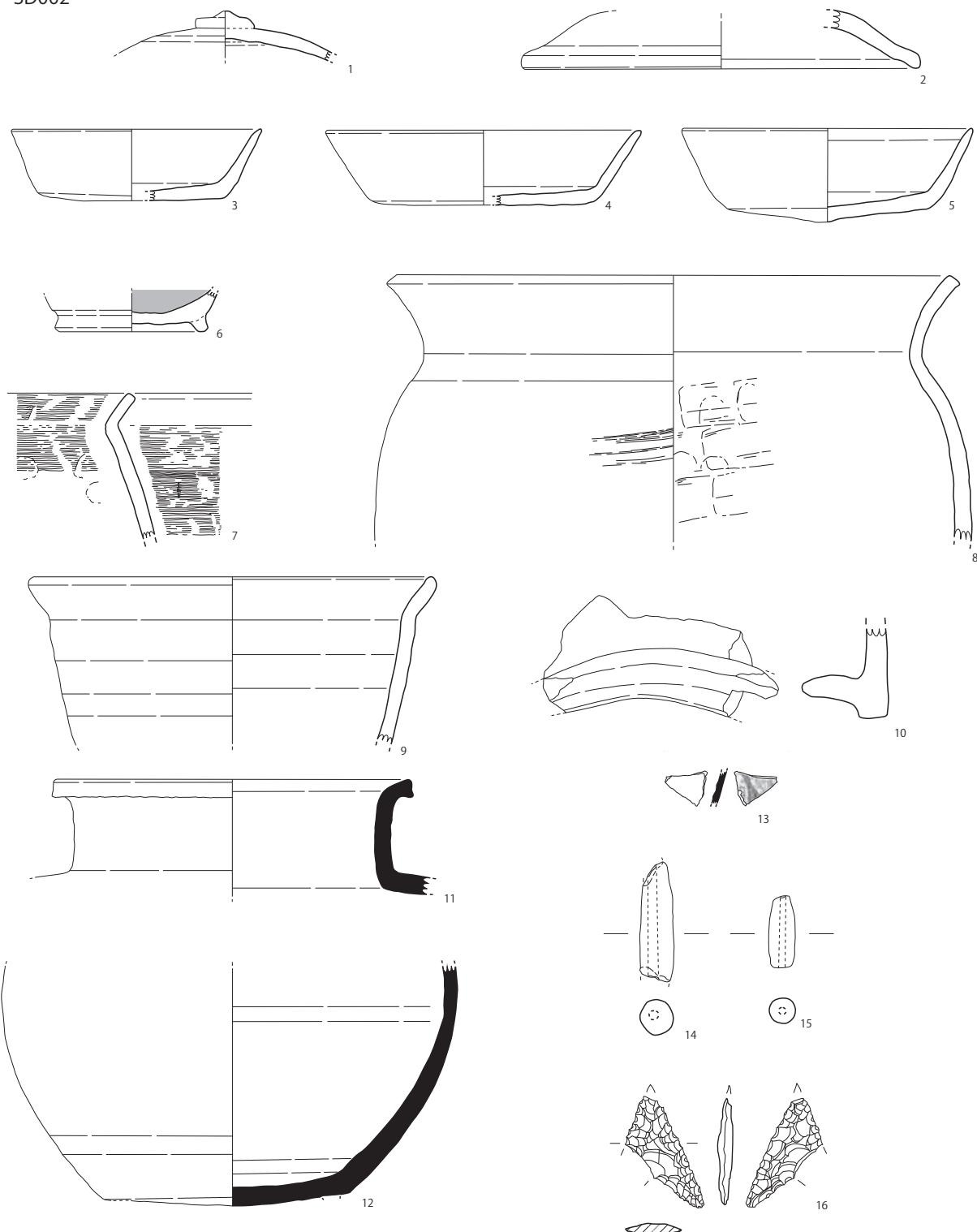
3. 小結

本調査では、8～9世紀代の溝状遺構が検出された。溝内からは多量の人頭大礫石や土師器の甕・壺・蓋・移動式カマド・甕等の遺物が出土しているが、これに関連する遺構は調査区内から検出されていない。



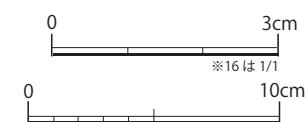
第17図 SD002 遺構実測図 (1/80・1/40)

SD002



SP137

SP

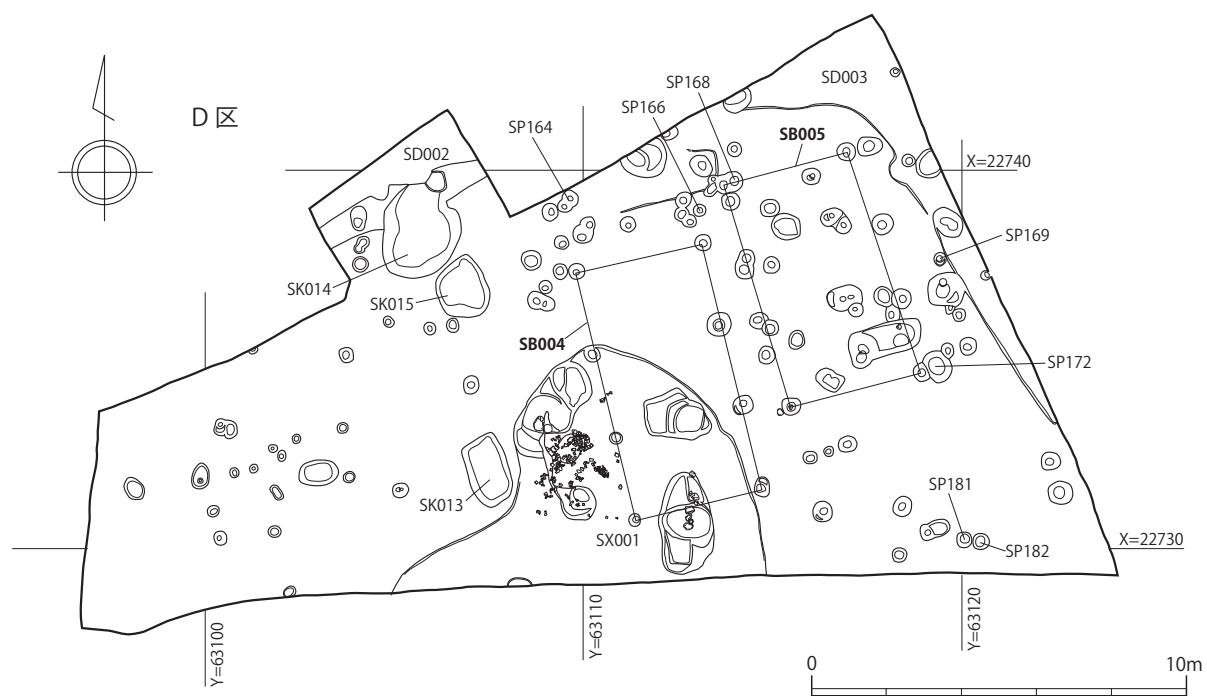
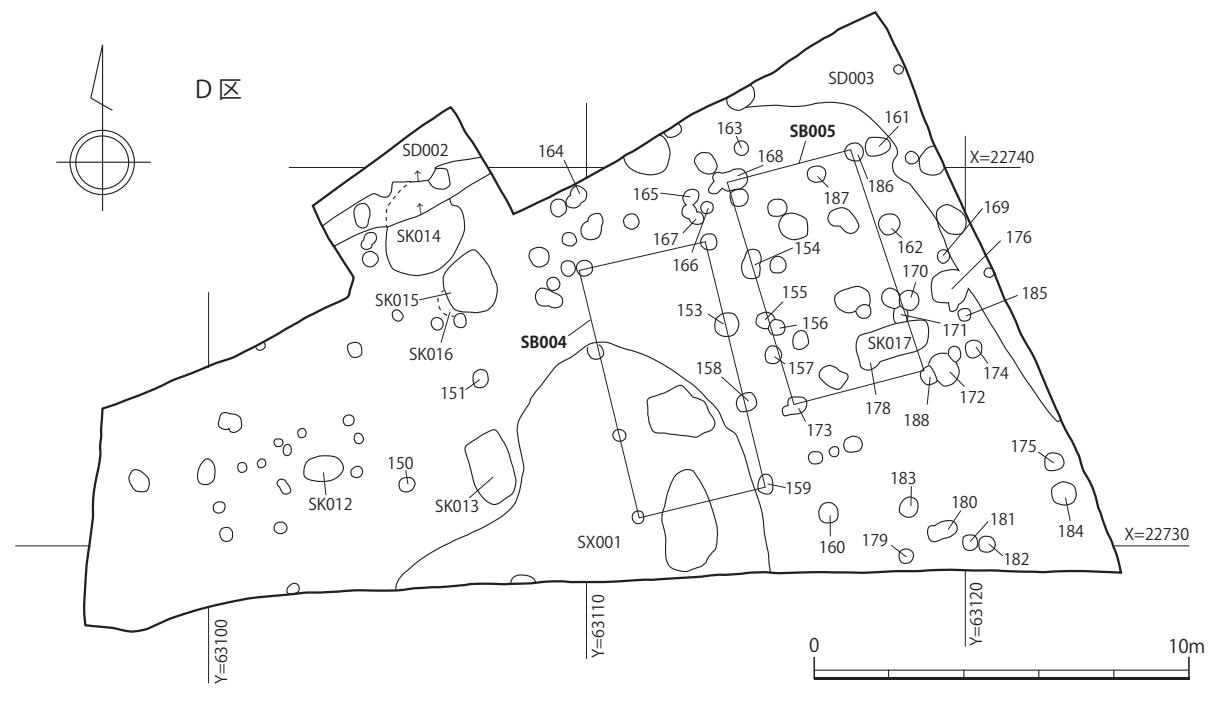


第18図 第1次調査区B区出土遺物実測図(1/1・1/3)

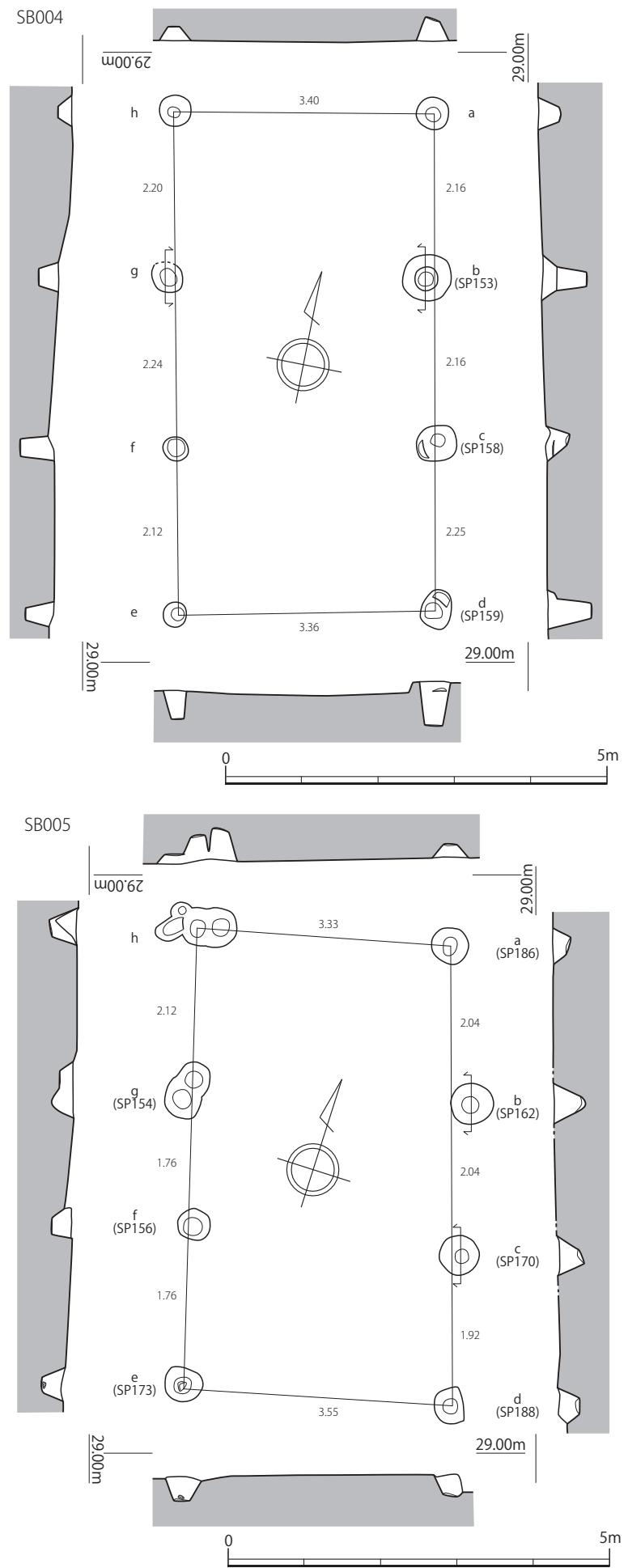
D 区

1. 調査概要

第1次調査区の南西に位置する調査区である。北にA区、東にE区が隣接する。調査面積は約240m²である。掘立柱建物跡2棟、溝状遺構2条、大型の不整形土坑の他、小型の土坑が多数検出された。



第19図 第1次調査区D区遺構配置図・全体遺構図(1/200)



第 20 図 SB004・SB005 遺構実測図 (1/80)

2. 遺構

掘立柱建物跡

SB004 (第 20 図)

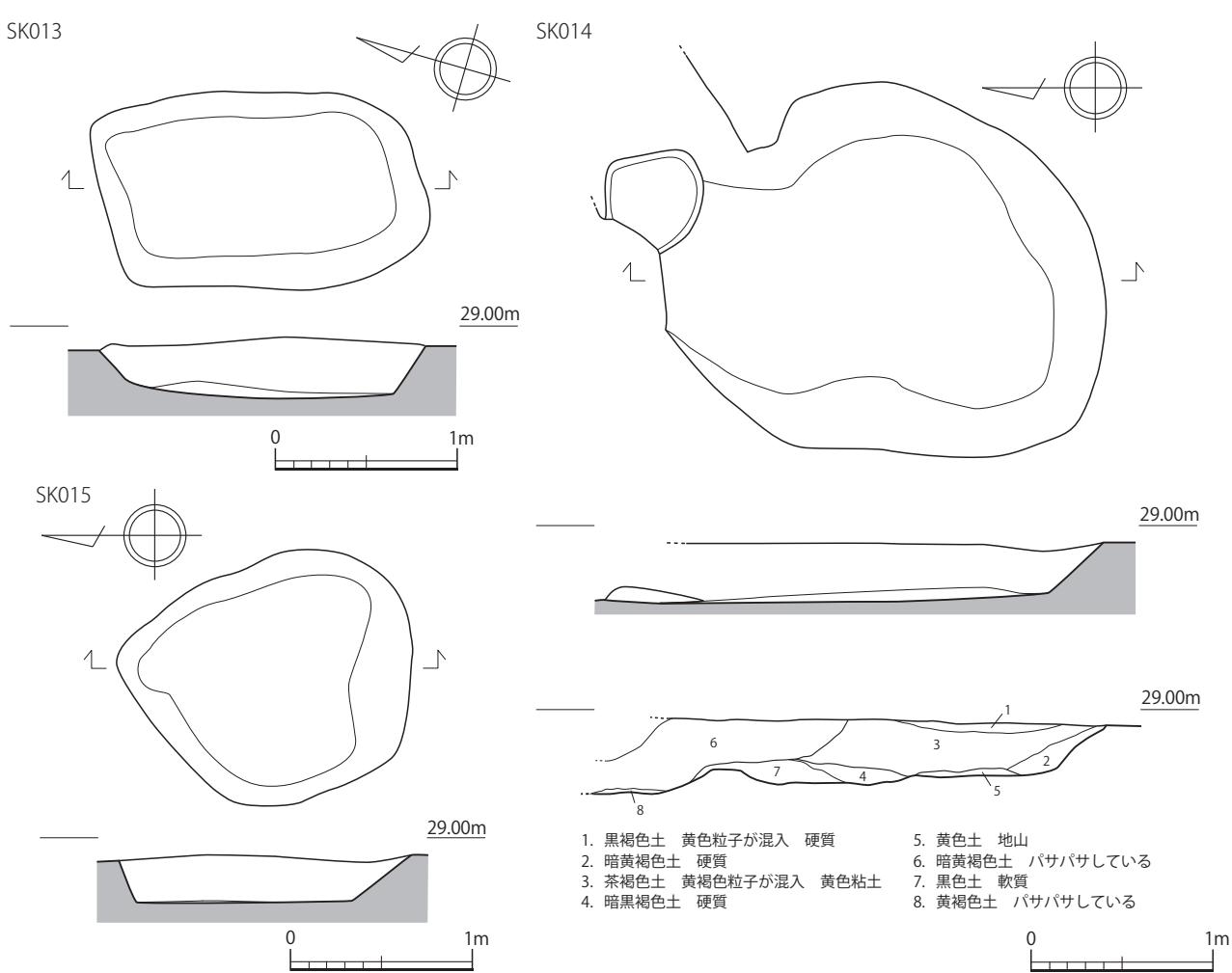
調査区の中央で検出した、桁行 3 間 × 梁行 1 間、身舎面積 20.7 m²の掘立柱建物跡である。建物西側の柱穴列が性格不明の土坑 SX001 を切っている。建物は南北棟で、建物の主軸方向は N – 12° – W である。柱穴の平面形状は円形もしくは不整橿円形を呈し、径 0.3 ~ 0.6m、検出面からの深度は 0.17 ~ 0.56m を測る。柱穴間は桁行が 2.12 ~ 2.25m、梁行が 3.36 ~ 3.40m である。

柱穴 c(SP158) から土錘、柱穴 d(SP159) から土師器坏片が出土している。切り合い関係にある SX001 が 8 世紀中頃～後半頃に埋没した遺構であることから、SB004 の年代はそれ以降のものと考えられる。

SB005 (第 20 図)

調査区の北東側で検出した、桁行 3 間 × 梁行 1 間、身舎面積 22.2 m²の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、建物の主軸方向は N – 18° – W である。柱穴の平面形状は円形もしくは不整橿円形を呈し、径 0.4 ~ 0.75m、検出面からの深度は 0.17 ~ 0.75m を測る。柱穴柱間は桁行が 1.76 ~ 2.12m、梁行が 3.33 ~ 3.55m である。

柱穴 a(SP186)・c(SP170)・e(SP173)・f(SP156) から土師器片が出土している他、柱穴 g(SP154) より青白磁の合子の蓋が出土している。



土坑

SK013 (第 21 図)

調査区の中央南側で検出した土坑である。平面形状は南北方向に延びる隅丸長方形を呈し、長軸 1.78m、短軸 1.08m、検出面からの深度は 0.32m を測る。断面形状は逆台形をなす。

遺構からは 8 世紀代の土師器高台付壺が出土しており、遺構の時期は 8 世紀代と考えられる。

SK014 (第 21 図)

調査区の北側で検出した土坑である。北側を SD002 によって切られている。平面形状は橢円形を呈し、長軸 2.42m、短軸 2.02m、検出面からの最大深度は 0.32m を測る。断面形状は逆台形をなす。

遺構からは須恵器片、土師器壺、甕が出土しており、遺構の時期は 8 世紀中頃～後半頃と考えられる。

SK015 (第 21 図)

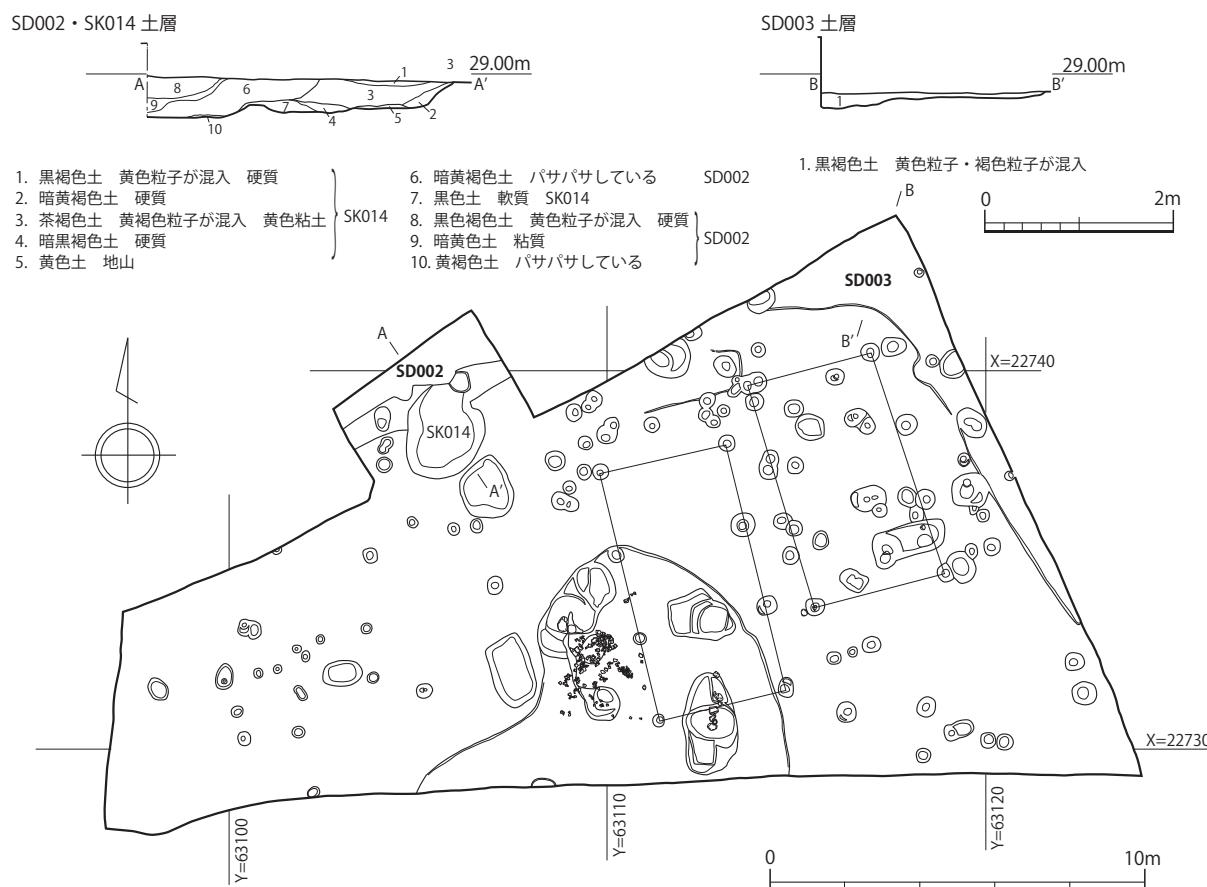
調査区の中央北側で検出した土坑である。平面形状は不整橢円形を呈し、長軸 1.60m、短軸 1.36m、検出面からの最大深度は 0.26m を測る。断面形状は逆台形をなす。

遺構からは土師器甕が出土している。

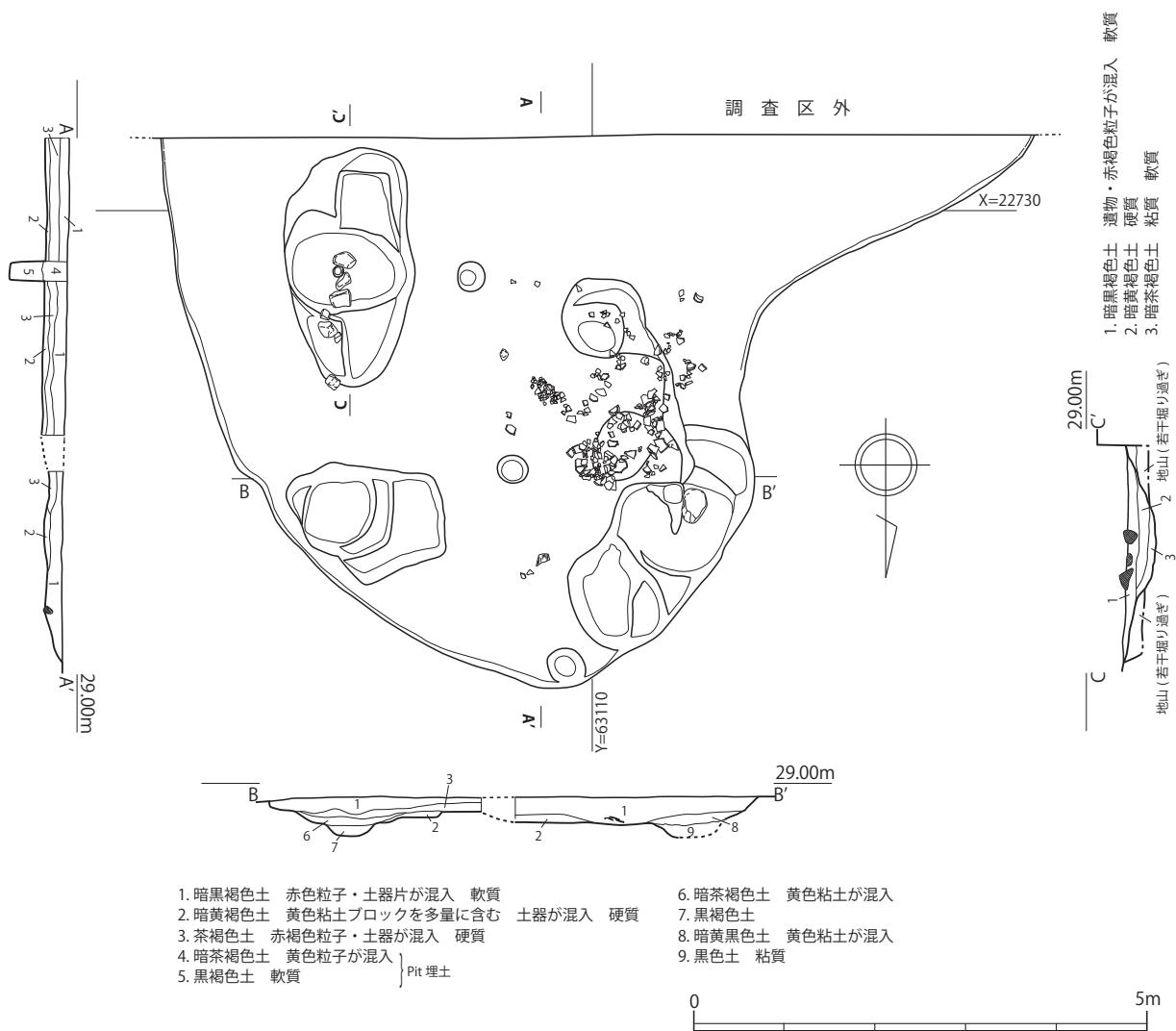
溝状遺構

SD002 (第 22 図)

調査区の北側で検出した、東西方向に延びる溝状遺構である。SK014 を切っている。遺構の東西ならびに北端は調査区外に延びており、全長は不明である。現状で検出長が東西 4.6m、南北 1.6m、検出面からの深度は最



第 22 図 SD002・SD003 遺構実測図 (1/200・1/80)



第 23 図 SX001 遺構実測図 (1/80)

大で 0.45m 前後を測る。土層の観察から、掘り返しが認められる。

遺構からは 14 世紀～15 世紀の青磁碗と瓦質土器の鍋が出土している。

SD003(第 22 図)

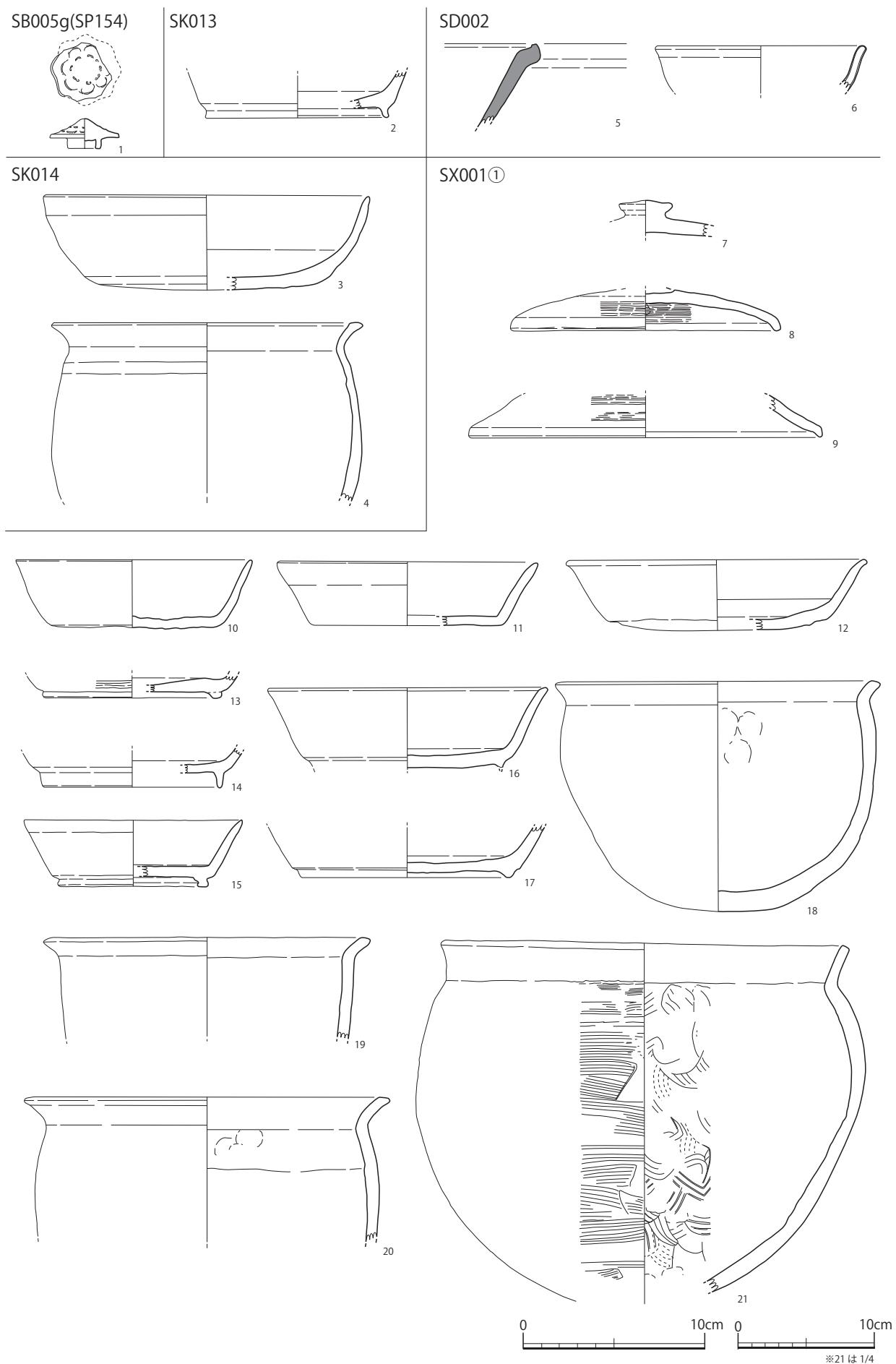
調査区の東側で検出した、南北方向に延びる溝状遺構である。遺構の南北ならびに東端は調査区外に延びており、全長は不明である。現状で東西 4.2m、南北 11.8m、検出面からの深度は最大で 0.2m 前後を測る。堆積土層の類似や位置関係から、SD002 と同一遺構であると考えられる。

遺構からは瓦質土器片が出土している。

ピット

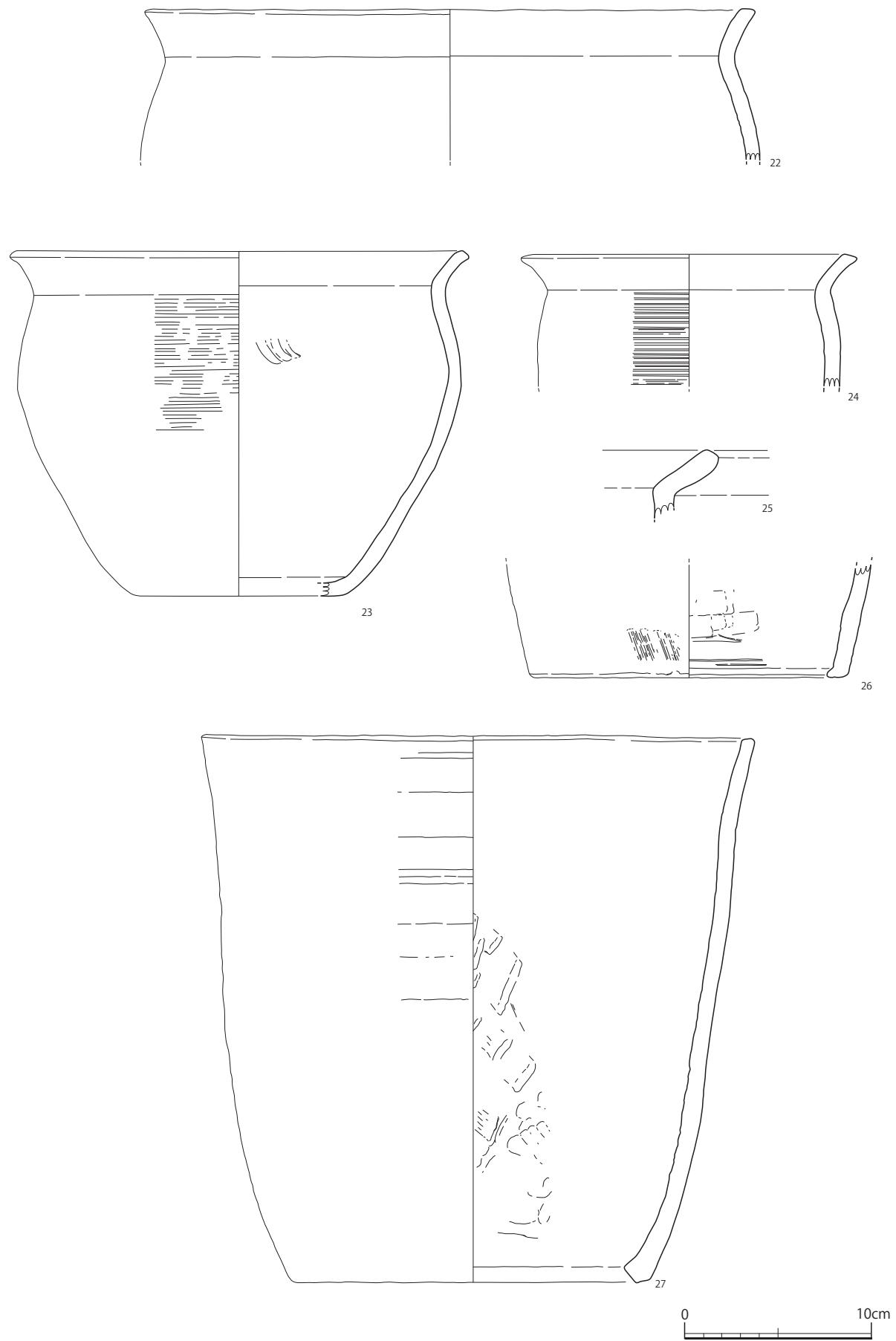
SP181(第 19 図)

調査区の南東側で検出したピットである。平面形状は円形を呈し、径 0.4m、検出面からの深度は 0.1m を測る。遺構からは国産陶器の天目碗が出土している。



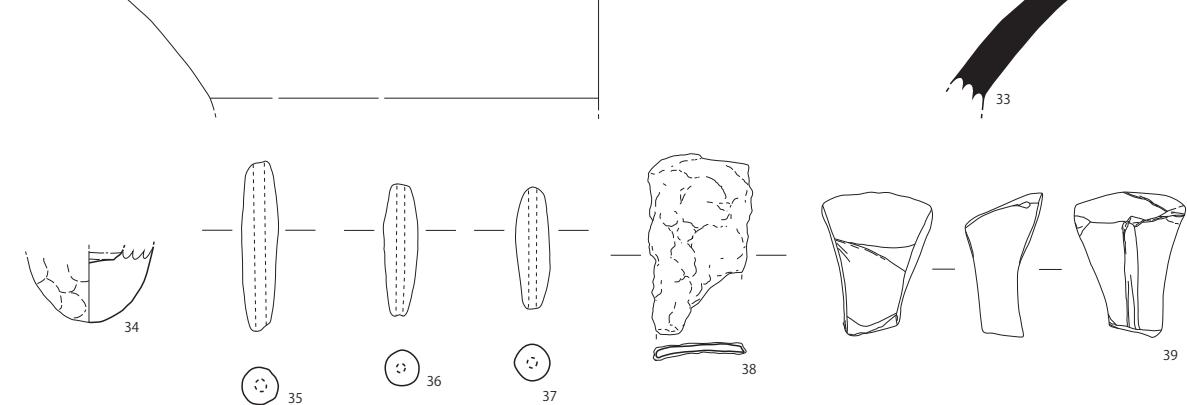
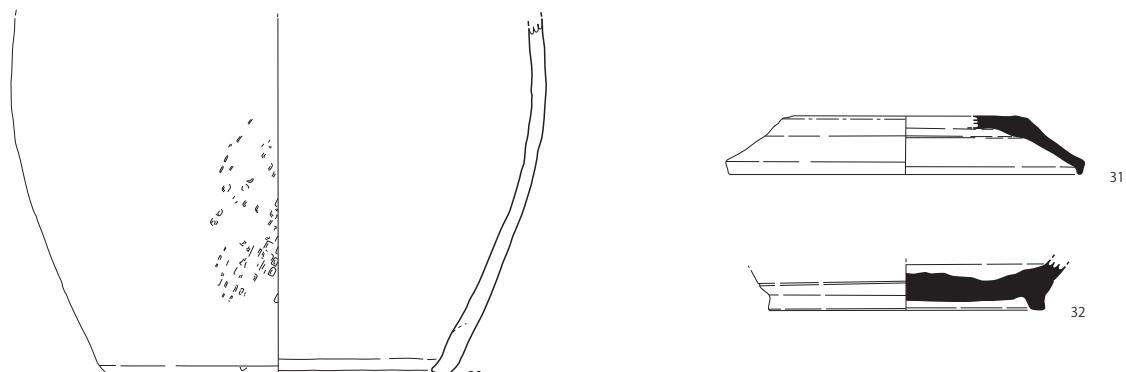
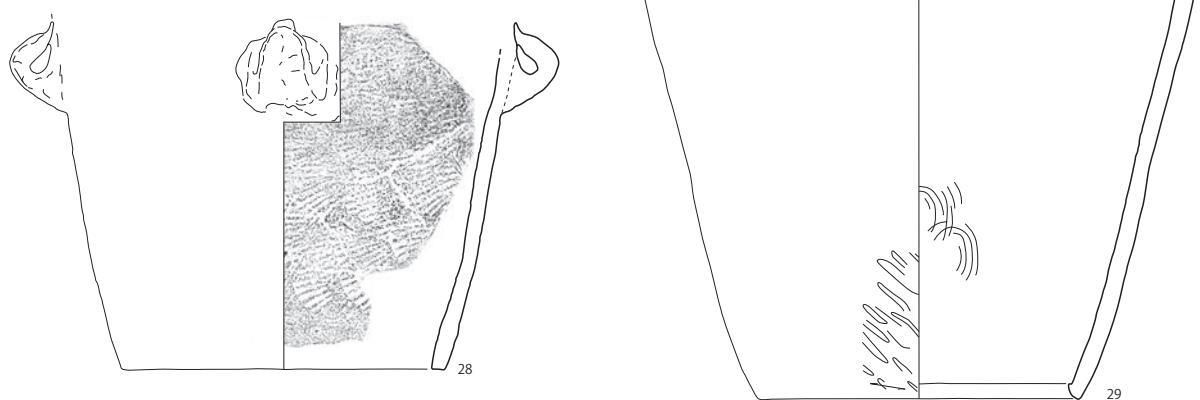
第24図 第1次調査区D区出土遺物実測図① (1/3・1/4)

SX001②

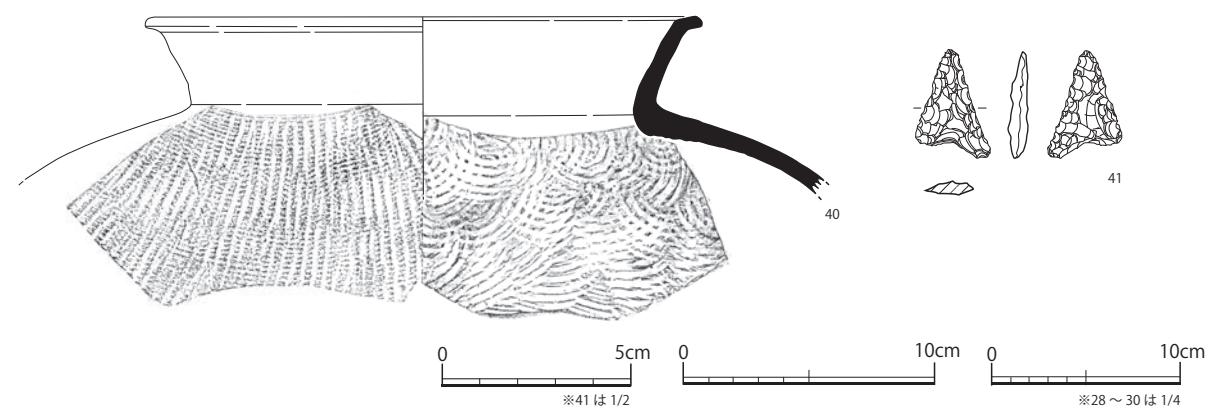


第25図 第1次調査区D区出土遺物実測図②(1/3)

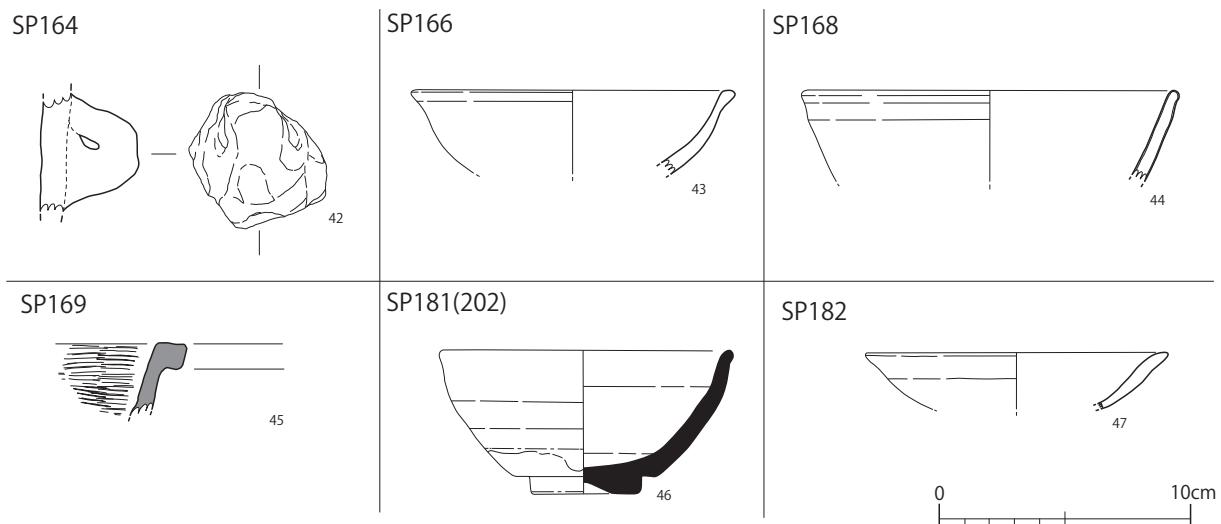
SX001③



表土



第26図 第1次調査区D区出土遺物実測図③(1/2・1/3・1/4)



第27図 第1次調査区D区出土遺物実測図④(1/3)

不明土坑

SX001(第23図)

調査区南壁に接して検出した性格不明土坑である。遺構のほぼ中央が掘立柱建物跡SB004の建物西側柱穴列によって切られている。遺構南端は調査区外に延びており、現状で南北6.18m、東西8.52m、検出面からの深度は最大で0.3m前後を測る。

遺構からは8世紀中頃～後半頃の須恵器の蓋、土師器壺・高台付壺、甕、甌等の多数の遺物が出土している。

3. 小結

本調査では、8世紀中頃～後半頃の大型性格不明土坑SX001が調査区の中央付近で検出され、多数の土師器が出土した。この土坑はA区の廃棄土坑SK001とほぼ同時期の遺構と考えられる。

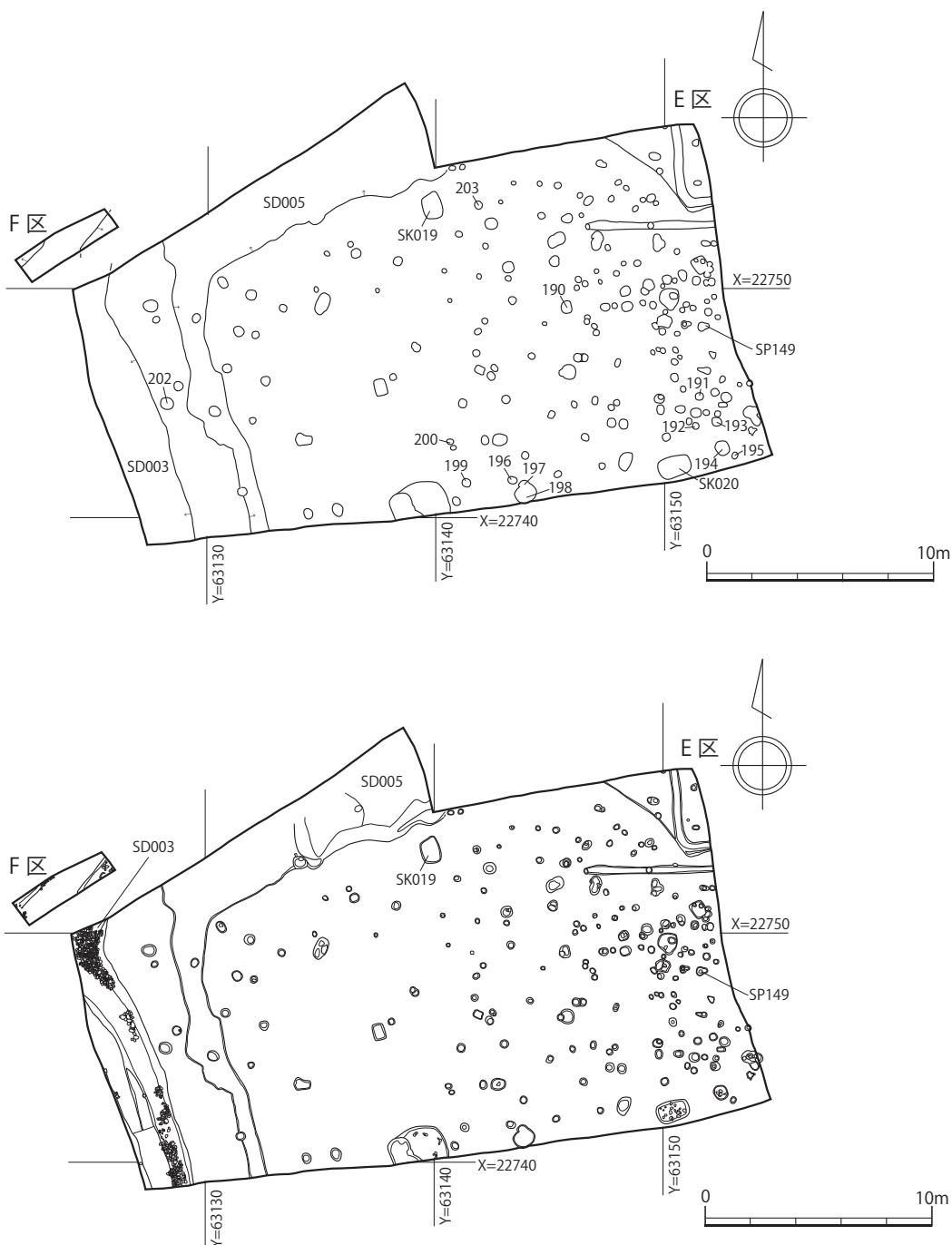
また、本調査では2棟の掘立柱建物跡を検出している。SB005は出土遺物から中世段階と考えられているが、SB004についてもSB005と切り合い関係が認められておらず、軸も概ねあってことから、同時期に建てられた可能性が高い。

溝状遺構SD002とSD003は土層観察により同一遺構であると推測され、調査区の北東で直角に屈曲している。この溝はSB004とSB005を囲むように掘られた溝と考えられる。

E 区・F 区

1. 調査概要

第 1 次調査区の南東に位置する調査区である。北に B 区、西に D 区が位置している。F 区は E 区の溝状遺構 (SD003・SD005) の延長部分を確認するために設定したトレンチである。調査面積は E 区が約 405 m²、F 区が約 8 m² である。検出した主な遺構は溝状遺構、土坑のほか、ピットである。



第 28 図 第 1 次調査区 E 区・F 区遺構配置図・全体遺構図 (1/300)

2. 遺構

土坑

SK019 (第 29 図)

調査区の中央北側で検出した土坑である。平面形状は橢円形を呈し、長軸 1.54m、短軸 1.0m、検出面からの深度は 0.1m を測る。断面形状は浅い逆台形をなす。

遺構からは、14 世紀代の土師器の皿の完形品が東側床面直上から出土したほか、鉄製の釘が複数出土していることから、木棺墓である可能性が高い。

溝状遺構

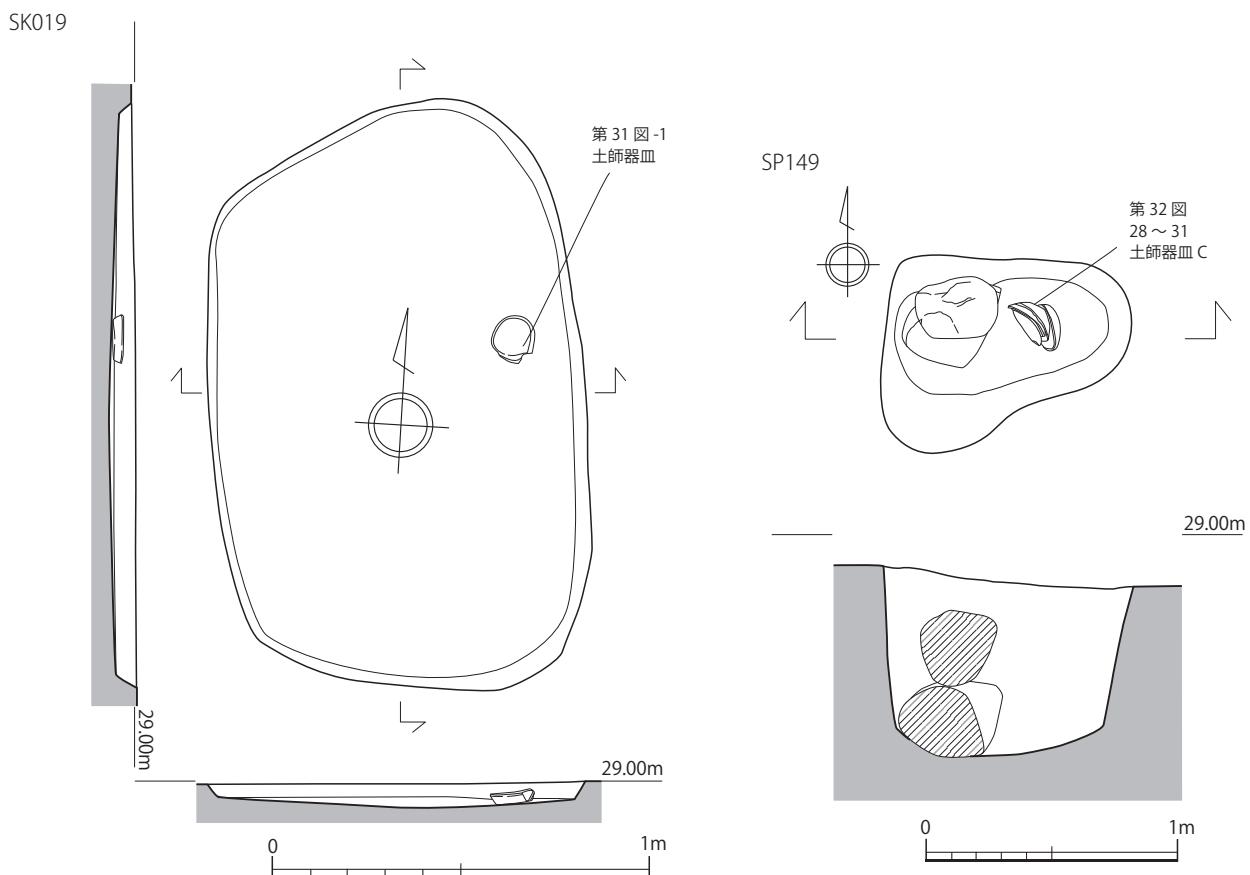
SD003 (第 30 図)

調査区の西壁に接して検出された溝状遺構である。溝は直線的ではなく若干弧を描くように掘られている。遺構の両端は調査区外に延びているため、規模は不明であるが、現状で長さ 11.9m、幅 0.95 ~ 1.75m、検出面からの深度は最大で 0.8m 前後を測る。土層の観察から、少なくとも二回の掘り返しが行われている。

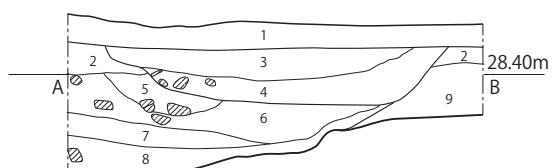
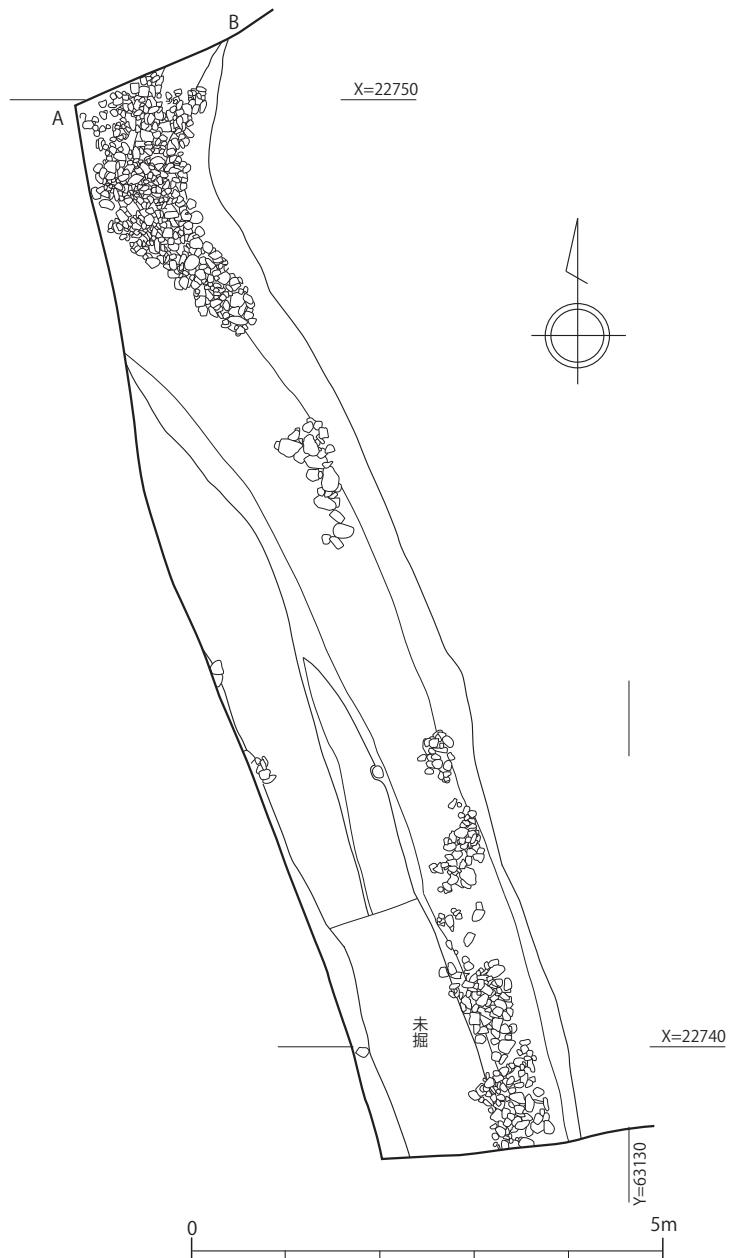
溝内からは肥前産磁器碗、龍泉窯系青磁碗、同安窯系青磁碗、備前産擂鉢、土師器坏等が出土している。掘り返しが行われるために遺物の年代幅が大きいが、最終埋没時期は 18 世紀前半代と考えられる。

SD005 (第 28 図)

調査区の北壁に接して検出された溝状遺構である。南北方向から東西方向に L 字状に屈曲する形に掘られており、遺構の南端ならびに北端、東端は調査区外に延びているため、全長は不明である。現状で長さ 24.0m、幅 0.8 ~ 4.0m、検出面からの深度は最大で 0.2m 前後を測る。



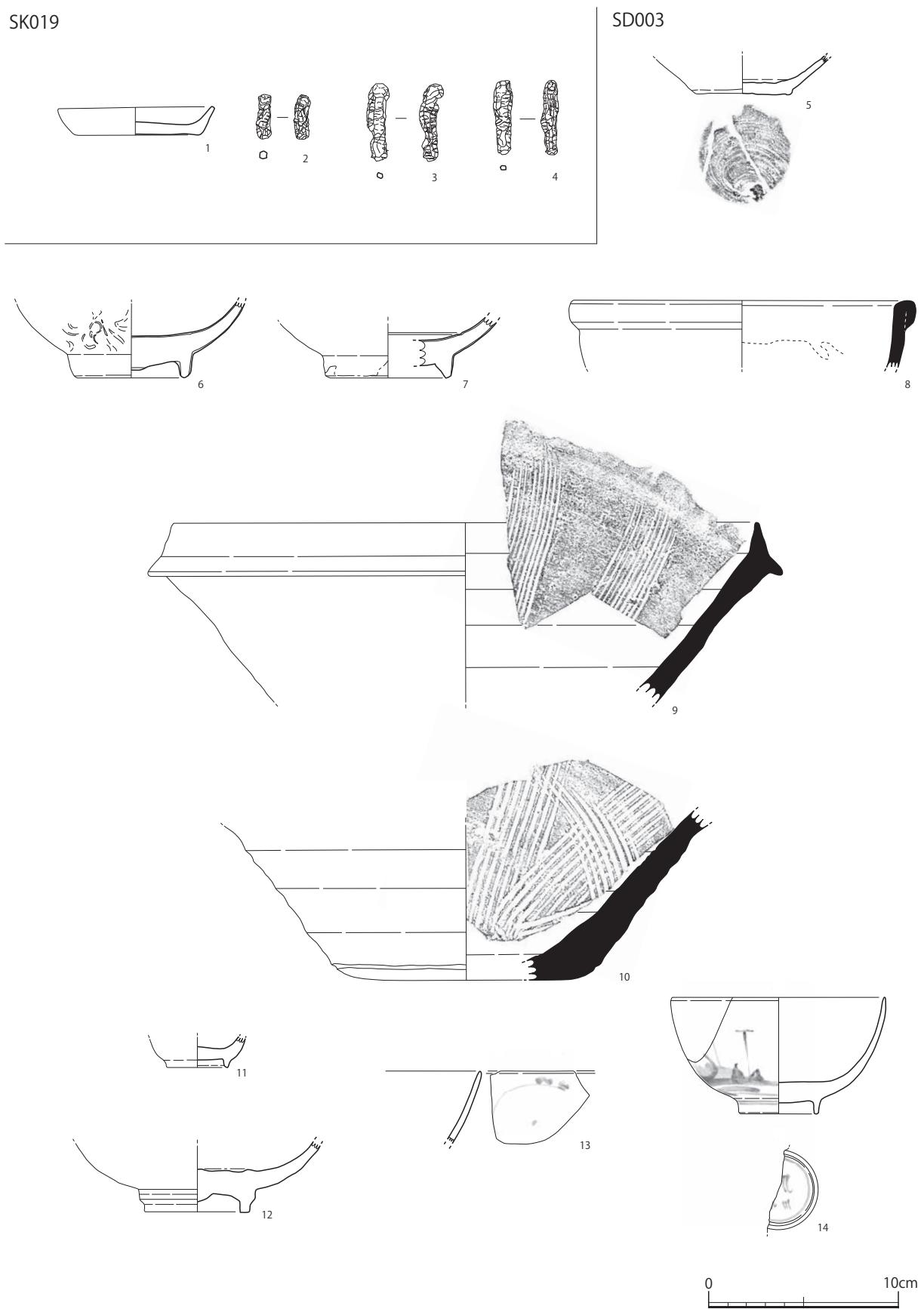
第 29 図 SK019・SP149 遺構実測図 (1/20・1/30)



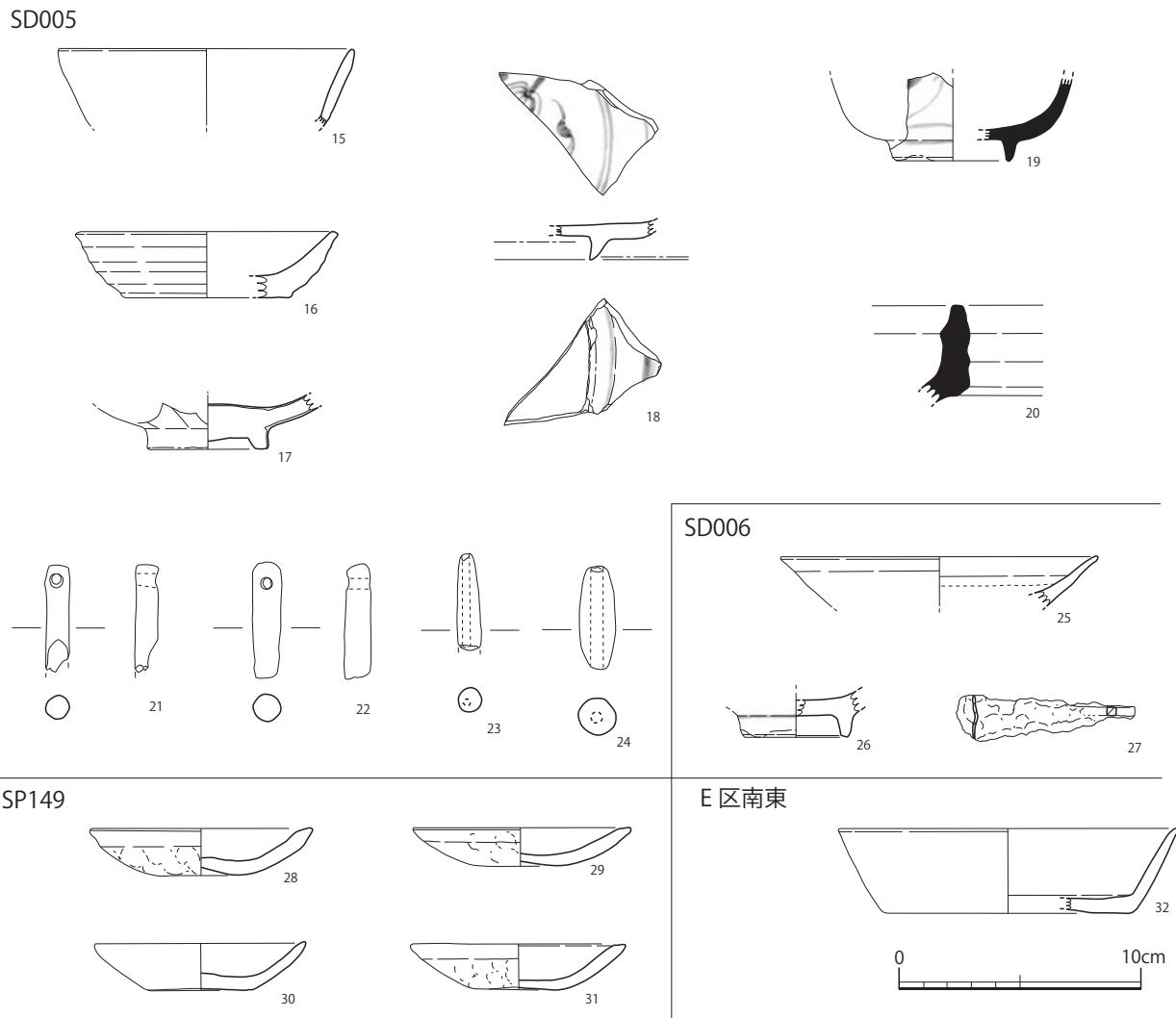
- 1. 耕作土
- 2. 灰褐色土 水田盤
- 3. 茶褐色土
- 4. 暗茶褐色土
- 5. 茶黒色土 黄色粘土ブロックが混入
- 6. 黄褐色土 黄色粘土ブロックが混入
- 7. 黒黄色土 黒褐色土と黄色粘土ブロックの混入土
- 8. 黄茶褐色土 茶色土と黄色粘土が混入
- 9. 黄褐色土 粘質 地山



第30図 SD003 遺構実測図 (1/40・1/80)



第31図 第1次調査区E区出土遺物実測図①(1/3)



第32図 第1次調査区E区出土遺物実測図②(1/3)

溝内からは、土師器坏、龍泉窯系青磁碗、景德鎮窯系染付皿等が出土しており、遺構の年代は15世紀から16世紀代と考えられるが、最終埋没時期は肥前産陶器碗などから18世紀代と考えられる。

ピット

SP149（第29図）

調査区の東側で検出したピットである。長軸0.96m、短軸0.8mを測る。遺構内からは4点の土師器皿Cが重なった状態で出土しており、これと共に径30cm大的石も2点確認された。この状況から、これらの土師器は祭祀に伴い埋納されたものと考えられる。

3. 小結

本調査では、主に溝状遺構2条と土坑、ピットが多数検出された。

溝状遺構のSD003とSD005の出土遺物は15世紀代から16世紀代と18世紀代前半の大きく2時期に分けられることや、土層観察から複数回の掘り返しが行われたことが認められるため、中世～近世にかけて長期に渡って踏襲してきたと考えられる。特にSD005はL字状に屈曲しており、この内側は土坑や柱穴の密度が高いことから、居住域を区画する用途を有していたと考えられる。

第1次調査小結

第1次調査では大きく5つの時期の遺構、遺物を確認することができた。

8世紀中頃～後半頃の遺構としてあげられるのが、A区から検出された廃棄土坑SK001、B区から検出された溝状遺構SD002、D区から検出された土坑SK014と大型性格不明土坑SX001である。調査地の西側に遺構が片寄って見られるものの、これに関連する掘立柱建物跡は検出されていない。

10世紀代の遺構としてあげられるのが、A区から検出された掘立柱建物跡SB001・SB002の南北棟で、建物は重複しており、時期差があると考えられるが、建物の主軸は概ね同じ東寄りの方位である。これ以外には遺構が確認されておらず、非常に土地利用が希薄な時期と考えられる。

14世紀代の遺構としてあげられるのが、A区から検出された土坑SK004と、E区から検出された土坑SK019である。ともに木棺墓である可能性が高いことから、14世紀代には調査区一帯は墓域として利用されていたと考えられる。

15世紀～16世紀代の遺構としてあげられるのが、A区から検出された掘立柱建物跡SB003と土坑SK002、D区から検出された掘立柱建物跡のSB004・SB005である。同じくD区から検出された溝状遺構SD002・SD003、E区から検出された溝状遺構SD003・SD005等も遺構が掘削され、利用され始めたのは当該期である可能性が高い。掘立柱建物跡は3棟全て南北棟で、建物の主軸も西寄りの方位である。これらの建物は、D区SD003のような溝で区画された屋敷の一部を構築していた可能性が高い。この15世紀～16世紀代に掘削された溝状遺構SD003・SD005は、その後数度の掘り返しを経て18世紀代前半まで使用されている。溝の明確な利用法については不明だが、18世紀代になると建物等の痕跡は周囲に見られず、溝の機能や土地利用もあわせて変化したものと考えられる。

(2) 横尾遺跡第2次調査(有田古墳)

1. 調査概要

横尾遺跡第2次調査地点は、大分市大字横尾に所在する。本調査地点の約25m南西には第88次調査地点が、約45m南には第92次調査地点が、約50m西には第113-2次調査地点が位置している。第88次調査地点の第5トレンチと第6トレンチから周溝遺構が1基、第9トレンチから周溝遺構1基が確認された。これが円形に廻ることから古墳の周溝と判断され、2基の円墳(有田古墳3号墳・4号墳)の存在が確認された。本調査では、円墳2基(有田1号墳・2号墳)、石蓋土壙墓1基が確認された。発掘調査は平成3年9月1日に開始し、同年12月27日に終了した。

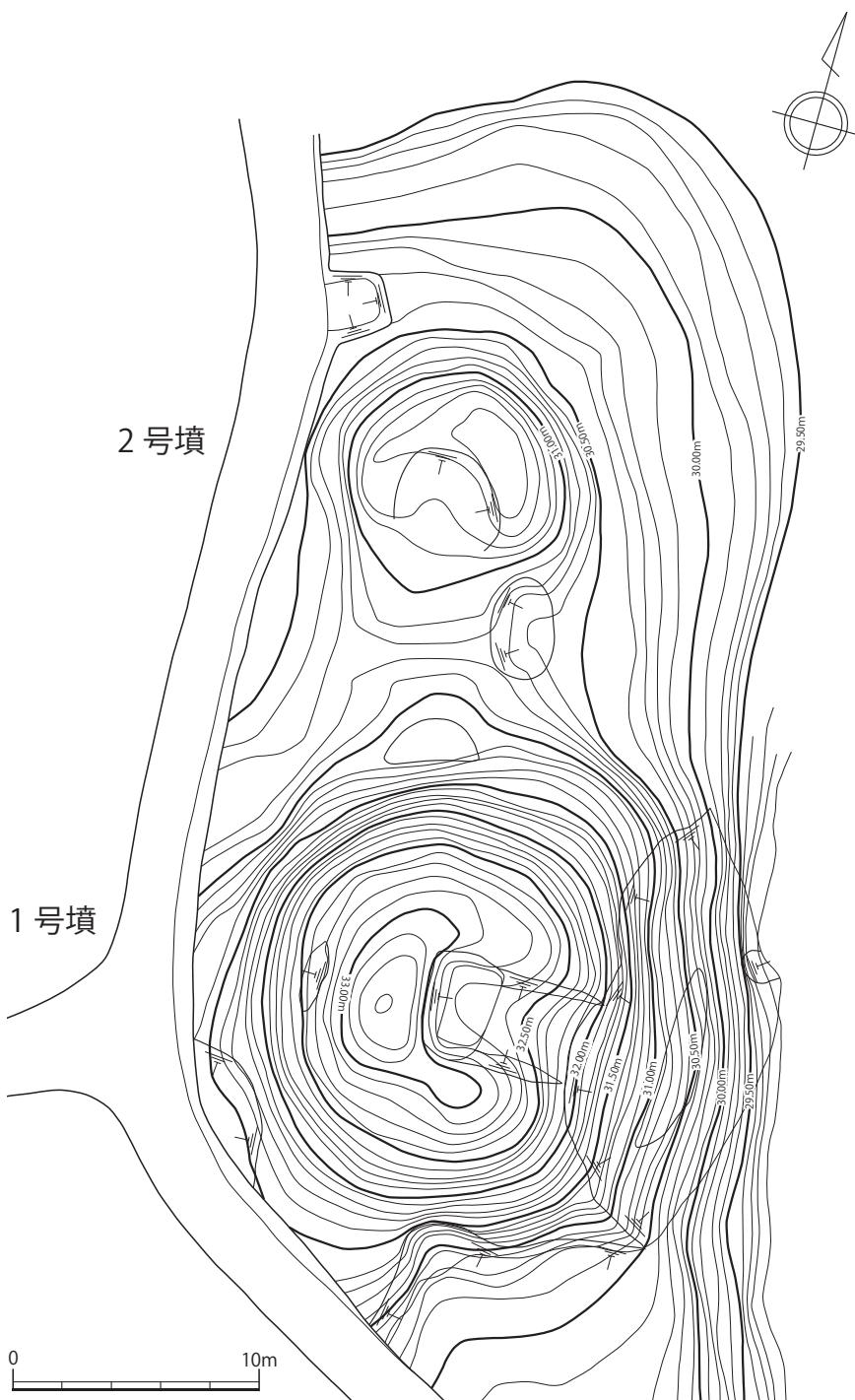
本調査地域周辺には縄文時代前期～後期にかけての横尾貝塚があり、昭和55年・56年度にかけて大分県教育委員会が、平成13年度から大分市教育委員会が発掘調査を行っている。有田古墳群は、この貝塚より西側の鶴崎丘陵端部の狭隘な谷間の最深部に所在している。

今回の調査は古墳の築造年代と墳丘の形態や性格を把握するため、南側に位置している大型の墳丘を1号墳、その北にある小型の墳丘を2号墳としてトレンチによる最小限の調査を実施した。トレンチの設定は1号墳の主体部に2本(1T・7T)、東側墳丘裾部に2本(2T・3T)、北側に2本(8T・10T)、また2号墳については、中央部の南北方向に断ち割るようにトレンチ1本(6T・9T)、北側に2本(4T・5T)を入れた。また、1号墳・2号墳の東側半分については表土層の剥ぎ取り作業を行った。

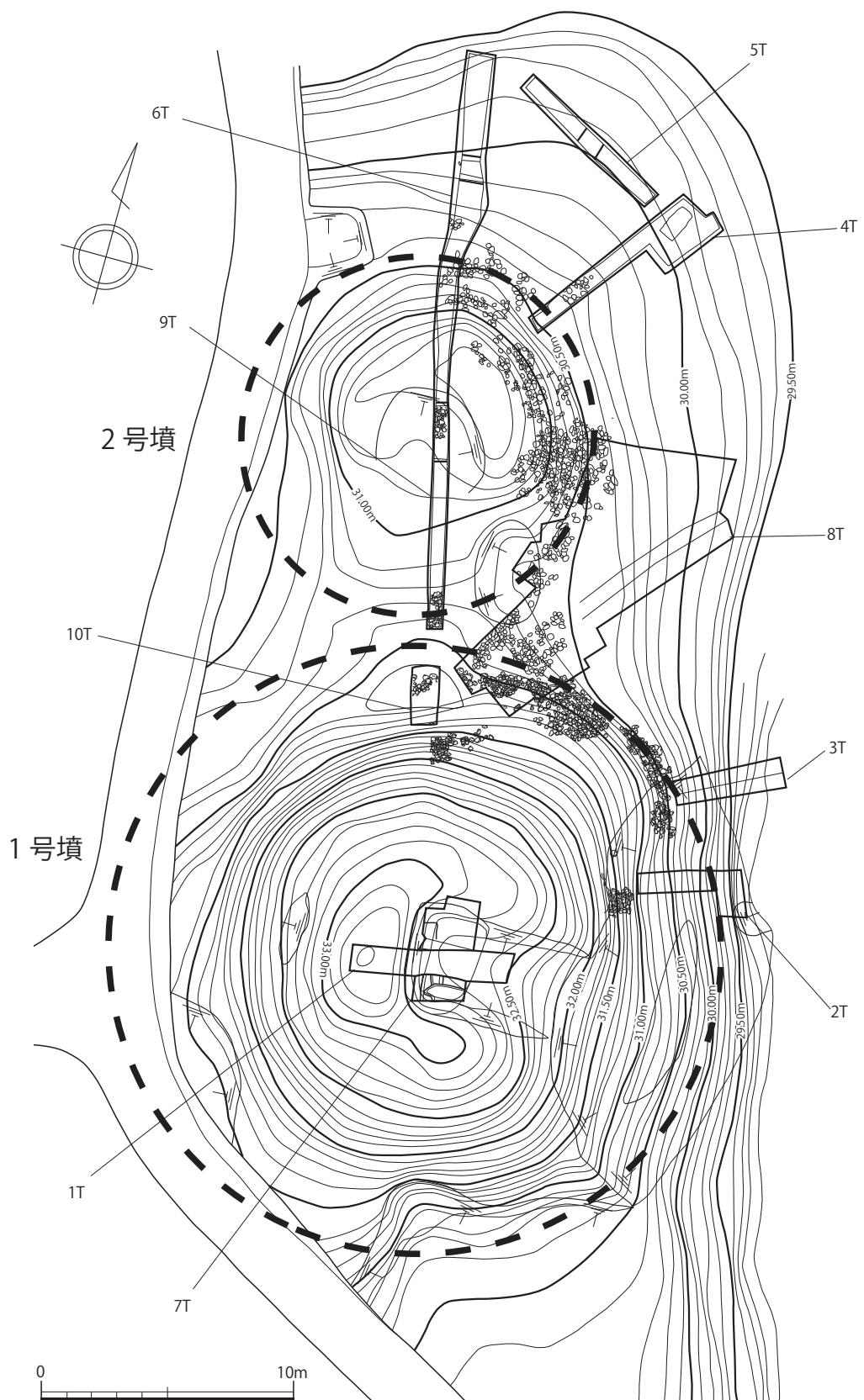
2. 遺構

1トレンチ(第35図)

1号墳の主体部を確認するために設定したトレンチで、中央部で7トレンチと交差している。トレンチの規模は長さ6.0m、幅0.8～1.2m、表土からの深さは最大

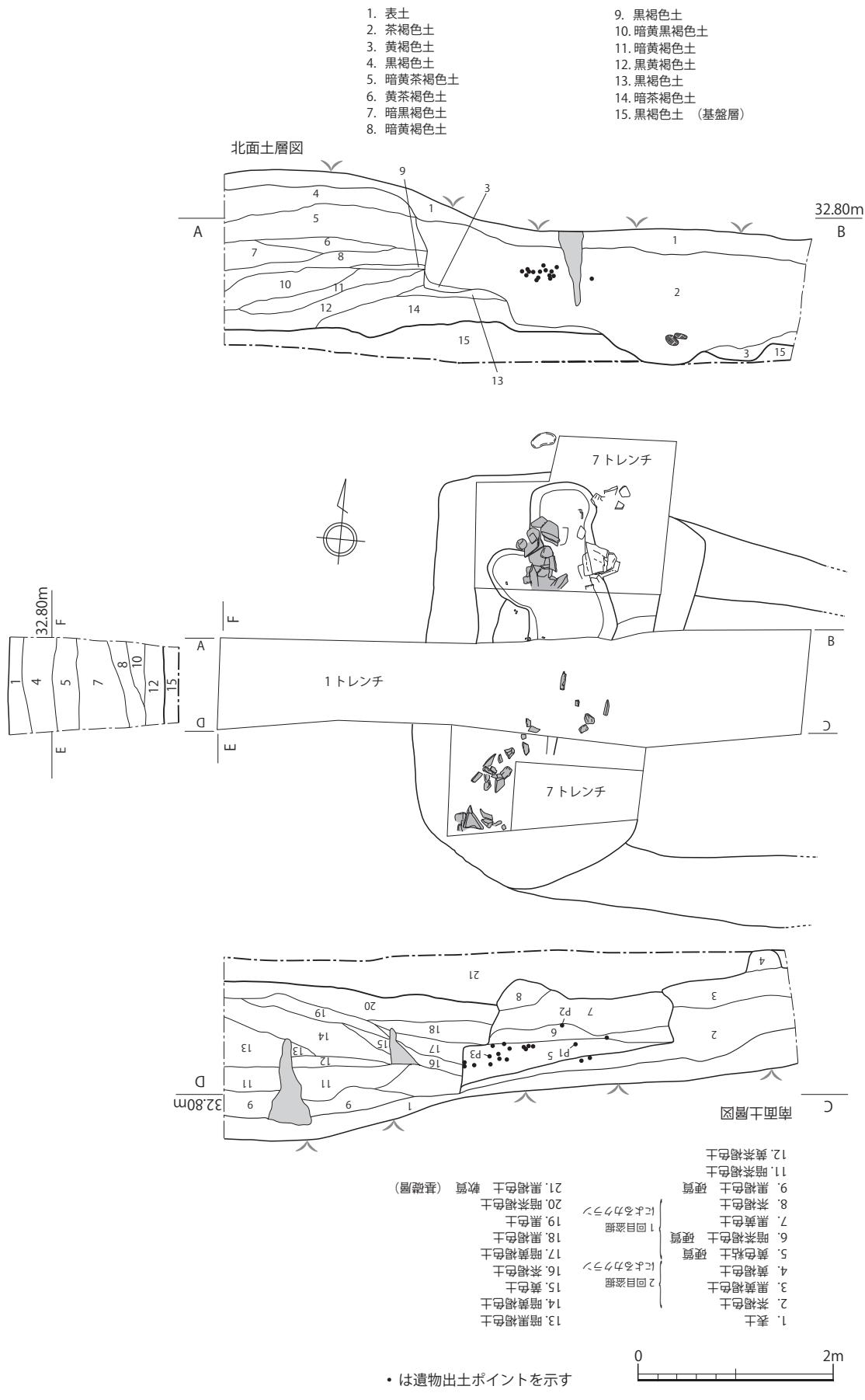


第33図 第2次調査区(有田古墳1号・2号墳)地形図(1/300)



第34図 第2次調査区(有田古墳1号・2号墳)トレンチ・葺石配置図(1/250)

※土層の注記は北面土層図に準ずる



第35図 1トレンチ遺構実測図(1/60)

で1.8m前後まで掘り下げを行った。土層の観察から、1号墳主体部は2度にわたって盜掘されている状況が認められた。

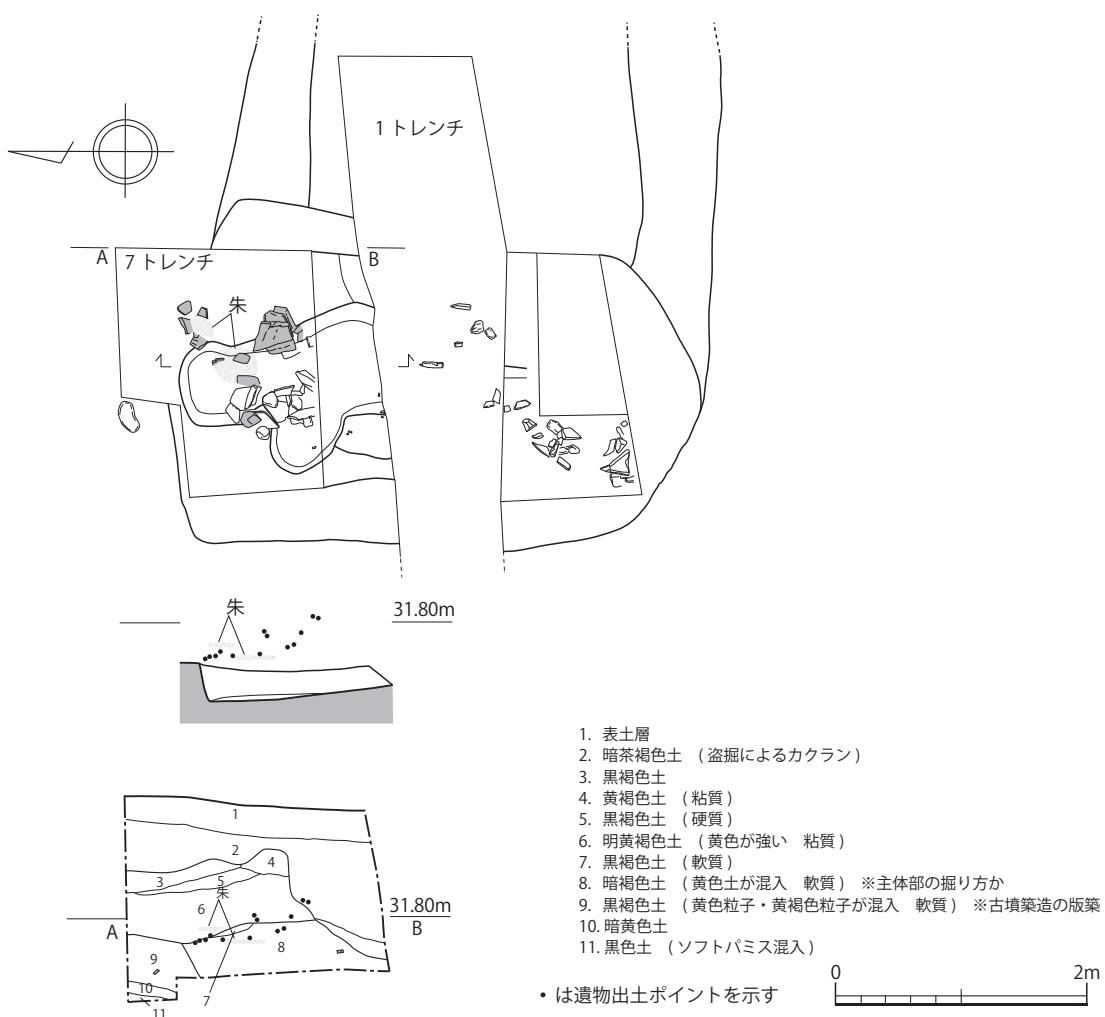
また、墳丘は質の異なる土を交互に盛り、築造されたことが看取できた。1トレンチの盜掘埋土中からは鉄剣片2点が出土している。1トレンチの東側の墳丘は、盜掘の掘削によるものと、地形の傾斜が強いことにより、墳丘盛土の流出が顕著である。

2 トレンチ（第37図）

1号墳東側裾部に、東西に長く、南北に短いL字状のトレンチを設定した。東西に長さ4.0m、南北に幅0.8(西側)～2.0(東側)m、表土からの深さは最大で1.0m前後まで掘り下げを行った。堆積している土は2層・3層ともに自然堆積土である。遺物は、トレンチ北東から4世紀～5世紀代の土師器壺の口縁部片や底部片などが出土している。

3 トレンチ（第37図）

1号墳東側裾部に東西に設定したトレンチである。東西に長さ4.5m、南北に幅1.2m前後、表土からの深さは最大で0.4m前後まで掘り下げを行った。土層の観察から、2層下部にこぶし大の礫石が確認できるが、これは古墳に伴う葺石ではなく自然礫であると考えられる。遺物は、須恵器、3世紀～4世紀代の土師器鉢の底部片など

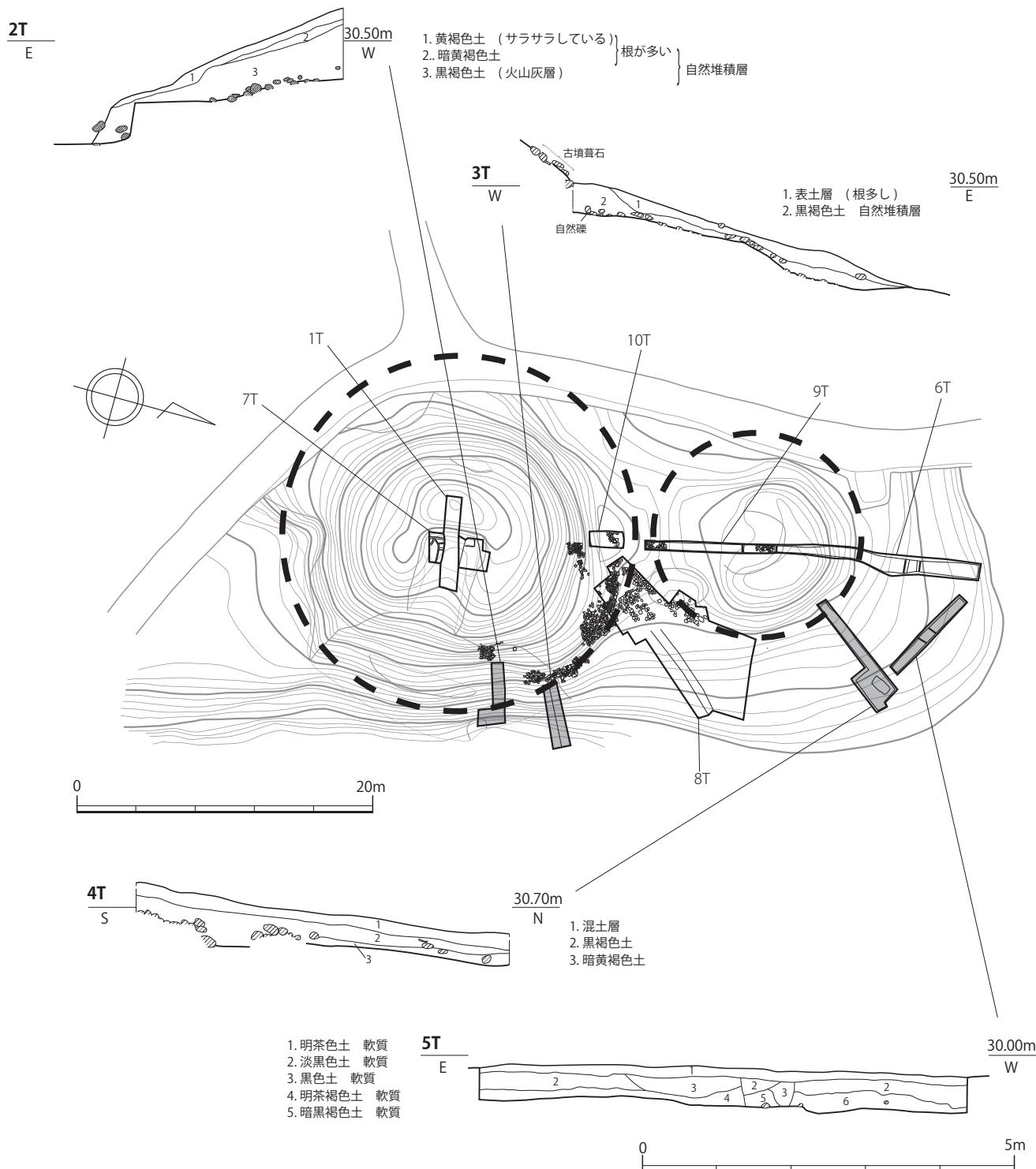


第36図 7トレンチ遺構実測図(1/60)

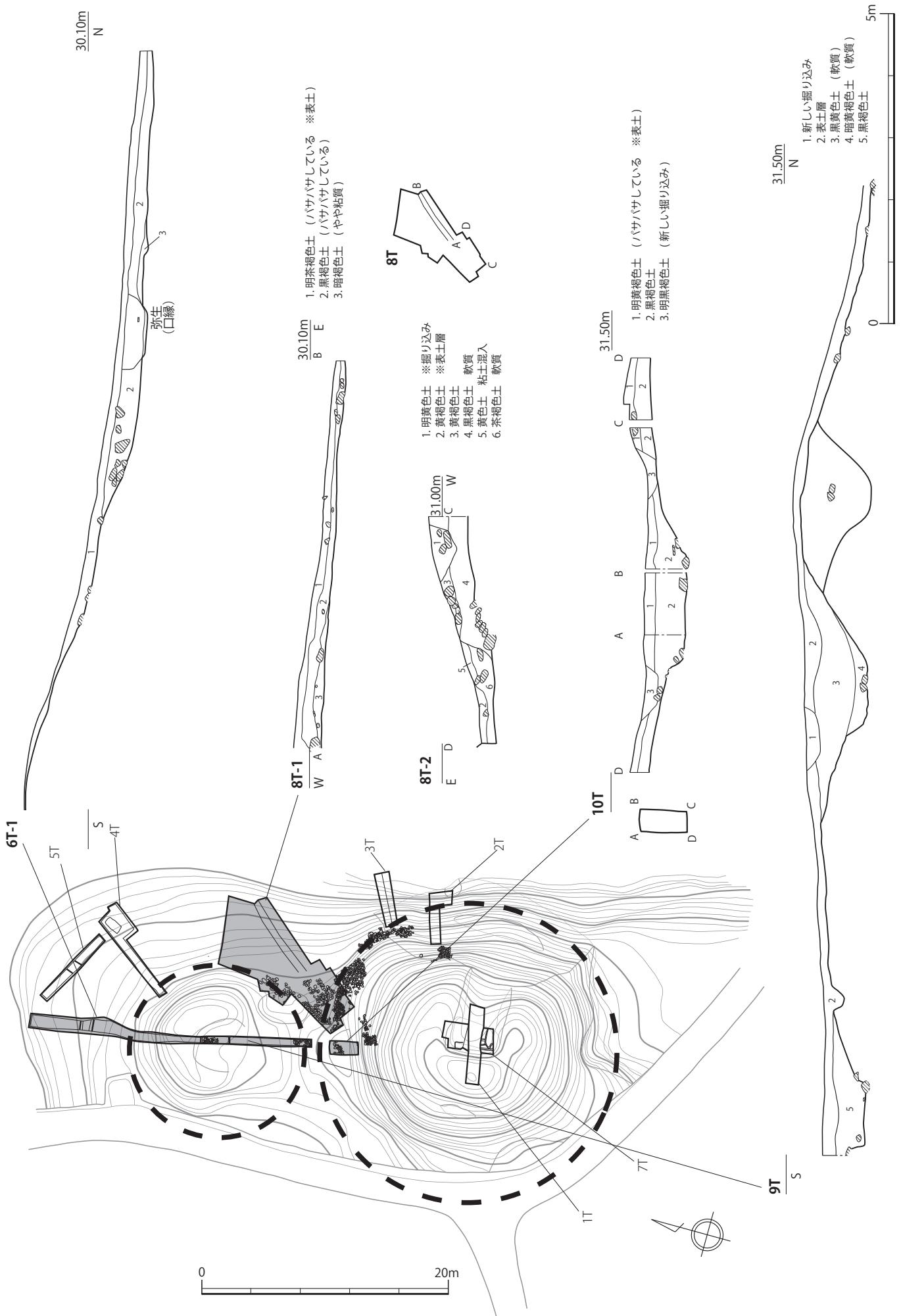
どが出土している。

4 トレンチ(石蓋土壙墓)(第37・39図)

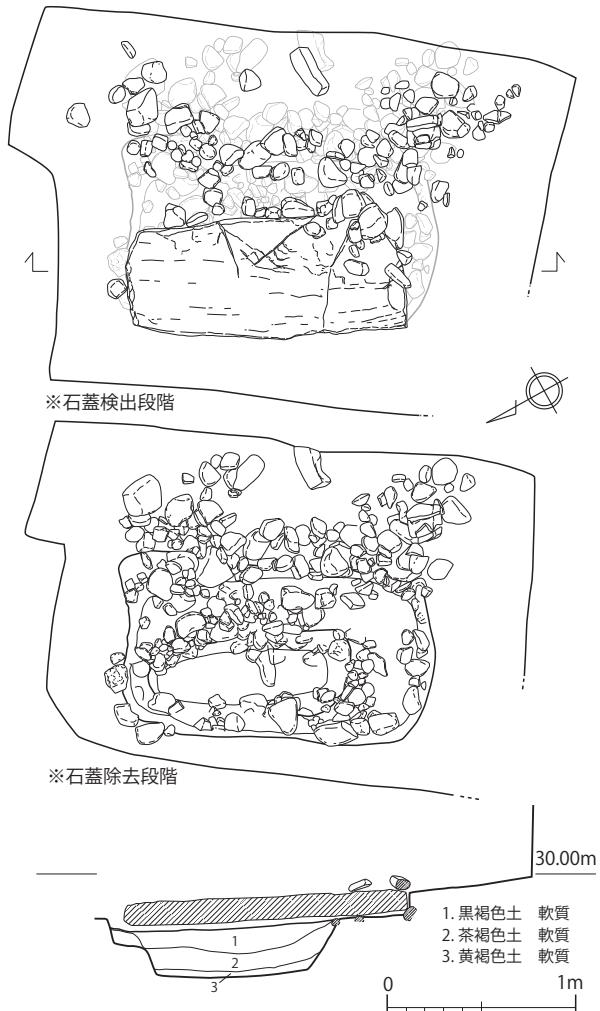
2号墳北東裾部を確認するために設定したトレンチである。長さ8.0m、幅0.8(南西)～2.0(北東)m、表土からの深さは最大で0.6m前後まで掘り下げを行った。北側からは長軸を北東に向かた長方形に加工された石蓋とその下部に土壙が検出された。石蓋は扁平な緑泥結晶片岩製で、長さ1.49m、幅0.63m、厚さ0.12mを測る。石蓋には赤色顔料の塗布は認められなかった。石蓋を取り除くと、石蓋を挿入するための掘り方が設けられた長さ1.07m、幅0.45m、深さ0.39mの土壙が確認された。土壙内からは副葬品の出土はなかったものの、石蓋土



第37図 2・3・4・5 トレンチ遺構実測図(1/400・1/80)



第38図 6・8・9・10 トレンチ遺構実測図 (1/400・1/80)



第39図 4トレンチ(石蓋土壙墓)実測図(1/40)

壙墓だと考えられる。2号墳に隣接する事から、これらに付随して造られた可能性も考えられる。

5 トレンチ (第37図)

2号墳北側裾部に南東から北西に設定したトレンチである。長さ7.0m、幅1.0m前後、表土からの深さは最大で0.6m前後まで掘り下げを行った。土層の観察から、トレンチのほぼ中央部に溝状遺構が確認できた。この溝状遺構は、位置関係と埋土状況の共通性から隣接する6トレンチで検出された溝状遺構と同一のものである可能性もあることから、弧を描くように延びているものと考えられる。遺物は土師器鉢や土師器の移動式カマドなどが出土している。

6 トレンチ (第38図)

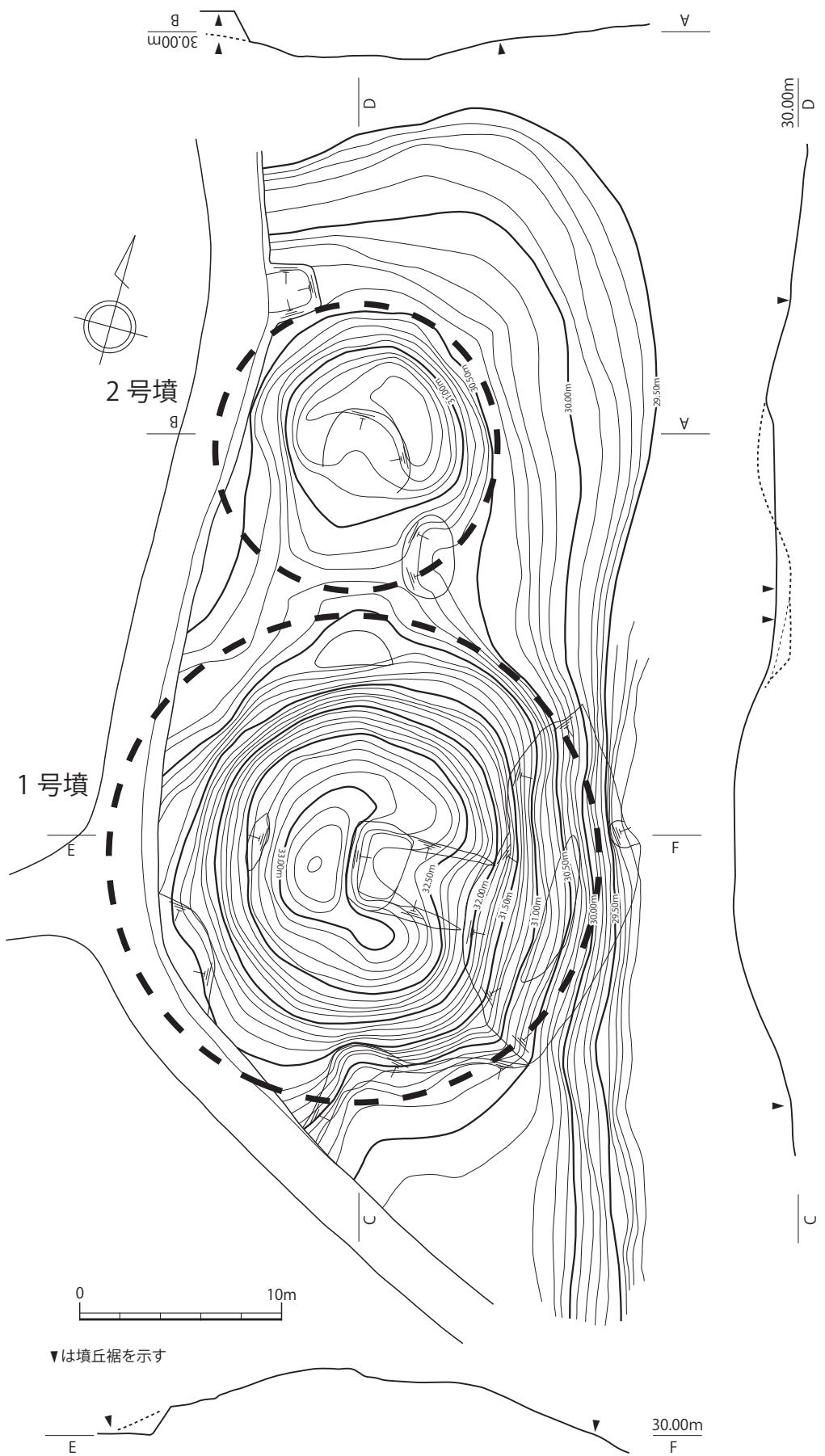
2号墳主体部から北側裾部に向かって南北に設定したトレンチである。南北に長さ16.0m、東西に幅1.2m前後、表土からの深さは最大で0.5m前後まで掘り下げを行った。トレンチの北側より溝状遺構を検出しており、遺構からは弥生後期初頭～中葉の壺口縁部が出土している。しかしながら、溝状遺構は墳丘の裾に堆積した層を掘り込んでいることから、墳丘築造後の遺構と判断される。この溝状遺構は、位置関係から隣接する5トレンチで確認できた溝状遺構と同一のものと考えられる。遺物は、土師器片、須恵器片などが出土している。

7 トレンチ (第36図)

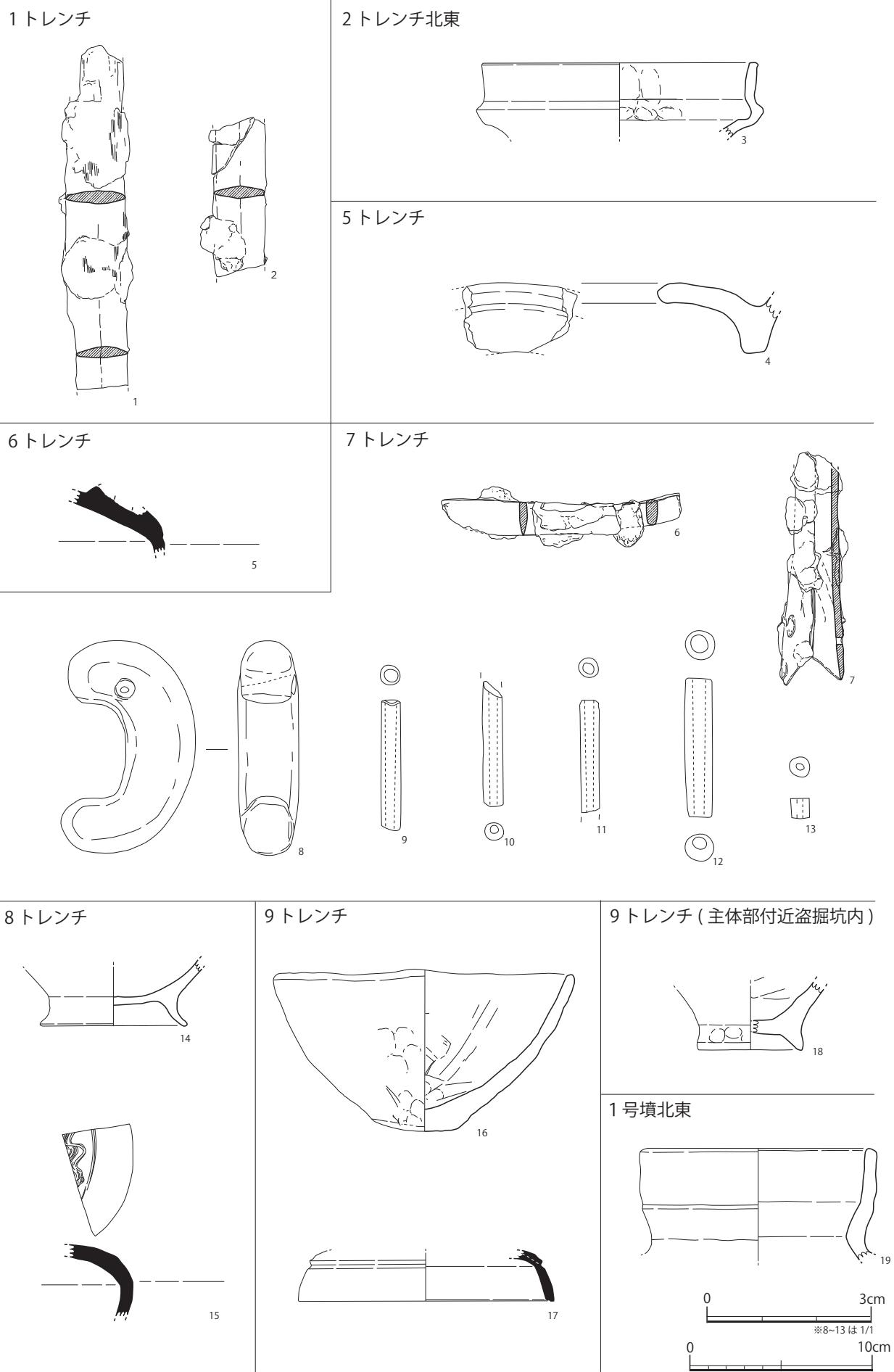
1号墳主体部に南北に設定したトレンチで、中央部で東西に設定した1トレンチと交差している。南北に長さ4.0m、東西に幅1.3m前後、表土からの深さは最大で2.4m前後まで掘り下げを行った。土層の観察から、1トレンチ同様に盗掘の痕跡と、墳丘築造過程の盛土の状況が確認できる。8層の黄色土が混入した暗褐色土層は主体部築造時の掘り方であると考えられる。トレンチ内から石棺の石材として使用されたと考えられる緑泥結晶片岩片が検出されたが、出土した棺材の状況から考えると、盗掘時に破碎されて完全に抜きとられてしまったと考えられ、石棺の規模は不明である。遺物も盗掘によるカクラン層中から、鉄矛の柄部分が1点、鉄製の刀子1点などが出土するのみで、元位置を留めているものはほとんどないが辛うじて床面と思われる部分より装飾品であるメノウ製の勾玉1点、碧玉製管玉4点、ガラス小玉1点が出土している。このように、盗掘のカクランにより、被葬者の埋葬時の状況を推測するには至っていない。

8 トレンチ (第38図)

1号墳北側裾部から2号墳の南東裾部に南北に設定したトレンチである。長さ約12.0m、幅約5.0m前後、表土からの深さは最大で0.6m前後まで掘り下げを行った。土層の観察から、1号墳・2号墳の裾部の葺石の状況が確認できた。遺物は弥生土器、土師器脚付鉢底部、須恵器はそうなどが出土している。



第40図 古墳復元図(1/300)



第41図 第2次調査区トレンチ出土遺物実測図 (1/1・1/3)

9 トレンチ（第38図）

2号墳南側裾部から墳丘の中心部に南北に設定したトレンチである。南北に長さ8.5m、東西に幅0.6m、表土からの深さは最大で0.95m前後まで掘り下げを行った。土層の観察から2号墳も盜掘されている状況が確認できる。遺物は、3世紀～4世紀代の土師器鉢、5世紀後半の須恵器壺蓋、主体部付近の盜掘坑内から4世紀代の脚付鉢が出土している。

10 トレンチ（第38図）

1号墳北側裾部に南北に設定したトレンチである。南北に長さ2.5m、東西に幅1.0m、表土からの深さは最大で0.65m前後である。遺物は須恵器の甕、土師器片などが出土している。

3. 小結

有田古墳群は横尾地区に位置し、大野川から展望できる中位段丘上の縁辺部沿いに築造された円墳からなる古墳群である。

調査前の段階では雑木林となっており、1号墳と2号墳の墳丘盛土は流出し、後世の盜掘や削平により形状が変わっていたため、当初は前方後円墳ではないかと見間違うほどであったが、今回の調査で2基の円墳であることが判明した。

1号墳の墳丘規模を復元すると直径25.0m、高さ3.0m、墳頂部径7.0m、墳頂部の標高33.00mを測る円墳である。トレンチの土層観察から、墳丘は黒色土と褐色～黄褐色土を重ねて盛土を行った墳丘であった。墳丘には葺石が施されており、墳丘裾部に約0.4m前後の礫を基礎として使用し、その上に選定したこぶし大の礫を長い方を斜めに挿入していく丁寧な葺き方である。主体部は盜掘を受けており、石棺材に使用されたと考えられる緑泥結晶片岩が破碎された状態で出土した。石棺の規模については不明である。副葬品については元位置を保っているか判断が難しいが、床面からメノウ製勾玉1点、碧玉製管玉4点、ガラス小玉1点が出土している。また盜掘埋土中からは鉄剣2片・鉄矛の柄部分1点・鉄製刀子1点などが出土している。

2号墳は1号墳の北側に位置しており、墳丘規模を復元すると直径14.0m、高さ1.0m前後を測る円墳である。トレンチの土層観察から、主体部は1号墳同様に盜掘を受けていることが確認できた。時期を判断できるような遺物の出土は認められない。葺石は1号墳に比べて丁寧ではなく、偏平な礫を置いた状態の葺石が施されていた。

2号墳墳丘の北東側に近接して1基の石蓋土壙墓が確認された。石蓋として使用されているのは長方形に加工された緑泥結晶片岩で、長さ1.49m、幅0.63m、厚さ0.12mの大きさを呈する。石蓋には赤色顔料の塗布は確認できなかった。土壙は隅丸長方形で、長さ1.07m、幅0.45m、深さ0.39mで、その規模から小児用の土壙墓の可能性も考えられる。副葬品などの遺物は出土していない。2号墳の墳丘に近接しており、古墳と関連して造られたと考えられる。

有田古墳群ではこれまでの調査により、4基の円墳が確認されている。本調査区で確認した1号墳・2号墳と、第88次調査区で確認した3号墳・4号墳である。3号墳・4号墳は1号墳・2号墳の約100m南に位置しており、墳丘は削平され、周溝のみ検出されている。今回調査した1号墳・2号墳では周溝は確認されていない。2号墳の北側で溝状遺構が検出されているものの、土層観察から2号墳が築造された後に堆積した土を掘り込んだ溝状遺構であり2号墳の周溝ではない。この溝状遺構からは弥生土器の口縁部が出土しているのみで、時期や性格は不明である。周溝の有無については、1号墳・2号墳が段丘縁辺部の際に立地しており、周溝を巡らせることが可能な立地ではなかったことや、3号墳・4号墳は段丘縁辺部より若干離れたところに立地していること、墳丘構築土の確保を目的とした周溝であった可能性や、築造の時期的な差異であることなどが考えられる。

(3) 横尾遺跡第4次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第4次調査地点は、大分市大字横尾に所在する。調査区の西側に第32次調査地点と第37次調査地点、北側には第30次調査地点が位置している。第32次調査地点からは18世紀前半～19世紀代にかけての掘立柱建物跡2棟、井戸跡1基、土坑10基、溝状遺構2条などを検出している。第37次調査地点からは、近世の掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基、土坑1基、溝状遺構3条、性格不明遺構1基を検出している。今回の調査面積は52m²であり、発掘調査は平成4年5月21日に開始し、同年5月26日に終了した。遺構検出面の標高は30.60m前後を測り、地形は平坦になっている。検出した遺構は土坑やピット多数である。

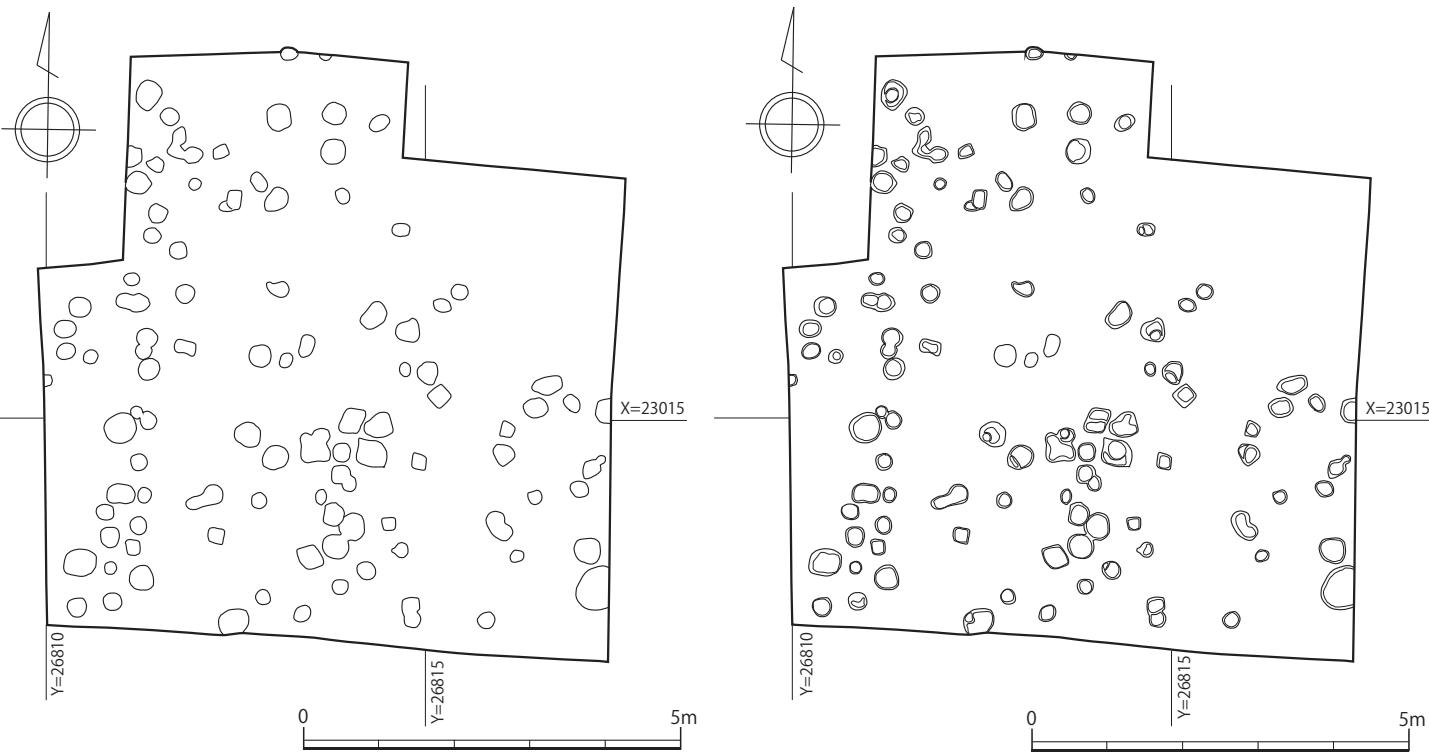
2. 遺構

調査区全域から土坑やピットが多数検出された。平面形状は円形、楕円形、不整楕円形で、径は0.2～1.25m前後を測る。前述した第32次調査地点や第37次調査地点では明確な掘立柱建物跡が検出されているが、本調査では建物になるような柱穴列は確認されていない。

3. 小結

本調査では調査区全体に多数の土坑やピットが検出されているものの、出土遺物は少なく、掘立柱建物跡を構成するような配置は確認できなかった。土錐、瓦質土器の擂鉢、近世の陶磁器、土師器の破片が出土していることから近世の遺構が主体と考えられる。

第37次調査地点では調査区を東西に延びる溝が確認されており、東端が調査区外に延びていたが、その延長線上にあたるもの、本調査では溝状遺構は検出されなかった。



第42図 第4次調査区遺構配置図・全体遺構図(1/100)

(4) 横尾遺跡第 14 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 14 次調査地点は、大分市大字横尾王子原に所在する。調査区北側に第 64 次調査地点、南側に第 33 次調査地点、西側に第 112-2 次調査地点が隣接している。第 64 次調査地点では掘立柱建物跡 3 棟、溝状遺構 5 条の他、地層横転遺構 1 基をはじめ多数の土坑・柱穴が検出された。第 33 次調査地点では、土坑やピットを多数検出し、これに伴って弥生時代後期の弥生土器片や土師器坏片が出土している。第 112-2 次調査地点では、L 字状に屈曲する 16 世紀後半～末の溝状遺構と 18 世紀代の東西溝が確認されている。本調査区は東側に逆コ字状を呈した形状と南北に延びたトレンチ状の 2ヶ所の調査区で、調査面積は 54 m² である。発掘調査は平成 5 年 5 月 19 日に開始し、同年 5 月 21 日に終了した。遺構検出面の標高は 31.50m 前後を測り、地形は平坦になっている。調査の結果、東側の調査区、西側の調査区ともに東西に延びる 3 条の溝状遺構が検出された。

2. 遺構

溝状遺構

SD001(第 43 図)

両調査区の南側で検出された東西方向に延びる溝状遺構である。遺構の南側および東西端は調査区外に延びており、全長は不明である。現状で検出した長さ 18.4m(推定部分含む)、幅 2.0m 以上を測る。

遺物は出土していない。

SD002(第 43 図)

両調査区の中央部分を東西方向に延びる溝状遺構である。遺構の東西端は調査区外に延びており、全長は不明である。現状で検出した長さ 14.0m(推定部分含む)、幅 1.8m を測る。

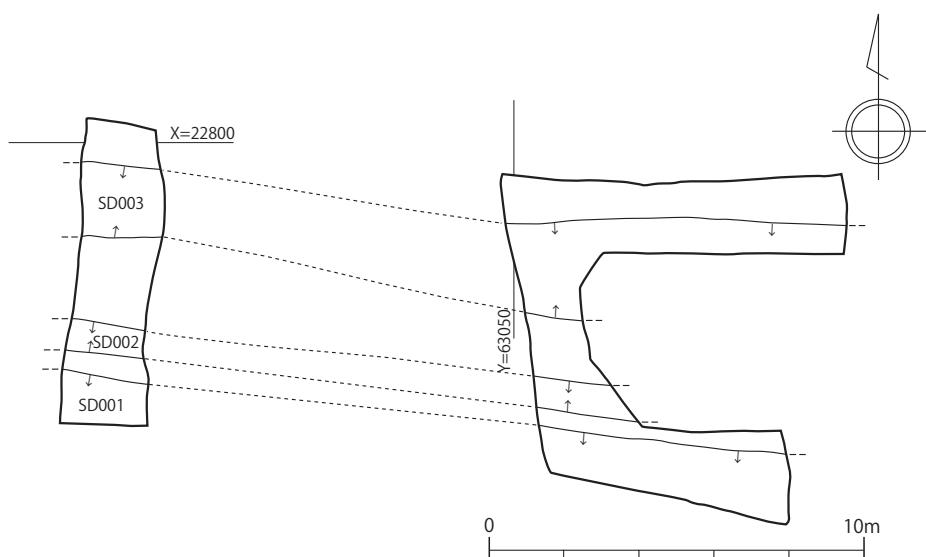
SD003(第 43 図)

両調査区の北側で東西方向に延びる溝状遺構である。遺構の東西端は調査区外に延びており、全長は不明である。現状で検出した長さ 20.0m(推定部分含む)、幅は最大で 2.5m を測る。

3. 小結

本調査区では、溝状遺構が 3 条検出されたが、位置関係から考えても、本調査区西側に位置する第 112-2 次調査地点(平成 18 年度実施調査)

で検出された中世の大規模な方形館の堀跡と考えられる溝状遺構 SD002 と今回検出された SD003 が同一の遺構である可能性は極めて低い。一方で第 112-2 次調査地点の 18 世紀代の東西溝 SD001 と繋がる可能性が高く、この SD001 が 2 条の溝状遺構により構成されており、しかも何度も何度も掘り返しが行われている。このことから、今回検出した SD001・SD002・SD003 がこれらと同一遺構になるものと考えられる。

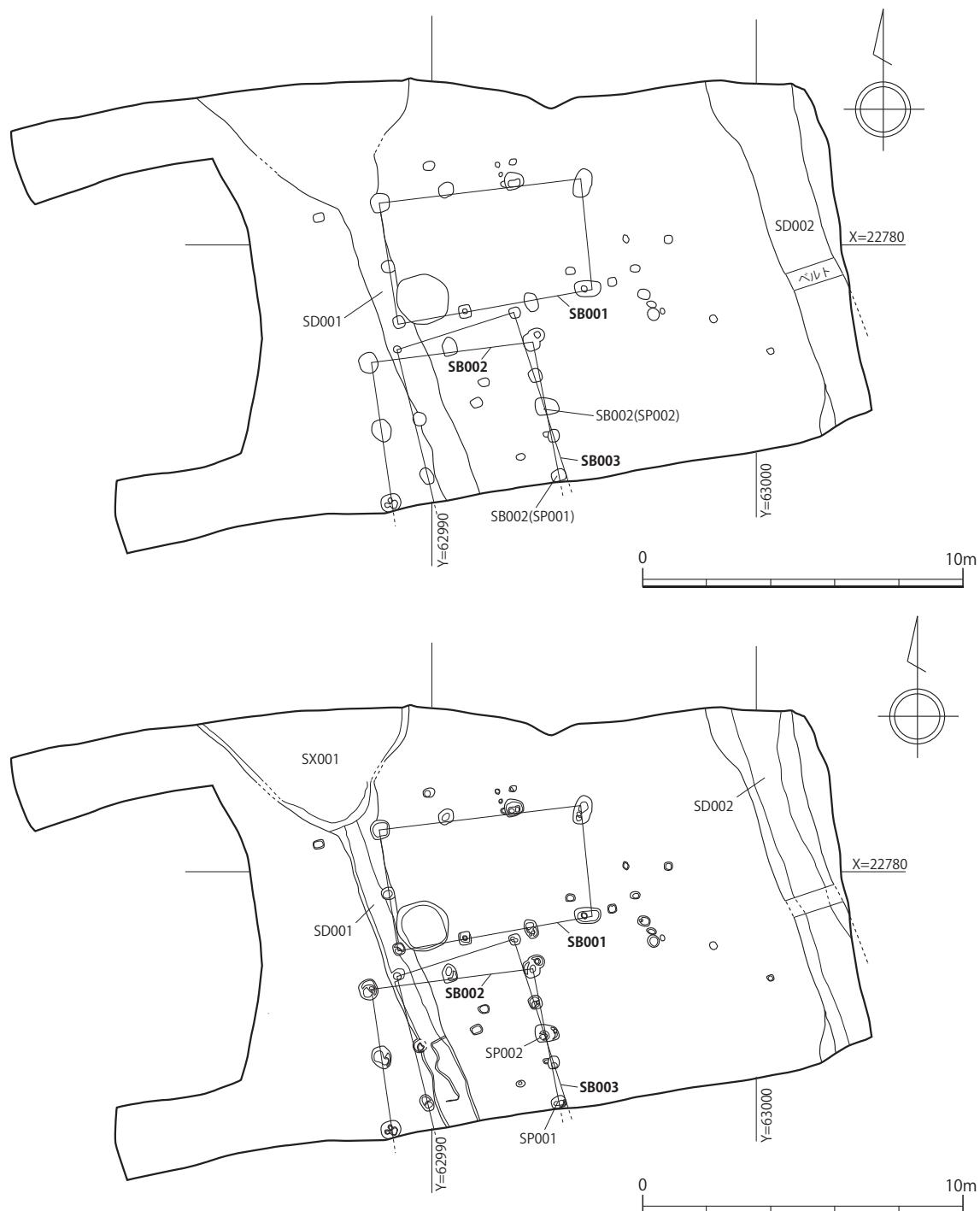


第 43 図 第 14 次調査区遺構配置図 (1/200)

(5) 横尾遺跡第31次調査

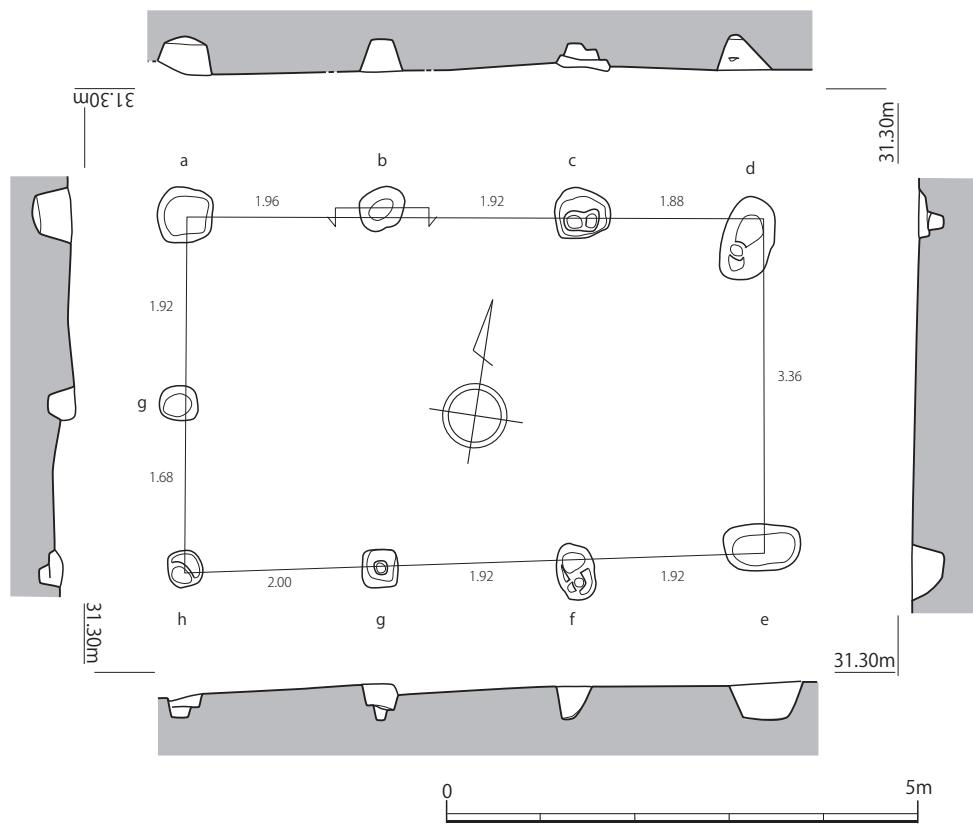
1. 調査概要

横尾遺跡第31次調査地点は、大分市大字横尾王子原に所在する。調査区北側に第112次調査地点、南側に第123次調査地点と第129-1次調査地点が隣接している。第112次調査地点では溝状遺構8条、地層横転遺構5基のほか、土坑・柱穴群が確認された。第123次調査地点では道路状遺構のほか、溝状遺構、土坑、柱穴が確認されている。第129-1次調査地点では、溝状遺構6条、溜井状遺構1基、土坑2基が確認されている。調査面積は300m²であり、発掘調査は平成6年6月2日から同年7月7日に終了した。遺構検出面の標高は

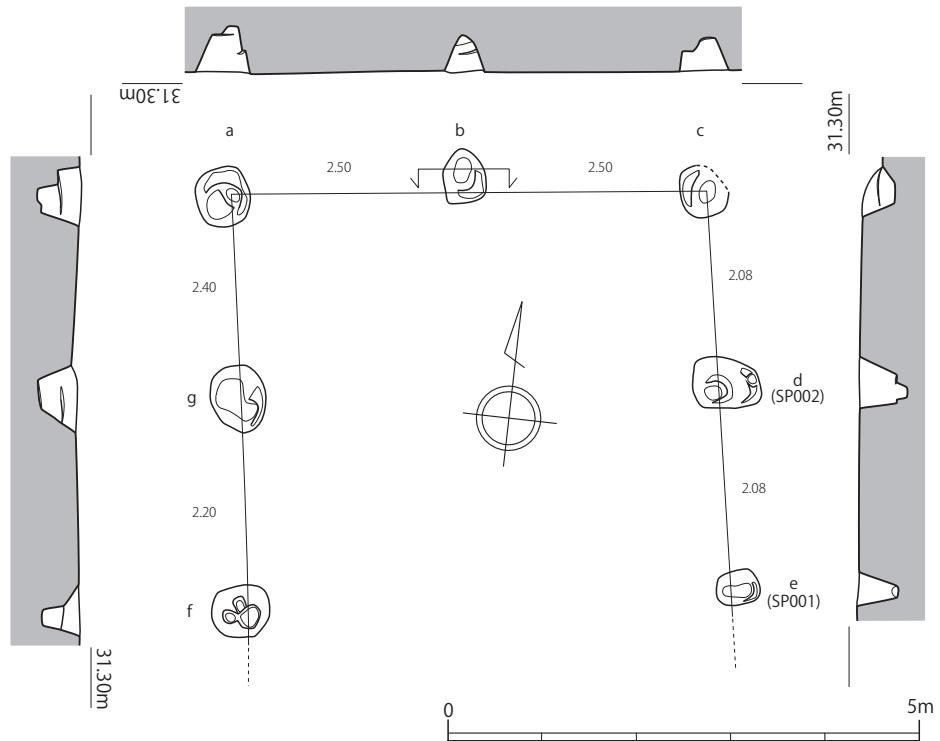


第44図 第31次調査区遺構配置図・全体遺構図(1/200)

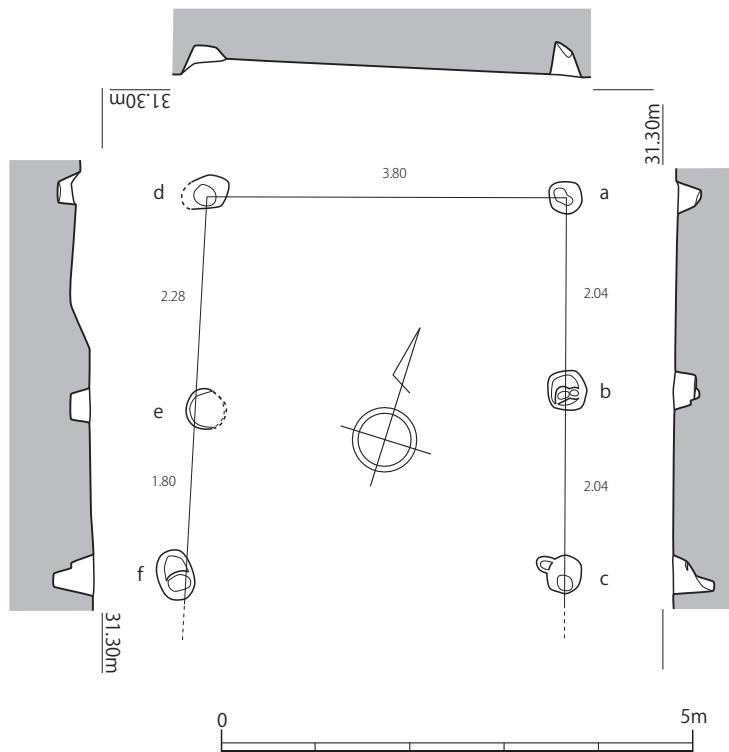
SB001



SB002



第45図 SB001・SB002遺構実測図(1/80)



第46図 SB003 遺構実測図(1/80)

31.00m前後を測る。検出した主な遺構は掘立柱建物跡が3棟、溝状遺構2条のほか、ピット等である。

2. 遺構

掘立柱建物跡

SB001(第45図)

調査区の中央で検出した、桁行2間×梁行3間、身舎面積約 20.1 m^2 の掘立柱建物跡である。SD001を切つており、建物は東西棟で、建物の主軸方向はN-12°-Wである。柱穴の平面形状は円形もしくは不整橢円形を呈している。径0.4~0.8m、検出面からの深度は0.2~0.3mを測る。柱穴柱間は桁行が1.88~2.00m、梁行が1.68~3.36mである。

遺物は出土していない。

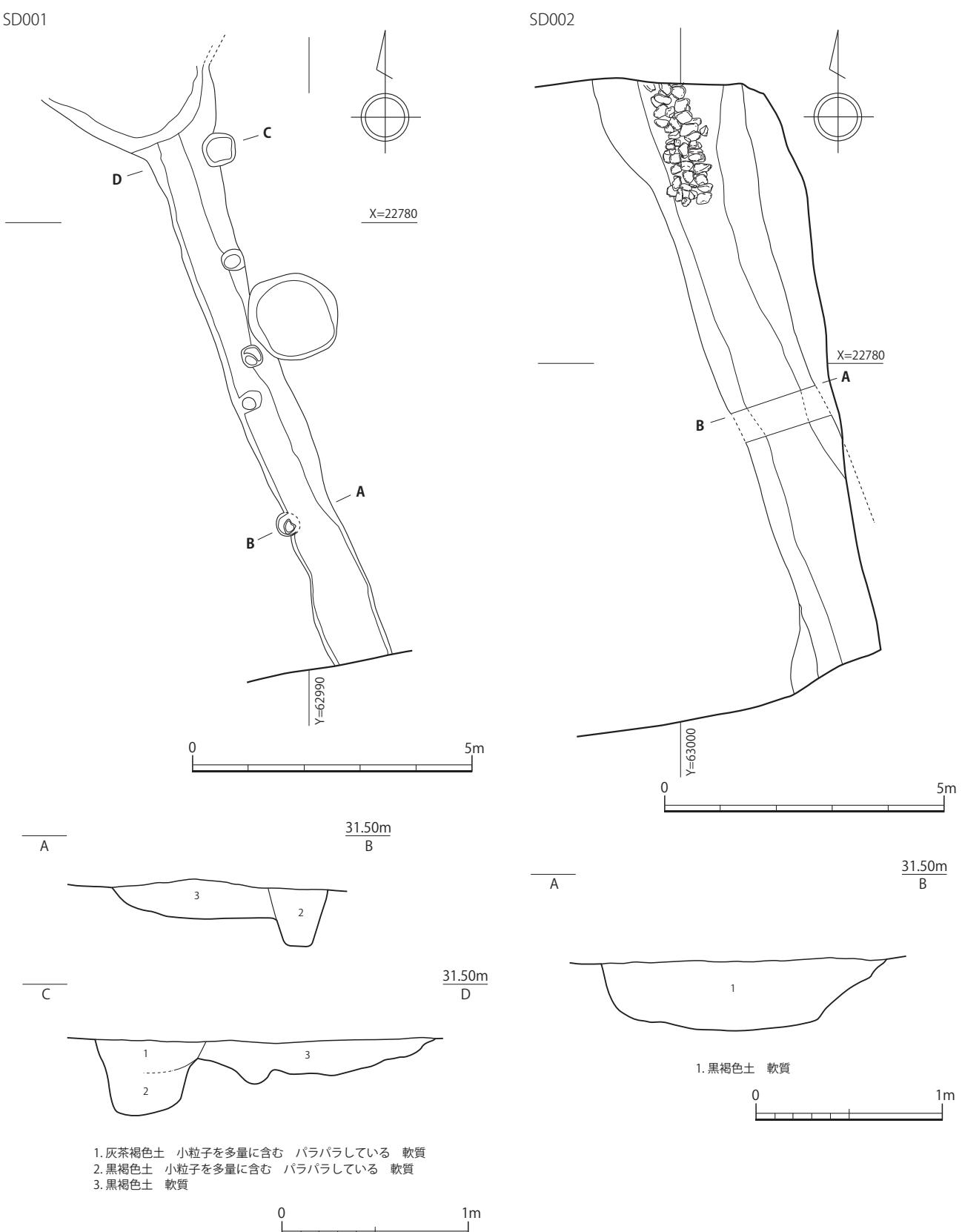
SB002(第45図)

調査区の南側で検出した、現状で桁行2間以上×梁行2間、身舎面積約 21.9 m^2 以上の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、建物の主軸方向はN-8°-Wであり、桁行は南側の調査区外に展開している。柱穴の平面形状は円形もしくは橢円形を呈しており、いずれも2段掘りとなっている。径0.48~0.76m、検出面からの深度は0.3~0.6mを測る。柱穴柱間は桁行が2.08~2.40m、梁行が2.50mである。SB001に対し、SB002の建物の方向が類似していることから併存していたと考えられる。

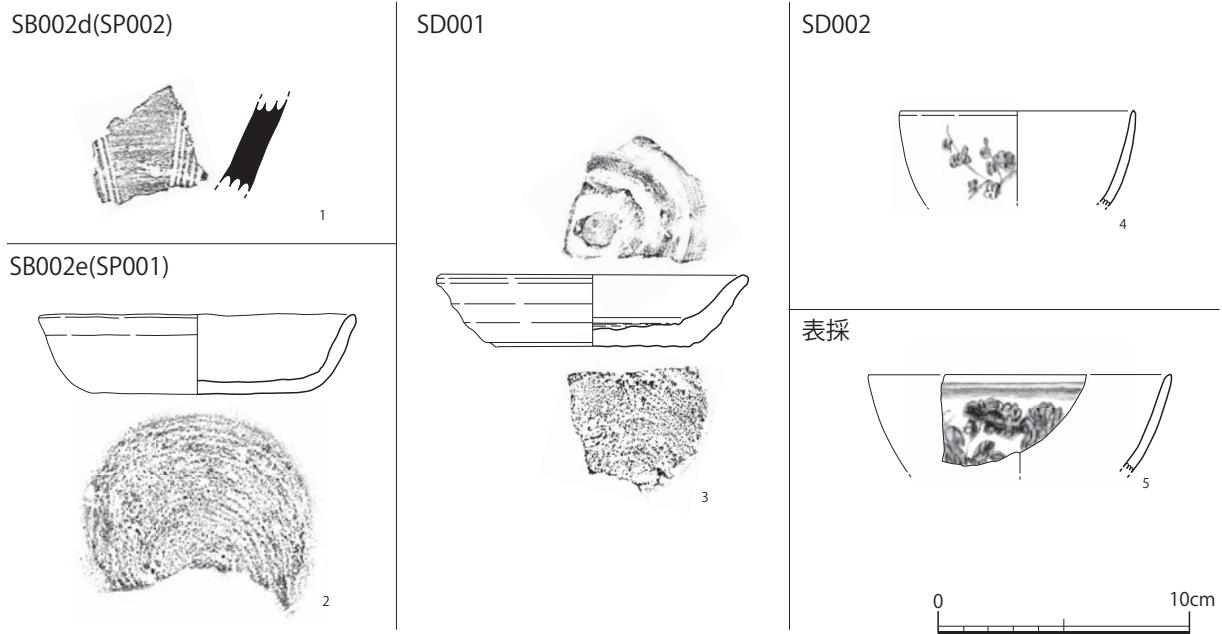
柱穴e(SPO01)から土師器坏A、柱穴d(SPO02)から備前産擂鉢が出土していることから、建物の時期は14世紀前後であると考えられる。

SB003(第46図)

調査区の南側で検出した、現状で桁行2間以上×梁行1間、身舎面積約 14.1 m^2 以上の掘立柱建物跡である。



第47図 SD001・SD002 遺構実測図 (1/100・1/30)



第48図 第31次調査区出土遺物実測図(1/3)

建物は南北棟で、建物の主軸方向は $N - 12^\circ - W$ であり、桁行は南側の調査区外に展開している。柱穴の平面形状は円形もしくは不整橿円形を呈しており、径 $0.35 \sim 0.52m$ 、検出面からの深度は $0.2 \sim 0.4m$ を測る。柱穴柱間は桁行が $1.80 \sim 2.28m$ 、梁行が $3.80m$ である。

遺物は出土していない。

溝状遺構

SD001(第47図)

調査区の中央で検出した、南北方向に延びる溝状遺構である。遺構の南端は調査区外に延びており、北端は SX001 に切られているため全長は不明である。現状で長さ $9.8m$ 以上、幅 $1.08m$ 、検出面からの深度は $0.2m$ 前後を測る。断面形状は緩やかな逆台形もしくは床面に凹凸の起伏がある逆台形をなす。溝内からは 12 世紀前半に比定される土師器坏 A が出土している。

SD002(第47図)

調査区の東側で検出した、南北方向に延びる溝状遺構である。遺構の両端はともに調査区外に延びているため、全長は不明である。現状で長さ $11.0m$ 以上、幅 $2.4m$ 、検出面からの深度は $0.4m$ 前後を測る。断面形状は緩やかな逆台形をなす。遺構の北側からは $0.1 \sim 0.3m$ の礫石が多数検出されている。溝内からは 17 世紀中頃～18 世紀前半頃の染付碗が出土している。

3. 小結

本調査区では掘立柱建物跡 3 棟を検出したが、その中で柱穴から出土した遺物により建築時期の比定ができたのは 14 世紀前後の SB002 のみである。しかし、3 棟全ての柱穴が 12 世紀前半の遺物が出土した溝状遺構 SD001 を切っていることから、SD001 埋没後に築造した建物であると判断される。また、SB002 と SB003 は建物の構造や柱穴の位置がほぼ同じであることから、建て替えられたものと推測されるが、柱穴に切り合が認められないことから、建築時期の先後関係については不明である。

(6) 横尾遺跡第33次調査

1. 調査概要

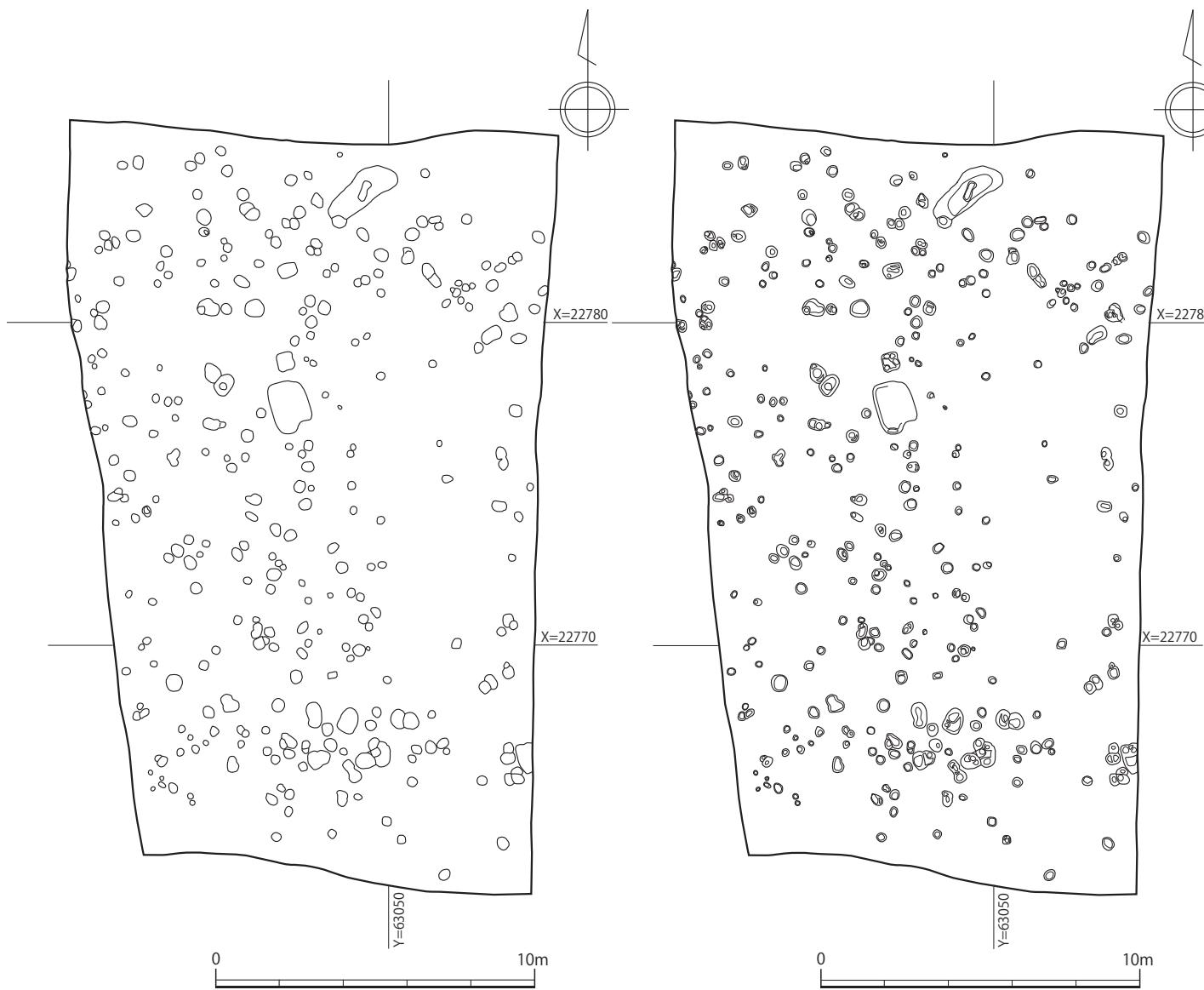
横尾遺跡第33次調査地点は、大分市大字横尾王子原に所在する。調査区の西側に第129-1次調査地点が位置している。第129-1次調査地点では15世紀～16世紀の溝状遺構6条、近世の溜井状遺構1基、土坑2基等が確認されている。調査面積は310m²であり、発掘調査は平成6年7月15日に開始し、同年8月1日に終了した。遺構検出面の標高は32.00m前後を測る。検出した遺構は土坑やピット多数である。

2. 遺構

調査区の主に西側から多数の土坑やピットが検出された。平面形状は円形、楕円形、不整楕円形等で、径は約0.3～3.5mである。

3. 小結

本調査では調査区全体に土坑やピットが多数検出されているものの、出土遺物は少なく、掘立柱建物跡を構成するような配置は確認できなかった。ピットからは、弥生時代後期の弥生土器片、土師器片が出土しているが、明確な遺構時期は不明である。



第49図 第33次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/200)

(7) 横尾遺跡第34次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第34次調査地点は、大分市大字横尾王子原に所在する。本調査地点の南西約160mには有田古墳群が、約40m西には第1次調査区・第141次調査区が位置している。調査面積は2,000m²であり、発掘調査は平成6年7月11日から同年10月25日に終了した。遺構検出面の標高は28.50～29.00m前後を測る。検出した主な遺構は掘立柱建物跡7棟、溝状遺構7条のほか、地層横転遺構1基をはじめ多数の土坑・柱穴等である。

2. 遺構

掘立柱建物跡

SB001(第52図)

調査区の南側で検出した、桁行4間×梁行3間に南側に1間幅の庇を有する、身舎面積44.9m²の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、内部には東側に束柱を持つ。建物の主軸方向はN-82°-Wである。柱穴の平面形状は円形もしくは不定楕円形を呈し、径0.32～1.04m、検出面からの深度は0.24～0.72mを測る。柱穴柱間は桁行が1.92～2.55m、梁行が1.05～2.80mである。

柱穴d(SP009)から瓦質土器片が、柱穴j(SP004)からは土師器坏が、柱穴l(SP023)からは土師器坏の底部片が出土しており、14世紀代の所産と考えられる。遺構の切り合いから、SB004よりも後でSB002の前に建てられた建物であると考えられる。

SB002(第53図)

調査区の南側で検出した、桁行3間×梁行2間に北側の一部に庇が1間分付属する、身舎面積27.7m²の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、内部には東側に束柱を持つ。建物の主軸方向はN-84°-Wである。柱穴の平面形状は円形もしくは不定楕円形を呈し、径0.4～0.8m前後、検出面からの深度は0.32～0.56mを測る。柱穴柱間は桁行が2.00～2.40m、梁行が2.00～4.28mである。

柱穴a(SP002)から糸切り底の14世紀前半の土師器坏・磁器の底部片が、柱穴k(SP003)からは白磁の皿が出土している。遺構の切り合いから、SB001の後に建てられた建物であると考えられる。

SB003(第53図)

調査区の南側で検出した、桁行3間×梁行2間、身舎面積24.6m²の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、内部には東側に束柱を持つ。建物の主軸方向はN-84°-Wであり、SB002に切られている。柱穴の平面形状は円形もしくは不定楕円形を呈し、径0.3～0.8m、検出面からの深度は0.12～0.52m前後を測る。柱穴柱間は桁行が1.92～2.16m、梁行が1.84～2.25mである。

柱穴b(SP012)から土器片が、柱穴c(SP006)から土器片と土錐が出土している。出土した遺物から建物の時期は12世紀以降であると考えられる。

SB004(第54図)

調査区の南側で検出した、桁行3間×梁行2間、身舎面積31.2m²の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、建物の主軸方向はN-83°-Wであり、SB001に切られている。柱穴の平面形状は円形もしくは不定楕円形を呈し、径0.4～1.0m、検出面からの深度は0.24～0.64m前後を測る。柱穴柱間は桁行が2.25～2.52m、梁行が1.75～2.72mである。

柱穴c(SP007)から土師器坏が出土している。遺構の切り合いから、SB001よりも古い建物と考えられる。



第50図 第34次調査区遺構配置図(1/300)

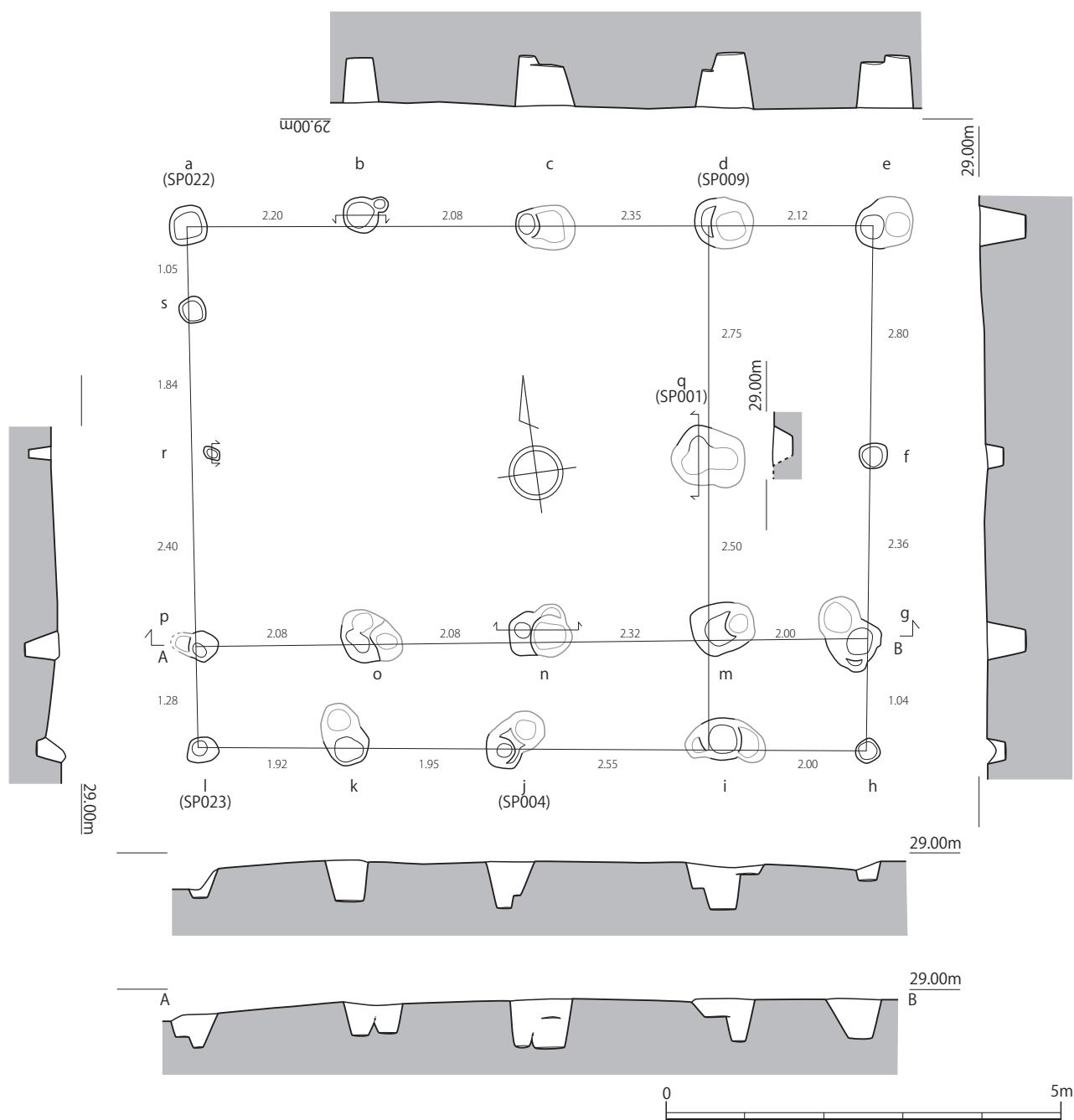


第 51 図 第 34 次調査区全体遺構図 (1/300)

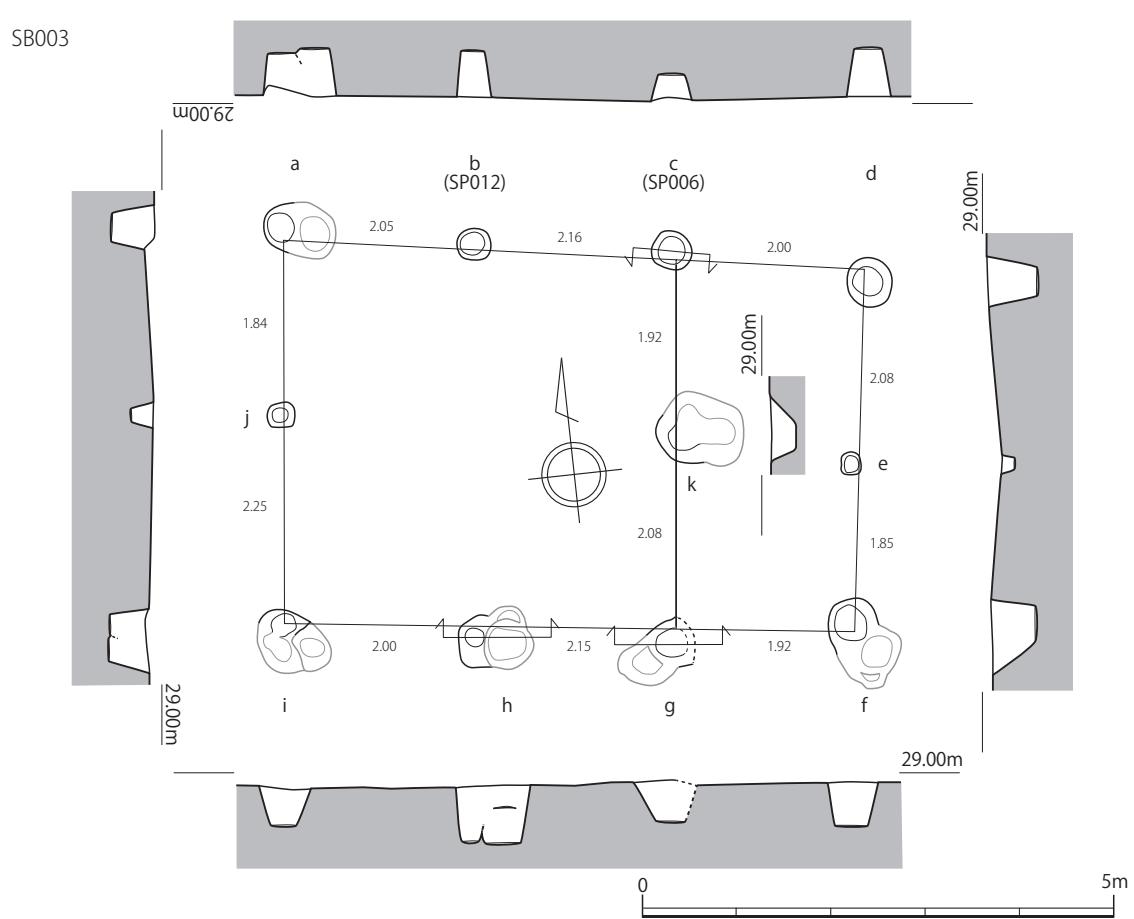
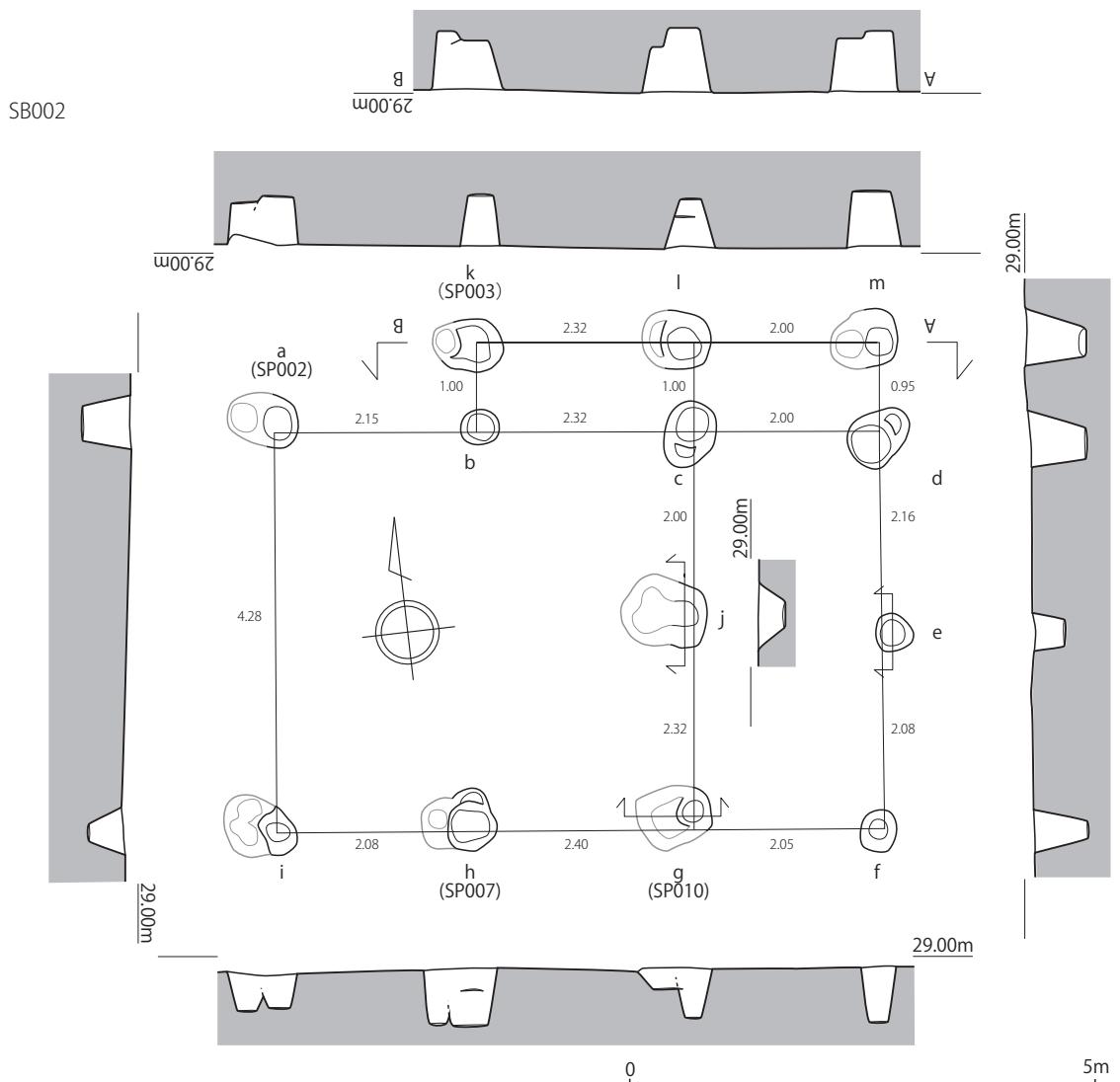
SB005(第54図)

調査区の南側で検出した、桁行3間×梁行2間、身舎面積19.7m²の掘立柱建物跡である。内部には2ヶ所に束柱があり、総柱建物となっている。また、梁行の棟上げ柱はやや外側に出ている。建物は南北棟で、建物の主軸方向はN-4°-Eである。柱穴の平面形状は円形もしくは不定橿円形を呈し、径0.28~0.56m、検出面からの深度は0.16~0.48m前後を測る。柱穴柱間は桁行が1.60~1.96m、梁行が1.64~2.00mである。

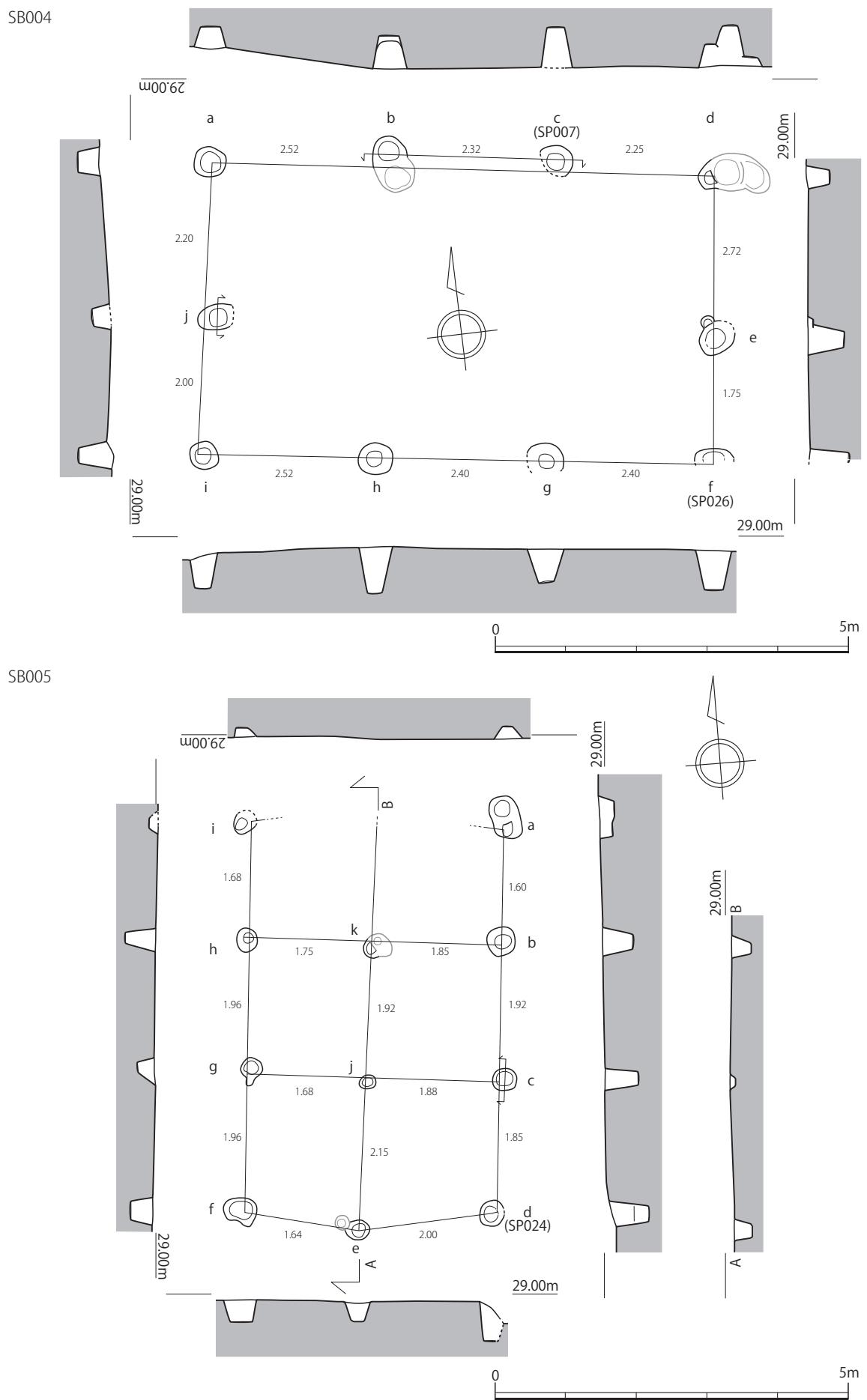
遺物は出土していない。SB005は建物方位と配置からSB001と併存していた可能性が高い。



第52図 SB001遺構実測図(1/80)

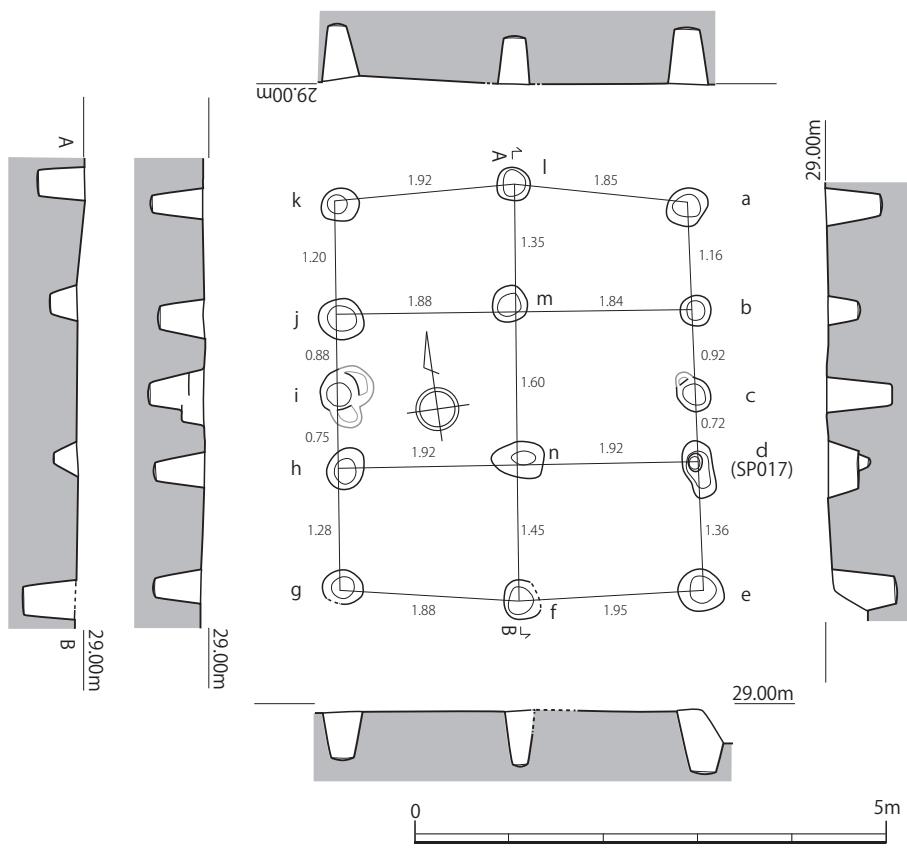


第 53 図 SB002・SB003 遺構実測図 (1/80)

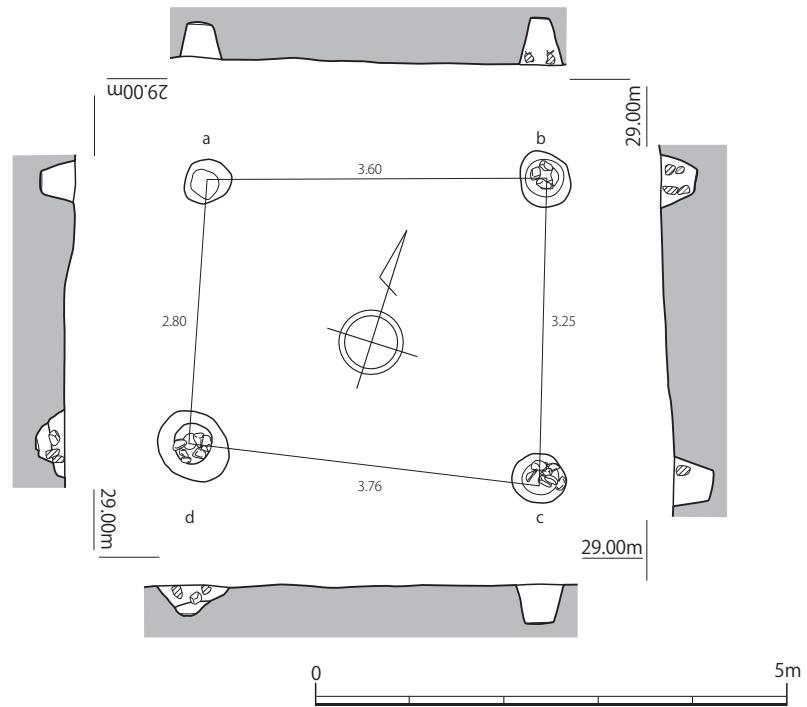


第 54 図 SB004・SB005 遺構実測図 (1/80)

SB006



SB007



第 55 図 SB006・SB007 遺構実測図 (1/80)

SB006(第 55 図)

調査区の南側で検出した、桁行 4 間 × 梁行 2 間、身舎面積 15.5 m² の総柱建物跡である。内部には 2ヶ所に束柱がやや外側に出ており、棟持柱的な機能を担っていた可能性も考えられる。建物は南北棟で、建物の主軸方向は N - 8° - E である。柱穴の平面形状は円形もしくは不定楕円形を呈し、径 0.3 ~ 0.6m、検出面からの深度は 0.24 ~ 0.64m 前後を測る。柱穴柱間は桁行が 0.72 ~ 1.36m、梁行が 1.84 ~ 1.95m である。

柱穴 d(SP017) から土器片が出土している。SB006 は SB005 と類似する機能を有する建物と考えられる。また、建物方位と配置から SB002 もしくは SB003 と併存していた可能性が高い。

SB007(第 55 図)

調査区の中央よりやや東寄りで検出した、桁行 1 間 × 梁行 1 間、身舎面積 11.0 m² の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、建物の主軸方向は N - 8° - W である。柱穴の平面形状は円形を呈し、径 0.48 ~ 0.72m、検出面からの深度は 0.28 ~ 0.48m 前後を測る。柱穴柱間は桁行が 3.60 ~ 3.76m、梁行が 2.80 ~ 3.25m である。

柱穴 b・c・d からは根締石であったと考えられるこぶし大の礫が検出されている。建物の規模と比較して柱穴も大きく、根締石も見られるが、建物の性格は不明である。

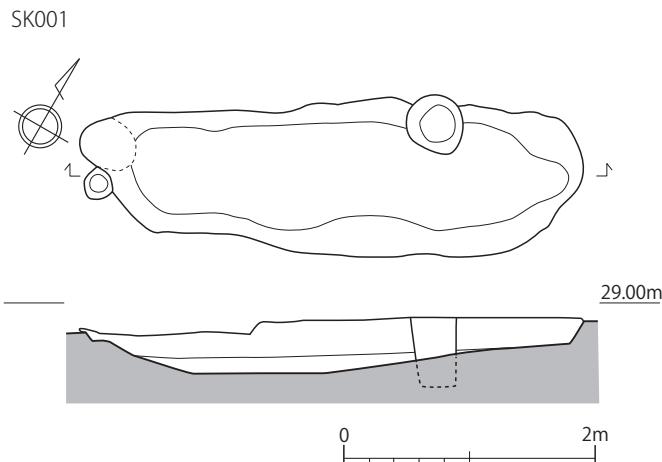
土坑**SK001(第 56 図)**

調査区の南側で検出した土坑である。平面形状は東西に延びた隅丸長方形を呈し、長軸 3.7m、短軸 1.2m、検出面からの深度は 0.4m を測る。断面形状は舟底形になっている。

遺構からは弥生土器の甕と、外面に赤色塗彩を施した弥生土器の壺が出土していることから、遺構の時期は弥生時代中期頃であると考えられる。

土壙墓**ST001(第 57 図)**

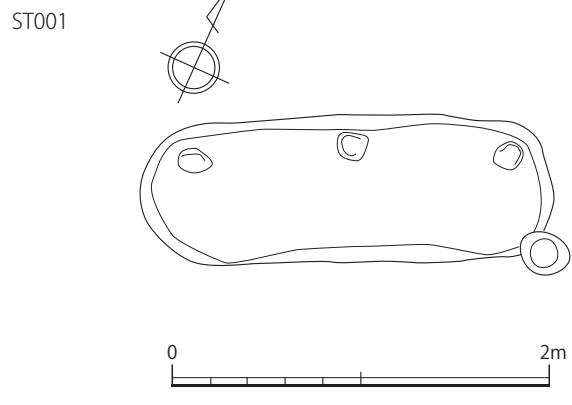
調査区の中央で検出した土壙墓である。遺構北西側から等間隔に配置された人頭大の礫石が 3 つ検出



第 56 図 SK001 遺構実測図 (1/60)



▲SK001 完掘状況 (東より)



第 57 図 ST001 遺構実測図 (1/40)



▲ST001 半截状況 (北より)

された。平面形状は東西に延びた隅丸長方形を呈し、長軸 2.16m、短軸 0.76m を測る。

遺物は土師器の脚付皿が 1 点出土しており、10 世紀代の年代が考えられる。

溝状遺構

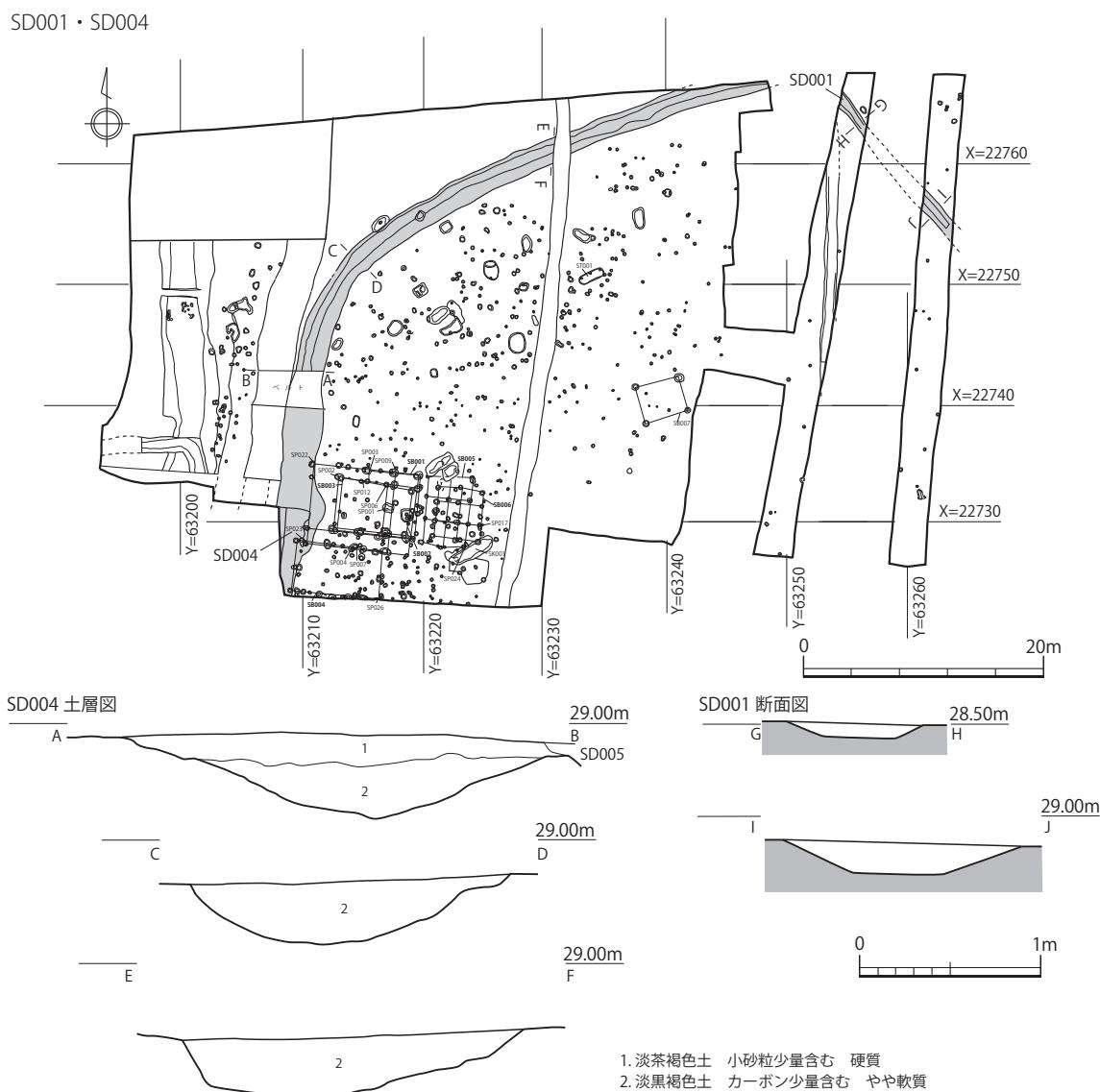
SD001(第 58 図)

調査区の東側を南東から北西に延びる溝状遺構である。遺構の東西端は調査区外に延びており、全長は不明であるが、現状で長さ 15.0m、幅 0.6m、検出面からの深度は 0.2m 前後を測る。

溝内からは磁器片、土器片等が出土している。

SD002(第 59 図)

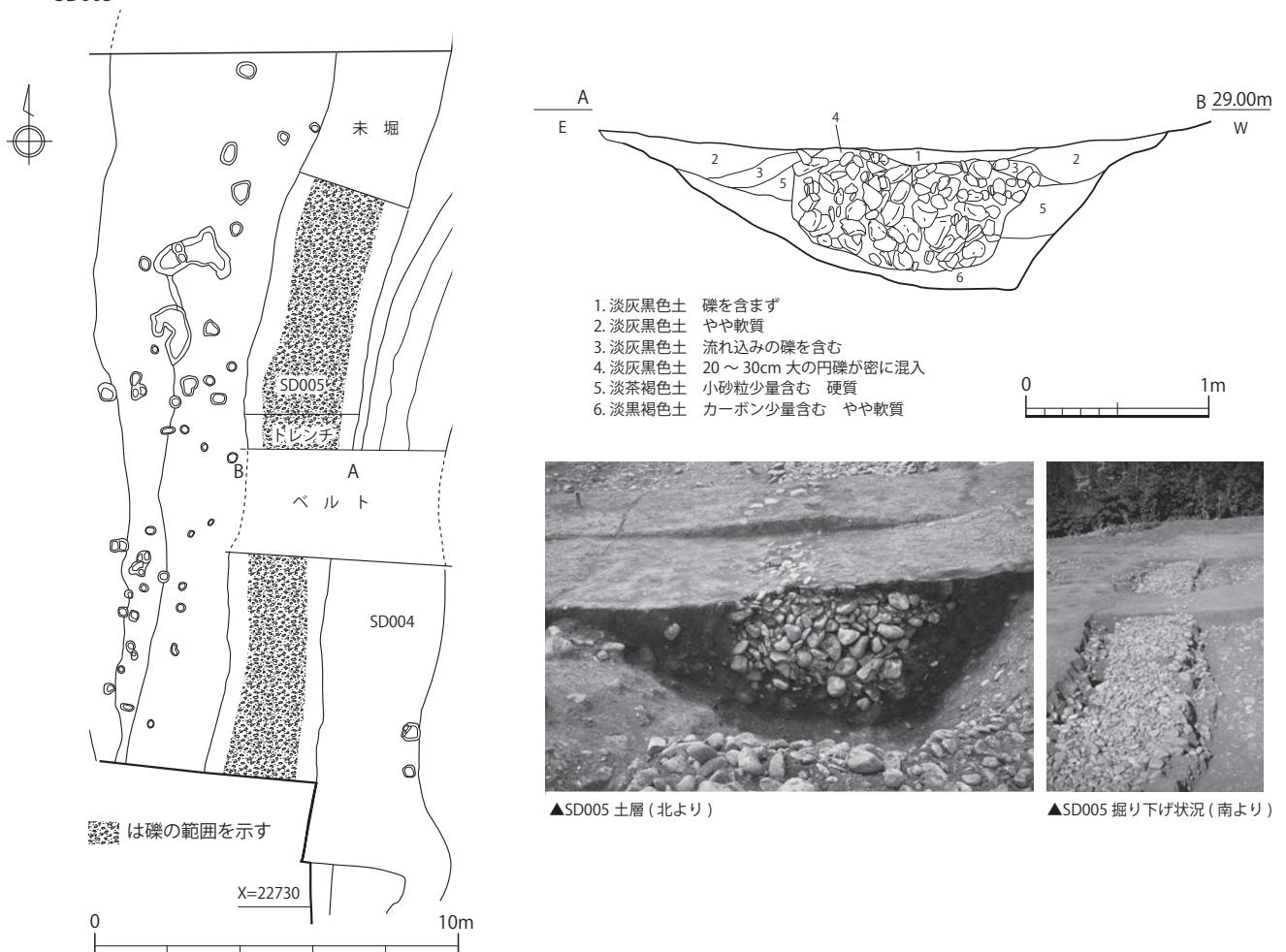
調査区の東側を南北に延びる溝状遺構である。溝の方位は N - 5° - E である。遺構の南北端は調査区外に延びており、全長は不明であるが、現状で長さ 21.0m、幅 0.6m を測る。この SD002 は、西側に 23m 間隔で SD003 と軸を同じくして掘削されている。



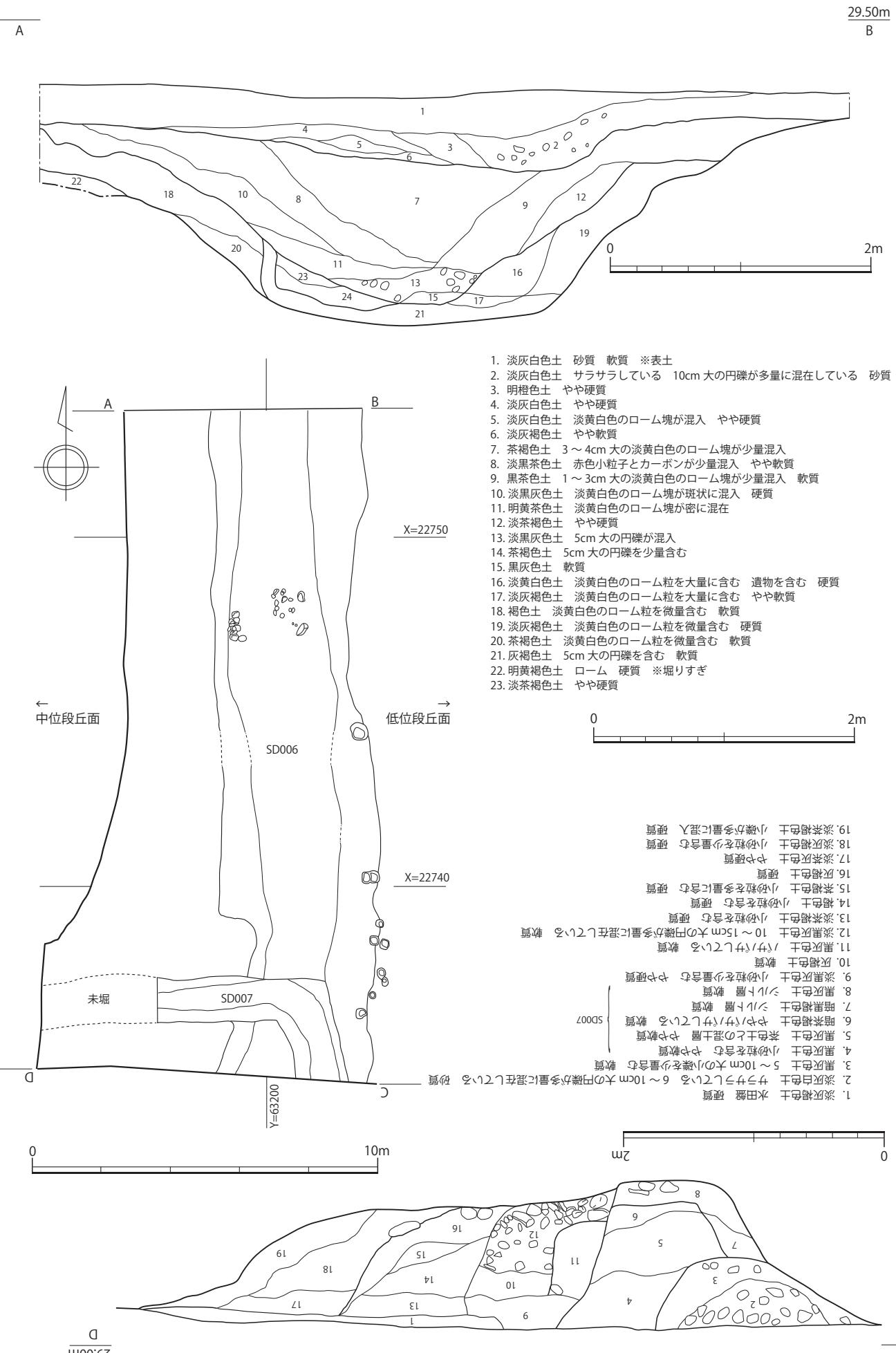
SD002・SD003



SD005



第 59 図 SD002・SD003 遺構実測図(1/600) SD005 遺構実測図(1/200・1/40)



第 60 図 SD006・SD007 遺構実測図 (1/150・1/40)

溝の中にはこぶし大の石が詰まっており、16世紀末の唐津産胎土目の皿、17世紀後半から18世紀代の肥前産の染付碗・染付皿、瓦質土器の内耳鍋や火鉢などが出土していることから、最終埋没時期は18世紀代と考えられる。

SD003(第59図)

調査区中央をSD002と23m間隔で平行して南北方向に延びる溝状遺構である。溝の方位はN-10°-Eである。遺構の南北端は調査区外に延びており、全長は不明であるが、現状で長さ42.0m、幅0.6mを測る。

溝内にはこぶし大の石が詰まっており、関西系の小碗、土錘等が出土していることから、埋没時期は17世紀末～18世紀前半以降であると考えられる。SD002とSD003はともに地割に伴う溝と考えられる。

SD004(第58図)

調査区を南西から北東に向けて弧を描くように北側の谷へと延びる溝状遺構である。南側ではSD005に切られている。また、SD004の東側に集中する掘立柱建物跡群を切っている。遺構の南端及び東端は調査区外に延びており、全長は不明であるが、現状で長さ約60.0m、幅2.5m前後、検出面からの深度は0.5m前後を測る。断面形状は丸底形をなす。

溝内からは12世紀～14世紀の蓮弁文様のある龍泉窯系青磁や中世の土師質土器鍋・羽釜、糸切り底の土師器坏等の中世の遺物が出土しているが、肥前産の磁器碗も出土しており、埋没時期は近世～近代まで下る。

SD005(第59図)

調査区西側を南北方向に延びる溝状遺構である。南側ではSD004を切っている。遺構の南端及び北端は調査区外に延びており、全長は不明であるが、現状で長さ22.0m、幅3.0m前後、検出面からの深度は0.8m前後を測る。断面形状は逆台形をなす。4層では掘り返された中に20～30cm大の円礫を密に詰め込んだ状態が確認できることから、暗渠的な機能を有していたものと考えられる。

溝内からは、瓦質土器の双耳釜、捏鉢、擂鉢、唐津産の碗、瀬戸産の四耳壺、肥前産の碗など中世～近世にかけての遺物が混在する。

SD006(第60図)

調査区西側を南北方向に延びる溝状遺構である。遺構の南北端は調査区外に延びており、全長は不明であるが、現状で長さ29.0m、幅4.0m前後、検出面からの深度は1.5m前後を測る。北側と南側には谷が入り込んでおり、台地を東西に分離させるための機能を有していたものと考えられる。土層の観察から、北側では大きく3度、南側では大きく2度程の掘り返しの痕跡が認められる。

溝内から弥生土器の壺や甕、高坏など、弥生時代中期末～後期前葉にかけての時期の遺物が出土しているが、土師器の坏・小皿等、中世の時期の遺物も出土している。この事から、埋没時期は中世まで下るものと考えられる。

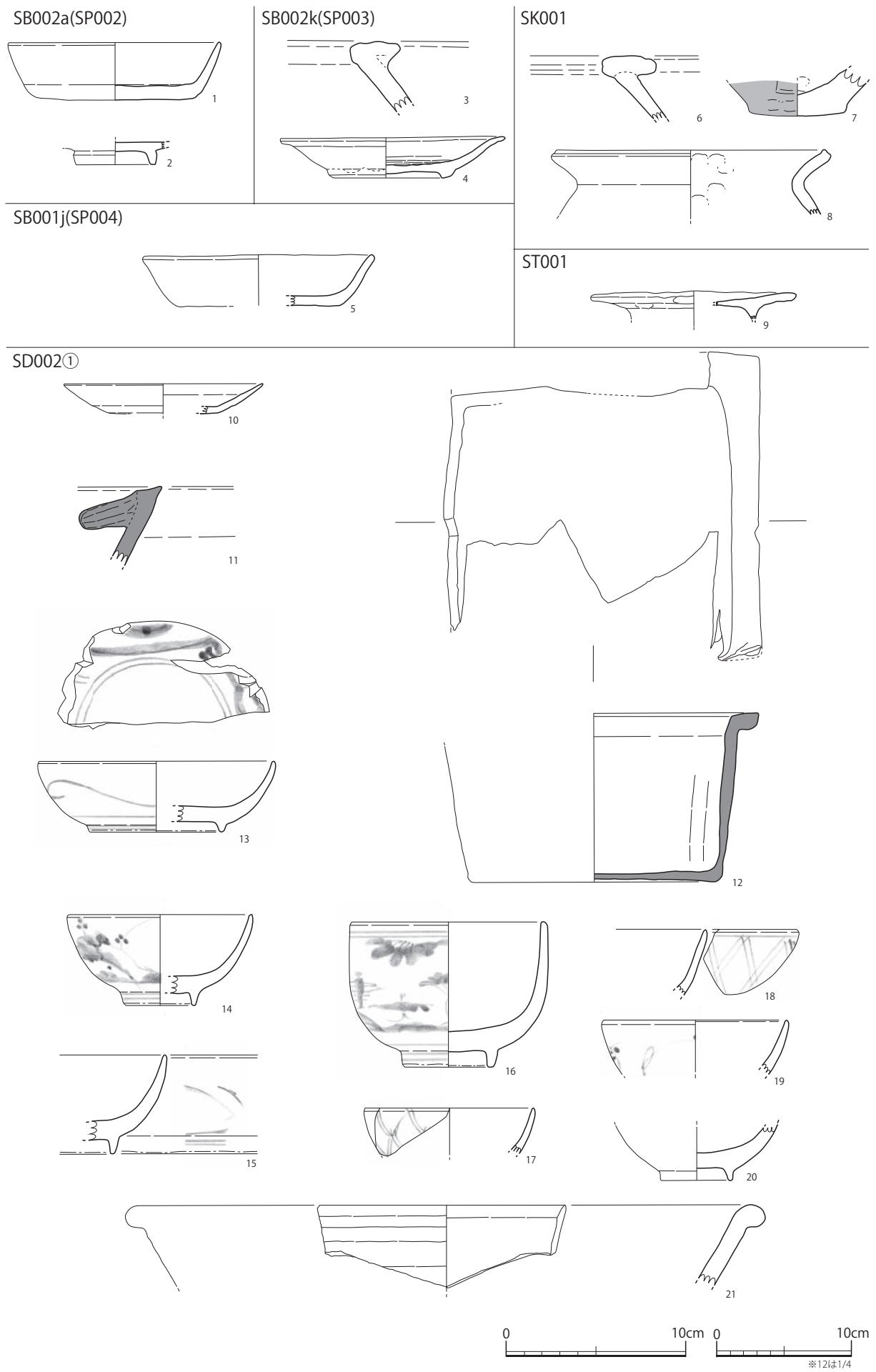
SD007(第60図)

調査区西側を南から西へとL字状に屈曲して延びる溝状遺構である。現状で検出長約18.0m、幅1.3m前後、検出面からの深度は1.1mを測る。断面形状は逆台形をなす。

溝内からは肥前産の小坏や碗が出土しており、埋没時期は近世と考えられる。

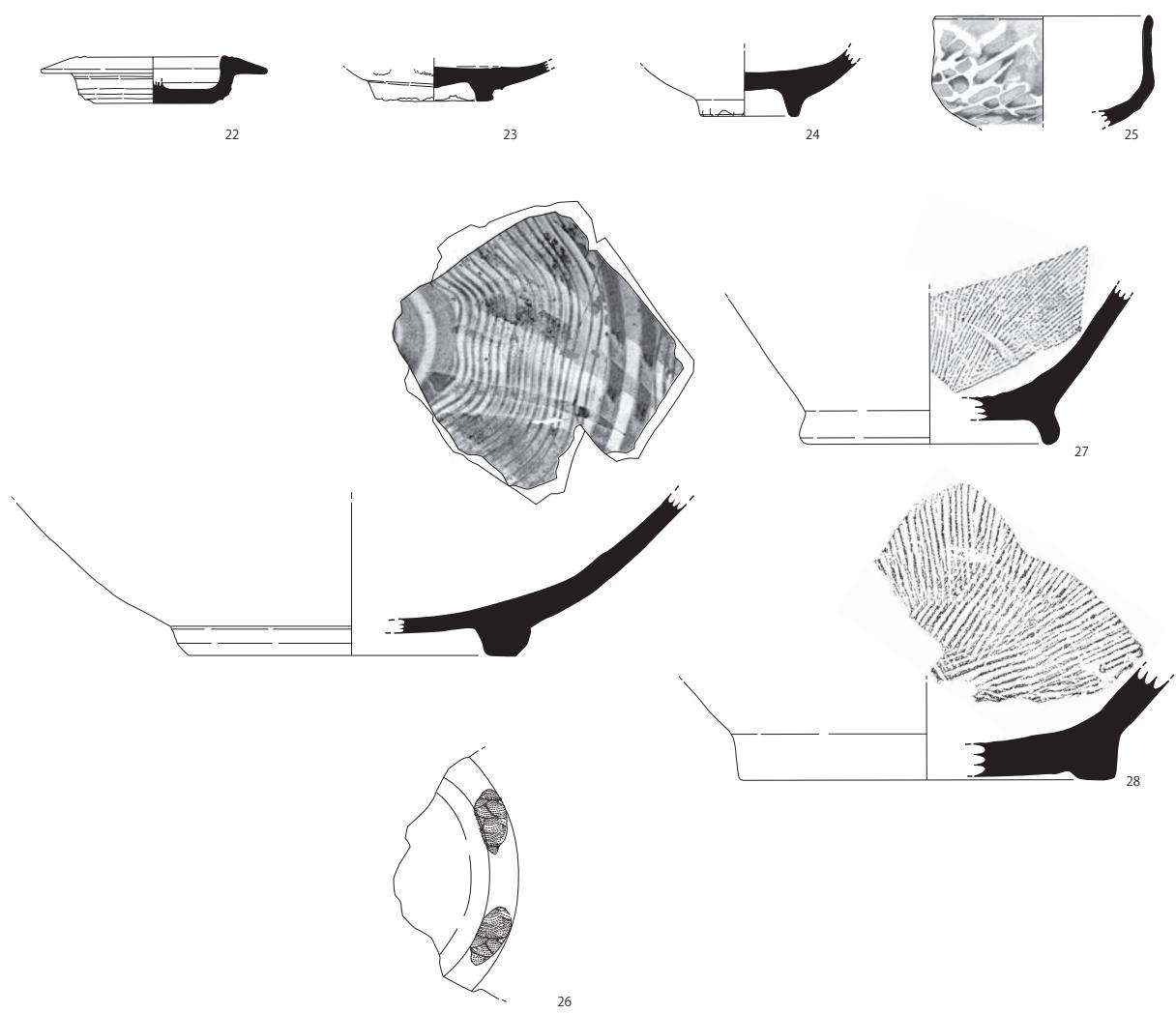
3. 小結

今回の調査では、7棟の掘立柱建物跡が検出された。この内、調査区の南側に集中して6棟の掘立柱建物跡が確認された。特徴としては建物群の西側には東西棟の大型の建物、東側には南北棟の総柱建物を配置しているこ

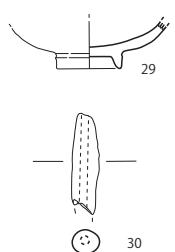


第61図 第34次調査区出土遺物実測図① (1/3・1/4)

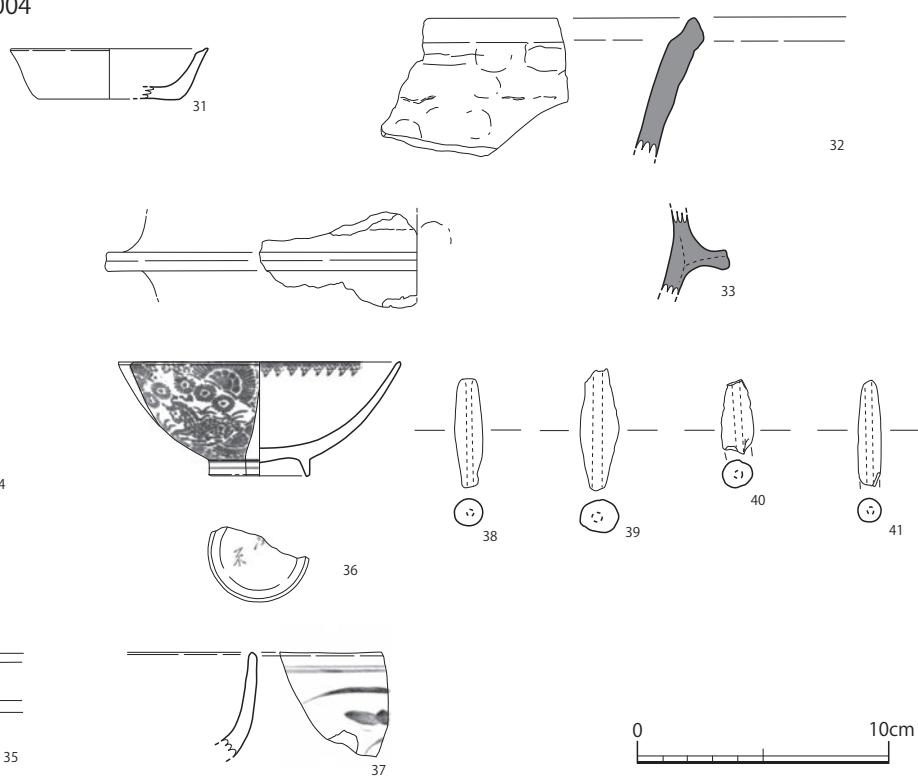
SD002②



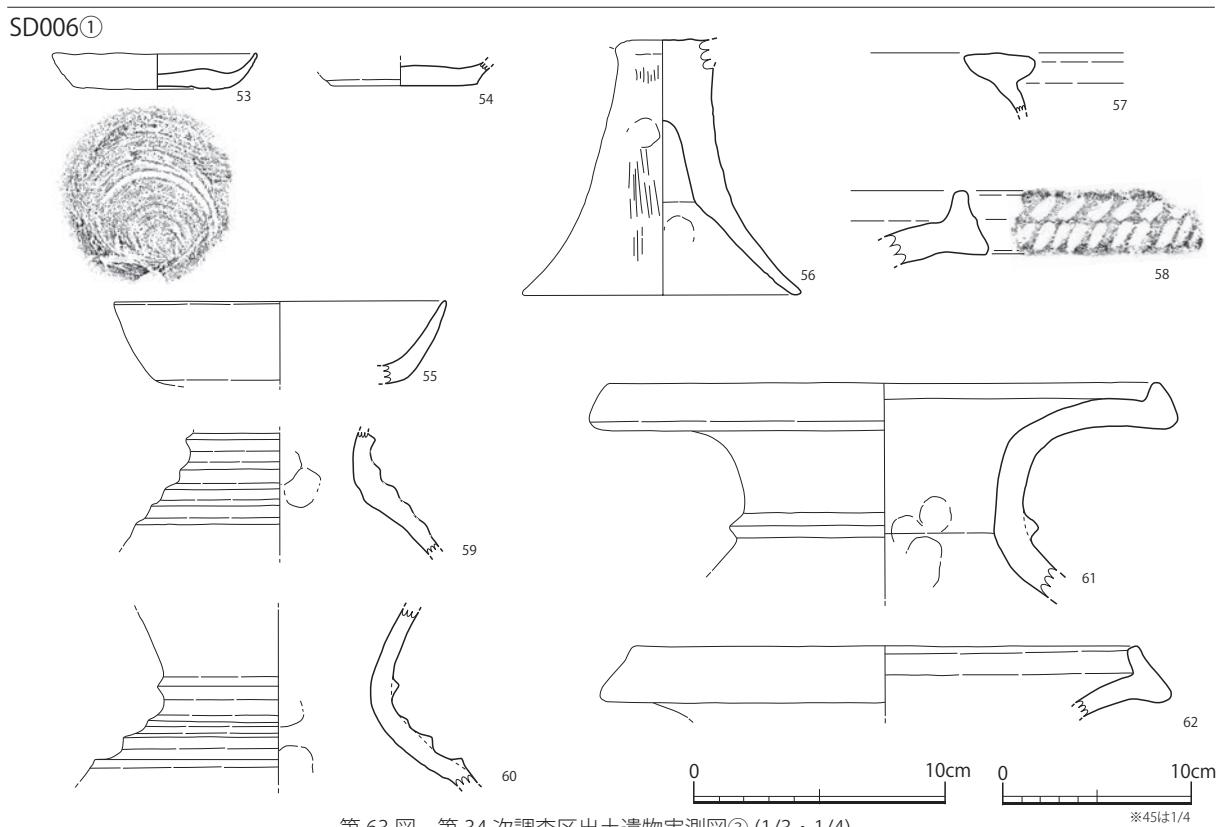
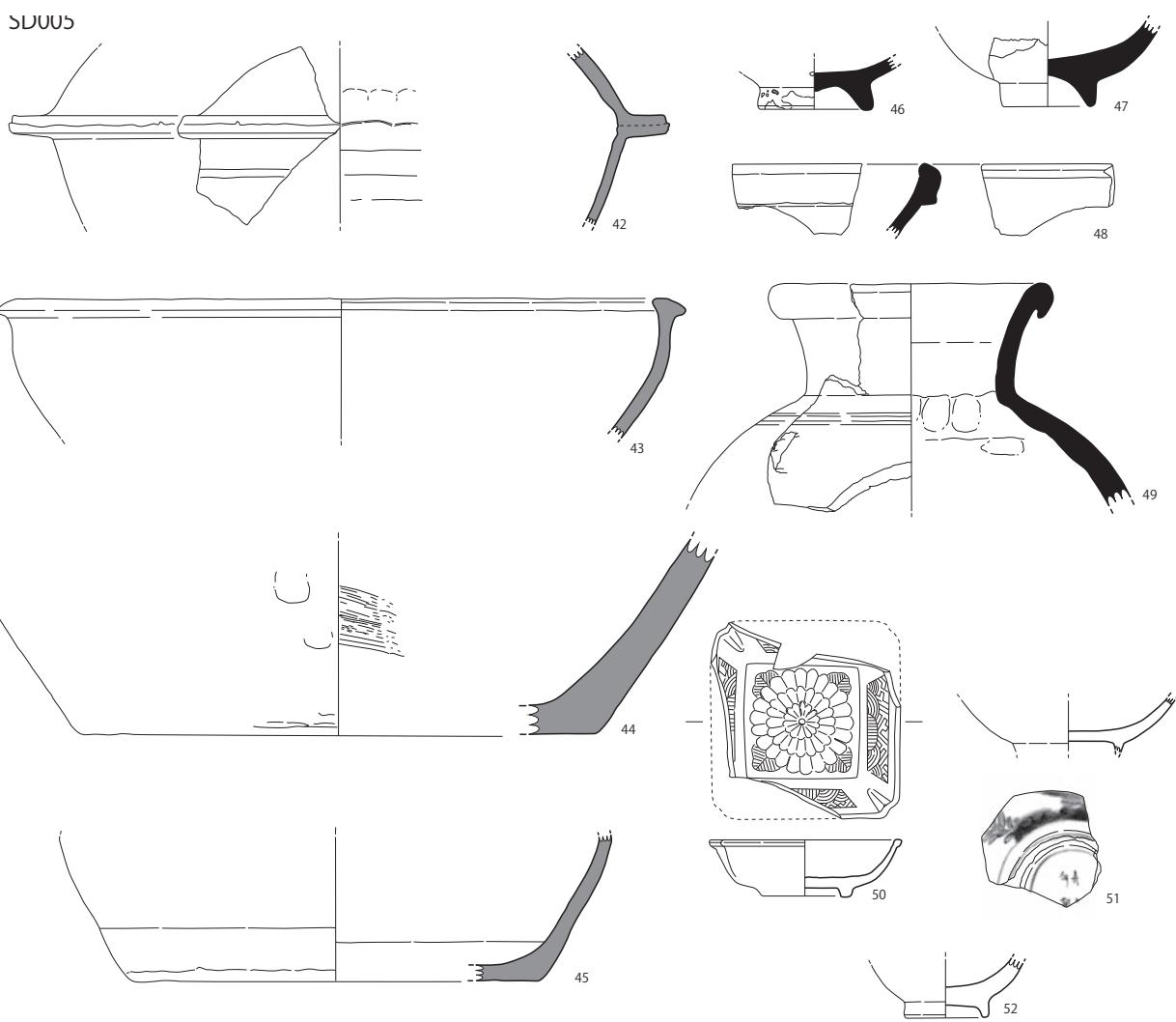
SD003



SD004

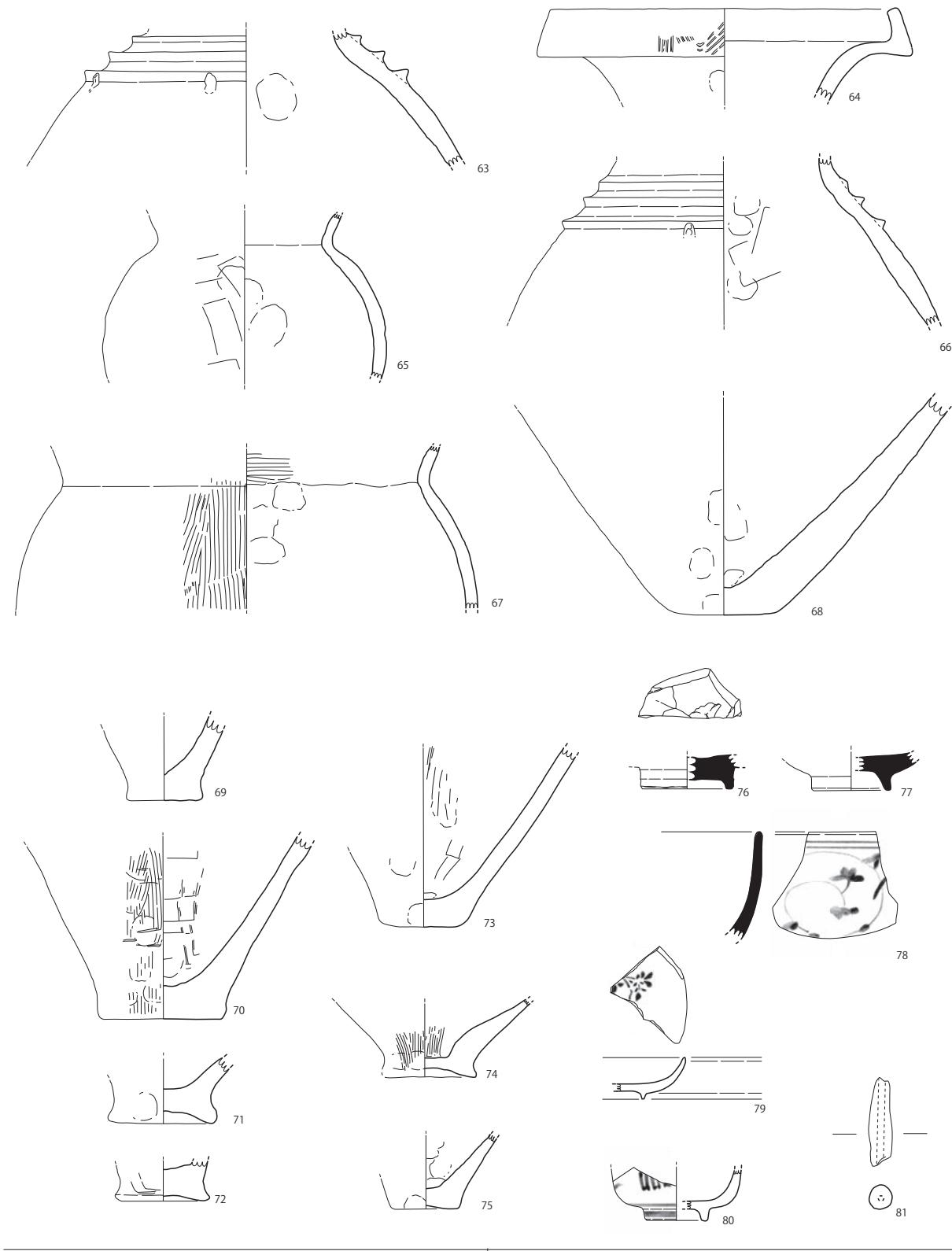


第62図 第34次調査区出土遺物実測図②(1/3)



第63図 第34次調査区出土遺物実測図③ (1/3・1/4)

SD006②



第64図 第34次調査区出土遺物実測図④(1/3)

とがあげられる。さらに西側の建物 SB001 と東側の建物 SB005、また SB002 ないし SB003 と SB006 とが同時期に建てられていた可能性が高い。柱穴との切り合い関係から、最初に建てられたのが SB004、その後、SB001 と SB005、最後に SB002 ないし SB003 と SB006 という順番が想定できる。出土遺物からこれらの年代を比定すると、14 世紀～15 世紀代に相当するものと考えられる。

柱穴中にはこぶし大の研磨した丸い石を正三角形状に 3 個埋設したもの (SP027) や、土師器の壺、小皿、白磁の皿等、建物に伴った祭祀行為を行ったものが認められた。これらの建物群はさらに南側の未調査地に延びており、広がるものと考えられる。

また、調査区の西側には大きく SD004・SD005・SD006 の溝状遺構があり、SD004 は調査区の西から北にかけて弧を描くように延びているが、SD005・SD006 は舌状台地を横断し、南北の谷に向かって大きく掘削している。このため台地の先端は独立した状態となっている。年代的には中世～近世にかけて利用されていると考えられる。このことから、SD005 ないし SD006 の溝状遺構とその東側で検出された 6 棟の掘立柱建物跡とが関連する可能性が高く、建物を含めた遺跡の性格を知る上で重要と考えられる。建物群の東 50m 地点にあたる第 99 次調査地点では、14 世紀前半頃に比定される火葬墓をはじめ、土師器壺を埋納した土壙群が分布しており、この段階の墓域が想定されるなど、それらとの関連性が示唆される。

(8) 横尾遺跡第 63 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 63 次調査地点は、大分市大字横尾王子原に所在する。本調査地点の北には東から入り込む谷が迫っており、西には第 81 次調査地点と第 65 次調査地点が隣接している。第 81 次調査地点では、16 世紀末に比定される溝状遺構 (SD005) が東西方向に延びている。第 65 次調査地点では、中世の溝状遺構が東西に 1 条、南北に 1 条検出されている他、掘立柱建物跡が 1 棟確認されている。本調査の調査面積は 915 m² であり、発掘調査は平成 9 年 8 月 18 日に開始し、同年 11 月 1 日に終了した。遺構検出面の標高は 30.50m 前後を測る。検出した主な遺構は掘立柱建物跡 7 棟、溝状遺構 2 条のほか、時期不明の地層横転遺構 1 基をはじめ多数の土坑・柱穴等である。

2. 遺構

掘立柱建物跡

SB001(第 67 図)

調査区の西側で検出した、桁行 3 間 × 梁行 1 間、身舎面積 20.2 m² の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、建物の主軸方向は N - 18° - W である。北西隅の柱穴は調査区外に展開している。柱穴の平面形状は円形を呈し、径 0.32 ~ 0.48m、検出面からの深度は 0.08 ~ 0.40m を測る。柱穴柱間は桁行が 1.80 ~ 2.08m、梁行が 3.60m である。

柱穴 b(SP003) から中世の土師器壺の破片が出土していることや、南で検出された同じ主軸方向を向いている掘立柱建物跡からも中世の遺物が出土している事から、建物の時期は中世と考えられる。

SB002(第 67 図)

調査区の西側で検出した、桁行 3 間以上 × 梁行 2 間、身舎面積 28.1 m² 以上の掘立柱建物跡であり、建物西側の桁行はさらに調査区外に展開する可能性が高い。建物は東西棟で、建物の主軸方向は N - 78° - W である。柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈し、径 0.24 ~ 0.40m 前後、検出面からの深度は 0.24 ~ 0.64m を測る。柱穴柱間は桁行が 1.60 ~ 2.24m、梁行が 2.12 ~ 2.16m である。

柱穴 b(SP010) から土師器片と土錐 1 点が、柱穴 c(SP011) から糸切り底の土師器小皿が、柱穴 g(SP015) から土師器片が、柱穴 i(SP017) から土師器壺片と土錐 3 点が出土している。出土遺物から、建物の時期は 15 世紀後半代と考えられる。

SB003(第 68 図)

調査区の西側で検出した、桁行 3 間 × 梁行 1 間、身舎面積 23.7 m² の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、建物の主軸方向は N - 19° - W である。柱穴の平面形状は円形もしくは不定楕円形を呈し、径 0.32 ~ 0.72m、検出面からの深度は 0.20 ~ 0.52m 前後を測る。柱穴柱間は桁行が 2.00 ~ 2.32m、梁行が 3.68m である。

全ての柱穴から遺物の出土が認められ、柱穴 a(SP018) から土師器壺片が、柱穴 b(SP019) から瓦質土器甕片が、柱穴 c(SP020) から糸切り底の土師器壺が、柱穴 d(SP021) から土師器壺片が、柱穴 e(SP022) から須恵器大甕の口縁部片と土師器片、土錐 2 点が、柱穴 f(SP023) から土師器壺片と土錐 2 点が、柱穴 g(SP024) から土師器壺が、柱穴 h(SP025) から糸切り底の土師器壺片が出土している。出土遺物から、建物の時期は 15 世紀後半代と考えられる。

SB006(第 68 図)

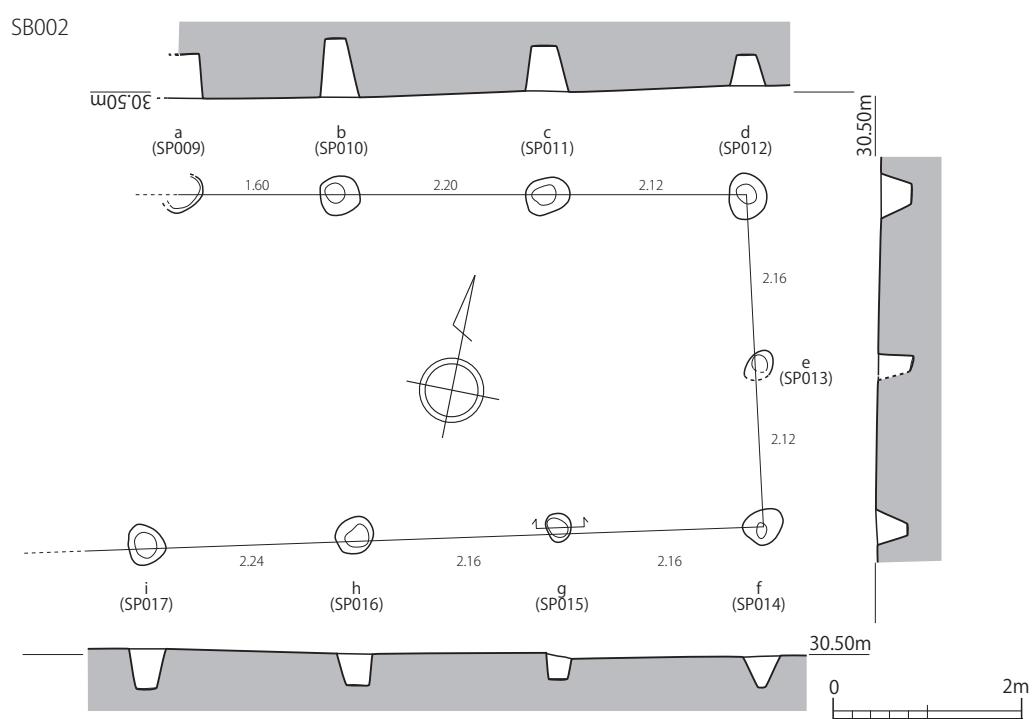
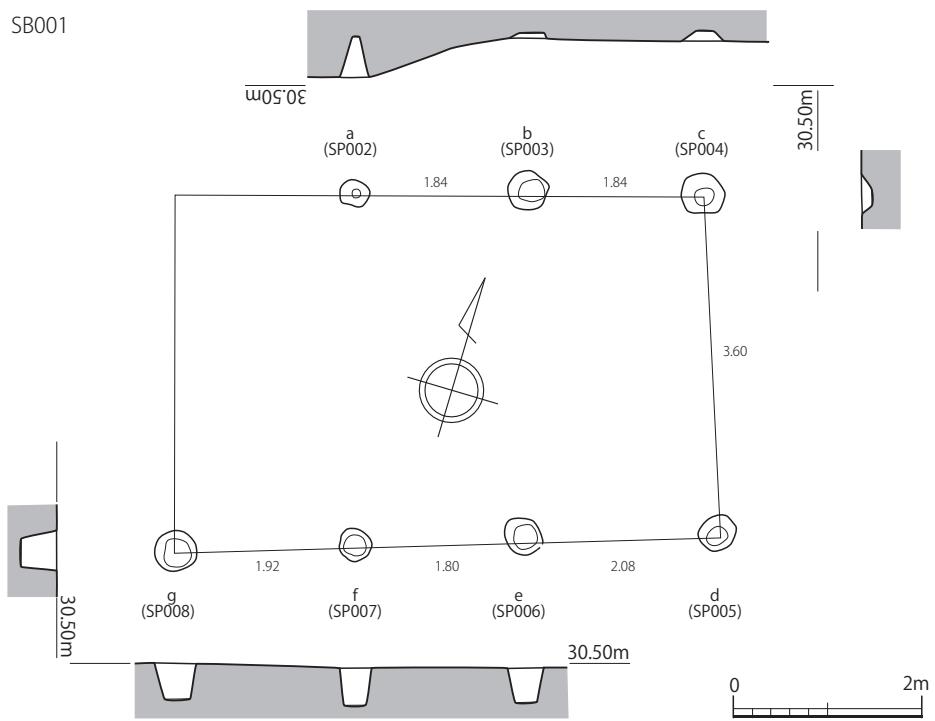
調査区の西側で検出した、桁行 3 間 × 梁行 1 間、身舎面積 26.8 m² の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、



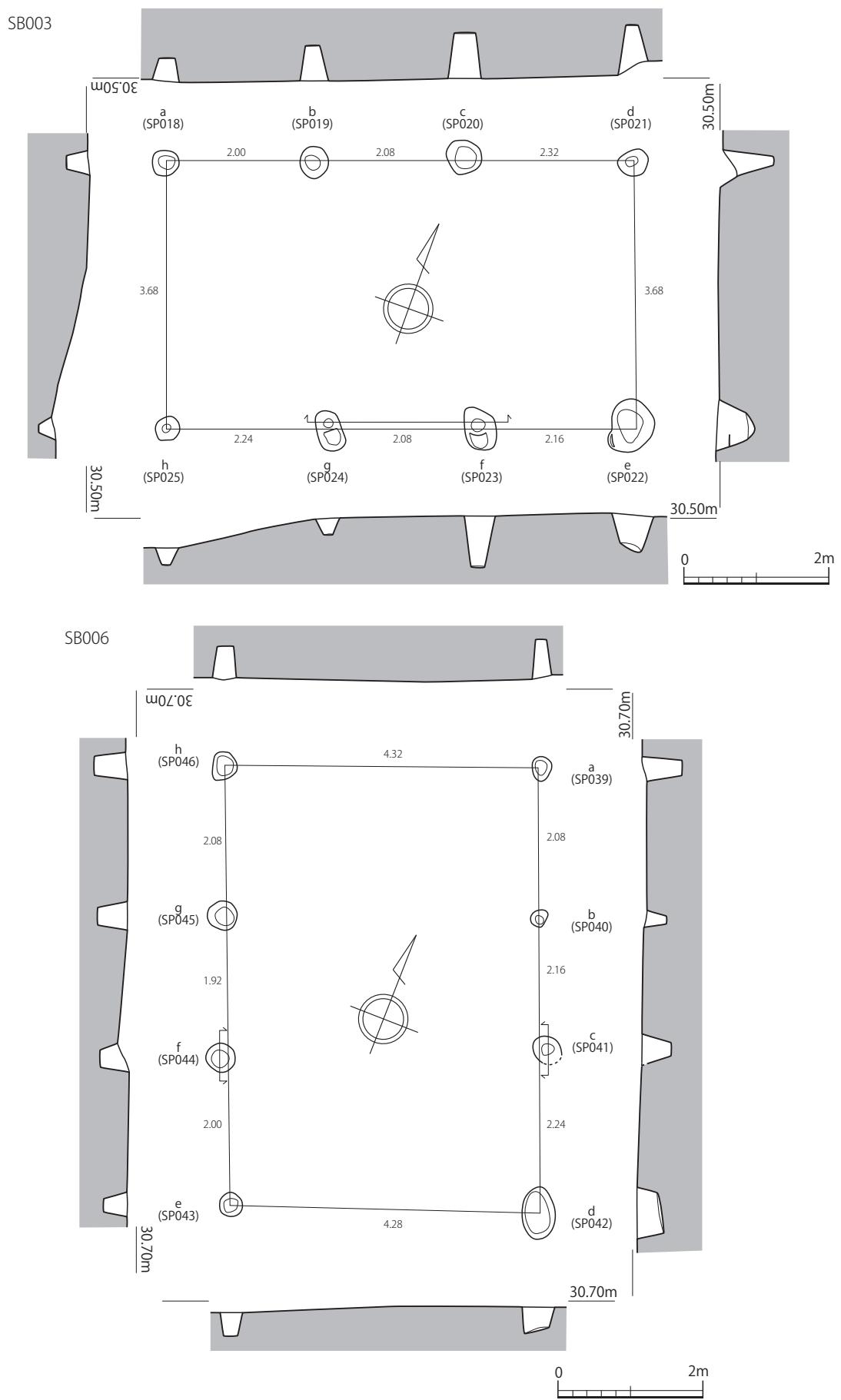
第65図 第63次調査区遺構配置図(1/300)



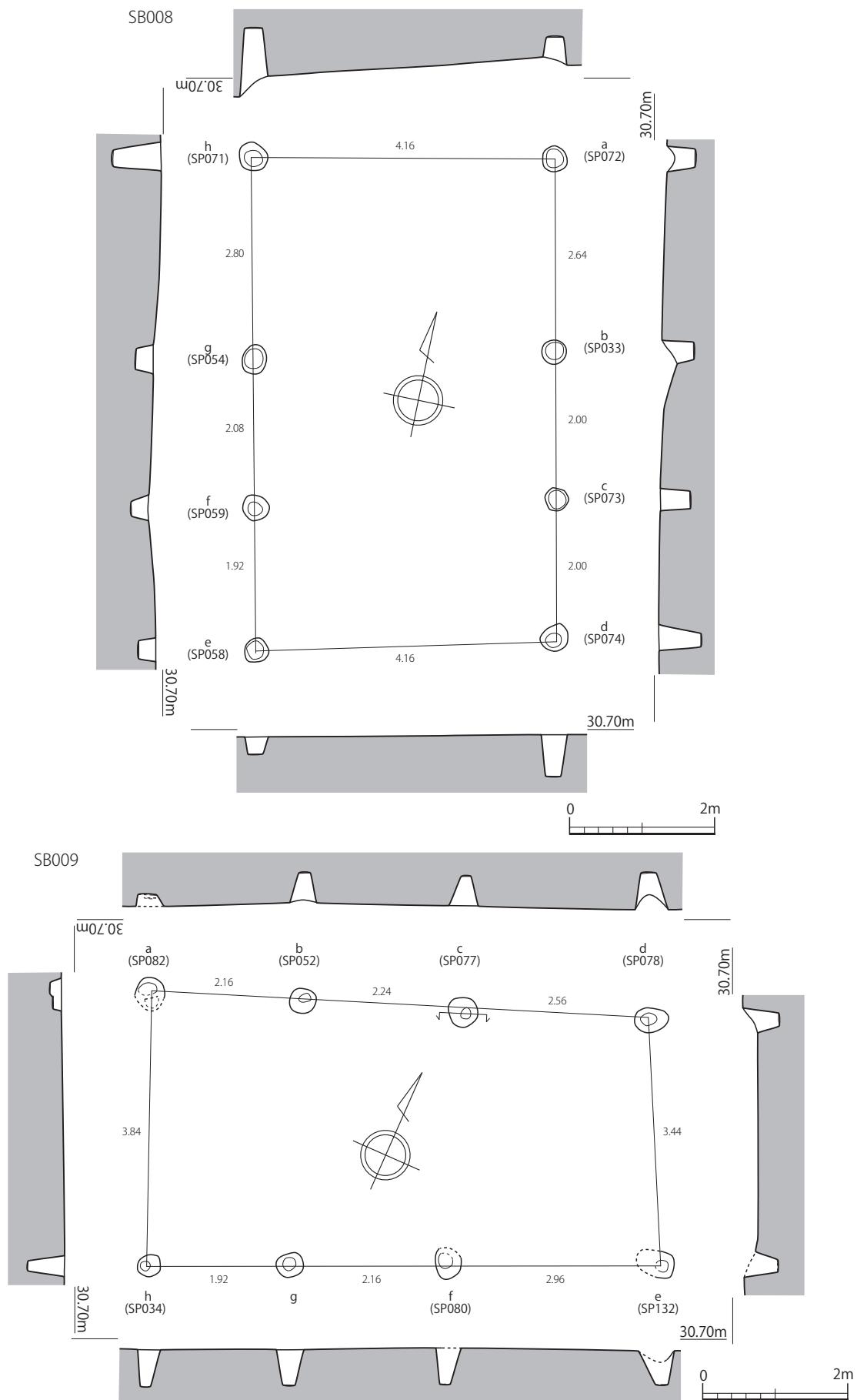
第66図 第63次調査区全体遺構図(1/300)



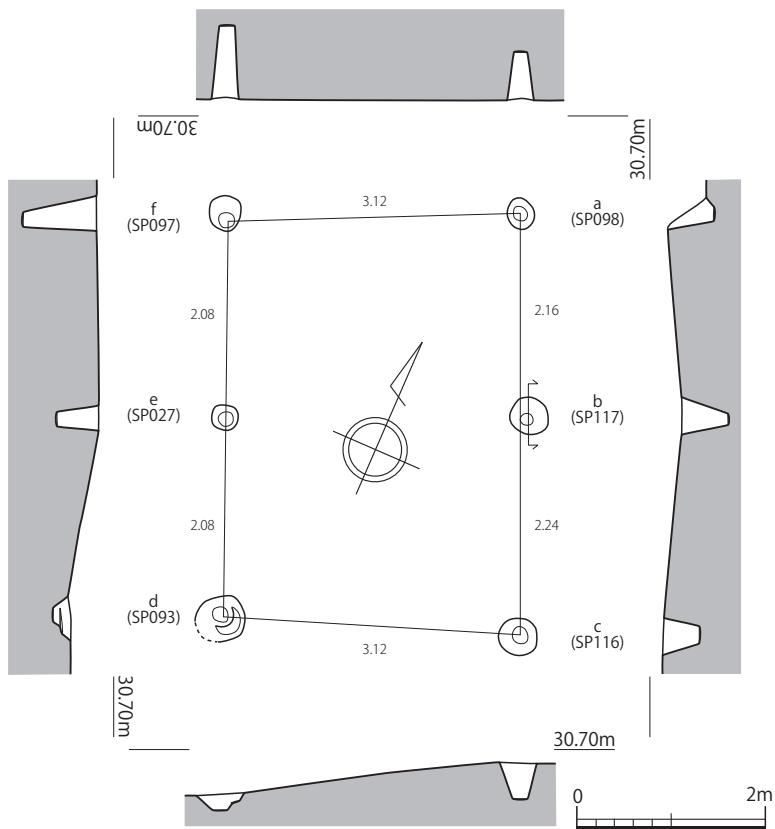
第 67 図 SB001・SB002 遺構実測図 (1/80)



第68図 SB003・SB006遺構実測図(1/80)



第69図 SB008・SB009 遺構実測図(1/80)



第70図 SB010遺構実測図(1/80)

建物の主軸方向はN-21°-Wである。柱穴の平面形状は円形もしくは橢円形を呈し、径0.24~0.72m、検出面からの深度は0.28~0.52m前後を測る。柱穴柱間は桁行が1.92~2.24m、梁行が4.30m前後である。

柱穴d(SP042)から土器片と糸切り底の土師器坏片が、柱穴e(SP043)から土錐が、柱穴f(SP044)から土師器坏片が出土している。出土遺物から建物の時期は限定はできないが、中世の範疇と考えられる。

SB008(第69図)

調査区の西側で検出した、桁行3間×梁行1間、身舎面積28.0m²の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、建物の主軸方向はN-12°-Wである。柱穴の平面形状は円形を呈し、径0.32~0.40m、検出面からの深度は0.24~0.80m前後を測る。柱穴柱間は桁行が1.92~2.80m、梁行が4.16mである。

柱穴c(SP073)・柱穴f(SP059)から土師器片が出土している。

SB009(第69図)

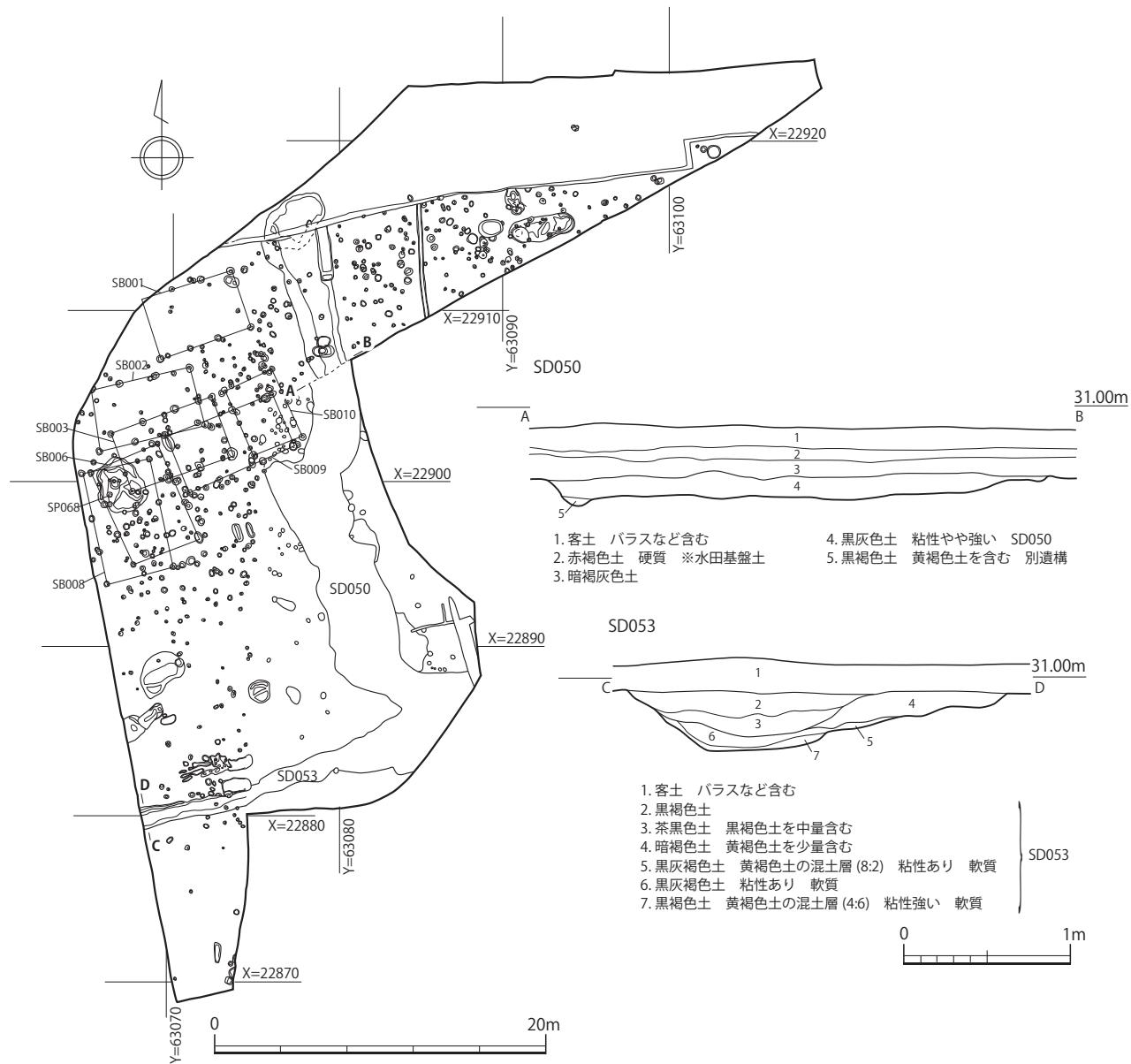
調査区の中央で検出した、桁行3間×梁行1間、身舎面積25.5m²の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、建物の主軸方向はN-22°-Wである。柱穴の平面形状は円形もしくは橢円形を呈し、径0.32~0.48m、検出面からの深度は0.16~0.48m前後を測る。柱穴柱間は桁行が1.92~2.96m、梁行が3.44~3.84mである。

柱穴c(SP077)から土師器片と土錐1点が、柱穴f(SP080)から土器片と土錐10点がまとまって出土している。

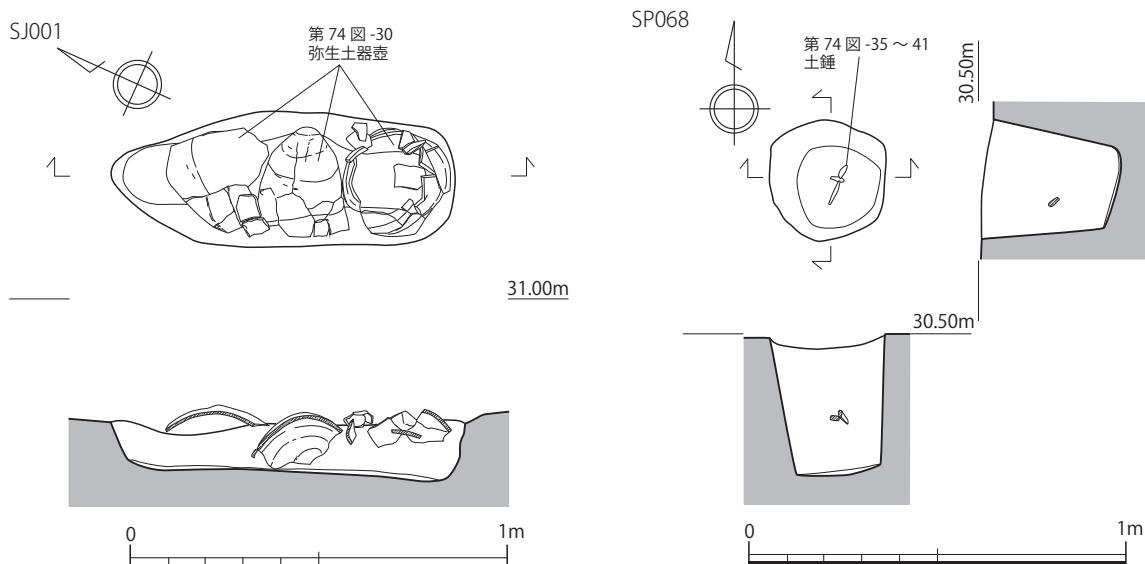
SB010(第70図)

調査区の中央で検出した、桁行2間×梁行1間、身舎面積13.4m²の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、建物の主軸方向はN-24°-Wである。柱穴の平面形状は円形を呈し、径0.28~0.56m、検出面からの深度は0.16~0.80m前後を測る。柱穴柱間は桁行が2.08~2.24m、梁行が3.12mである。

柱穴a(SP098)・柱穴c(SP116)から土師器坏片が、柱穴e(SP027)・柱穴f(SP097)から糸切り底の土師器小皿片が出土している。出土遺物から、建物の時期は15世紀代と考えられる。



第71図 SD050・SD053遺構実測図 (1/400・1/40)



第72図 SJ001・SP068遺構実測図 (1/20)

溝状遺構

SD050(第71図)

調査区の中央を南北に延びる溝状遺構である。南端で東西方向に延びるSD053とL字状に繋がる。床面のレベルが北側の谷方向に向かって下がっている状況が確認できた。遺構の北端は造成による削平のため遺構が消失している。南端は一部が調査区外に延びているため、分岐するかどうかは不明である。現状で南北長32.8m、幅2.0～3.5m、検出面からの深度は0.25m前後を測る。

溝内からは14世紀～15世紀代の龍泉窯系青磁碗、糸切り底の土師器坏、土師質土器鍋、瓦質土器の擂鉢、土錘などが出土しており、15世紀代に埋没したものと考えられる。

SD053(第71図)

調査区の南側を東西に延びる溝状遺構である。東端でSD050とL字状に接続し、同一遺構と考えられる。遺構の東西端は調査区外に延びているため、分岐するかどうかは不明である。現状で東西長18.4m、幅0.8～3.6m、検出面からの深度は0.2m前後を測る。土層の観察から、一度の掘り返しが認められた。

溝内からは土師器坏片、土師器小皿片が出土している。

土器埋納遺構

SJ001(第72図)

調査区の中央で検出した土器埋納遺構である。平面形状は南北に延びた橢円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.36m、検出面からの深度は0.3mを測る。断面形状は浅い逆台形をなす。

遺構内からは弥生土器の壺を口縁部及び体部半分を上下に打ち欠いた3個体がいずれも内面を下にふせて並べた状態で検出された。用途・機能は不明であるが、小児用の土器蓋土壙墓である可能性も指摘できる。出土遺物から、遺構の時期は弥生時代後期後葉と考えられる。

ピット

SP068(第72図)

調査区の西側で検出されたピットである。平面形状は円形を呈し、直径約0.3m、検出面からの深度は0.34mを測る。断面形状は逆台形をなす。

床面と検出面のほぼ中間に位置する地点から土錘7点が出土している。

3. 小結

今回の調査では、調査区南側でL字状にほぼ直交する溝状遺構SD050・SD053に区画された空間内から15世紀代を中心とする掘立柱建物跡が7棟検出された。

①7棟すべての向きが概ね溝に平行あるいは直交している。

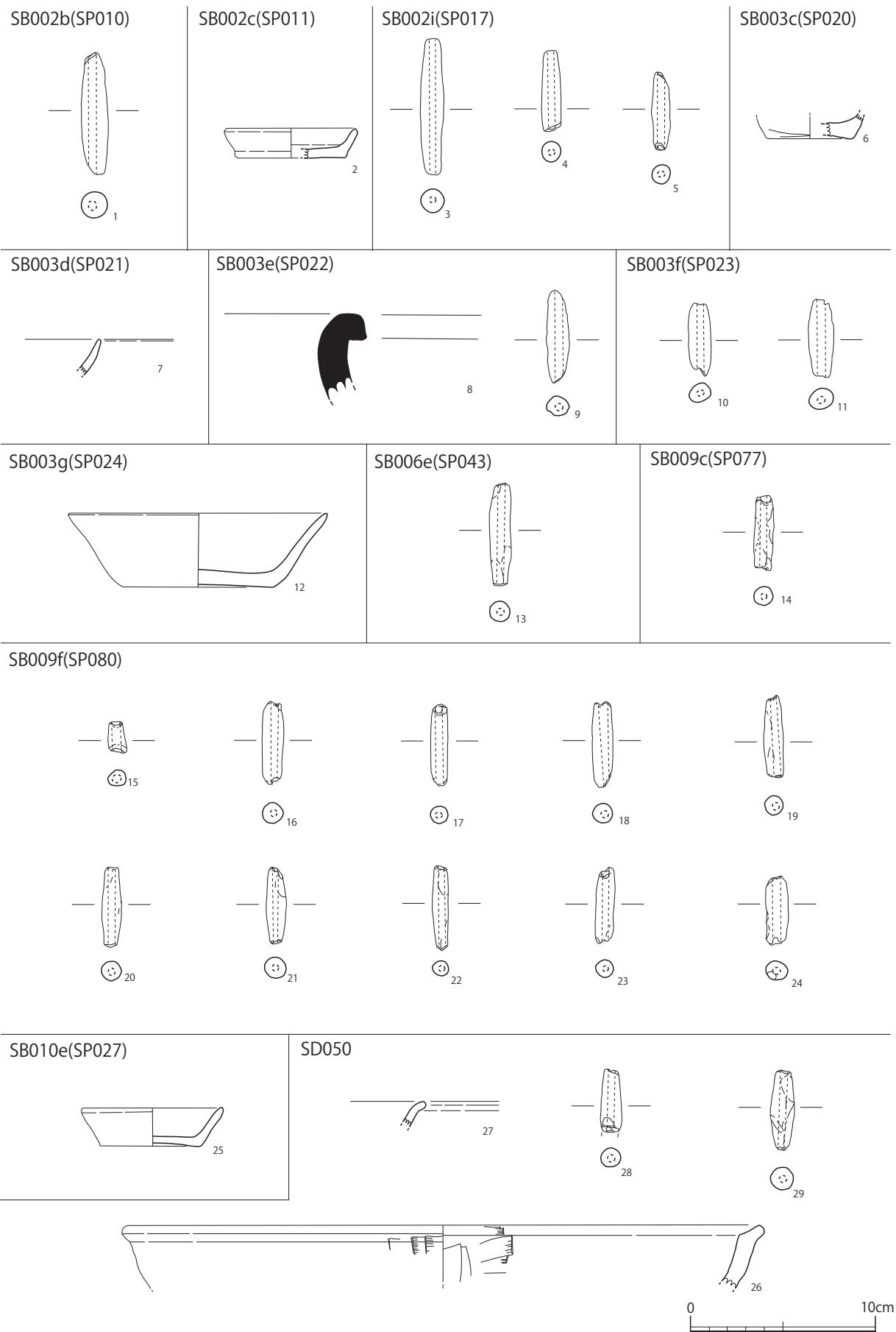
②掘立柱建物跡群は溝によって区画された空間内の北側に集中しており、南側は柱穴が散在している程度である。

③総柱建物跡は確認できていない。

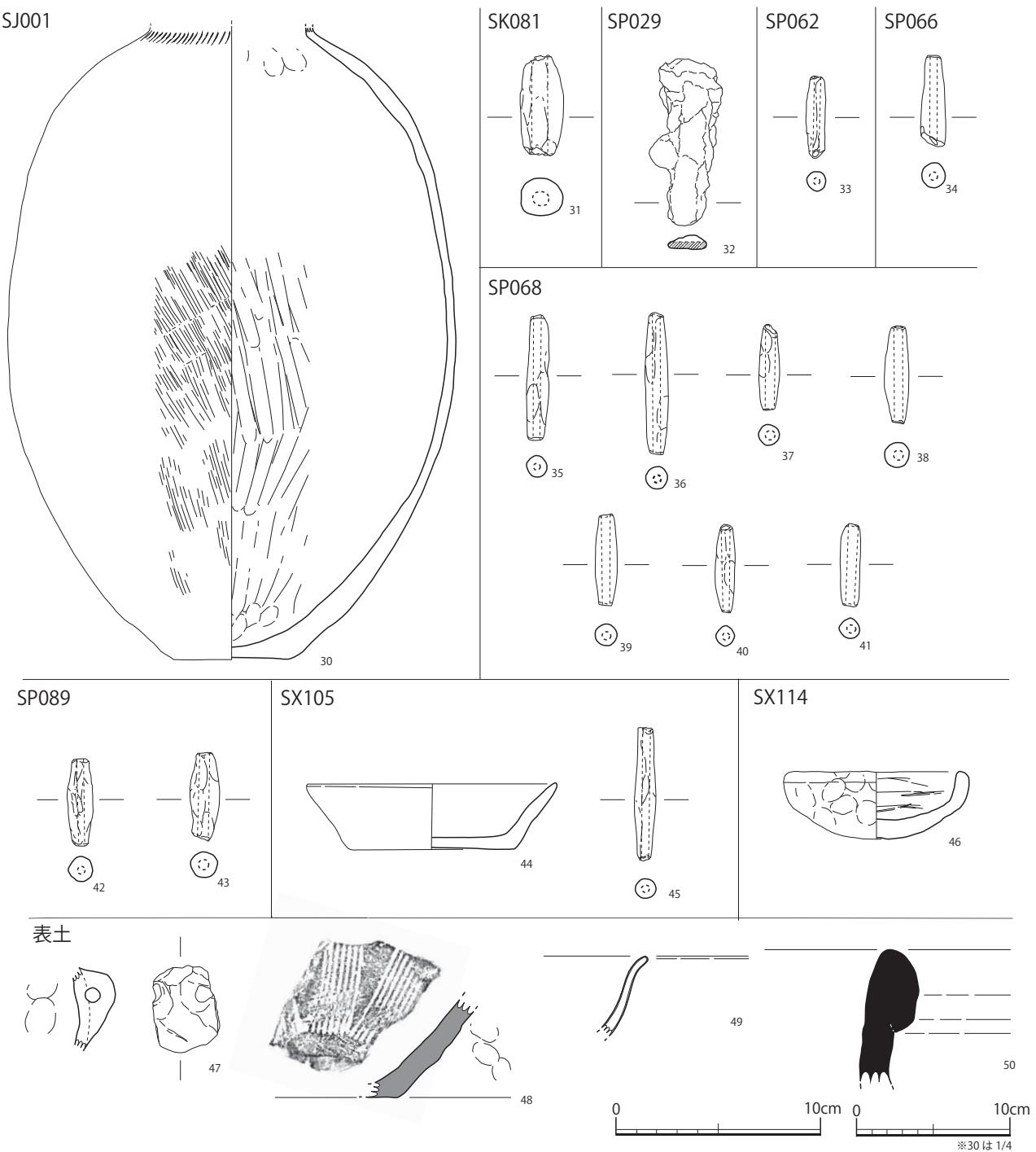
④規模の明らかな6棟のうち、SB010(2間×1間)を除く建物跡は、3間×1間の構造および20m²大の身舎面積を有する。

⑤建物の重複関係から、三回以上の建て替えが認められる。

以上の特徴から、2～3棟の建物群が、区画溝と密接な関わりを持ちながら継続的に存在した状況が看取され、さらにその区画された空間内においても建物跡群の占地が踏襲されていたと考えられる。切り合い関係と建物の配置から、SB001・SB006・SB009の3棟、SB002・SB008の2棟、SB003・SB010の2棟は同時併存していた



第 73 図 第 63 次調査区出土遺物実測図① (1/3)



第74図 第63次調査区出土遺物実測図②(1/3・1/4)

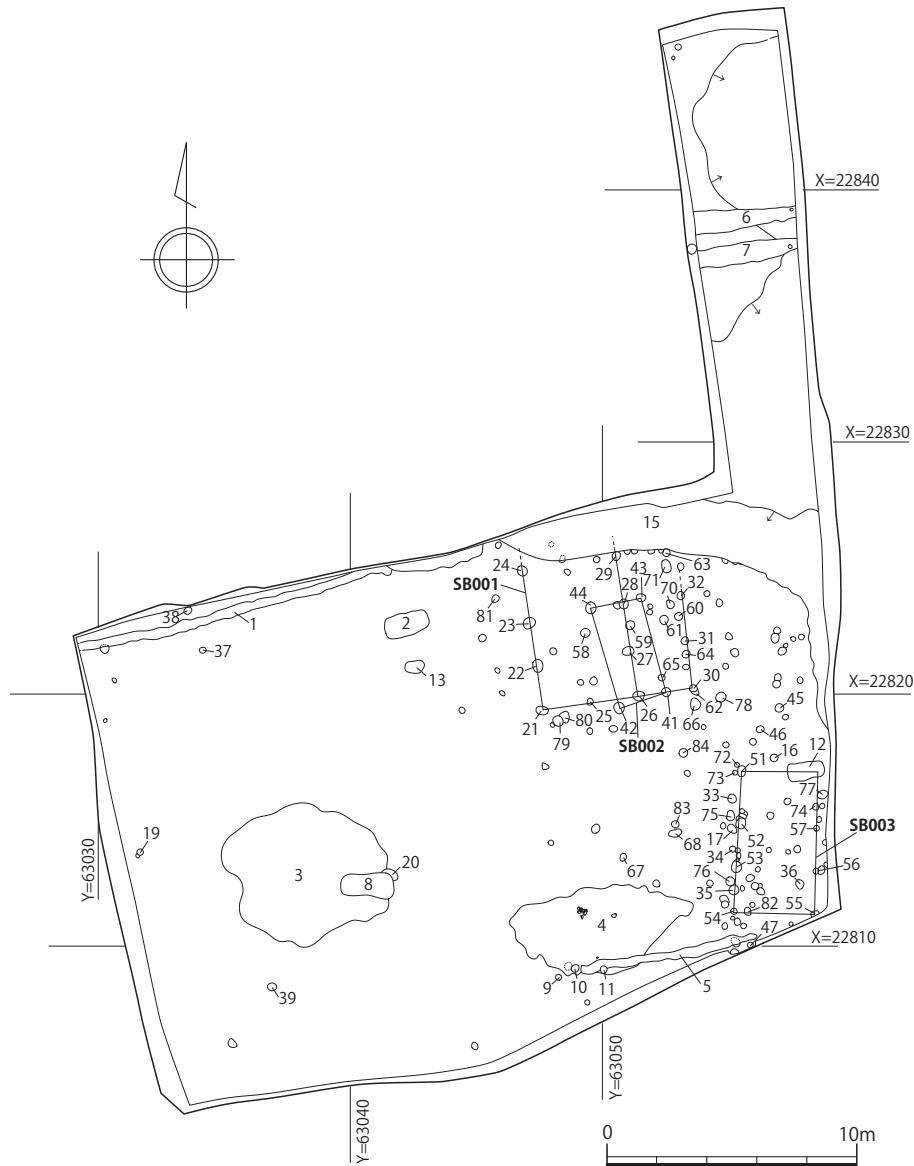
可能性が考えられる。

また、本調査区の西側には約半町の規模を有する中世の方形館跡が確認されており、第79次調査地点・第81次調査地点・第83次調査地点・第112次調査地点からは方形館の外郭施設であった溝状遺構が検出されている。方形館外郭施設の東側にあたる溝状遺構は現在実施済の発掘調査では検出されておらず、第63次調査地点の手前で南側に屈曲するものと考えられる。なお、SD053は本調査区の西側に延びているが、これは第65次調査地点から検出された溝状遺構SD010と繋がる溝と考えられる。

(9) 横尾遺跡第 64 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 64 次調査地点は、大分市大字横尾王子原に所在する。本調査地点の北には第 79 次調査区、南には第 14 次調査区、東には第 66 次調査区、西には第 112 次調査区が近接している。第 79 次調査地点は古代と中世の掘立柱建物跡、溝状遺構、道路状遺構、土器埋納遺構等が確認されている。第 66 次調査地点は、南北方向に延びる 5 条の溝状遺構と土坑 2 基、ピット等が確認されている。本調査の調査面積は 610 m² であり、発掘調査は平成 9 年 10 月 15 日に開始し、同年 12 月 11 日に終了した。遺構検出面の標高は 31.50m 前後を測る。検出した主な遺構は掘立柱建物跡 3 棟、溝状遺構 5 条のほか、地層横転遺構 1 基をはじめ多数の土坑・柱穴等である。



第 75 図 第 64 次調査区遺構配置図 (1/300)

2. 遺構

掘立柱建物跡

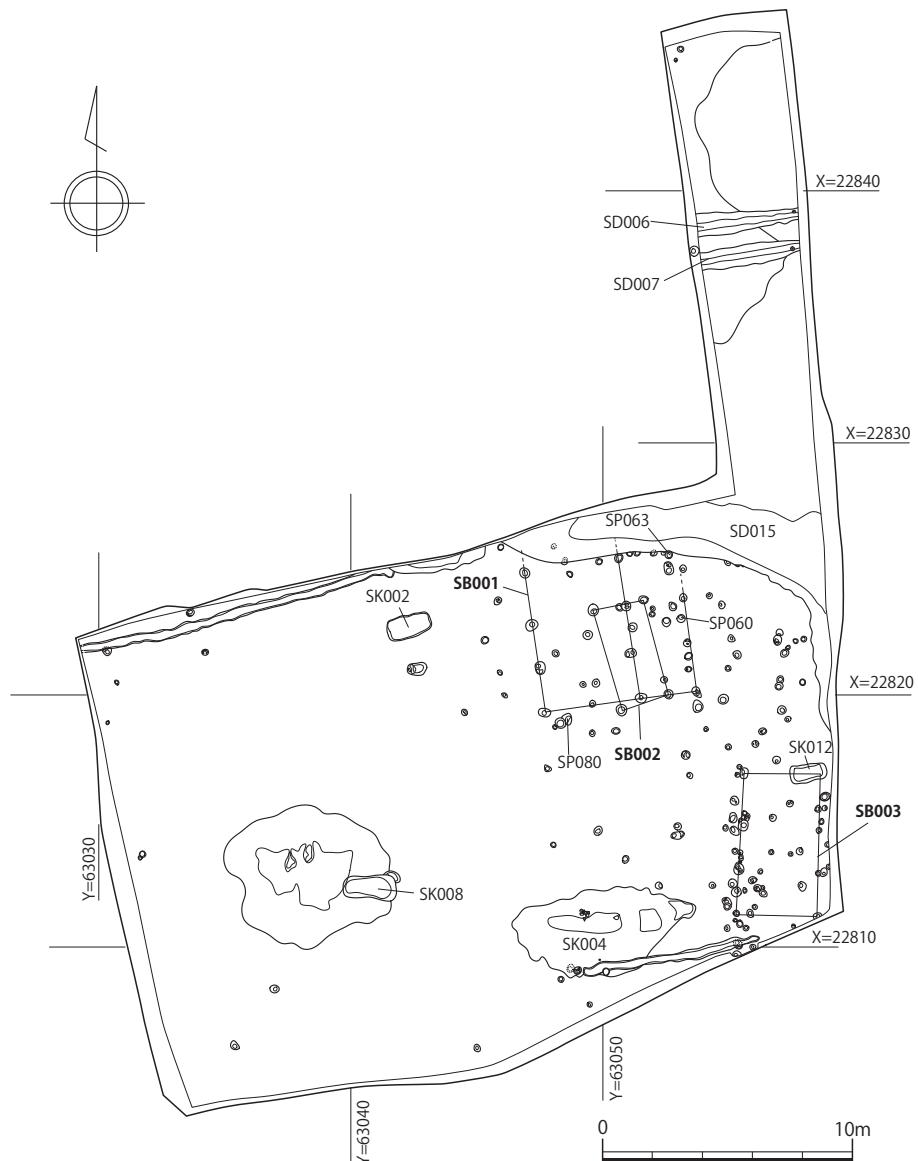
SB001(第77図)

調査区の東側で検出した桁行3間以上×梁行2間で、建物の東側に庇幅1間を有する掘立柱建物跡である。建物の北側部分をSD015に切られており、建物の規模は不明であるが、身舎面積は21m²以上あるものと考えられる。建物は南北棟で、建物の主軸方向はN-10°-Wである。柱穴の平面形状は円形もしくは橢円形を呈し、径0.25~0.65m、検出面からの深度は0.10~0.65mを測る。柱穴柱間は桁行が1.64~1.96m、梁行が1.88~2.16mである。

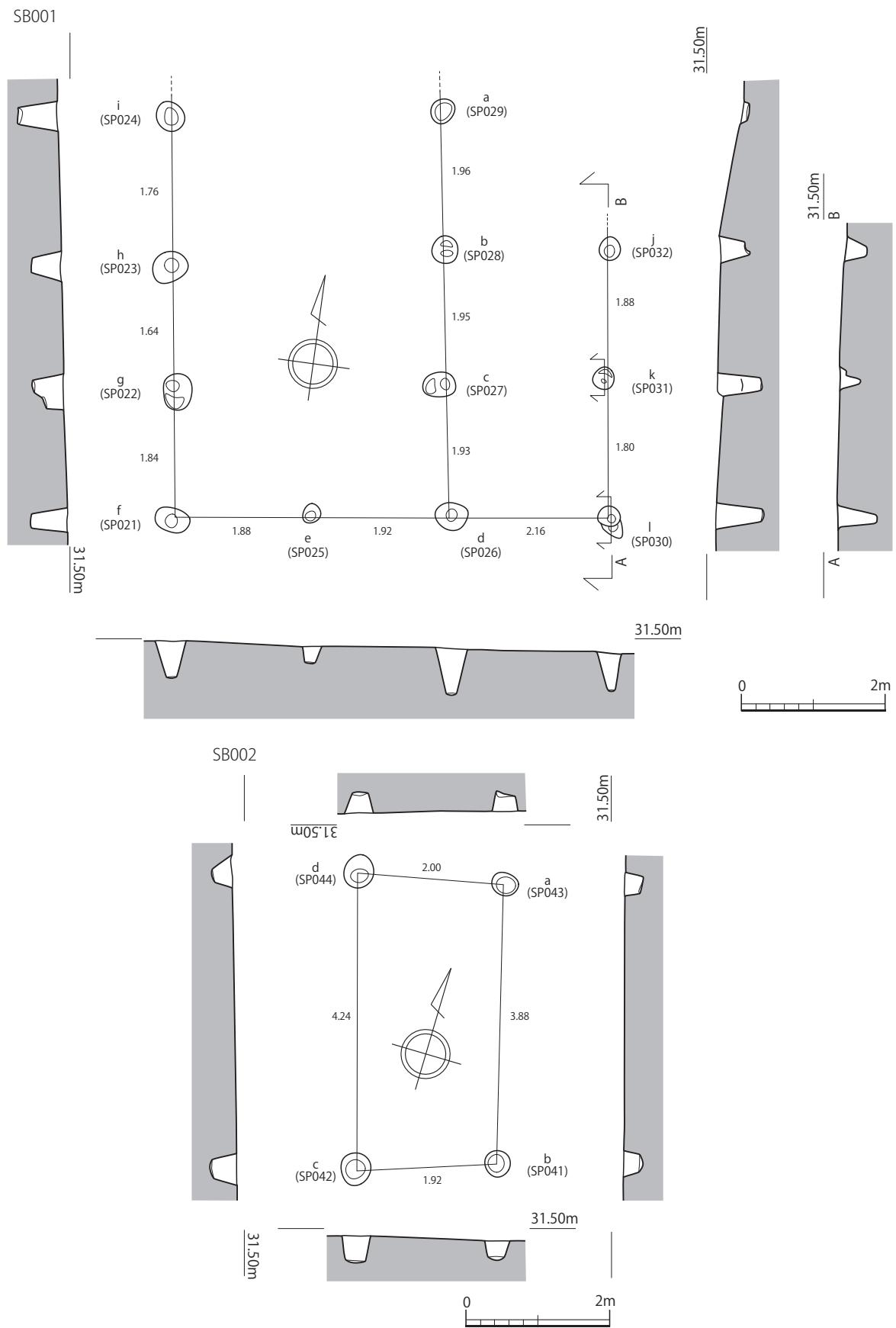
柱穴I(SP030)からは土錐が出土している。

SB002(第77図)

調査区の東側で検出した、桁行1間×梁行1間、身舎面積7.95m²の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、建物の主軸方向はN-21°-Wである。柱穴の平面形状は円形を呈し、径0.5m前後、検出面からの深度は0.25



第76図 第64次調査区全体遺構図(1/300)



第 77 図 SB001・SB002 遺構実測図 (1/80)

～0.36mを測る。柱穴柱間は桁行が3.88～4.24m、梁行が1.92～2.00mである。

南西隅の柱穴c(SP042)から土器片が出土しているものの、小片のため建物の年代は不明である。

SB003(第78図)

調査区の南東側で検出した、桁行3間×梁行1間の掘立柱建物跡である。建物北東の柱穴はSK012によって切られている。身舎面積は推定で19.5m²である。建物は南北棟で、建物の主軸方向はN-3°-Eである。柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈し、径0.25～0.45m、検出面からの深度は0.16～0.56m前後を測る。柱穴柱間は桁行が1.68～2.66m、梁行が3.16mである。

柱穴e(SP053)・f(SP052)・g(SP051)からは土師器片が出土しているが、小片のため年代を特定することはできていない。

土坑

SK002(第78図)

調査区の中央で検出した土坑である。平面形状は東西に伸びた隅丸長方形を呈し、長軸1.8m、短軸0.9m、検出面からの深度は0.15mを測る。堆積土層は暗茶褐色土が大半を占めており、上面に黒褐色砂質土がまばらに堆積している。

遺構からは土師器片や須恵器片が出土しており、15～16世紀代と考えられる。

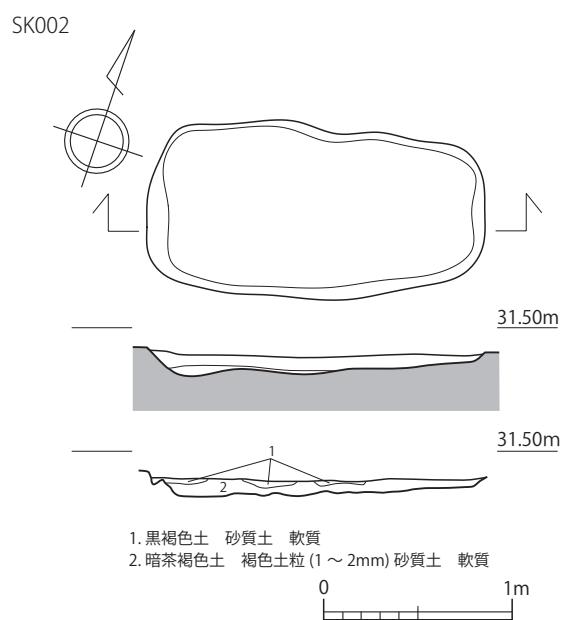
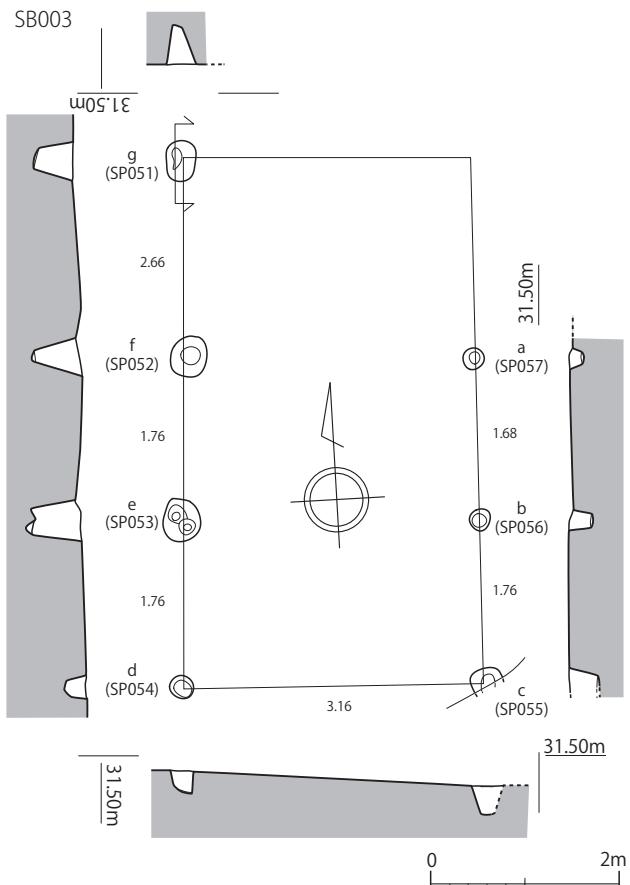
SK004(第79図)

調査区の南側で検出した土坑である。平面形状は東西に伸びた不整楕円形を呈し、長軸7.2m、短軸3.5m、検出面からの深度は0.7mを測る。断面形状は舟底形になっている。堆積土層は4層からなり、内、下層からの3層には褐色土のブロック土が混在する。

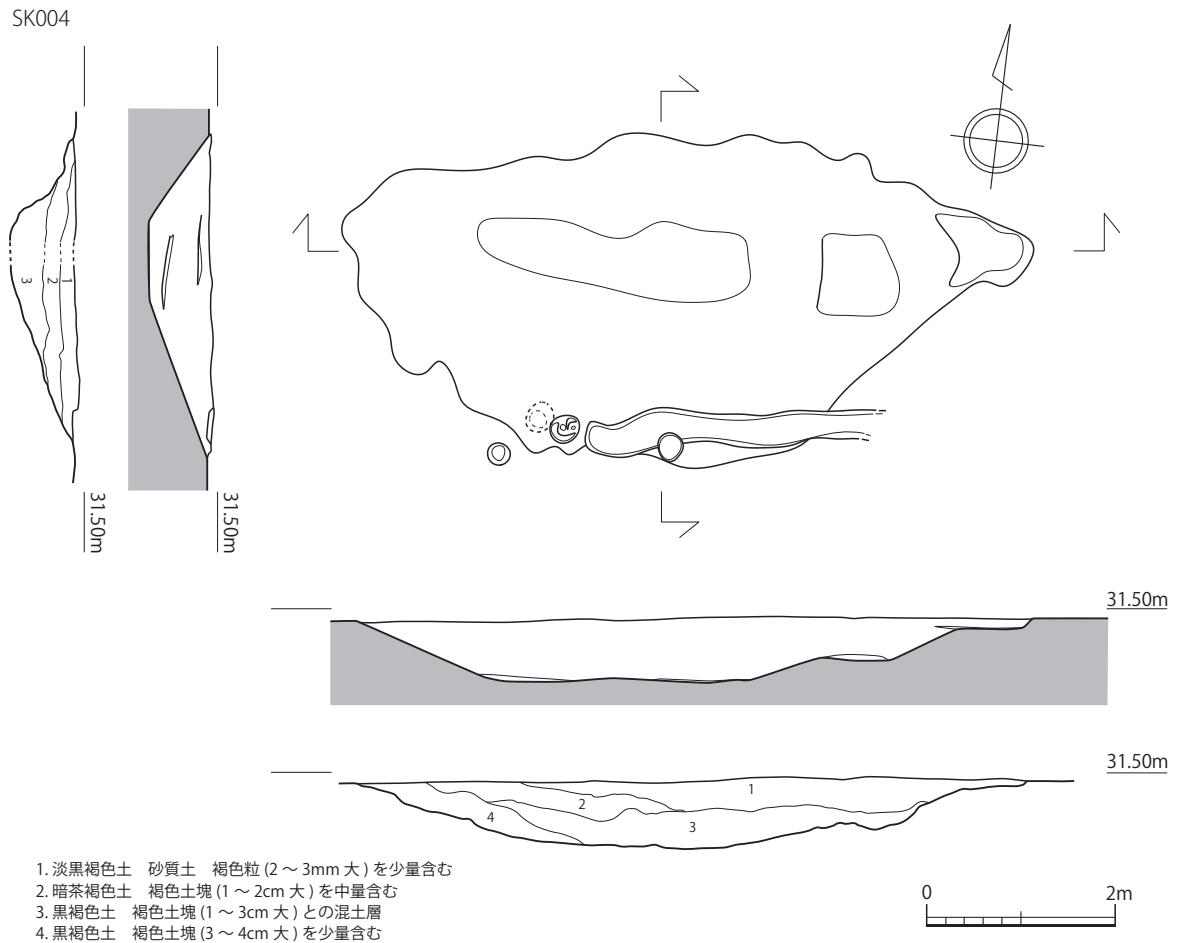
遺構からは龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗片、土師器小皿A、瓦質土器羽釜等が出土しており、遺構の埋没年代は15世紀後半頃になると考えられる。

SK008(第79図)

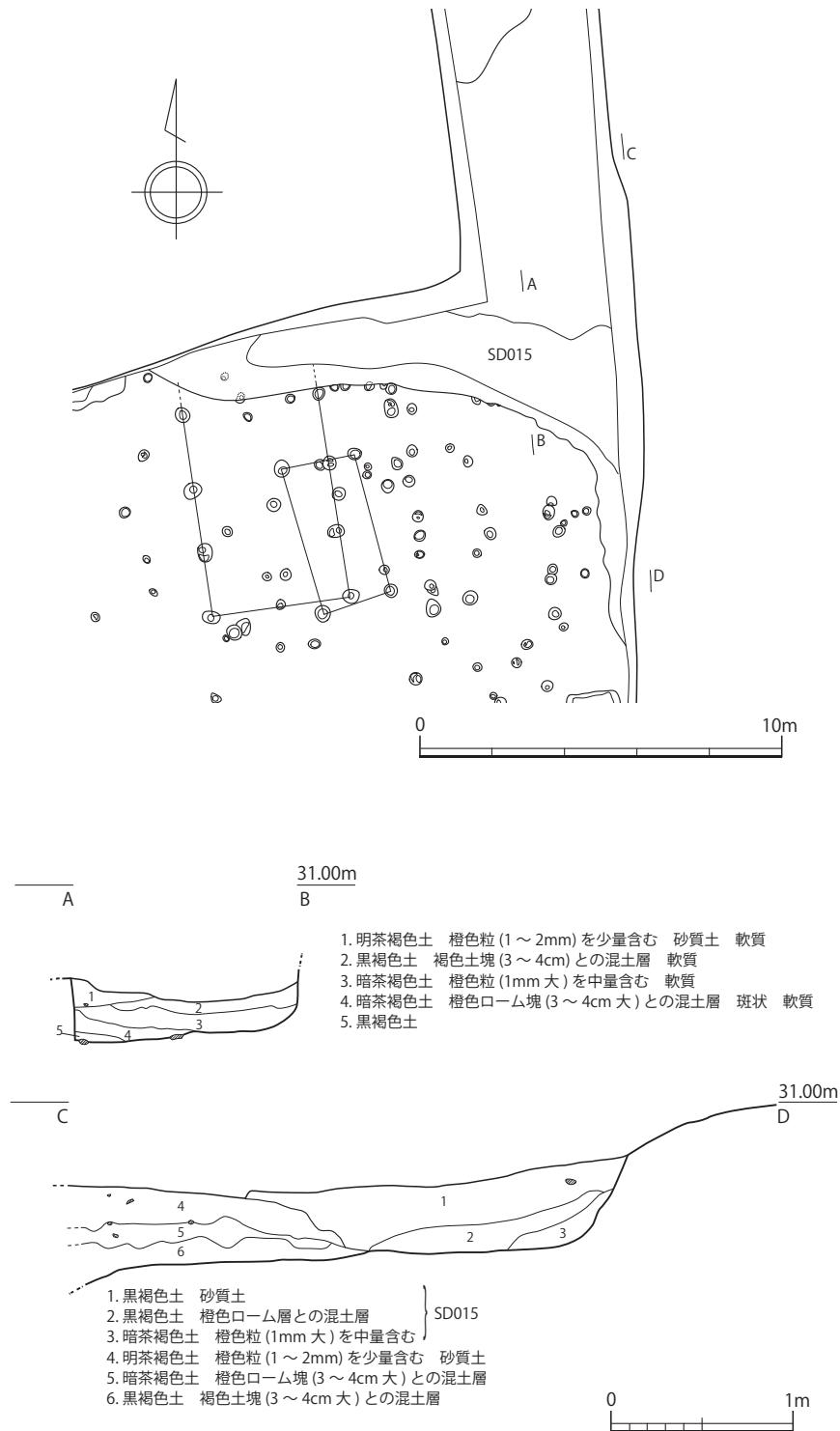
調査区の南西側で検出した土坑である。切り合い関係は、風倒木跡と考えられる地層横転遺構(S003)



第78図 SB003・SK002遺構実測図(1/80・1/40)



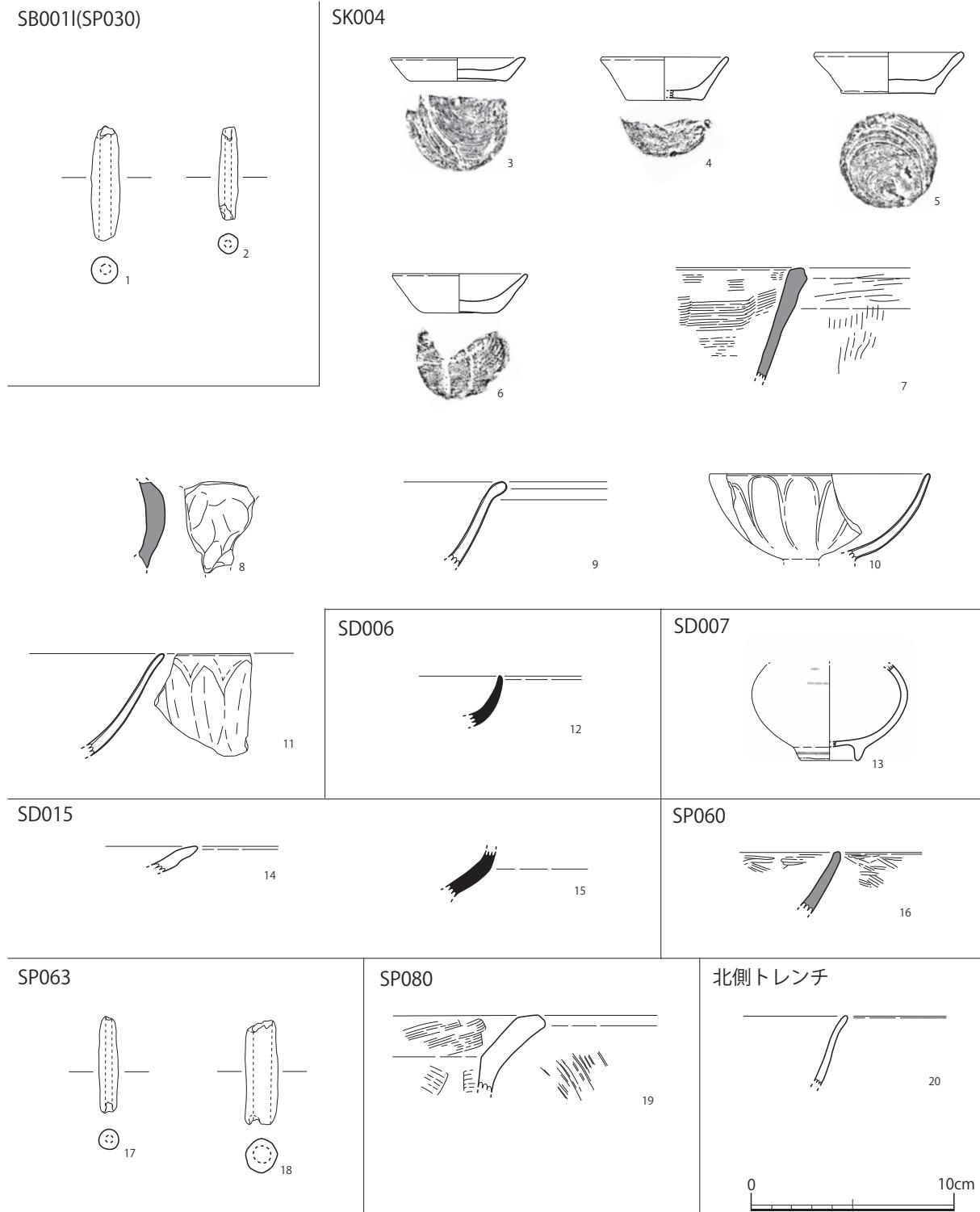
第79図 SK004・SK008・SK012遺構実測図(1/80・1/40)



第80図 SD015 遺構実測図(1/200・1/40)

の東側と、SO20の南を切って掘削されている。平面形状は東西に延びた不整橢円形を呈し、長軸2.1m、短軸0.82m、検出面からの深度は0.2mを測る。断面形状は逆台形をなす。土層は黒褐色砂質土の単一層で人為的に埋めた堆積と考えられる。

遺構からは土師質土器の鍋もしくは甕の一部と考えられる破片が出土している。



第 81 図 第 64 次調査区出土遺物実測図 (1/3)

SK012(第79図)

調査区の東側で検出した土坑である。SB003 北東の柱穴と切り合いが認められる。形状は東西に延びた不整橢円形を呈し、長軸 1.46m、短軸 0.72m、検出面からの深度は 0.36m を測る。断面形状は逆台形をなす。土層は橙色ローム塊が混入した黒褐色土と、暗茶褐色土の 2 層である。

遺構からは瓦質土器の鍋、土師質土器の鍋、青磁碗片等が 1 層から出土している。遺構の時期は中世であると考えられる。

溝状遺構**SD006・SD007(第76図)**

調査区の北側において、東西方向に延びる 2 条の溝状遺構を検出した。2 条が平行して掘削されており、幅が SD006 が約 1.0m、SD007 が約 0.8m 程である。

SD006 からは国産陶器の仏飯器、SD007 からは 18 世紀中頃から後半の肥前産の油壺が出土しており、SD006・SD007 ともにこの年代に近似するものと考えられる。

SD015(第80図)

調査区の東壁に接して検出した、東西方向に延びる溝状遺構である。調査区の途中で南側へと屈曲し、それぞれ調査区外に延びている。掘り下げ範囲は西から東側に向かって途中で南側に屈曲し、調査区外に延びている。土層観察により、溝の幅は約 2.0m、検出面からの深度は 0.5m 前後を測る。土層の観察から滯水の痕跡は認められず、埋土は南から北に向かって斜堆積している。埋土の状態から溝とは考えられず、地割りの掘り下げや道路状遺構であった可能性も考えられる。

溝内からは土師器皿 C や瀬戸産天目碗の破片が出土しており、遺構の時期は 16 世紀代と考えられる。

3. 小結

今回の調査では、15 世紀から 16 世紀代の遺構・遺物を確認することができた。掘立柱建物跡は SB001 において、東側に庇を設けた建物であるが、他の 2 棟の建物とは方位が異なる事からこの調査区内では単体で建てられていたものと考えられる。また、周辺部に見られる SD015 の溝とも切り合っており、溝によって区画された状況にもない。また、SK002・SK008・SK012 の長土坑については、いずれも中世の遺物を含んでいるが、遺物を埋納した状況でないため、土壙墓と現段階で判断する事はできない。

なお、SD015 は、東側においては隣接する第 66 次調査地点の溝状遺構 SD002 と同一遺構と考えられる。このため、SD015 は調査区の東側で大きく南側へ屈曲し、そのまま南に向かって延びていく。一方、西側は、第 79 次調査地点の拡張区(79-2 次調査地点)へと繋がっていくが、西側においては次第に溝が途切れた状況となっている。

(10) 横尾遺跡第 65 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 65 次調査地点は、大分市大字横尾王子原に所在する。本調査地点の西側には第 81 次調査地点・第 79 次調査地点、南側には第 64 次調査地点と第 66 次調査地点、東側には第 63 次調査地点がそれぞれあり、その中間に第 65 次調査地点が位置している。本調査区の調査面積は約 130 m²であり、発掘調査は平成 9 年 12 月 17 日に開始し、同年 12 月 22 日に終了した。遺構検出面の標高は 31.50m 前後を測り、地形は平坦になっている。検出した主な遺構は、中世と考えられる掘立柱建物跡 1 棟、溝状遺構 2 条、土坑 2 基などである。

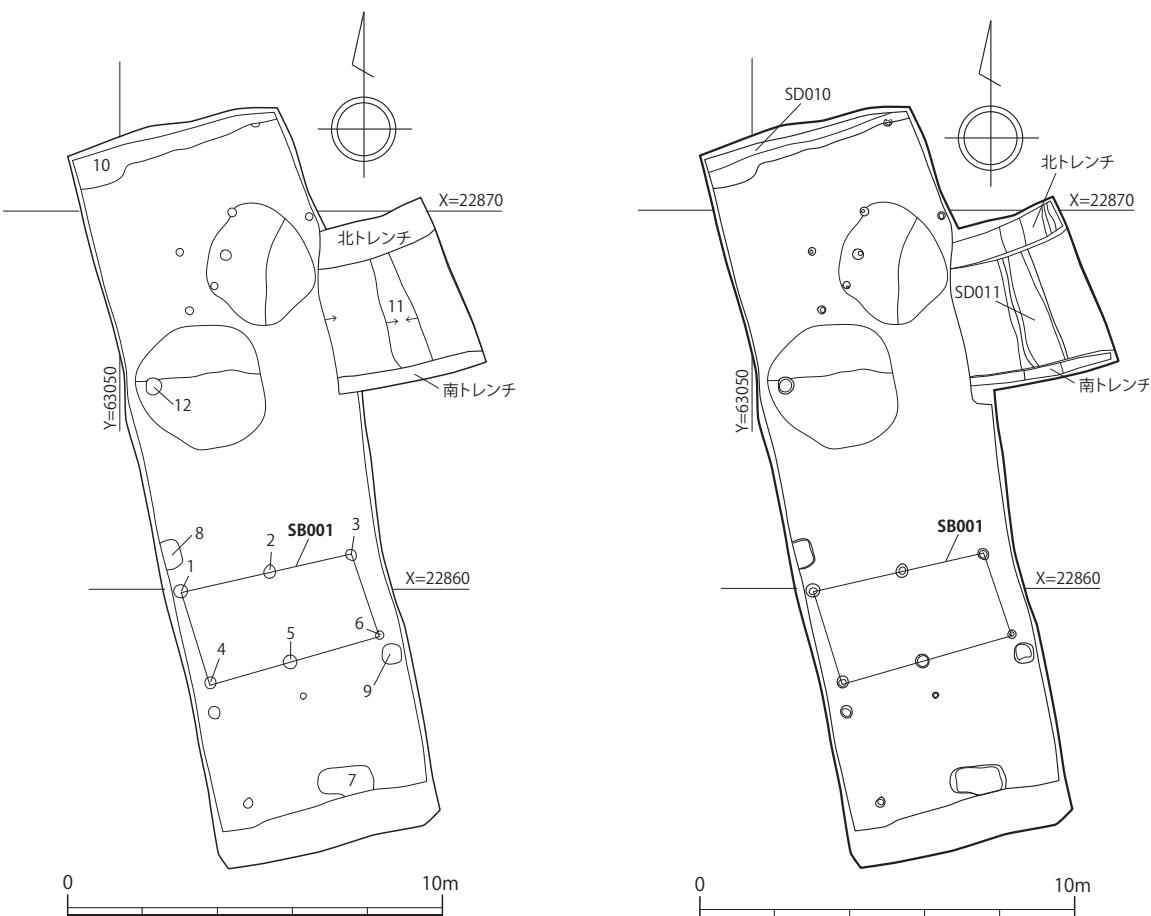
2. 遺構

掘立柱建物跡

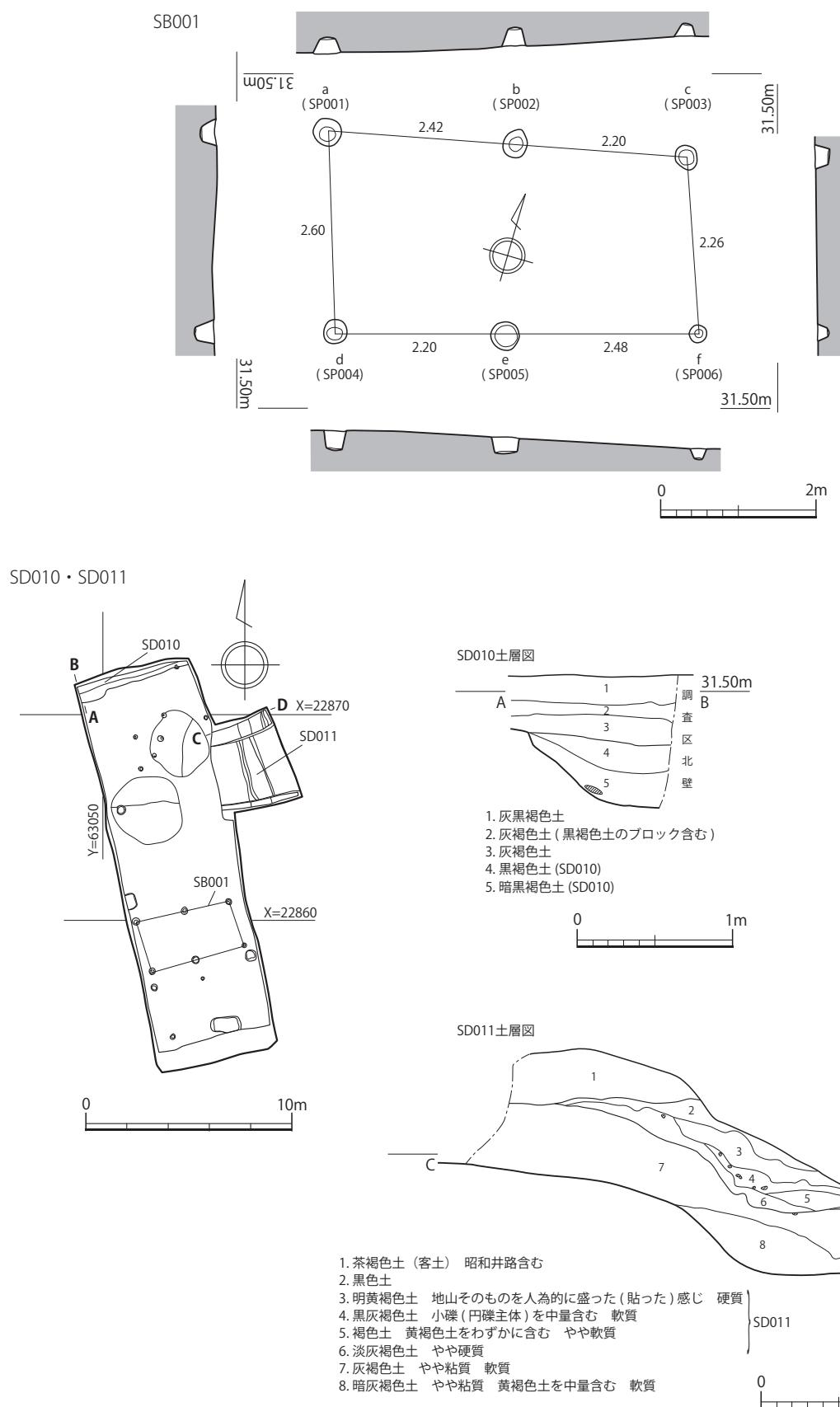
SB001(第 83 図)

調査区の南側で検出した、現状で桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積約 11 m²の掘立柱建物跡であり、桁行はさらに調査区外に展開することも想定される。建物は東西棟で、建物の主軸方向は N - 20° - W である。柱穴の平面形状は円形を呈しているものが多く、径 0.22 ~ 0.36m、検出面からの深度は 0.14 ~ 0.26m を測る。

出土遺物は総じて僅少であるが、柱穴 f(SP006) から中世の土師器坏片が出土している。



第 82 図 第 65 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/200)



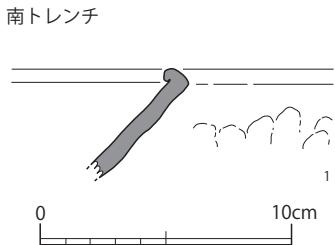
第 83 図 SB001 遺構実測図 (1/80) SD010・SD011 遺構実測図 (1/300・1/40)

溝状遺構

SD010（第83図）

現況の畦畔の直下において、調査区北壁に接して検出された東西方向の溝状遺構である。現状で検出長5.6mで東西それぞれに延び、幅は0.9m以上、検出面からの深度は0.4mを測る。

溝内から糸切り底の土師器小皿が出土していることから、中世の遺構と考えられる。また、SD010は、第63次調査において確認された第84図 第65次調査区出土遺物実測図(1/3)の東西溝(SD053)の延長線上に位置し、中世の遺物を含んでいる事や溝の方向性が同一であることから、この両遺構が繋がる可能性が高い。



SD011（第83図）

調査区東側の拡張部分で検出した南北方向に延びる溝状遺構である。南北端は調査区外に延びており、全長は不明である。現状で検出長4.4m、検出幅2.2m、検出面からの深度は0.7mを測る。SD011の下層にも古い段階の溝状遺構が確認されているが、土層観察によりさらに東側へと床面が下がっている状況が見られた。土層観察の結果、最低2回の掘り返しがおこなわれ、堆積の状況から4時期が確認される。遺構の性格としては、いずれとも流水・滯水の痕跡が認められないことや、掘削面に沿って人為的な硬質土の堆積が認められることから、道路状遺構や区画溝の性格を有することが想定される。

3. 小結

本調査は、調査面積が狭小であり、また遺構密度も低かったものの、SD010が第63次調査において確認されたL字形の区画溝に連続する可能性が指摘された。また、出土遺物も僅少ではあるが、SD010から出土した糸切り痕を有する土師器片や、調査区東側の拡張部分に設定した南側のトレーニチから出土した瓦質土器の擂鉢片などから、周辺部に見られる中世の掘立柱建物跡や溝状遺構との関連性が指摘できる。

(11) 横尾遺跡第 66 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 66 次調査地点は、大分市大字横尾王子原に所在する。本調査地点の西側には第 64 次調査区があり、掘立柱建物跡 3 棟、溝状遺構 5 条のほか、土坑やピット等が検出されている。本調査区の調査面積は 200 m² であり、発掘調査は平成 10 年 1 月 20 日に開始し、同年 2 月 2 日に終了した。遺構検出面の標高は調査区北端で 30.50m 前後、南端で 30.80m 前後を測る。検出した主な遺構は、近世の溝状遺構 5 条、道路状遺構 1 条、土坑 2 基、ピット 1 基である。溝状遺構は SF001 を中心にほぼ平行して検出された。

2. 遺構

溝状遺構

SD002 (第 86・87 図)

調査区の南西隅で検出した、SF001 と並走して南北に延びる溝状遺構である。

溝内から出土した遺物は土師器片が 1 点のみだが、SF001 よりも先に構築された溝で第 64 次調査地点で検出された溝状遺構 SD015 と繋がる可能性が高いことから、16 世紀代の遺構と考えられる。

SD003 (第 86 図)

SF001 の東側で検出した、SF001 と並走して南北に延びる溝状遺構である。南端は調査区外へと延びており、全長は不明である。幅 0.5m 前後、検出面からの深度 0.08m と浅い溝であることから、側溝としての機能を有していたのではないかと想定される。床面からは 0.15 ~ 0.20m の浅い連続した掘削痕が認められた。

溝内からは土師器片や唐津産陶器皿片が数点出土している。

道路状遺構

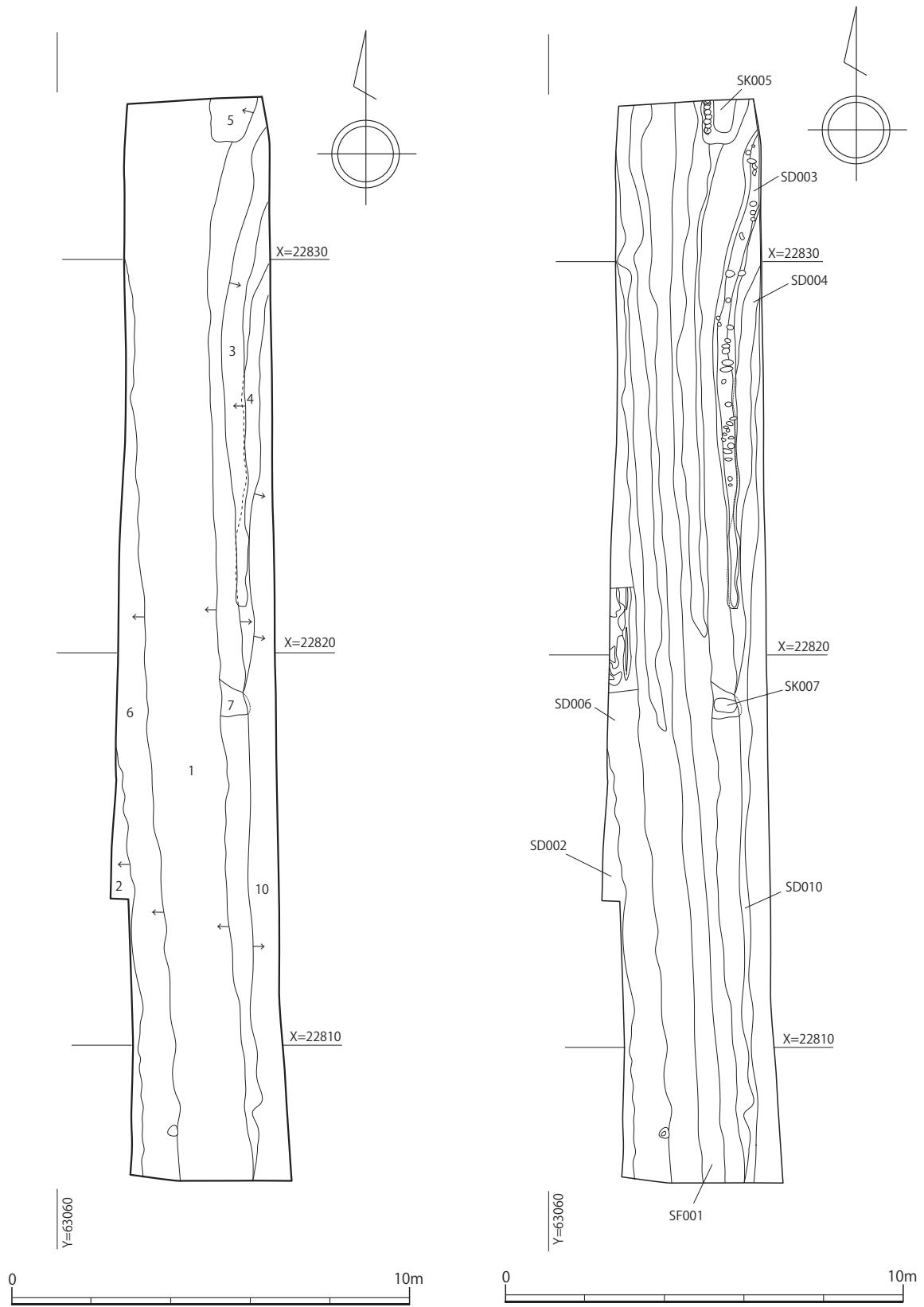
SF001 (第 86・87 図)

調査区の中央で検出した南北に延びる道路状遺構である。南北端は調査区外へと延びており、全長は不明である。現状で検出長 27.2m、幅 2.0m、検出面からの最大深度は 0.65m を測る。埋土は床面直上に黒褐色の軟質の土を埋め、その上面に拳大の石を敷いた上に黄茶色の地山ローム土を 0.15 ~ 0.20m の厚さで貼っている。また、流水の痕跡が認められることや、石敷きが見られることから、道路としての性格が考えられる。

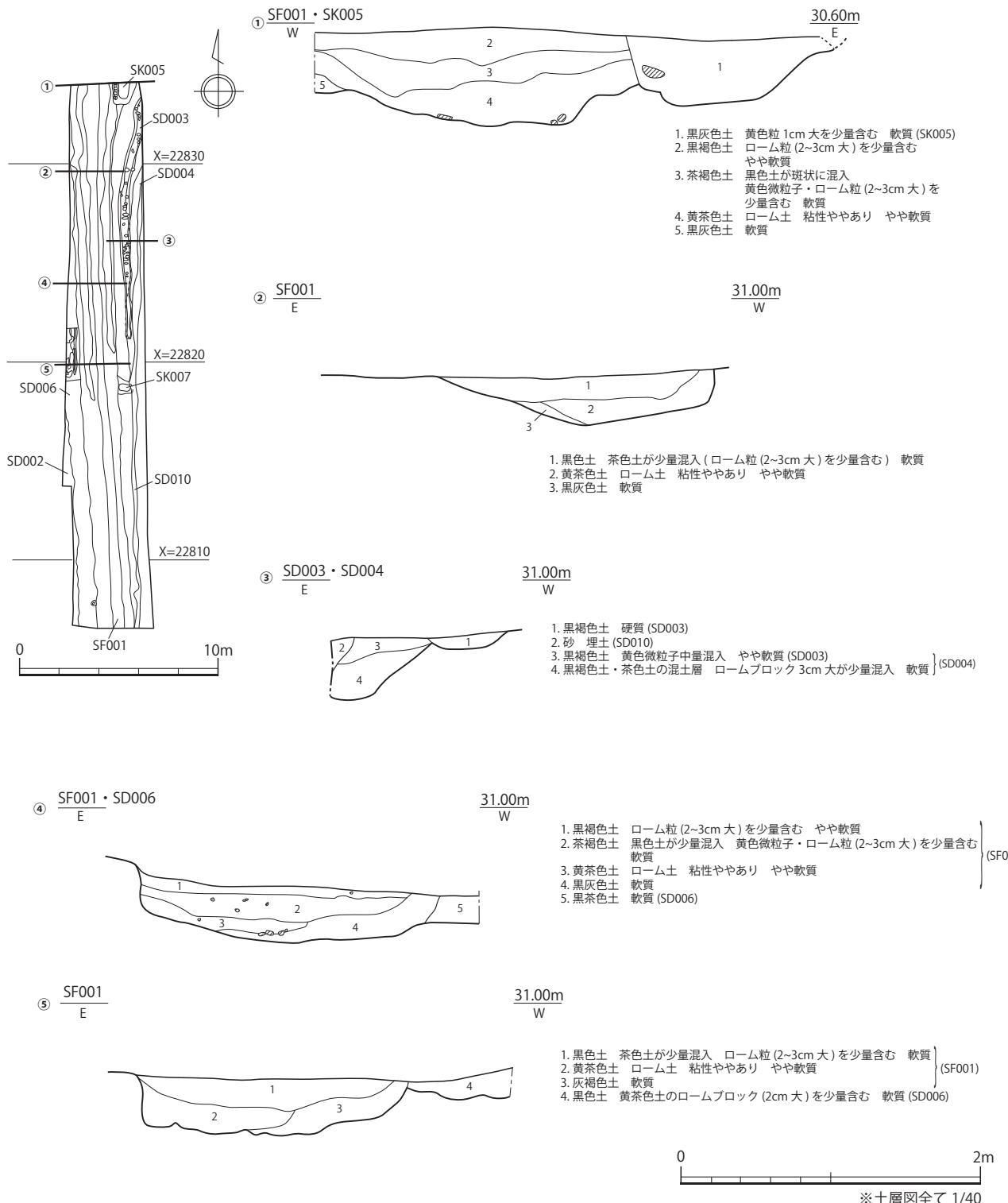
遺物は、備前産陶器の擂鉢片、土錘、胎土目を持つ唐津産陶器皿片、染付皿 B2 群の磁器皿片などが出土していることから、16 世紀末の遺構と考えられるが、最終埋没時期は寛永通寶（新寛永 3 期以降 /1697 ~ ）などから 17 世紀末以降と思われる。

3. 小結

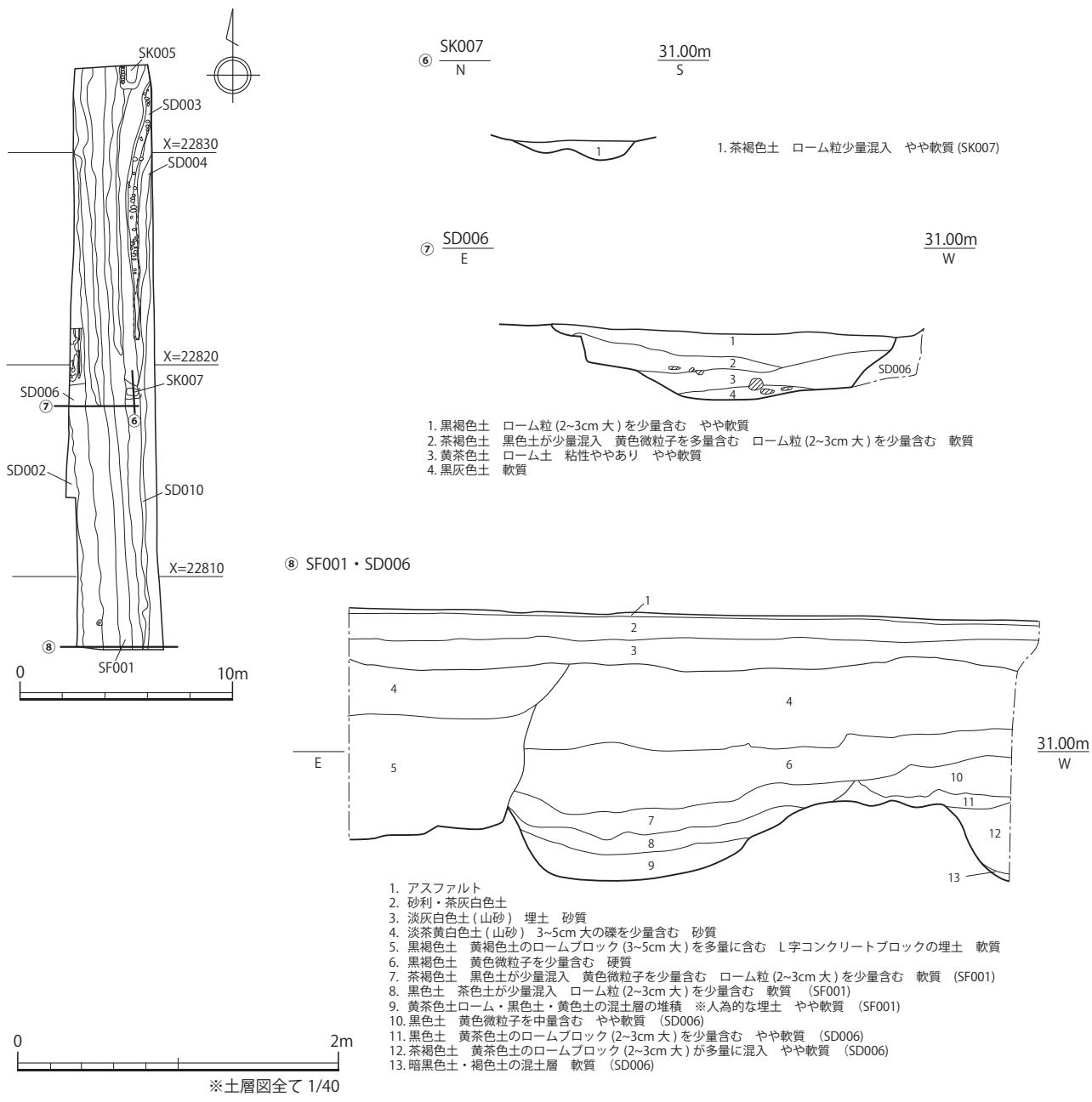
本調査では、調査区の大半が道路状遺構とこれに伴う溝状遺構で占められている。SF001 は南から北にかけて 1° の下り勾配であり、調査区北東隅で遺構ラインが東側に広がっていることから、道の分岐点になるものと考えられる。その延長線上には第 65 次調査で確認された SD011 と重なっており、これらが同一の遺構である可能性が高い。この台地上において中世末～近世にかけては、地面を溝状に掘り込んだ道がかなり大規模に作られており、その後近年に至るまで同一場所が道路として踏襲されていることが看取できる。



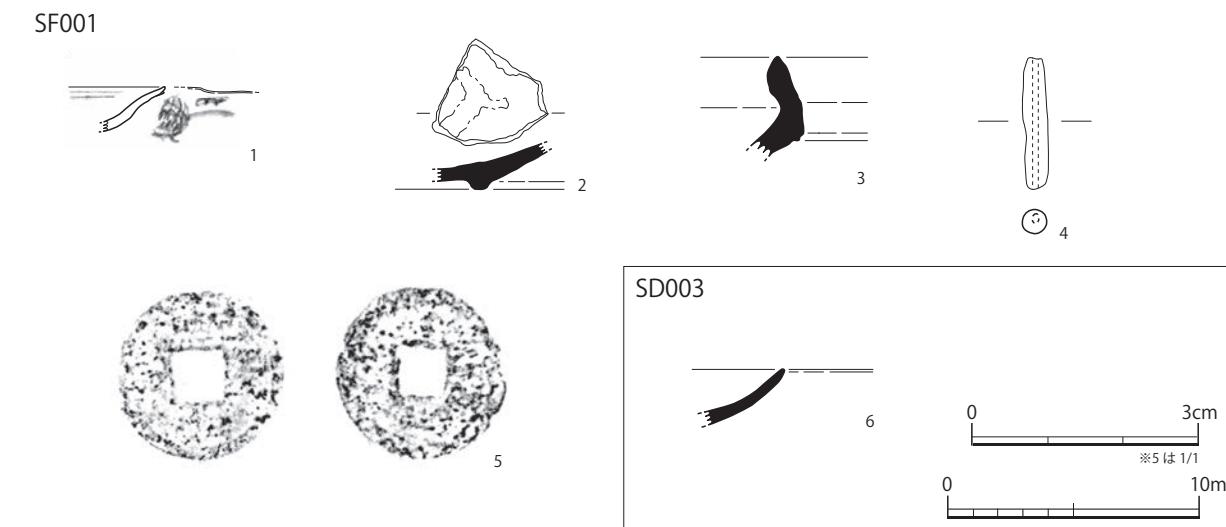
第85図 第66次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/150)



第 86 図 SF001・SD003～SD006 遺構実測図 (1/300・1/40)



第 87 図 SF001・SD006・SK007 遺構実測図 (1/300・1/40)



第 88 図 第 66 次調査区出土遺物実測図 (1/1 • 1/3)

(12) 横尾遺跡第 74 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 74 次調査地点は、大分市大字横尾王子原に所在する。調査区は南の A 区と北の B 区に分かれている。B 区の東側には第 83 次調査地点、A 区の東側には第 79 次調査地点が位置している。本調査区の調査面積は 1,010 ㎡であり、発掘調査は平成 11 年 2 月 16 日に開始し、同年 3 月 31 日に終了した。遺構検出面の標高は 31.00m 前後を測る。検出した主な遺構は、溝状遺構 9 条、性格不明遺構 2 基、地層横転遺構 6 基、ピット多数である。

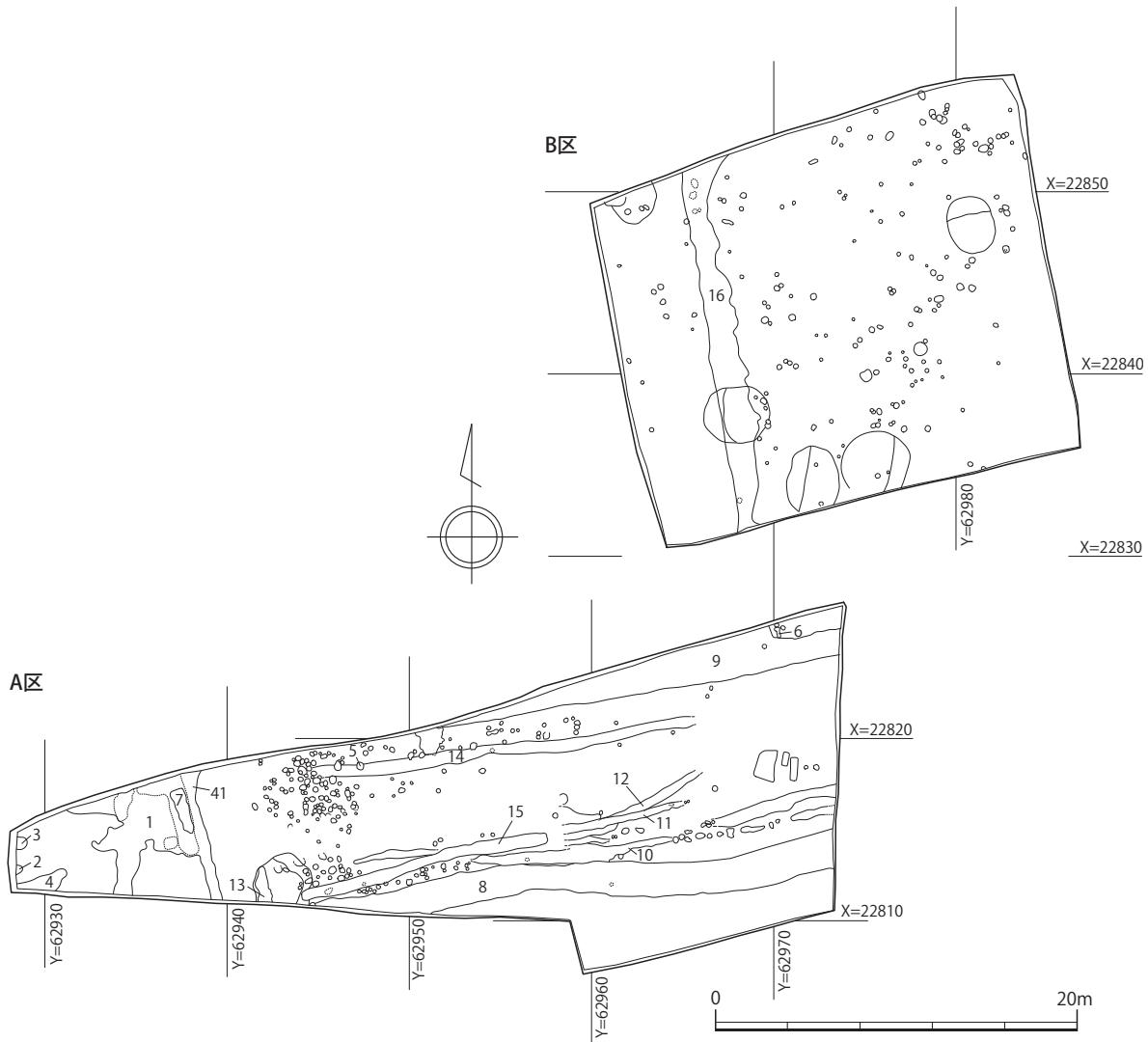
2. 遺構

溝状遺構

SD008 (第 92 図)

A 区の南側で検出された東西方向に延びる溝状遺構である。東西端は調査区外に延びており、全長は不明である。現状で長さ 28.8m、幅 1.8m、検出面からの深度は 0.5m を測る。断面形状は逆台形をなす。床面に硬化面がないものの最下層に流水の状況等は認められない。

遺物は土師器坏片が出土し、近世遺物を含まないこと、SD015 と一連の遺構である SD010 を切って作られて



第 89 図 第 74 次調査区遺構配置図 (1/400)

いることから、15～16世紀の範疇に比定される。

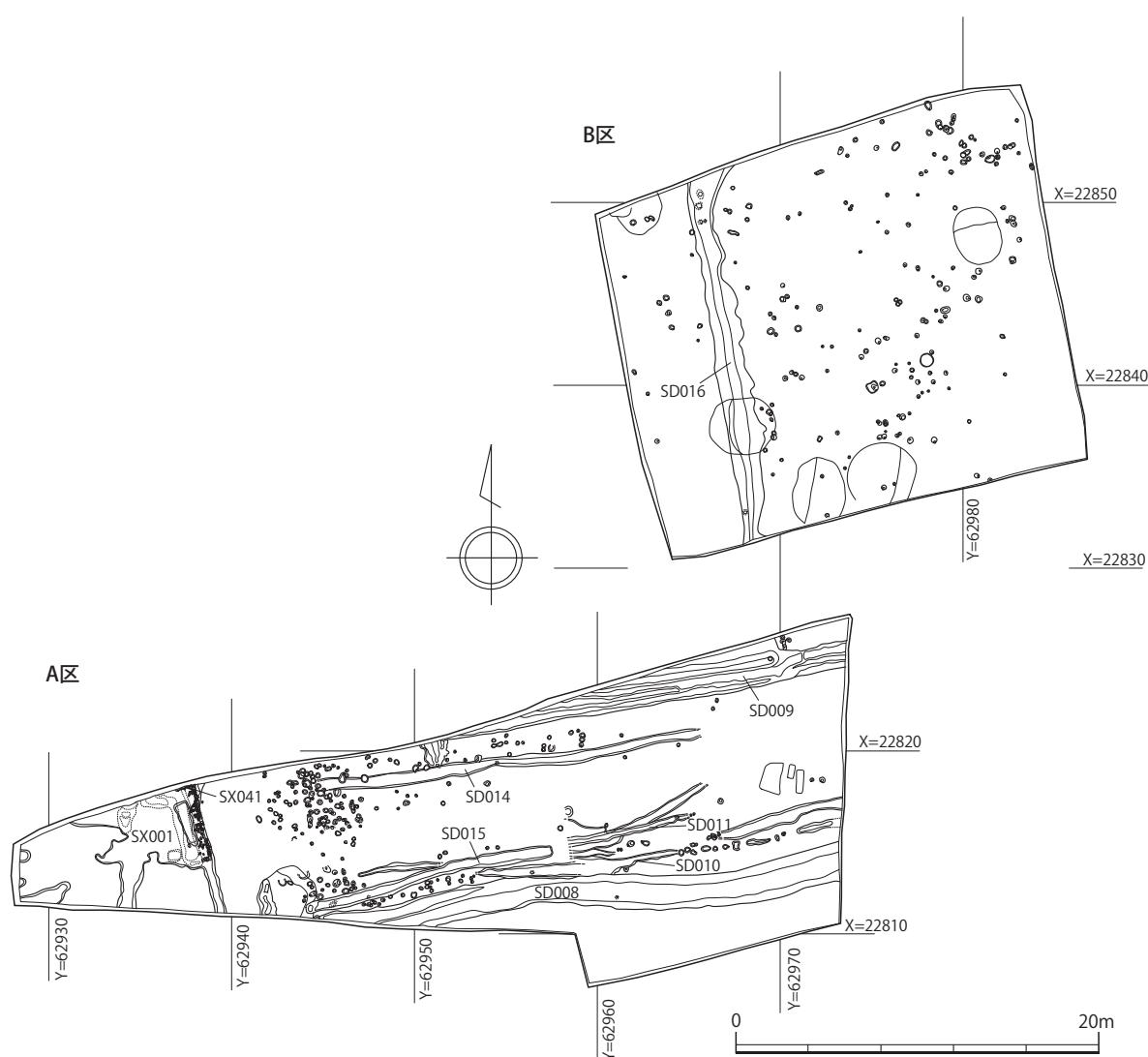
SD009（第91図）

A区の調査区北壁に接して検出された東西方向に延びる溝状遺構である。東西端は調査区外へと延びており、一部北側のB区へT字状に分岐している。現状で長さ24.0m、幅2.0m、検出面からの深度は0.5mを測る。土層観察により、掘り返しが1度認められる。

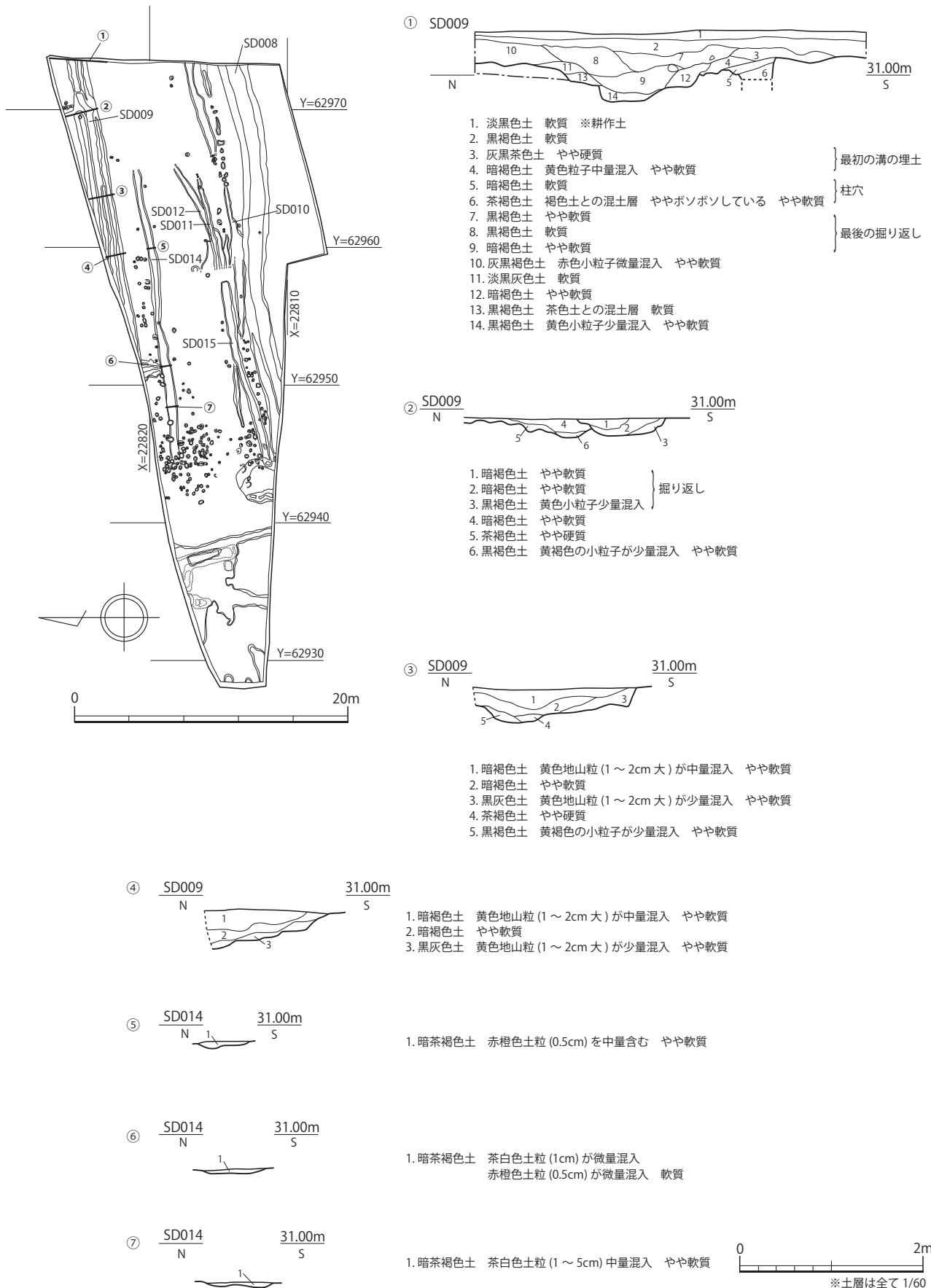
遺物は肥前産陶胎染付碗や磁器の小碗などが出土しており、最終埋没時期は18世紀代と考えられる。

SD010（第92図）

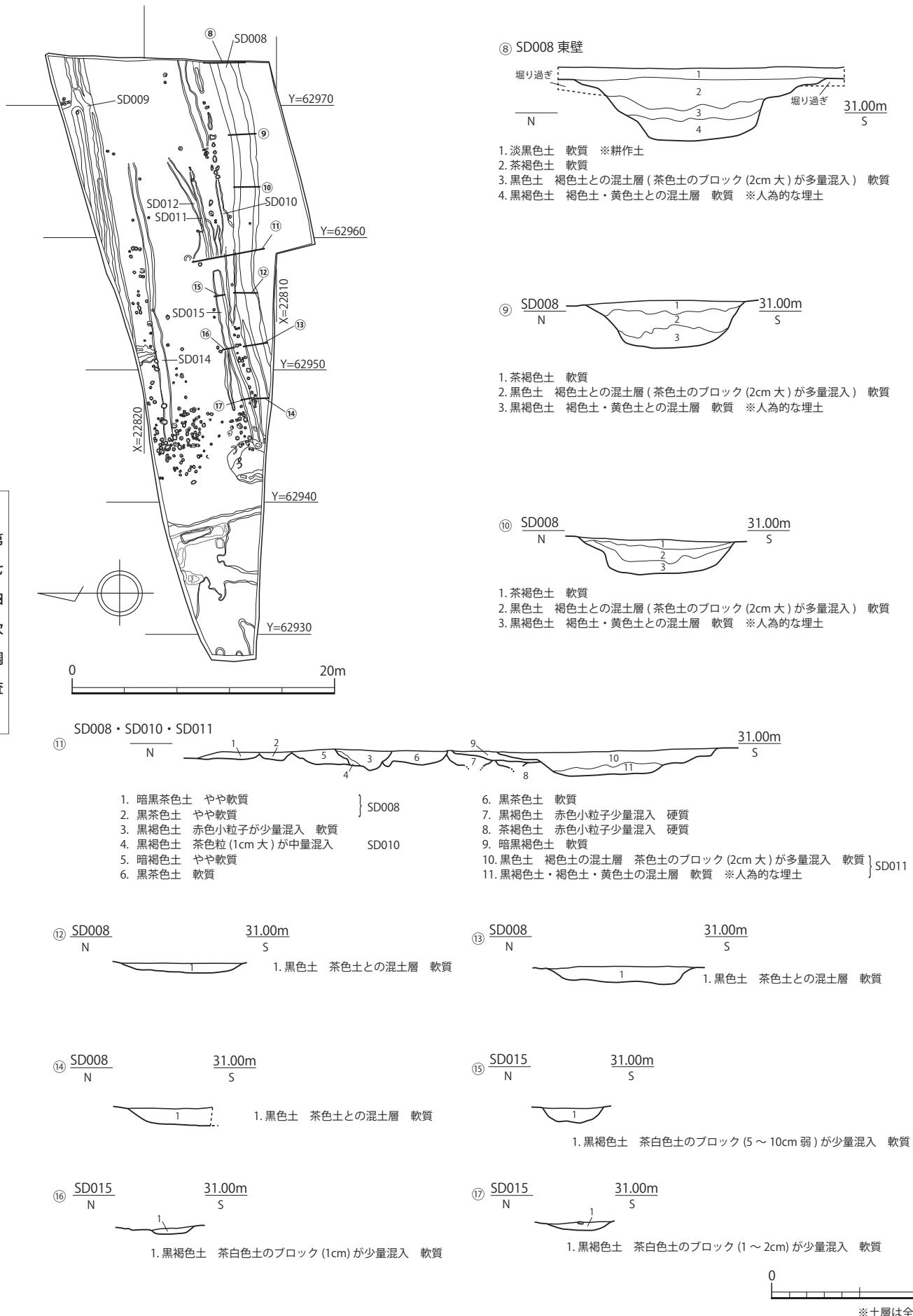
A区の中央南東側で検出された東西方向に延びる溝状遺構である。長さ20.8m、幅0.8m、検出面からの深度は0.4mを測る。遺構南側をSD008に切られ、西側を交差する形でSD015に切られている。SD010はSD011やSD015と類似する性格を有する遺構と考えられる。年代的にも近似する事が想定され、SD015から土師器の小皿が出土している事から、15世紀代の遺構と考えられる。



第90図 第74次調査区全体遺構図(1/400)



第91図 SD009・SD014 遺構実測図 (1/400・1/60)



第92図 SD008・SD010・SD011・SD015遺構実測図(1/400・1/60)

SD011 (第 92 図)

A 区の中央東側で検出された東西方向に延びる溝状遺構である。長さ 5.2m、幅 0.6m を測る。調査区中央では、SD011 が SD015 に切られている。

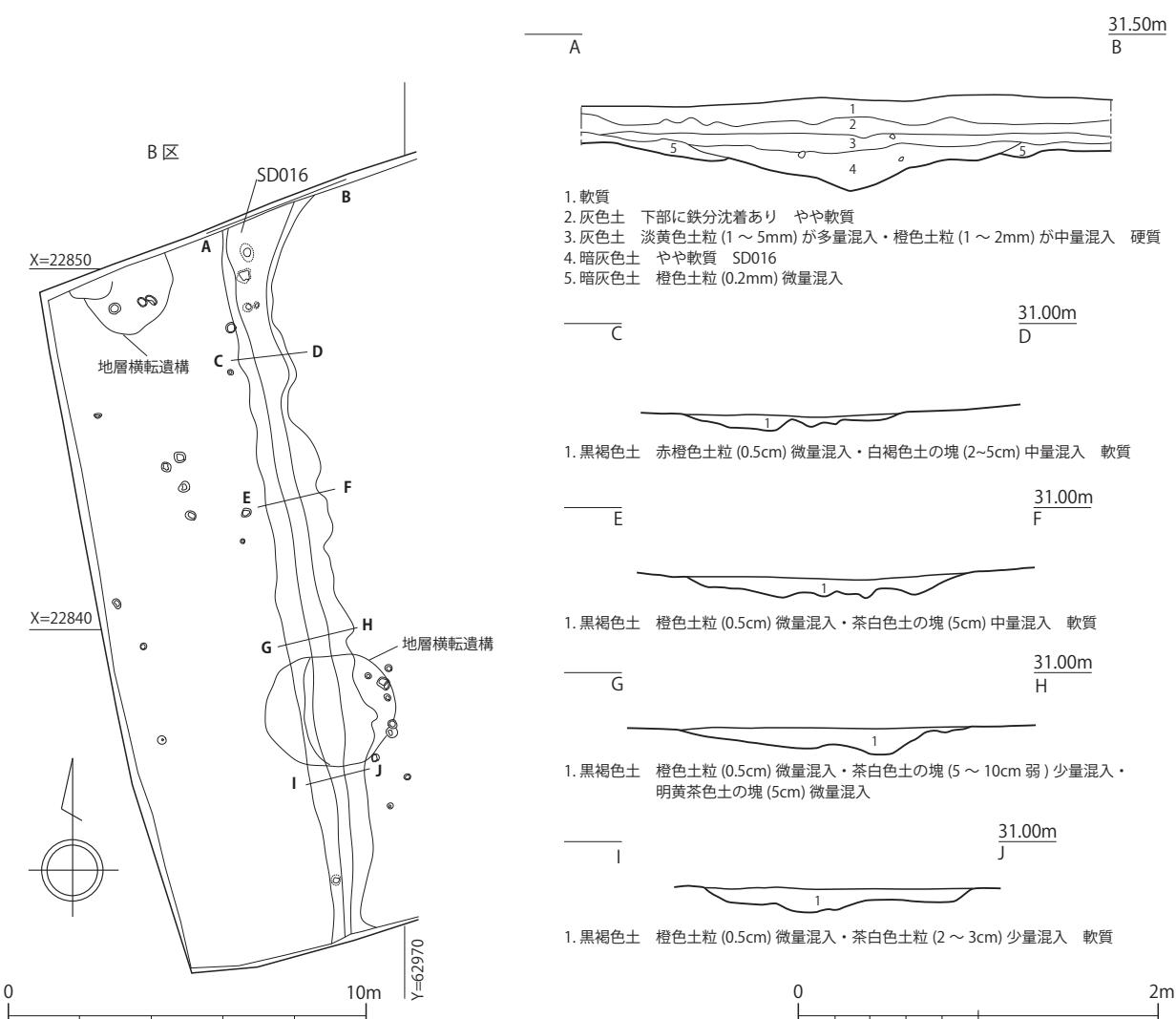
SD014 (第 91 図)

A 区の北側で検出された東西方向に延びる溝状遺構である。長さ 21.2m、幅 0.8m を測る。遺構西端ではピットが集中しており、この内の数基のピットによって切られている。SD014 と平行して南側に 5 ~ 6m の位置に同じく東西方向に延びる溝状遺構 (SD010・SD011・SD015) が確認され、方向と規模が同じであることから、関連する遺構である可能性がある。

SD015 (第 92 図)

A 区の南側で検出された東西方向に延びる溝状遺構である。長さ 13.8m、幅 0.8m を測る。交差する形で SD010 を切っているほか、SD011 と方向が同一であることから、同じ性格を有する溝状遺構であると考えられる。

溝内からは 15 世紀代の土師器小皿が出土している。



第 93 図 SD016 遺構実測図 (1/200・1/40)

SD016 (第 93 図)

B 区の西側で検出した南北方向に延びる溝状遺構である。現状で長さ 20.0m、最大幅 2.0m、検出面からの最大深度 0.2m を測る。埋土は黒褐色土で、浅い溝状を呈するが、A 区で検出された溝状遺構 SD009 が北へ T 字状に分岐した延長線上にこの SD016 が存在することから、一連の遺構の可能性が考えられる。

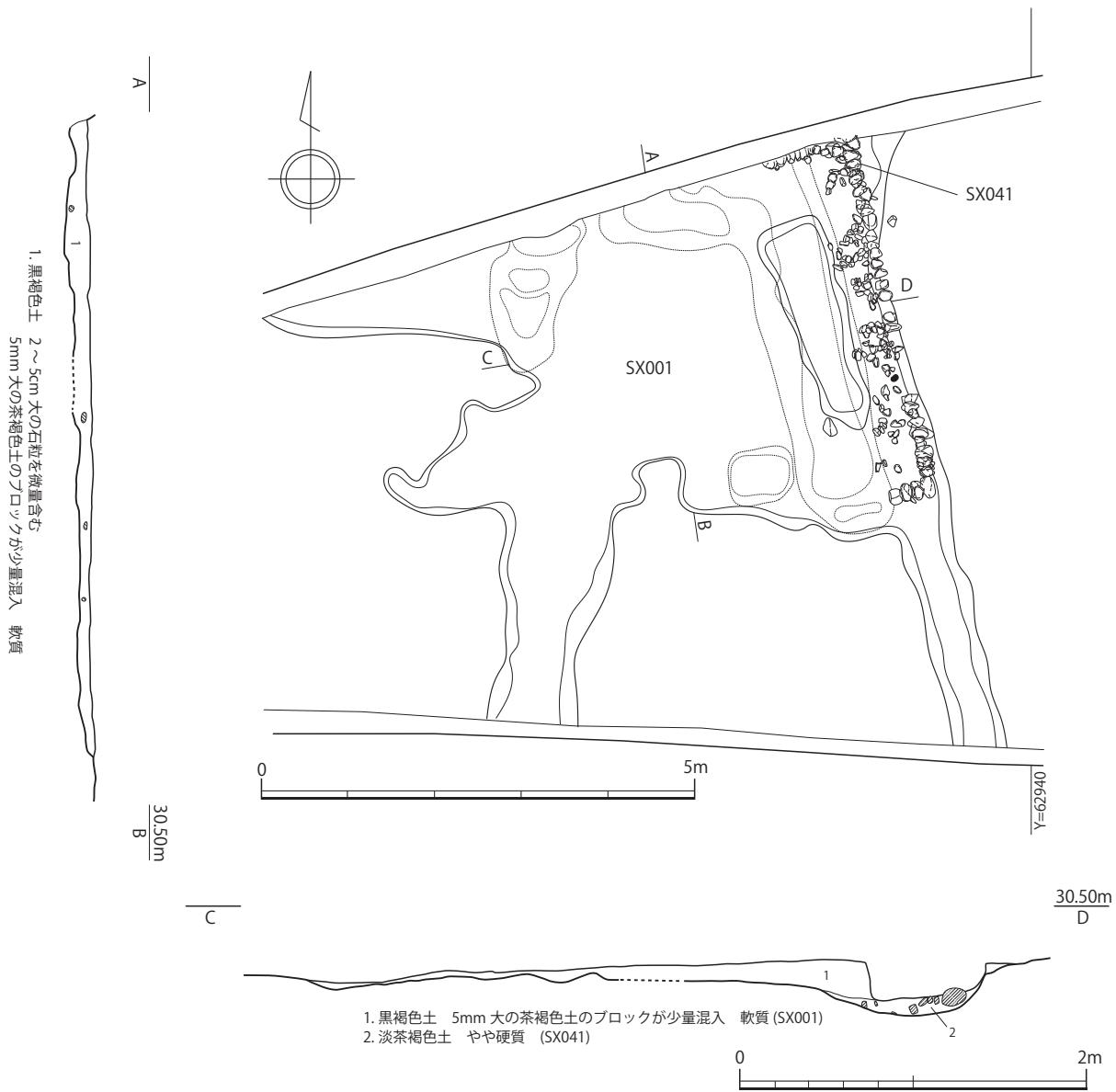
性格不明遺構**SX001 (第 94 図)**

A 区の西側で検出された不定形の遺構であり、遺構の北側及び南側の一部は調査区外へ展開する。現状で東西軸は最大で 7.6m 以上、南北軸は最大で 7.2m 以上、検出面からの最大深度は約 0.3m を測る。

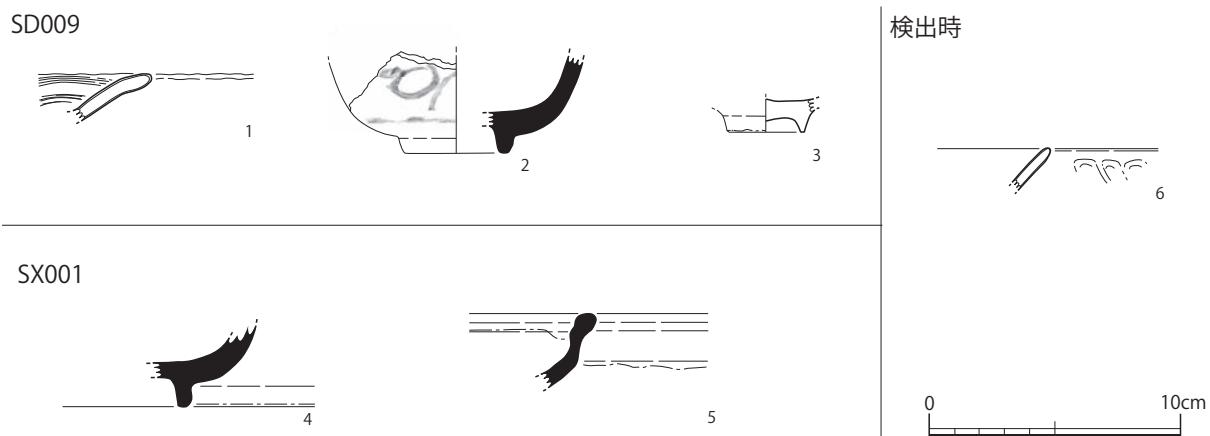
遺物は陶胎染付碗・陶器の火入れが出土しており、17 ~ 18 世紀の遺構と考えられる。

SX041 (第 94 図)

SX001 の東側に接して南北方向に延びる溝状遺構である。この溝状遺構の堀方の東に沿うように石列が検出



第 94 図 SX001・SX041 遺構実測図 (1/80・1/40)



第 95 図 第 74 次調査区出土遺物実測図 (1/3)

された。石列は挙大～人頭大の石で構成され、南北長は約 4.0m を測る。また、北端と南端部は西側に向かって L 字状に屈曲しており、屈曲部の長さは北側で 1.0m、南側で 0.4m である。SX001 との関連性を含め、性格は不明である。

3. 小結

本調査では、溝状遺構 SD009 をはじめ、9 条の溝状遺構が確認された。このうち SD010・SD011・SD014・SD015 はいずれも検出面において幅約 0.7m で東西に平行して延びている。東側は削平によりいずれも消失しているが、西側では SD014 と SD015 が 5m の間隔で平行して延び、ほぼ同じ地点で収束している。類似する構造と平行して延びる溝であり、これらが道路側溝である可能性も指摘される。SD015 からは 15 世紀代に比定される土師器小皿が出土しており、概ねこの時期に比定されよう。第 74 次調査地点の東には約半町規模の中世方形館があり、SD014 と SD015 はその方形館へと延びる遺構である可能性も考えられる。

なお、溝状遺構の他にはピットが多数検出されているものの、出土遺物は少なく、掘立柱建物跡を構成するような配置は確認できていないが、第 74 次調査地点の南に位置する第 123 次調査地点からは SD014・SD015 とほぼ同じ約 5m 間隔で南北方向に並走する 2 条の溝と多数の連続土坑で構成された道路状遺構 SF025 が検出されており、この SF025 と本調査区で検出されたピット・SD014・SD015 が関連する遺構である可能性も考えられる。

(13) 横尾遺跡第 79 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 79 次調査地点は、大分市大字横尾王子原に所在する。本調査地点の北には第 83 次調査地点・第 132 次調査地点、南には第 64 次調査地点・第 112 次調査地点、西には第 74 次調査地点が接する。調査面積は約 1,700 m²である。発掘調査は平成 12 年 6 月 5 日に開始し、同年 8 月 30 日に終了した。遺構検出面の標高は 31.00m 前後を測る。検出した主な遺構は掘立柱建物跡、溝状遺構、道路状遺構、ピット等である。

2. 遺構

掘立柱建物跡

SB100(第 98 図)

調査区の東側で検出した、桁行 4 間 × 梁行 2 間、身舎面積 32 m²程度の掘立柱建物跡である。中世の掘り込み地業跡と考えられる性格不明土坑 SX090 を切って構築されている。建物は南北棟で、建物の主軸方向は N - 9° - W である。柱穴の平面形状は円形もしくは不整橢円形を呈し、径 0.40 ~ 0.95m、検出面からの深度は 0.30 ~ 0.85m を測る。柱穴柱間は桁行が 1.76 ~ 2.44m、梁行が 1.96 ~ 2.36m である。柱穴 c からは土師器皿 C が出土しており、建物の時期は 16 世紀後半に比定される。



第 96 図 第 79 次調査区遺構配置図 (1/400)

土坑

SK070(第 99 図)

調査区の中央の北東寄りで検出した土坑である。平面形状は南北に延びた隅丸長方形を呈し、長軸 2.47m、短軸 0.72m、検出面からの深度は 0.5m を測る。断面形状は逆台形をなす。埋土は大半がブロック土を含む淡灰褐色の土層で構成されており、北側壁面には裏込土と考えられる不整合な堆積状況が認められる。遺構からは須恵器片が出土している。

SK105(第 99 図)

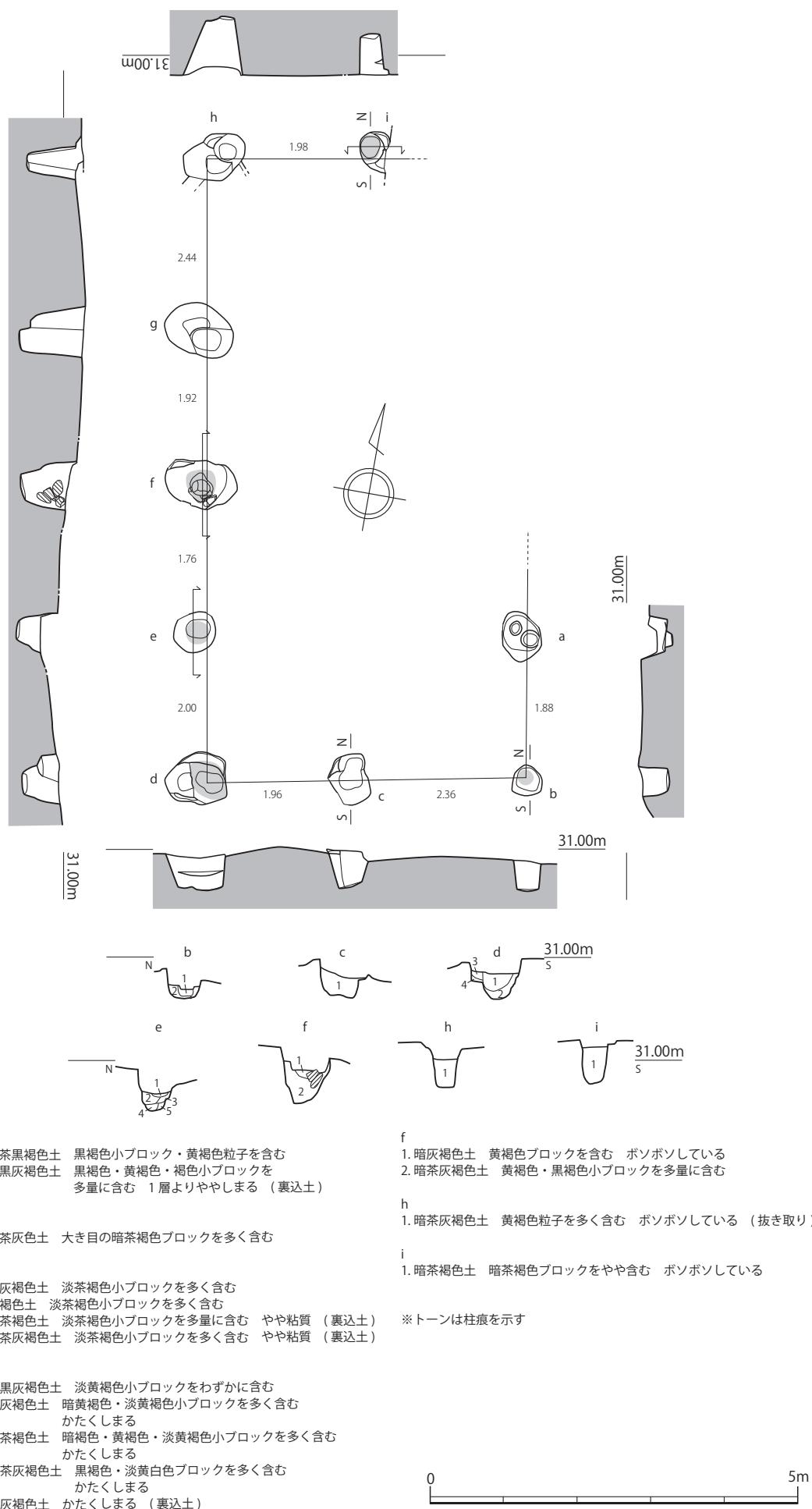
調査区の北東側で検出した土坑である。平面形状は東西に延びた隅丸長方形を呈し、長軸 0.9m、短軸 0.46m、検出面からの深度は 0.25m を測る。東西軸の断面形状は台形にオーバーハングしている。埋土は 2 層に分けられるものの、ブロック土を基調とし、人為的な埋土と判断される。遺構からは土器片が出土している。

SK125(第 100 図)

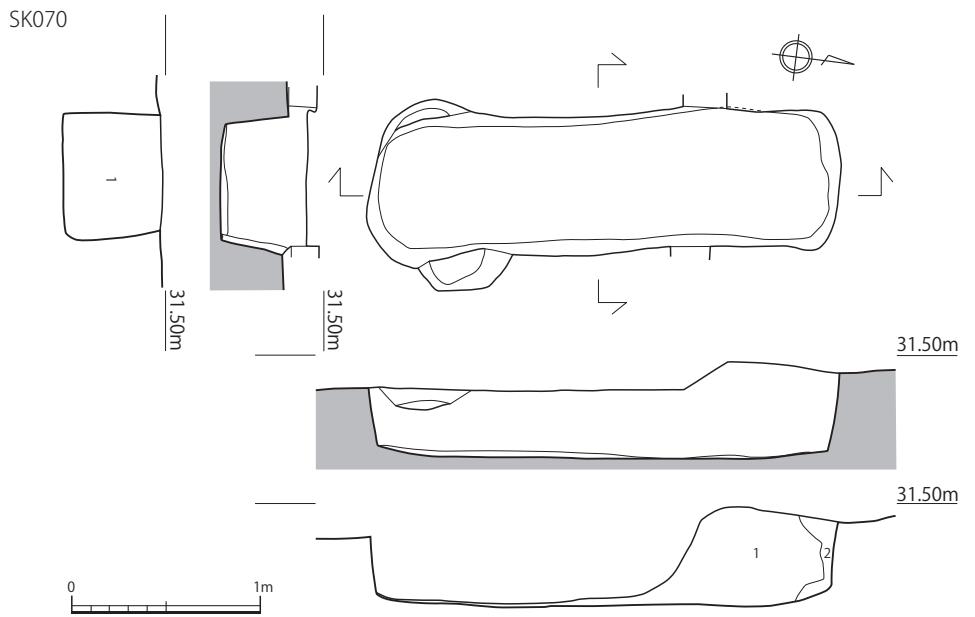
調査区の北東側で検出した土坑である。切り合い関係は、S123 に切られ、S193 を切っている。平面形状は南北に延びた隅丸長方形を呈し、長軸 3.64m、短軸 0.85m、検出面からの深度は 0.45m を測る。断面形状は逆台形になっている。土層の観察により、1・2 層は不整合な堆積状況が認められ、人為的に埋め戻された、もしく



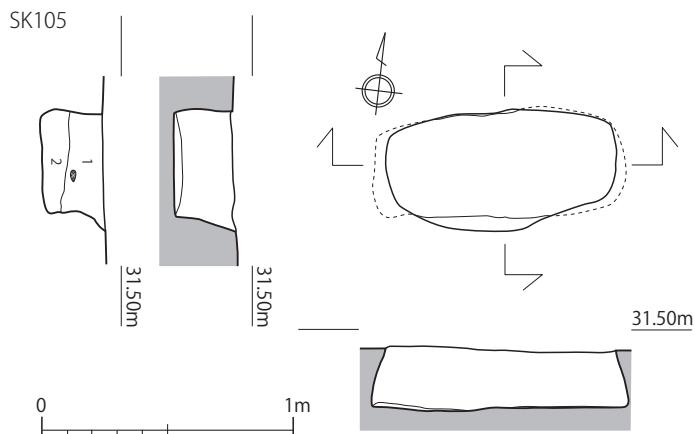
第 97 図 第 79 次調査区全体遺構図 (1/400)



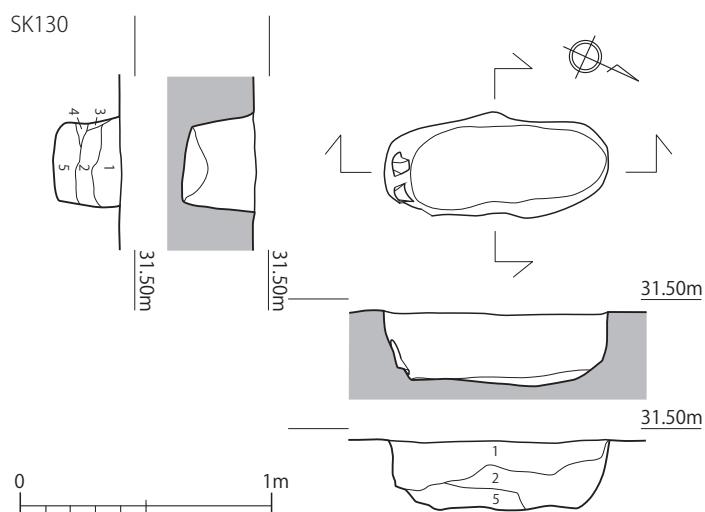
第98図 SB100 遺構実測図(1/80)



1. 淡灰褐色ブロック土 黄褐色ブロック（地山）・暗黄褐色ブロックを多量に含む 黒褐色ブロックをわずかに含む かたくしまっている
2. 淡黒灰褐色土 淡茶灰褐色・淡黄褐色ブロックを含む やや粘質（裏込土）



1. 淡黒茶褐色ブロック土 粘質を帶びている
2. 暗茶褐色ブロック土 黒灰色ブロックをわずかに含む 粘質を帶びている



1. 暗灰茶褐色ブロック土 茶褐色小ブロックを多く含む ややしまる
2. 黒茶褐色ブロック土 茶褐色小粒子を多く含む
3. 茶褐色ブロック土 黒灰褐色ブロックを含む
4. 暗褐色ブロック土 茶褐色ブロックをかなり多く含む やや粘質
5. 暗茶褐色ブロック土 黄褐色・黒褐色ブロックを多く含む ボソボソのブロック

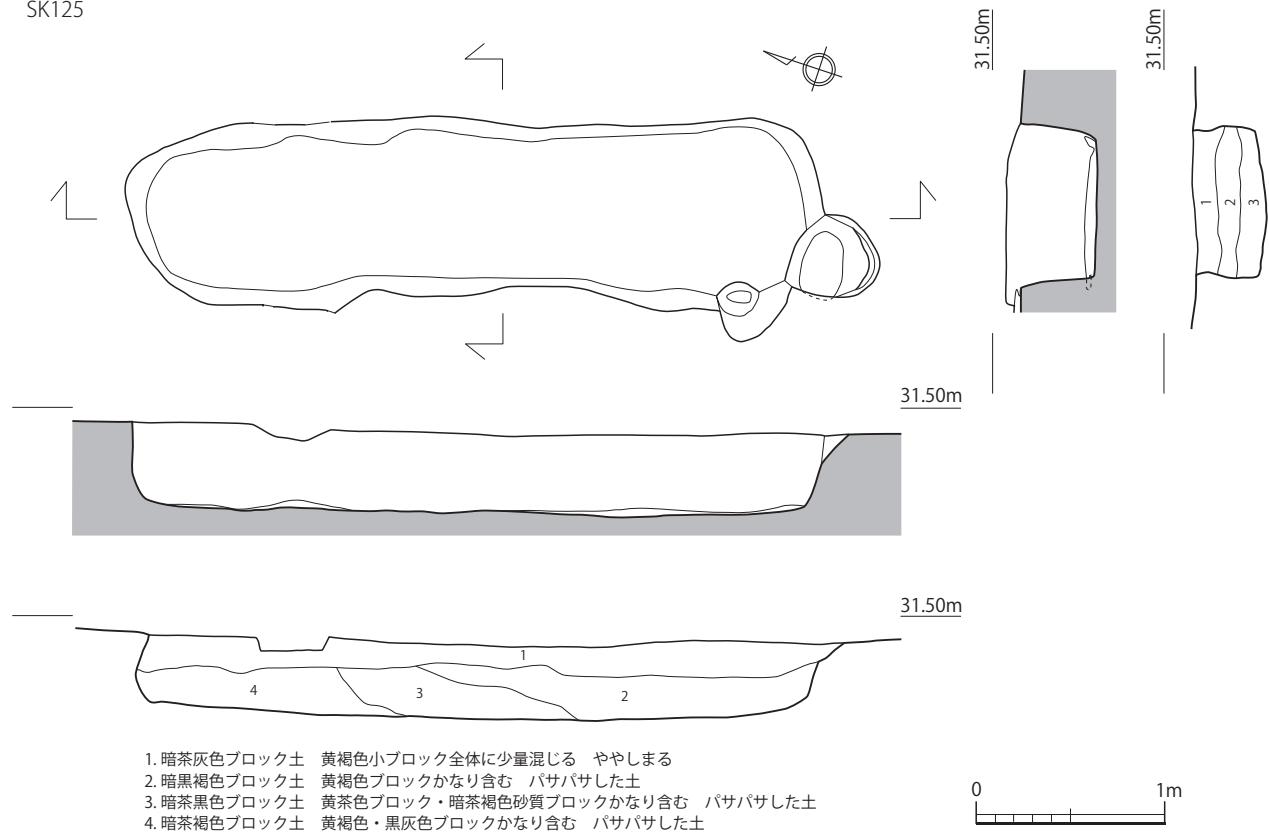
第99図 SK070・SK105・SK130 遺構実測図 (1/30・1/40)

は土坑上面に木蓋等が存在し、その崩落により埋没した可能性が指摘される。遺構からは底部糸切り離しの土師器小皿が出土している。

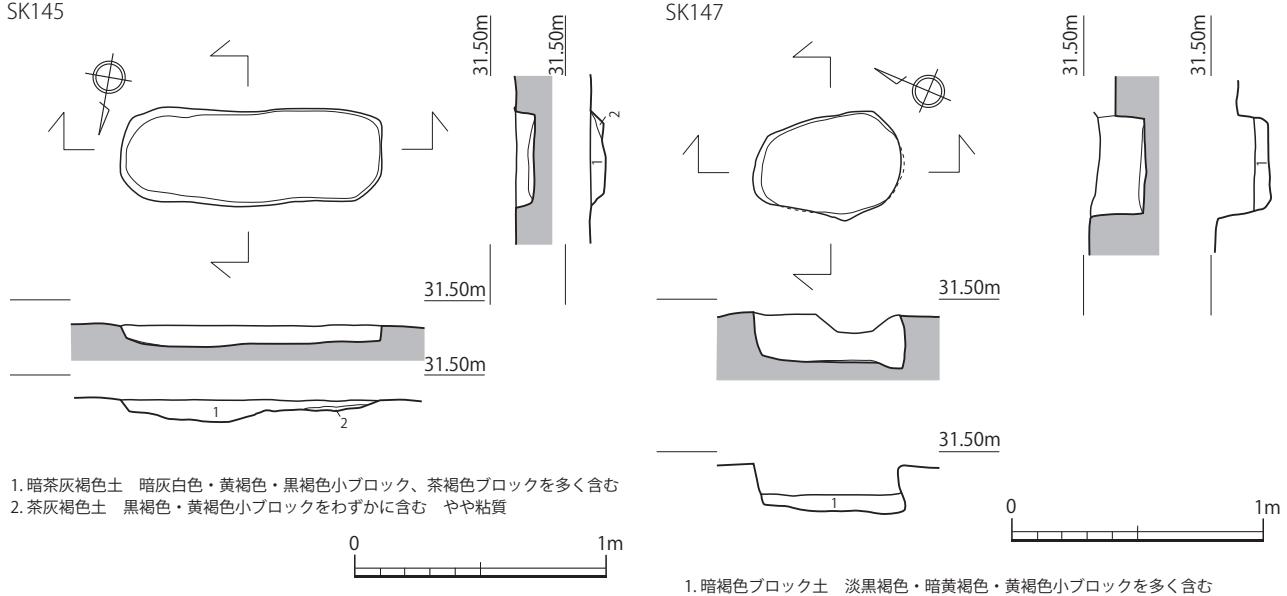
SK130(第99図)

調査区の北東側で検出した土坑である。平面形状は南北に延びた楕円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.4m、検出面からの深度は0.28mを測る。断面形状は逆台形をなす。土層の観察により、埋土はブロック土を基調とし、北側から人為的に埋め戻された、もしくは土坑上面に木蓋等が存在し、その崩落により埋没した可能性が指摘される。遺構からは土器片が出土している。

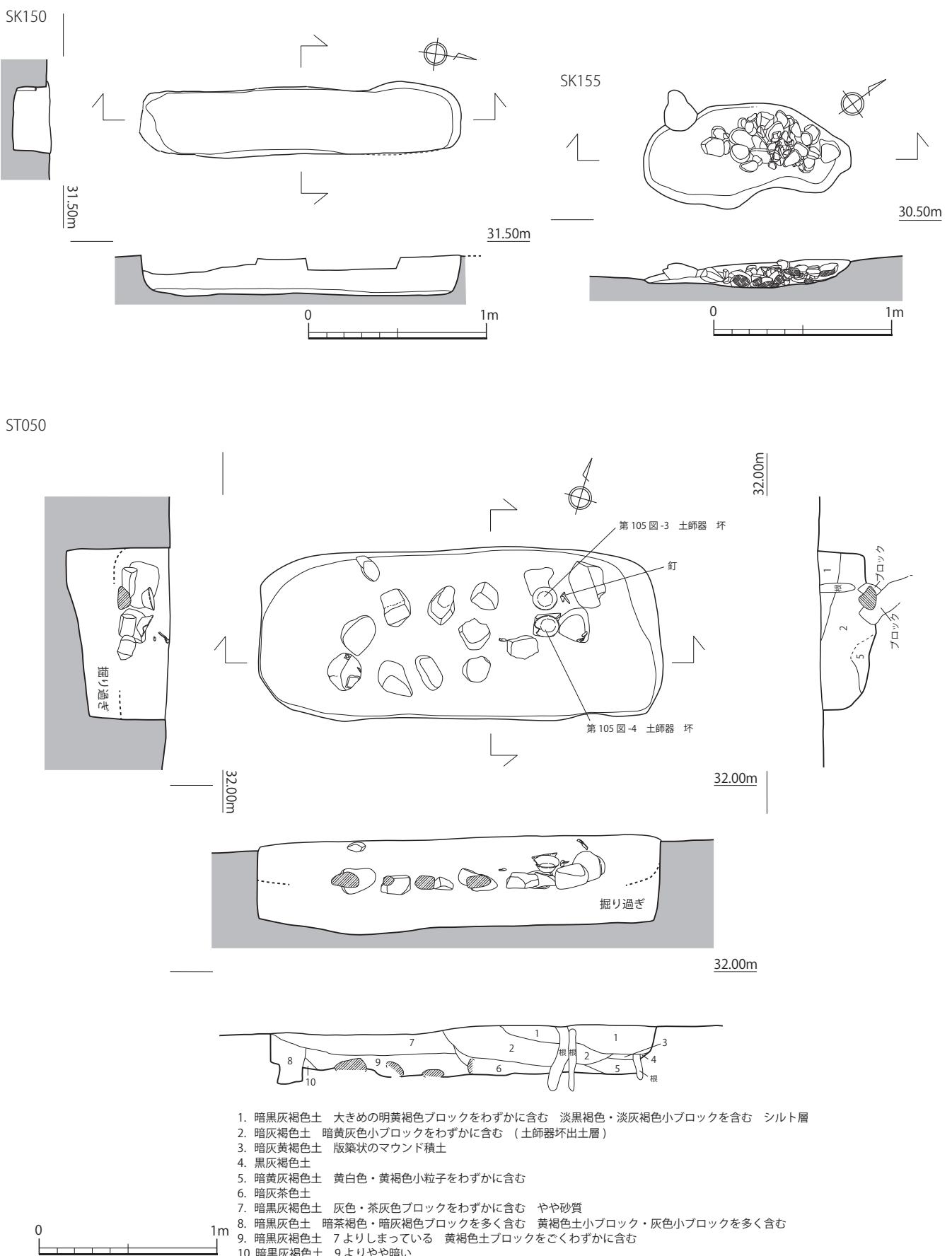
SK125



SK145



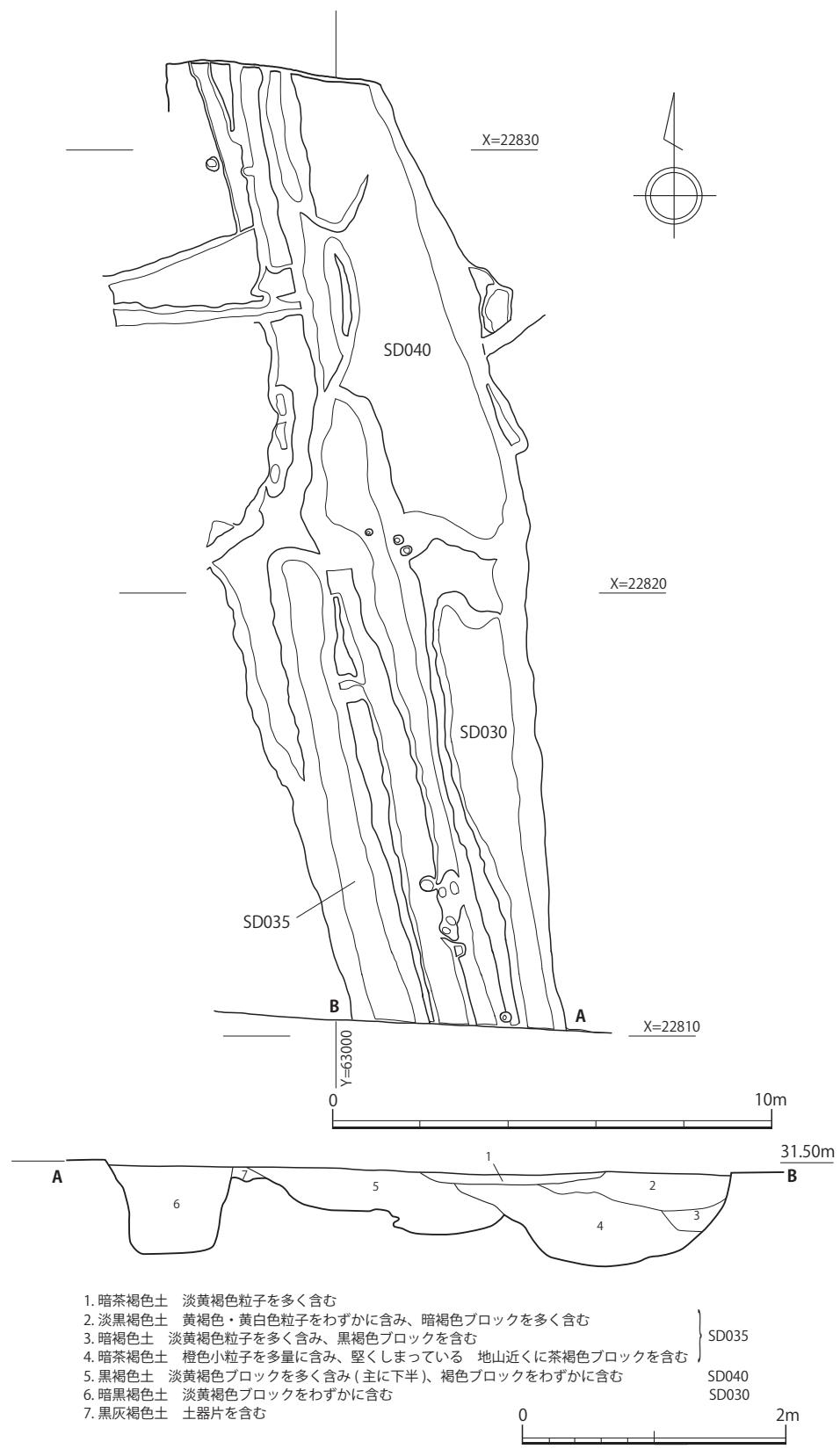
第100図 SK125・SK145・SK147 遺構実測図(1/30・1/40)

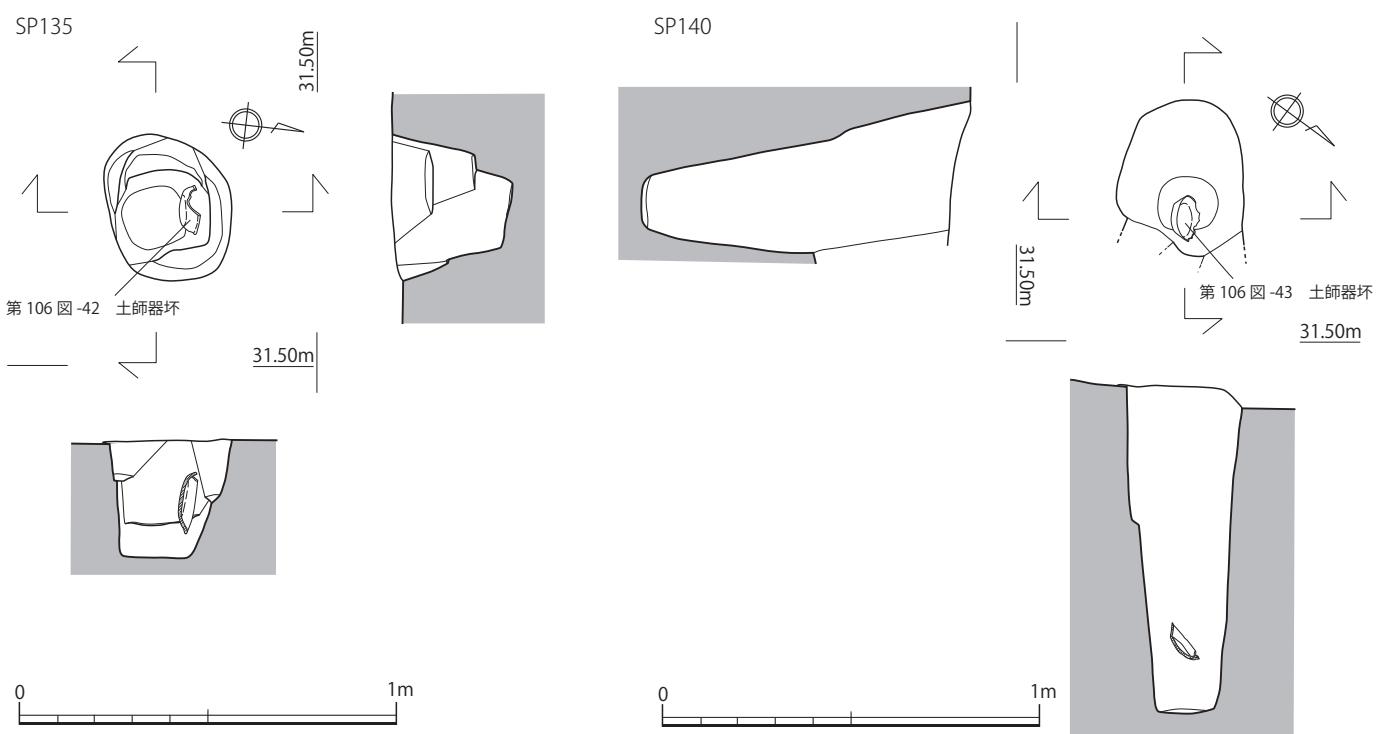


第101図 SK150・SK155・ST050 遺構実測図 (1/30)

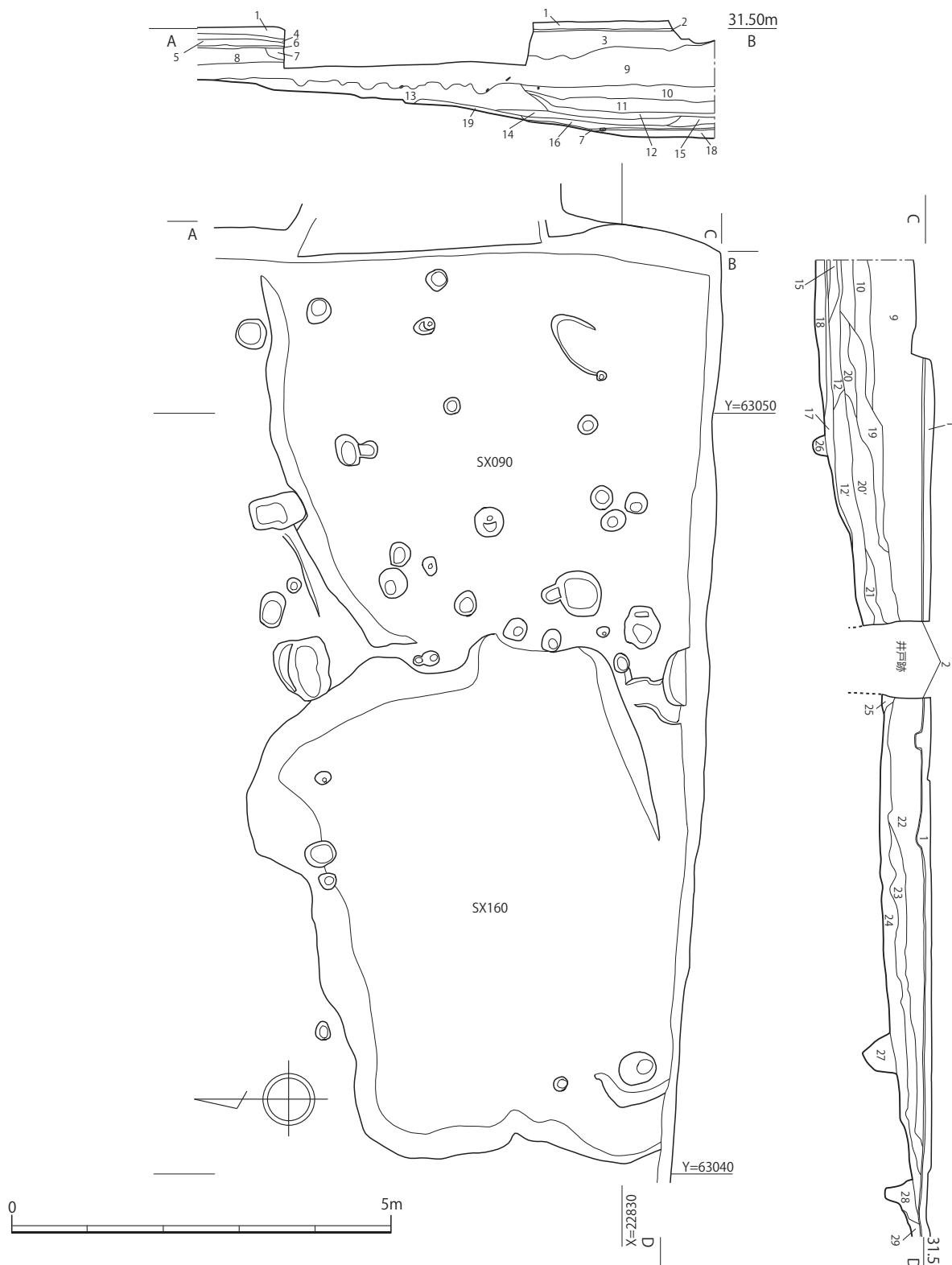
SK145(第100図)

調査区の北側で検出した土坑である。平面形状は東西に延びる長方形を呈し、長軸 1.03m、短軸 0.37m、検出面からの深度は 0.1m を測る。埋土は茶灰褐色土を基調とする。遺物は出土していない。





第103図 SF185・SP135・SP140 遺構実測図 (1/400・1/20)



1. 暗茶灰色土
2. 暗茶黒褐色土 Fe層
3. 暗茶褐色土 砂粒・土器片・1cm大の小礫を多量に含む
4. 黒褐色土 淡褐色土ブロックを多く含む
5. 暗灰褐色土
6. 暗黄灰色土 砂粒・1~2cm大の小礫・土器片を多量に含む
7. 暗黒灰色土
8. 暗茶褐色土(3層対応)
9. 淡黒褐色土 1~5cm大の小礫・砂粒・土器片を多量に含み、北へ向かう程
色調が濃くなる
10. 淡茶褐色ブロック土 5cm大の礫をやや含む
11. 淡黒茶色ブロック土 黒灰褐色小ブロックをわずかに含む
12. 黒茶褐色ブロック土 黒灰褐色・明黄褐色小ブロックを多く含む サクサクしている
12'. 暗黒茶褐色土 12よりしまりが強く黄褐色粒子を多く含まない
13. 淡黒茶褐色ブロック土 北へ向かう程色調に濃さが増す
14. 茶褐色ブロック土 黒灰褐色・明黄褐色小ブロックを多く含む サクサクしている
15. 淡黒灰褐色ブロック土
- 耕作土
16. 淡茶褐色ブロック土 粘質を帯びる
17. 黒色粘質土
18. 暗灰褐色土 1cm大の小礫と茶褐色・黒褐色小ブロックを多量に含む 粘質を帯びる
19. 暗茶褐色ブロック土 粘質を帯びる
20. 暗茶褐色土 1~5cm大の小礫を含む 暗茶褐色粒子を多く含む やや粘質
20'. 暗黒茶色土 2より暗茶褐色粒子の含有量が低い
21. 黑茶褐色土 暗茶褐色粒子・暗茶褐色小ブロックを多く含む
22. 淡茶黒褐色土 暗茶褐色粒子を多量に含む 1cm大の小礫を多く含む(9層にほぼ対応)
23. 淡黒茶褐色土 暗茶褐色粒子を多量に含む
24. 茶黒褐色土 暗茶褐色粒子・暗茶褐色小ブロックを多く含む
25. 淡黒茶灰色ブロック土 暗茶褐色ブロックを多く含む 土坑埋土
26. 暗茶褐色土 黑褐色小ブロックを多く含む やや粘質
27. 暗褐色土 黄褐色・褐色ブロックを西上半に多量に含む Pit埋土
28. 黑灰褐色土 サクサクしている
29. 淡黒灰褐色土 灰褐色ブロックを含む サクサクしている

第104図 SX090・SX160 遺構実測図(1/80)

SK147(第 100 図)

調査区の北側で検出した土坑である。平面形状は橢円形を呈し、長軸 0.58m、短軸 0.42m、検出面からの深度は 0.2m を測る。断面形状は不整形の逆台形をなす。土層は单一で、ブロック土を多く含んでいる。遺構からは 15 世紀～ 16 世紀に比定される底部糸切り離しの土師器坏が出土しているため、遺構の時期は 15 世紀以降であると考えられる。

SK150(第 101 図)

調査区の北東側で検出した土坑である。平面形状は南北に主軸をもつ隅丸長方形を呈し、長軸 1.8m、短軸 0.37m、検出面からの深度は 0.2m を測る。断面形状は逆台形をなす。遺物は出土していない。

SK155(第 101 図)

調査区の東側で検出した土坑である。平面形状は不整橢円形を呈し、長軸 1.2m、短軸 0.6m、検出面からの深度は 0.15m を測る。断面形状は浅い皿状になっている。人頭大の礫石が遺構の北側から多数検出されている。遺物は出土していない。

木棺墓**ST050(第 101 図)**

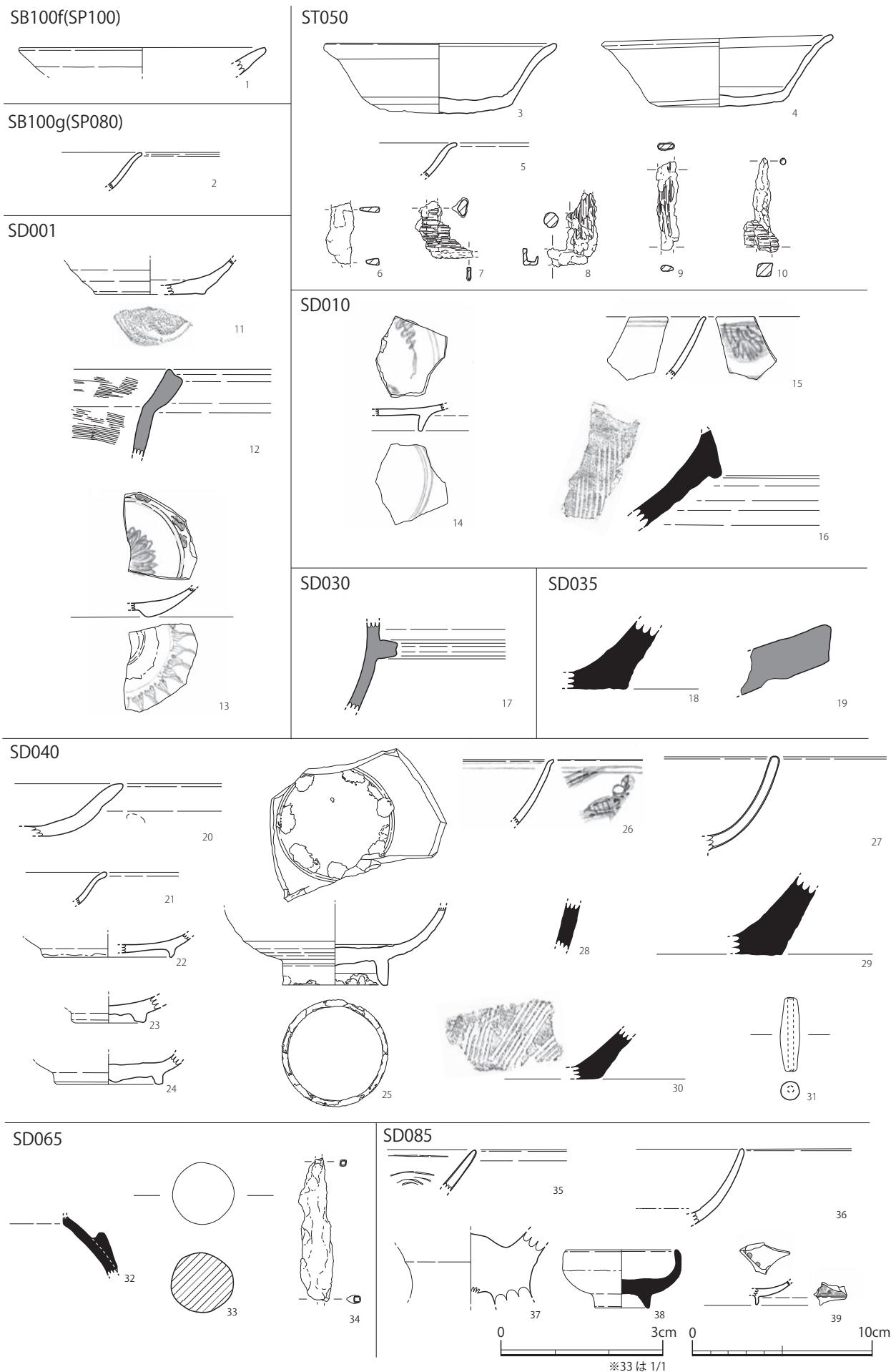
調査区の南側で検出した木棺墓である。平面形状は東西に主軸をもつ長方形を呈し、長軸 2.3m、短軸 0.95m、検出面からの深度は 0.5m を測る。断面形状は逆台形をなし、底面に円礫が並ぶように出土している。土層の観察により、埋土には不整合な堆積状況が認められ、出土遺物に土師器坏 2 点と鉄製の刀子 1 点、木片が付着した鉄釘などがあることから木棺墓と判断されるものである。土師器坏と刀子については、供献品として本来は木棺蓋上に置かれていたものと考えられ、棺蓋の朽廃に伴い落下したものと推測される。円礫は棺台として使用されていたものと考えられる。

溝状遺構**SD040(第 102 図)**

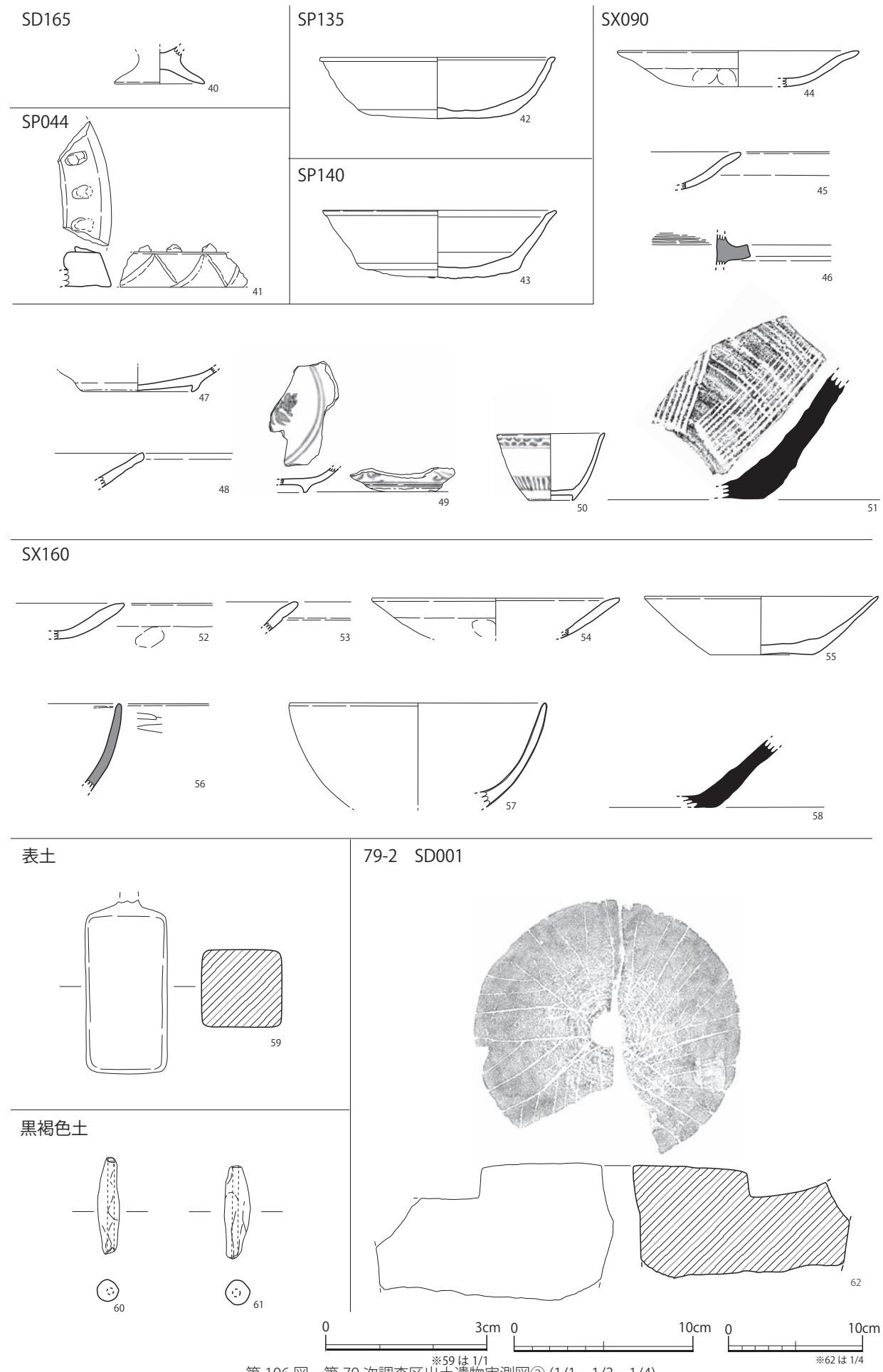
調査区の南西側で検出した、南北方向に延びる溝状遺構である。遺構の主軸は東側で検出された掘立柱建物跡 SB100 の主軸方向とほぼ一致する。切り合い関係は、SD035 に切られている。遺構の両端は調査区外に延びており、現状で長さ約 21.6m 以上、幅 0.65m、検出面からの深度は最大で 0.5m 前後を測る。隣接する第 83 次調査区、第 112 次調査区から検出された溝状遺構と一連の遺構と判断されることから、当地一帯に存在していた方形館の西側外郭施設と考えられる。溝内からは土師器皿 C をはじめ、朝鮮王朝産白磁碗や中国産三彩鉢小片等が出土しており、埋没時期は 16 世紀末頃と考えられる。

道路状遺構**SF185(第 103 図)**

調査区の東西に延び、中央北側で南に分岐する道路状遺構である。南に延びた柱穴列は調査区南壁近くで裾広がりに幅が広がっており、更に道が分岐する可能性も考えられる。夥しく切り合った柱穴がほぼ平行して 2 列に構築されたもので、密集する柱穴列の幅は約 3.0m を測る。重複した柱穴群には一定量斜め方向に差し込まれたものが認められ、分岐地点の北側の柱穴の密集度は他地点に比べ顕著である。柱穴の出土遺物から、9 世紀後半代の遺構と考えられる。また、並列する柱穴列との間の空間からは当該期の遺構は検出されていない。



第105図 第79次調査区出土遺物実測図① (1/1・1/3)



第106図 第79次調査区出土遺物実測図②(1/1・1/3・1/4)

ピット

SP135(第103図)

調査区の北側で検出したピットである。ほぼ平行して2列に構築された道路状遺構(SF185)の柱穴のうち、南側の柱穴列の1つであり、東西に延びる道路の分岐点にあたる地点に位置している。平面形状は円形を呈し、長軸0.38m、短軸0.32m、検出面からの深度は0.3mを測る。断面形状は逆台形になっている。柱抜き取り痕からは9世紀後半の完形に近い土師器坏が出土している。遺構北側壁面に立てられた状態での出土状況であることから、意図的に埋置されたものと考えられる。

SP140(第103図)

調査区の北側で検出したピットである。ほぼ平行して2列に構築された道路状遺構(SF185)の柱穴のうち、北側の柱穴列の1つであり、東西に延びる道路の分岐点にあたる地点に位置している。平面形状は円形を呈し、長軸0.4m、短軸0.32m、検出面からの深度は0.85mを測る。断面形状は逆台形になっている。柱抜き取り痕からは9世紀後半の完形に近い土師器坏が出土している。SP135と同じく、遺構北側壁面に立てられた状態での出土状況であったことから、意図的に埋置されたものと考えられる。

性格不明土坑

SX090・160(第104図)

調査区の東側で検出した、中世の掘り込み地業と考えられる性格不明土坑である。切り合い関係はSX160がSX090に切られている。また、SX090を切って、掘立柱建物跡SB100が構築されている。SX090の平面形状は不整橢円形を呈し、長軸5.7m、短軸5.2m、検出面からの深度は1.5m前後を測る。調査区南東部に位置する第64次調査で検出された大型の掘り込み地業跡と同一のものであると考えられる。遺構からは土師器皿Cや龍泉窯系青磁碗、白磁皿、備前産擂鉢等が出土しており、16世紀前半～中頃にかけて地業後に埋め戻された遺構と考えられる。

3. 小結

今回の調査では、古代と中世の2つの時代の遺構が検出された。

古代の道路状遺構(SF185)については、東西に延びる道路が南へと分岐する分岐点に位置する2つの柱穴から、柱抜き取り後に意図的に埋置された土師器が出土している。このような事例は、古代官道をはじめとした道路状遺構の交差点や三叉路の路面中央部に認められる土器埋納行為と同種のものと考えられる。また、SF185の西側で検出された木棺墓(ST050)は、道路の廃絶段階に造営されたと考えられる墓壙であり、大宰府周辺の墓壙においても同様な事象が指摘されている。墳墓の立地を規制した「喪葬令」^(註)との関連が注目される。

中世の溝状遺構(SD040)は、隣接する第83次調査区で検出されたSD015、第112次調査区で検出されたSD008と一連の遺構であると判断される。一連の溝状遺構は当地一帯に造営されていた半町規模の方形館の外郭施設であると考えられる。横尾遺跡が所在する鶴崎台地には猪野・中原遺跡や猪野新土井遺跡をはじめとする半町規模の方形館跡が存在し、共通する現象として朝鮮王朝産陶磁器の出土が指摘されている。また、愛媛県松山市に所在する伊予国守護河野氏の居城・湯築城跡の調査では家臣の階層に応じて出土陶磁器の様相が異なることが判明しており、朝鮮王朝産陶磁器が出土する地区はほぼ上級武士居住区に相当しているという極めて重要な所見が提示されている。

この鶴崎台地一帯は中世高田庄に比定されている地域であり、南北朝時代には大友氏の所領となった荘園にあたることから、今回確認された16世紀代の遺構群については大友家臣団によって構築された可能性が示唆されるものである。

(註)757年に施行された「養老律令」の令の一つで、全17条から成る。その中の「皇都条」では「皇都及び道路の近くにはいざれも死者を埋葬してはならない」と定められている。

(14) 横尾遺跡第 81 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 81 次調査地点は、大分市大字横尾王子原に所在する。本調査地点の北側には谷地形が東に開口し、南には第 65 次調査地点・第 83 次調査地点・第 132 次調査地点が近接し、東側には第 63 次調査地点が隣接している。調査面積は 744 m²である。発掘調査は平成 12 年 9 月 30 日に開始し、同年 11 月 2 日に終了した。遺構検出面の標高は 30.50m 前後を測り、南側から北側にかけて緩やかに傾斜している。

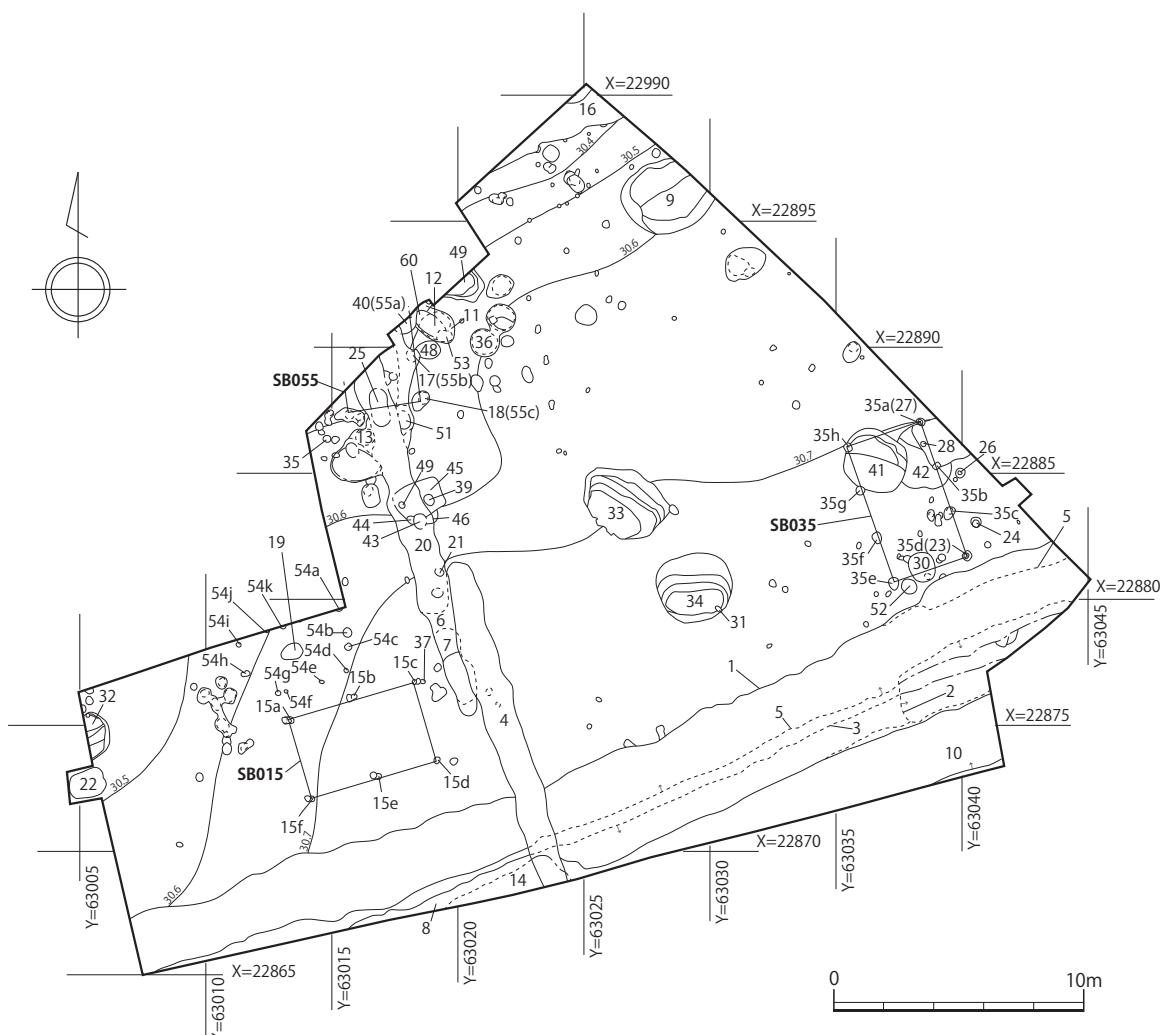
検出した主な遺構は集石遺構、土器埋設遺構、掘立柱建物跡、溝状遺構、地層横転遺構等である。

2. 遺構

掘立柱建物跡

SB015(第 109 図)

調査区の南西側で検出した、桁行 2 間 × 梁行 1 間、身舎面積 17.2 m²の掘立柱建物跡である。建物は東西棟で、建物の主軸方向は N - 15° - E である。柱穴の平面形状は円形もしくは不整橢円形を呈し、径 0.2 ~ 0.4m、検出面からの深度は 0.15 ~ 0.40m を測る。柱穴柱間は桁行が 2.40 ~ 2.90m、梁行が 3.20 ~ 3.30m である。柱穴から遺物は出土していない。



第 107 図 第 81 次調査区遺構配置図 (1/300)

SB035(第109図)

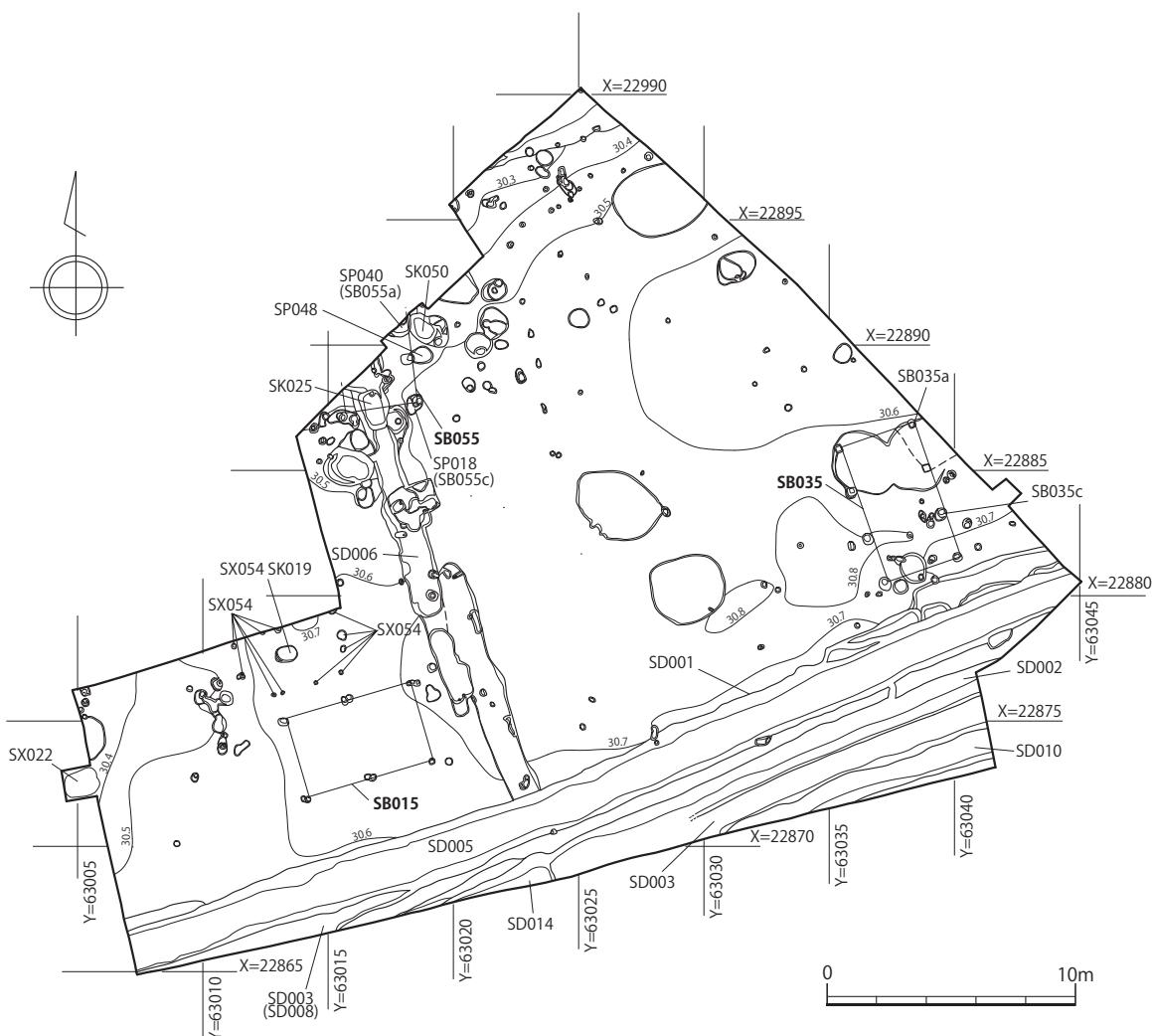
調査区の東側で検出した、桁行3間×梁行1間、身舎面積17.4m²の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、建物の主軸方向はN-18°-Wである。柱穴の平面形状は円形～四角形を呈し、径0.3～0.6m、検出面からの深度は0.20～0.65mを測る。柱穴柱間は桁行が1.74～2.04m、梁行が3.06～3.10mである。

柱穴cからは小野分類の中国産染付碗E群と土錐が出土しており、建物の時期は16世紀中頃に比定される。

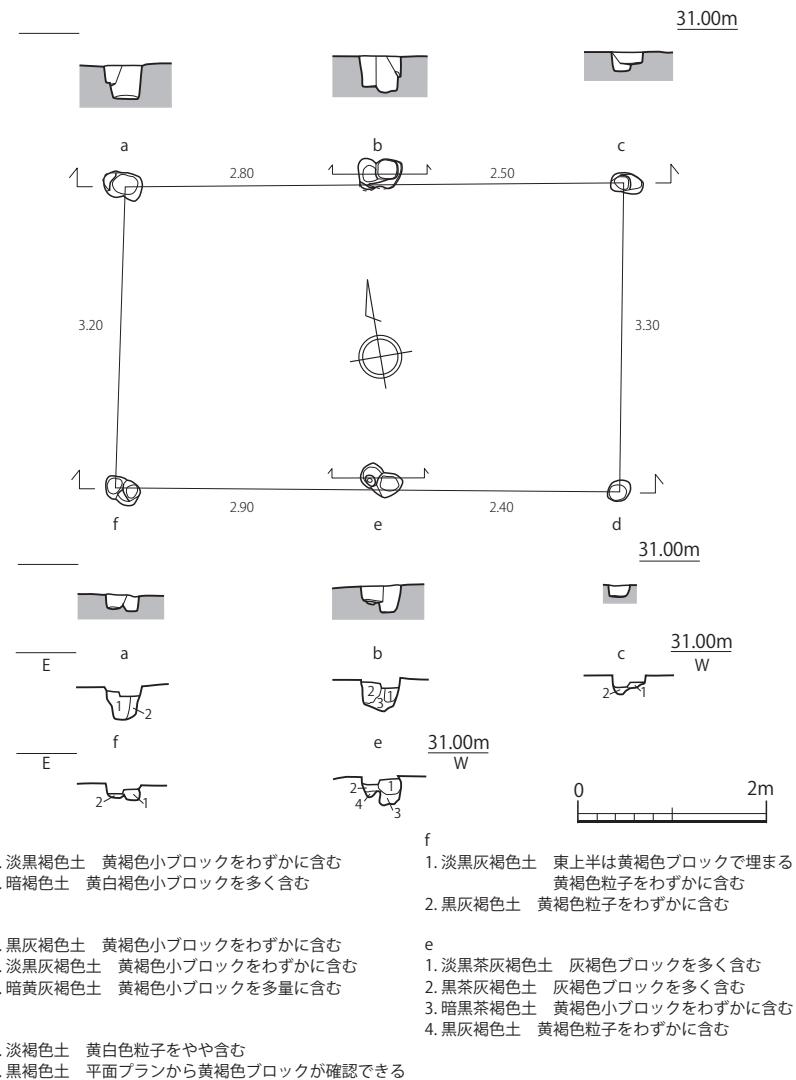
SB055(第110図)

調査区の北西側で検出した、現状で桁行2間以上×梁行1間以上、身舎面積約10m²以上の掘立柱建物跡であり、桁行はさらに調査区外に展開している。建物は南北棟で、建物の主軸方向はN-8°-Wである。柱穴の平面形状は円形もしくは不整楕円形を呈し、径0.40～0.65m、検出面からの深度は0.25m前後を測る。柱穴柱間は桁行が1.60～1.70m、梁行が3.06mである。

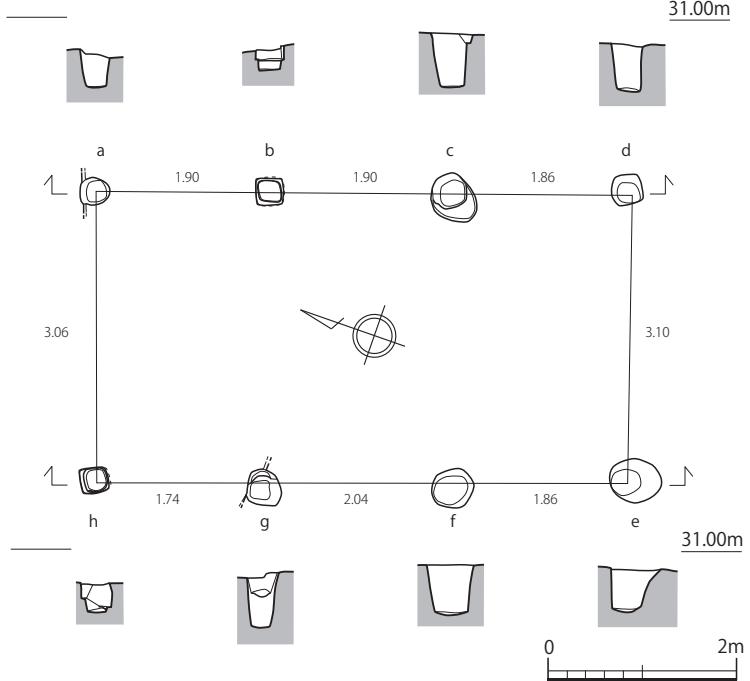
柱穴からは体部から一定の器厚で口縁部まで立ち上がる14世紀～16世紀の土師器坏口縁部片が1点出土しており、建物の時期は14世紀以降と考えられる。



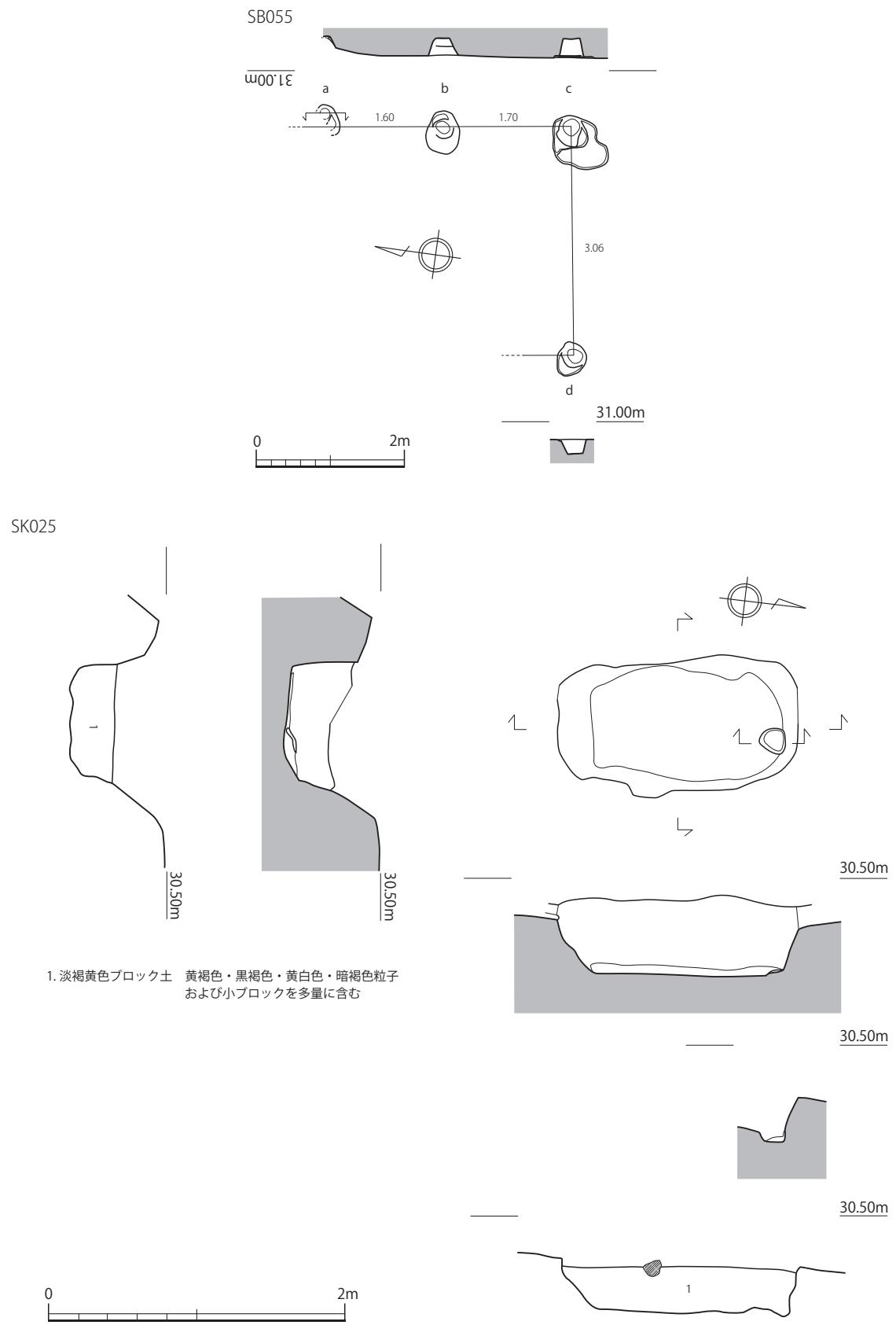
SB015



SB035



第109図 SB015・SB035 遺構実測図 (1/80)



第 110 図 SB055・SK025 遺構実測図 (1/40・1/80)

土坑

SK025(第 110 図)

調査区の北側で検出した土坑である。遺構北側床面からピットが検出されている。平面形状は南北に延びる隅丸長方形を呈し、長軸 1.6m、短軸 0.8m、検出面からの深度は 0.3m を測る。断面形状は逆台形になっている。埋土はブロック土の単一層である。遺物は出土していない。

SK050(第 111 図)

調査区の北側で検出した遺構である。平面形状は不整橿円形を呈し、長軸 1.8m、短軸 0.8m、検出面からの深度は 0.5m を測る。断面形状は緩やかな U 字状をなし、埋土はブロック土を基調とする。人為的に埋め戻された可能性が指摘される。

出土遺物は土師器の杯 1 点で、廃棄や外部からの流入とは考えにくく、埋納時のものと推測される。遺構の時期は、遺物の帰属年代から 13 世紀後半頃に比定される。

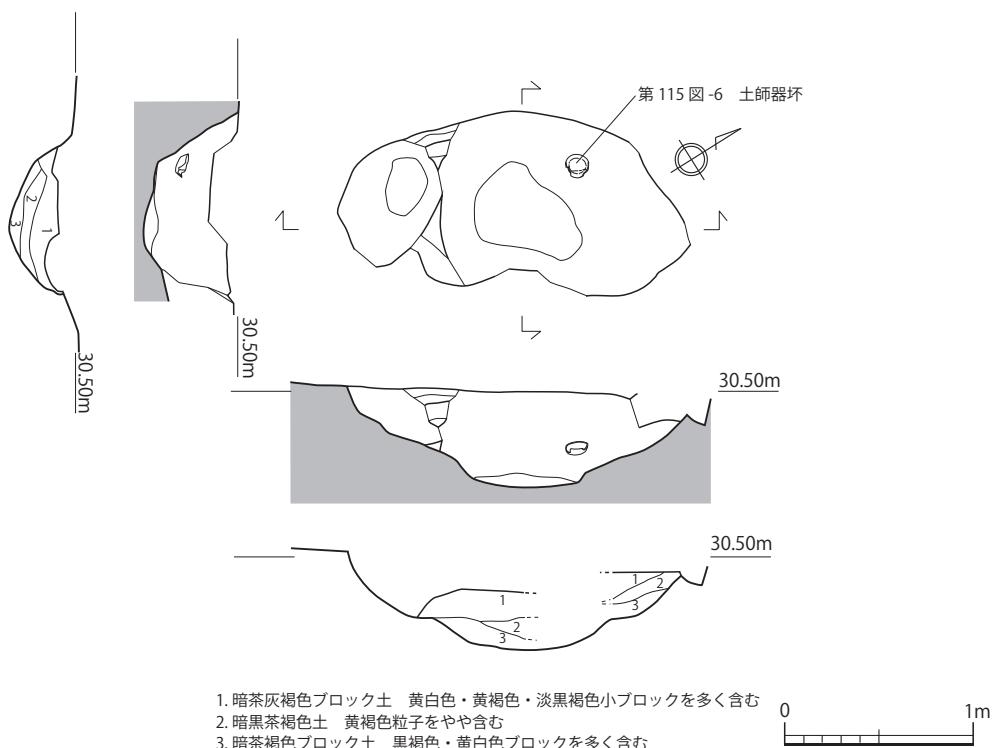
溝状遺構

SD001(第 114 図)

調査区の南側で検出した、東西方向に延びる溝状遺構である。切り合い関係は SD002 を切っている。遺構の両端は調査区外に延びており、現状で長さ 40.5m、幅 1.5 ~ 3.9m、検出面からの深度は最大で 0.2m 前後を測る。肥前産染付碗が出土していることから、埋没時期は 18 世紀後半以降と考えられる。

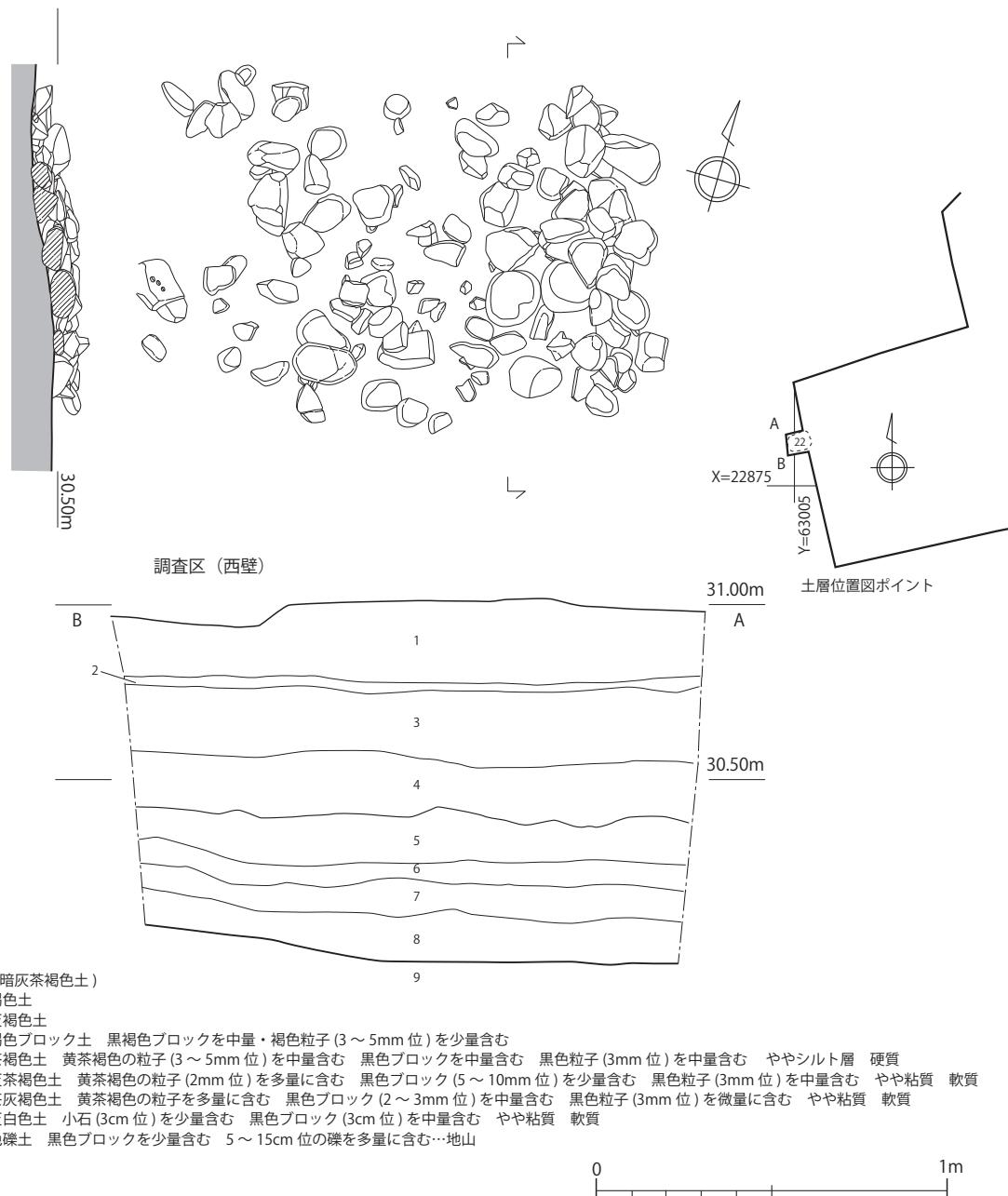
SD003(第 114 図)

調査区の南側で検出した、東西方向に延びる溝状遺構である。切り合い関係は SD002 によって切られている。遺構の西端は調査区外に延びており、現状で長さ 13.5m、幅 1.0m 前後、検出面からの深度は最大で 1.2m 前後を測る。

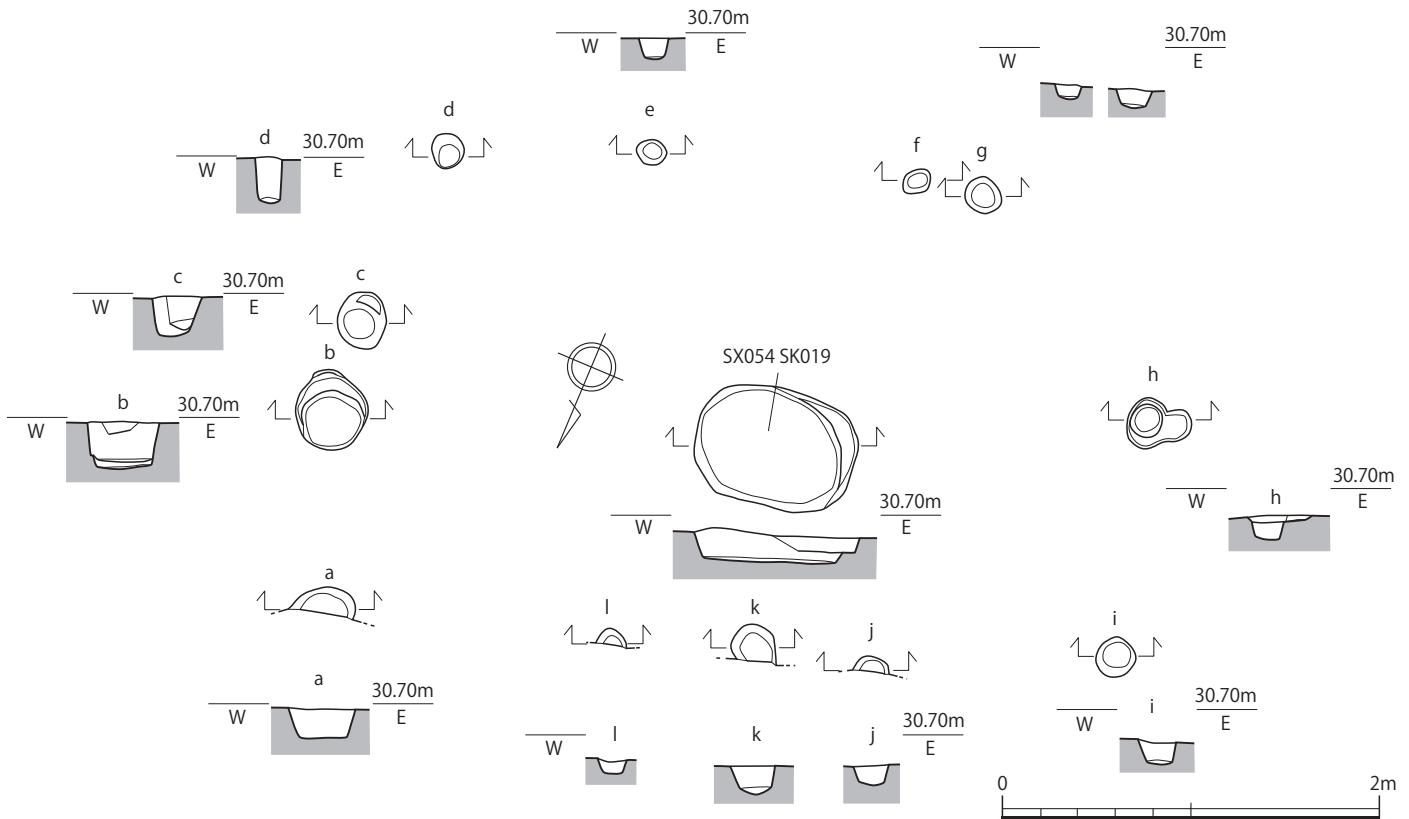


第 111 図 SK050 遺構実測図 (1/40)

出土遺物には、17世紀末～18世紀初頭の肥前波佐見焼、関西系陶器碗が出土していることから、埋没時期は18世紀前後と考えられる。



第112図 SX022遺構実測図(1/20)



第113図 SX054 遺構実測図(1/40)

SD005(第114図)

調査区の南側で検出した、東西方向に延びる溝状遺構である。切り合い関係はSD002を切っている。遺構の両端は調査区外に延びているため規模は不明だが、現状で長さ39.0m、幅1.5～2.7m、検出面からの深度は最大で0.5m前後を測る。

乗岡分類による近世1-b期の備前産擂鉢、土師器皿C、中国産染付皿C群、朝鮮王朝産雜釉陶器碗が出土していることから遺構の年代は16世紀末に比定され、第79次調査地点のSD040、第83次調査地点のSD001の延長にあたる遺構と考えられる。

SD010(第114図)

調査区の南側で検出した、東西方向に延びる溝状遺構である。切り合い関係はSD001・SD003によって切られている。遺構の東端は調査区外に延びているため規模は不明だが、現状で長さ11.6m、幅0.5m前後、検出面からの深度は最大で1.3m前後を測る。

銅製の鈴や国産陶器の瓶II Aが出土しており、埋没時期は17世紀前半と考えられる。

性格不明土坑**SD022(第112図)**

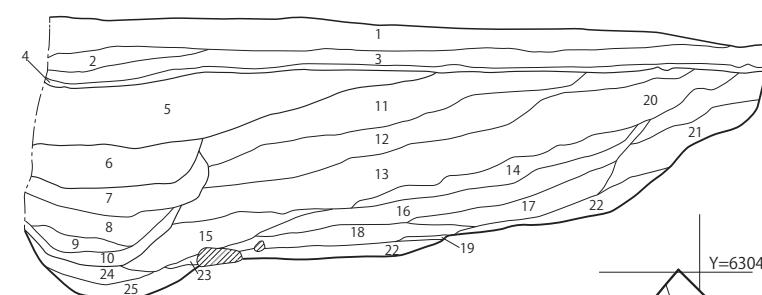
調査区の西側で検出した、集石遺構である。谷地形に堆積した黒茶褐色ブロック土層の直下に分布する。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸1.4m、短軸1.1mである。

検出した石は全て被熱しており、当初は炉跡と考えられたが、石が全面被熱を受けており、中には下面の方が強い被熱を受けているものがあることや、集石の置かれていた面が被熱を受けていないことなどから、これらの被熱石は他の場所で使用された可能性が高いと考えられる。また、検出された石には割れているものやじけているものも多く含まれているが、この割れ口にも被熱が認められるため、これらの石は使い捨てではなく、何度

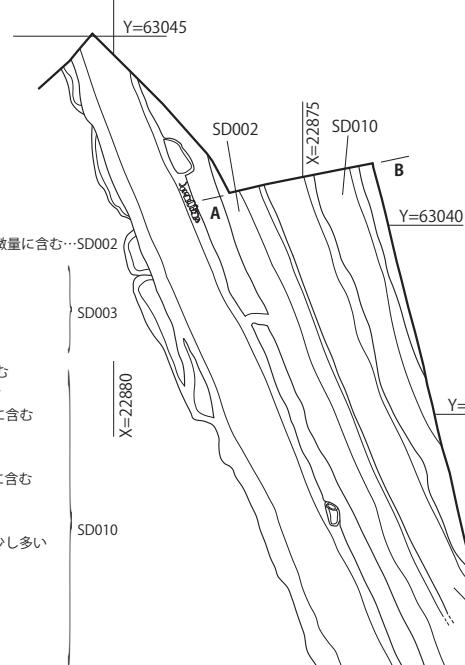
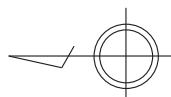
31.50m

A

B



1. 暗茶褐色土 茶黃褐色の粒子を少量含む
2. 暗茶灰褐色土 茶黃褐色の粒子(3~7mm位)を中量含む ※5より色味はやや強い
3. 暗灰茶褐色土 茶黃褐色の粒子(2~5mm位)を中量含む 炭化物を微量に含む
4. 赤茶褐色土 赤茶色の粒子(鉄分?)を多量に含む 炭化物を微量に含む
5. 暗茶灰褐色土 茶黃褐色の粒子(3~7mm位)を中量含む 炭化物を微量に含む…SD001
6. 茶灰褐色土 茶黃褐色の粒子(3mm位)を中量含む 2~4cmの小石を少量含む 炭化物を微量に含む…SD002
7. 暗茶黃灰色ブロック土 茶黃褐色のブロックを中量含む
8. 暗茶灰褐色ブロック土 茶黃褐色のブロックを少量含む
9. 暗茶灰褐色ブロック土 茶黃褐色のブロックを多量に含む
10. 暗褐茶色土 1~3cm位の小石を少量含む 茶黃褐色の粒子(3~5mm位)を少量含む
11. 暗茶褐色土 5~10mm位の炭化物を少量含む 茶黃褐色の粒子(3~5mm位)を中量含む
12. 暗茶褐色土 3~10mm位の炭化物を少量含む 茶黃褐色の粒子(2~3mm位)を多量に含む
13. 暗茶褐色土 2~3mm位の炭化物を微量含む 茶黃褐色の粒子(2~3mm位)を多量に含む
14. 暗茶灰褐色ブロック土 茶黃褐色のブロックを少量含む 茶黃褐色の粒子(2mm位)を多量に含む ※15よりブロック片は大きい(3~5mm位)
15. 暗茶灰褐色ブロック土 茶黃褐色のブロック(1cm位)を少量含む
16. 暗茶灰褐色ブロック土 茶黃褐色のブロックを少量含む 茶黃褐色の粒子(2mm位)を多量に含む 2~3cm位の小石を少量含む
17. 暗茶灰褐色ブロック土 茶黃褐色のブロック(~1cm位)を中量含む
18. 暗茶灰褐色ブロック土 茶黃褐色のブロック(2~3cm位)を中量含む ※17より含有数が少し多い
19. 暗茶黃灰色ブロック土 赤茶色のブロックを中量含む
20. 暗褐茶灰色土 5mm位の炭化物を少量含む
21. 暗褐茶色ブロック土 茶黃褐色のブロックを中量含む
22. 暗茶黃灰色ブロック土 茶黃褐色のブロックを多量に含む
23. 暗茶灰褐色土 茶黃褐色の粒子(2mm位)を微量に含む



31.00m

D

C

1. 暗茶灰褐色土 茶黃褐色の粒子(3mm位)を多量に含む 炭化物(2mm位)を微量に含む…SD001
2. 暗灰茶褐色土 茶黃褐色の粒子(2mm位)を微量に含む
3. 茶灰褐色土 茶黃褐色の粒子(3mm位)を多量に含む
4. 暗茶褐色土 3~5cm位の小石を含む 茶黃褐色の粒子(2~3mm位)を少量含む 炭化物(3mm位)を微量に含む
5. 暗褐茶色土 礫及び4cm位の小石を含む 茶黃褐色の粒子(3~5mm位)を少量含む 炭化物(3mm位)を微量に含む
6. 暗茶褐色土 茶黃褐色の粒子(3~5mm)を中量含む 炭化物を微量に含む
7. 暗茶灰褐色ブロック土 茶黃褐色のブロックを中量含む
8. 暗茶灰褐色ブロック土 茶黃褐色のブロックを多量に含む
9. 暗茶褐色ブロック土 茶黃褐色の粒子及びブロックを中量含む
10. 暗茶褐色ブロック土 茶黃褐色のブロックを多量に含む
11. 暗茶褐色ブロック土 茶黃褐色の粒子を中量含む
12. 淡黒茶褐色土 レキを含む 茶黃褐色の粒子(3~5mm位)を中量含む…SD010

SD003

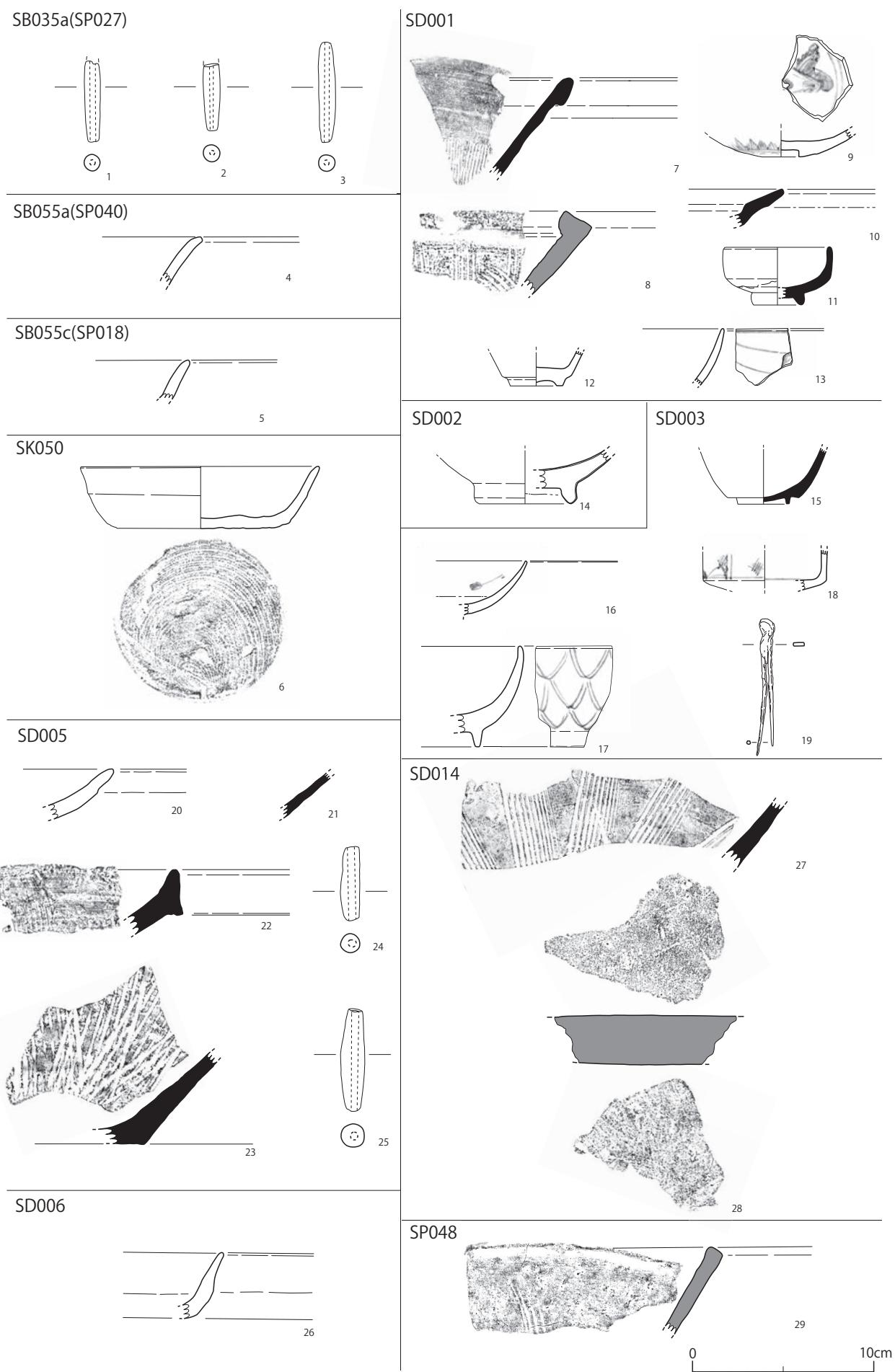
SD005

SD003 (SD008)

Y=63010



第114図 SD001・SD002・SD003・SD005・SD010 遺構実測図(1/40・1/200)



第 115 図 第 81 次調査区出土遺物実測図 (1/3)

も繰り返して使用されていたと判断される。遺物は出土していない。

SX054(第113図)

調査区の西側で検出した土坑(SK019)とその周辺に分布するピット群である。遺構全体は東西に4.4m、南北に約2.6m以上となる。各ピット平面形状は円形もしくは楕円形を呈しており、径は0.15～0.40m、検出面からの深度は0.10～0.26mを測る。SK019の周りにピットが東西に延びる隅丸長方形をなすように分布している。明確な関係性は不明ながら、周辺の遺構密度が低い中でピットが集中することから、土坑との関連を注視して記録した遺構である。

SK019からの出土遺物は古代の土師器蓋の小破片が出土しているものの、ピットからの出土遺物は皆無である。

SX054 SK019(第113図)

調査区の西側で検出した土坑で、平面形状は楕円形を呈しており、径は長軸0.9m、短軸0.65m、検出面からの深度は0.18mを測る。

遺構からは土師器蓋の小破片が出土しており、遺構の時期は古代であると考えられる。

3. 小結

今回の調査で検出された遺構で特筆されるものに、中世の溝状遺構と、縄文時代に比定される集石遺構がある。中世の溝状遺構SD005は、隣接する第83次調査区で検出されたSD015、第112次調査区で検出されたSD008と当地一帯に造営されていた一連の半町規模の方形館の北側外郭施設と考えられるものである。

また、調査区西側で確認された集石遺構(SX022)は谷地形に堆積した黒茶褐色ブロック土層の直下に分布するものである。この谷の北側斜面に位置する第75次調査地点では、縄文時代早期後半頃の遺物包含層が検出されており、縄文時代の遺跡が展開しているものと判断される。このことから、集石遺構(SX022)も当該期のものである可能性は高いと考えられる。

(15) 横尾遺跡第 149 次調査

1. 調査概要

横尾遺跡第 149 次調査地点は、大分市大字横尾利尾に所在し、弥生時代後期の環濠集落跡が推定されている範囲の一角にあたる。また、第 143-1 次調査区の東側に隣接するため、環濠集落に先行する弥生時代中期の遺構の存在が予測された地点である。調査面積は 15 m² であり、発掘調査は平成 24 年 8 月 20 日・21 日に実施した。検出された遺構は弥生時代中期の土坑 1 基及び時期不明のピット 4 基である。

2. 遺構

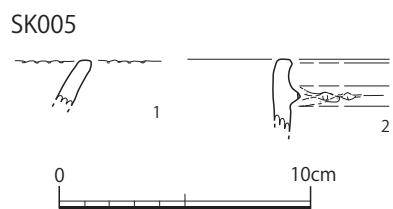
土坑

SK005(第 116 図)

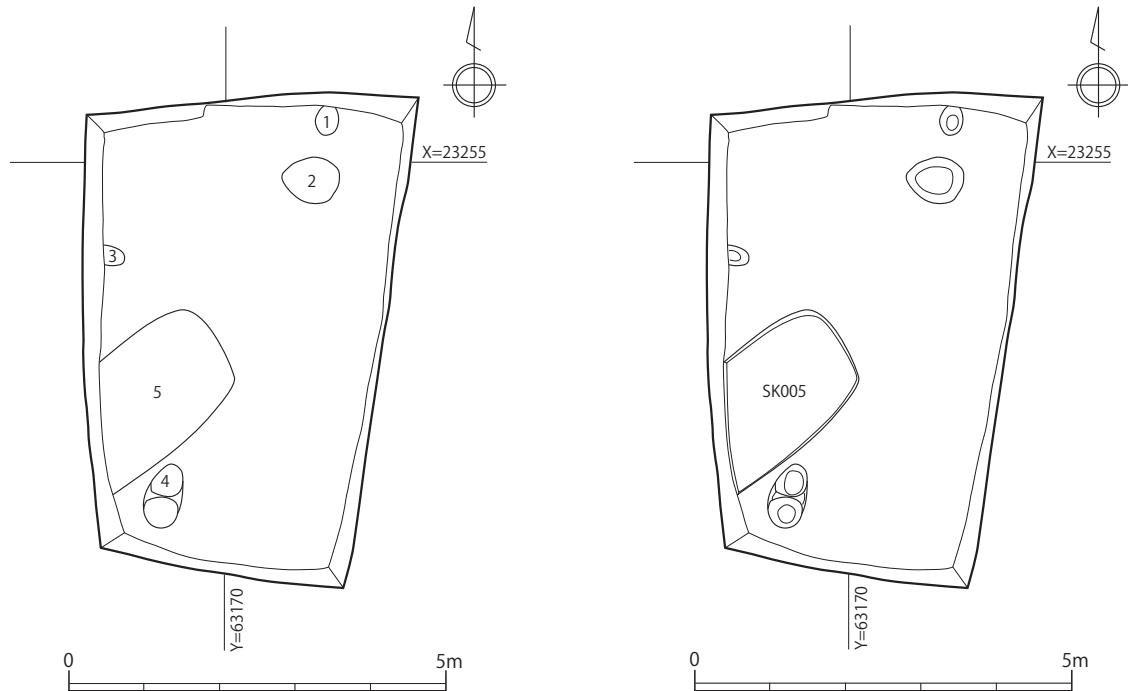
調査区の南西側で検出した土坑で西側の一部は調査区外に展開している。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸 1.5m 以上、短軸 1.2m、検出面からの深度は 0.2m を測る。断面形状は逆台形をなし、埋土は淡茶色の地山ロームブロックを多く含む暗茶褐色土の単一層である。土坑の掘削状況や堆積状況から、土坑の掘削が廃棄等の一時的な目的で行われたものではないと考えられる。出土遺物は僅少で、下城式甕形土器小片の他、姫島産黒曜石製の石錐などが確認されており、弥生時代中期の遺構と考えられる。

3. 小結

本調査区の隣接地では、弥生時代中期後半から末頃までの貯蔵穴群が検出されており、弥生時代後期前葉頃から後期終末頃の環濠集落に先行する集落の存在が示唆されるなかで、今回の調査成果は、こうした想定を裏付けるものである。



第 117 図 第 149 次調査区出土遺物実測図 (1/3)



第 116 図 第 149 次調査区遺構配置図・全体遺構図 (1/100)

(16) 横尾遺跡第 153 次調査

1. 調査概要

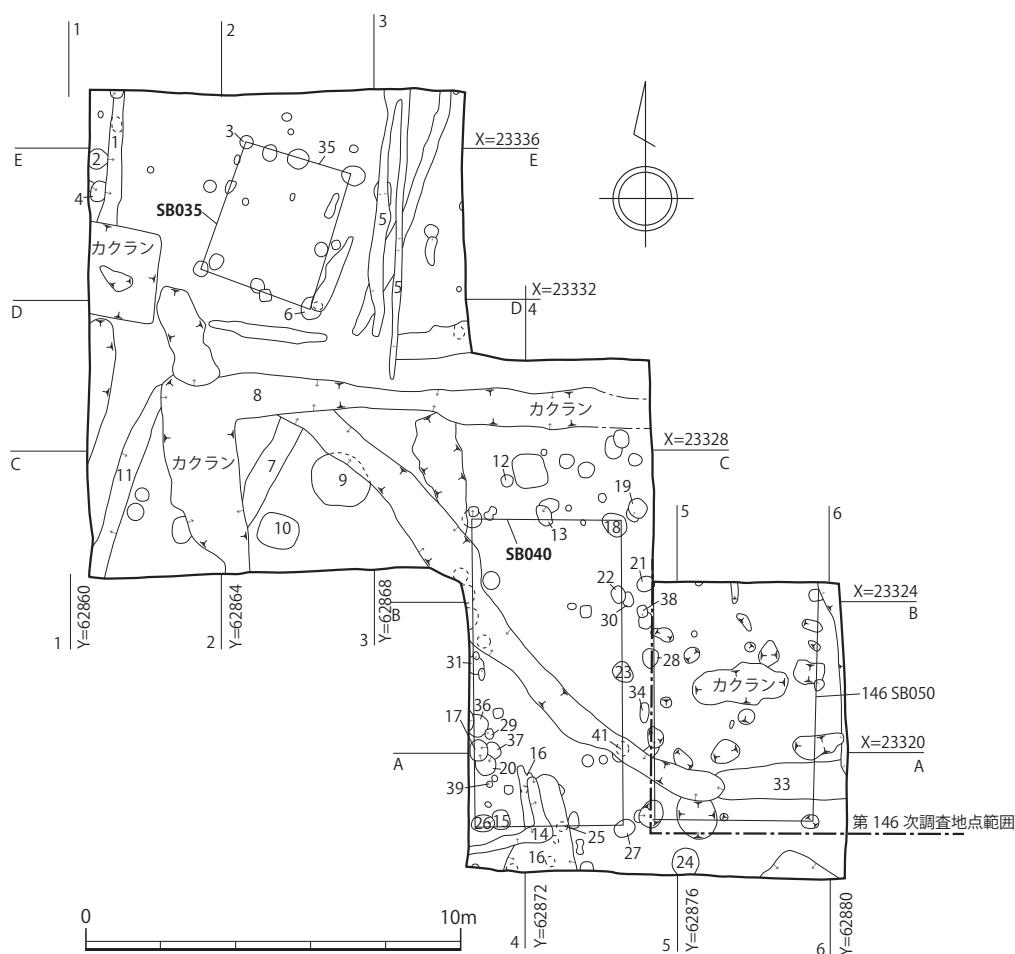
横尾遺跡第 153 次調査地点は、横尾土地区画整理事業地内の北西部に位置し、大分市大字横尾奈良原に所在する。遺跡の立地は、鶴崎台地の西側の横尾面(tm1)から東側に開析する谷の緩やかな傾斜地にあり、平成 22 年度に調査が実施された第 146 次調査区の西側に隣接する。調査面積は 240 m² であり、発掘調査は平成 27 年 3 月 2 日に開始し、同年 3 月 27 日に終了した。隣接する第 146 次調査区では掘立柱建物跡群や工房跡と考えられる屋外炉跡 (SX100) が検出されているため、本調査でも関連する遺構の検出が予測されたが、検出した主な遺構は、掘立柱建物跡 2 棟、溝状遺構 6 条、土坑 3 基、ピットなどであり、工房跡に関連する明確な遺構は確認出来ていない。

2. 遺構

掘立柱建物跡

SB035(第 120 図)

調査区の北西側で検出した、桁行 2 間 × 梁行 2 間、身舎面積 10.7 m² の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、建物の主軸方向は N - 20° - E である。柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形を呈し、径 0.27 ~ 0.43m、検出面からの深度は 0.21 ~ 0.62m を測る。出土遺物は柱穴 c(SP006) から唐津産陶器碗の底部片程度と僅少であり、



第 118 図 第 153 次調査区遺構配置図 (1/200)

時期の特定は困難であるが、17世紀前半頃に比定されるものと考えられる。

SB040(第120図)

調査区の南東側で検出された、桁行4間×梁行2間、身舎面積30.1m²の掘立柱建物跡である。建物は南北棟で、建物の主軸方向はほぼ真北を指向しており、第146次調査区で検出された掘立柱建物跡SB050のすぐ西側に隣接する。このSB050も南北棟で、建物の主軸方向がほぼ真北を指向する。

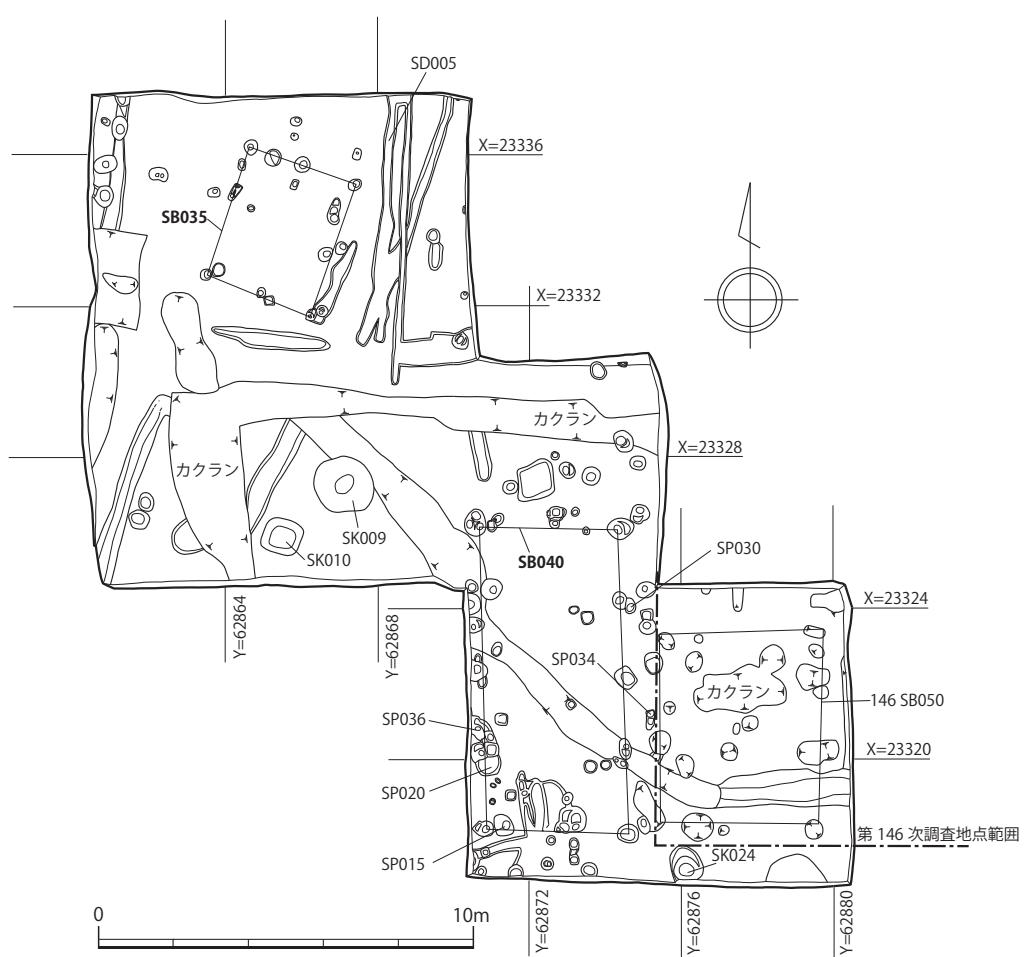
掘立柱建物跡を構成する柱穴は楕円形を呈するものが多く、中には柱痕が確認できるもの(SP022・SP023・SP025・SP026)や、柱の一部が残存するもの(SP031)が検出された。柱穴の径は0.26～0.72m、検出面からの深度は0.06～0.66mを測る。

出土遺物は少なく、破片がほとんどであるが、柱穴h(SP017)からは備前産陶器片、唐津産陶器の把手、中国産青花片が出土している。また、周辺の柱穴からは瓦質土器の香炉や土師器皿Cなどが出土していることから、第146次調査区で検出された掘立柱建物跡SB050とほぼ同時期の16世紀末～17世紀初頭頃に位置づけられると考えられる。しかしながら、両者の建物は隣接するため、同時併存は困難で、時期差があるものと判断される。

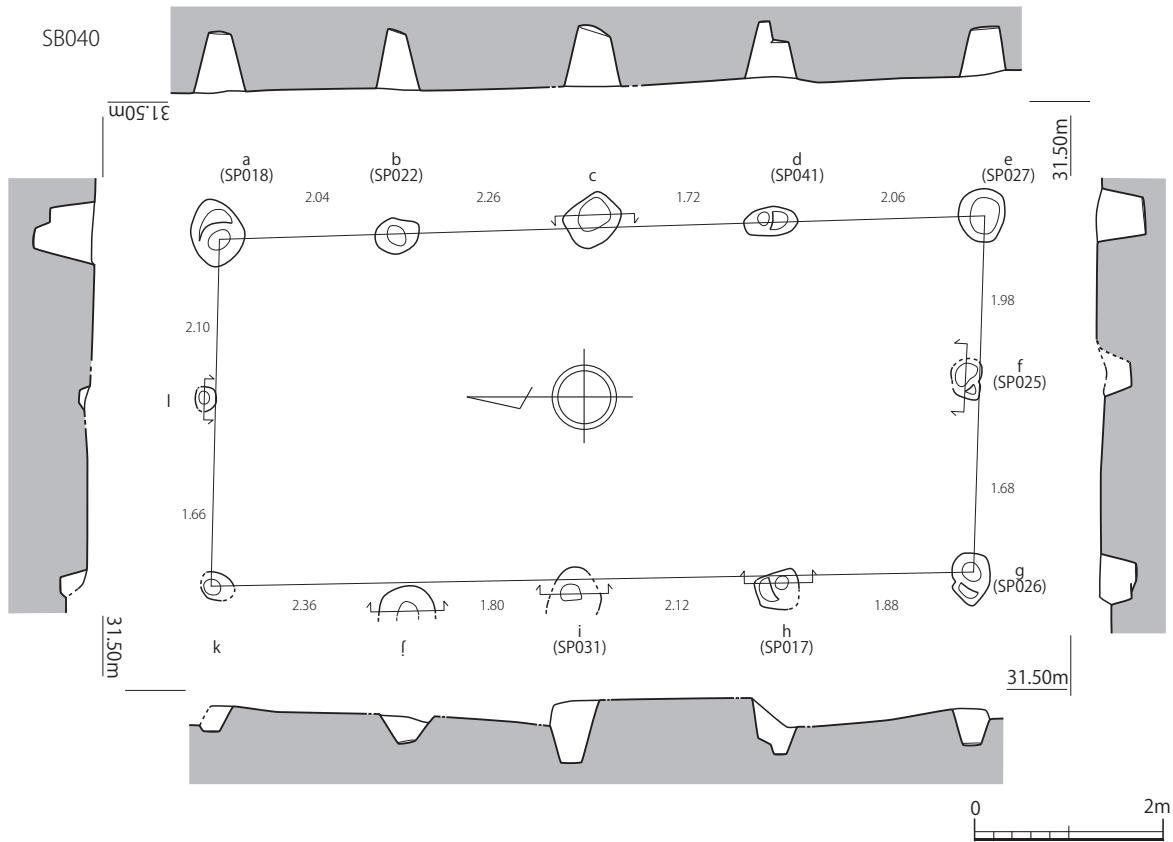
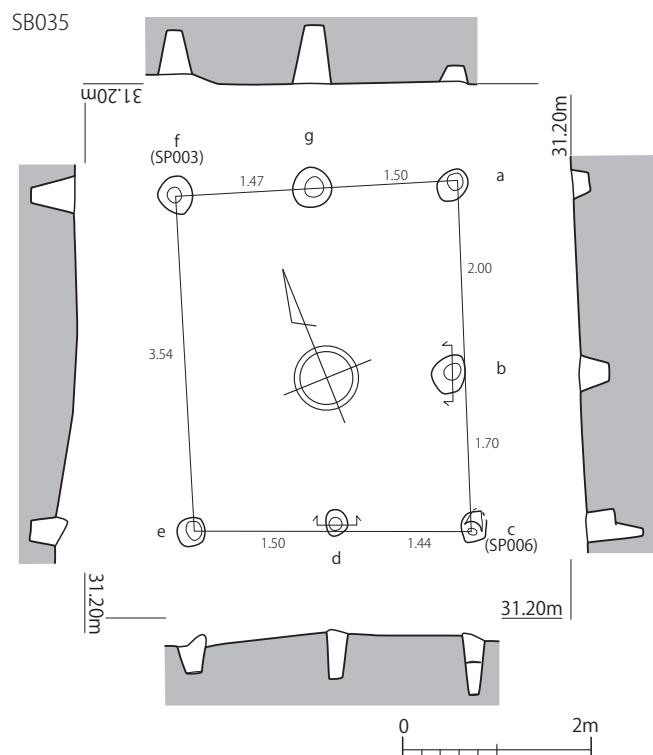
土坑

SK009(第121図)

調査区のほぼ中央で検出した円形の土坑である。長軸1.68m、短軸1.52m、検出面からの最大深度は0.62m



第119図 第153次調査区全体遺構図(1/200)



第 120 図 SB035・SB040 遺構実測図 (1/80)

を測り、断面形状は擂鉢状をなす。

遺物は土器片及び床面から拳大～人頭大の石が数点出土したのみであり、時期決定に至らないが、周囲の遺構の状況から近世初頭に位置づけられると考えられる。

SK010(第 121 図)

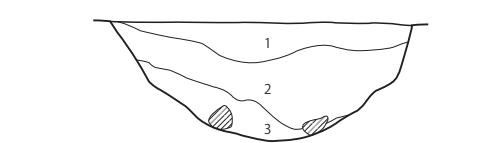
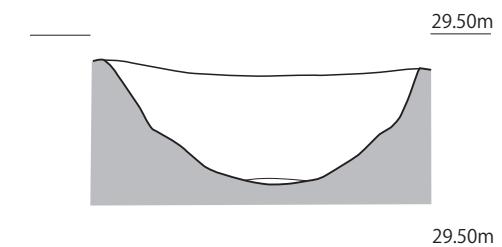
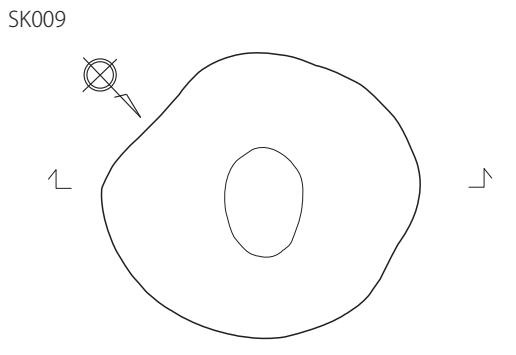
調査区の中央、土坑 SK009 のほぼ南西側で検出された隅丸方形の土坑である。長軸 1.02m、短軸 0.94m、検出面からの最大深度は 0.3m を測り、断面形状は逆台形をなす。

出土遺物は最下層から土師器皿 C、焼締陶器片が出土していることから、16 世紀後半～末頃の遺構と考えられる。

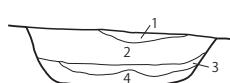
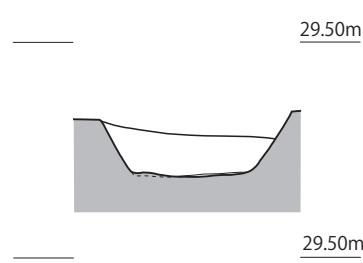
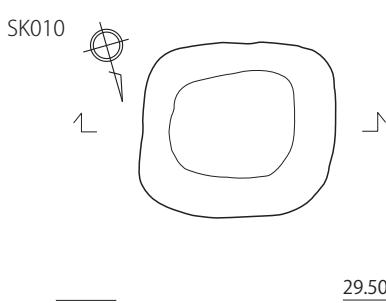
SK024(第 121 図)

調査区の南東側で検出された楕円形の土坑で、南端部は調査区外に展開する。現状で長軸 0.94m 以上、短軸 0.85m、検出面からの最大深度は 0.57m を測り、一部調査区外へ展開するが、断面形状は逆台形をなしているものと考えられる。

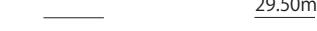
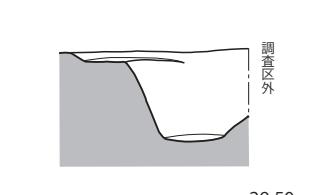
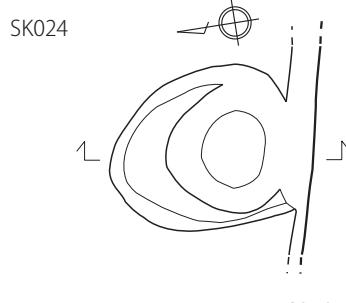
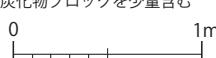
遺物は土器片のみであり、時期は不明であるが、周辺の遺構の状況から類推して中世末～近世初頭に位置づけられるものと考えられる。



1. 茶灰色土 かたくしまる 微量の焼土粒及び炭化物粒を含む
全体に黄灰色地山ブロックを含む
2. 灰茶色粘質土 全体に黄灰色地山ブロックを含む
3. 暗褐色粘質土 微量の黄褐色ブロックを含む 拳大～人頭大の礫を含む



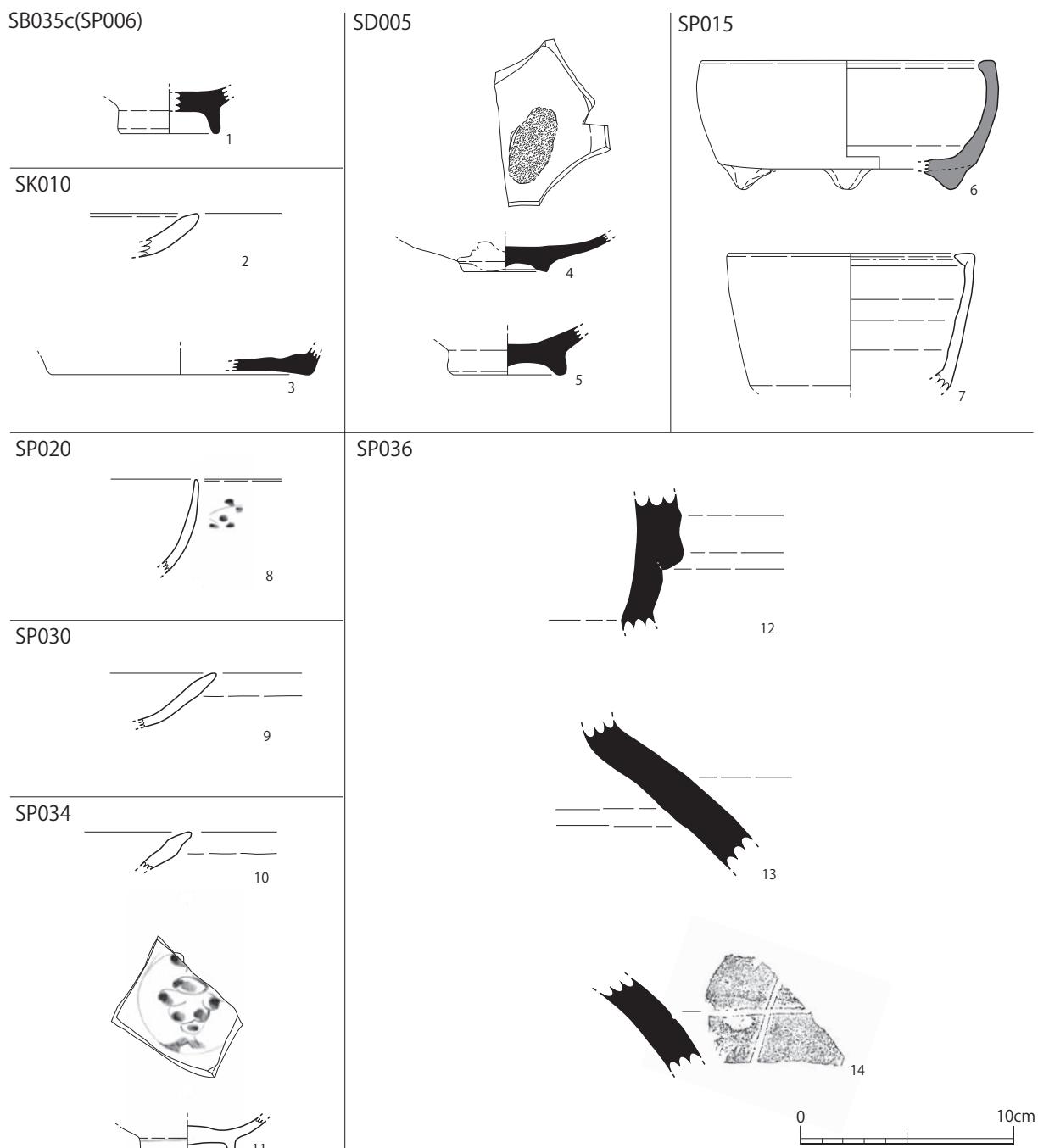
1. 灰茶色土 かたくしまる 地山土を多く含む
2. 暗茶褐色土 少量の橙色土粒・黄灰色地山ブロックを含む
やや粘質
3. 暗茶褐色土 全体に黄灰色地山ブロックを多く含む
4. 暗褐色粘質土 微量の黄灰色地山ブロックを含む
1cm 大の炭化物ブロックを少量含む



1. 暗茶灰色粘質土 少量の地山ブロック・
1cm 大の橙色土ブロック・5cm 大の礫を含む
2. 暗茶灰色粘質土 全体に黄灰白色地山ブロックが多く混入
5mm～1cm 大の炭化物ブロックを少量含む



第 121 図 SK009・SK010・SK024 遺構実測図 (1/40)



第122図 第153次調査区出土遺物実測図(1/3)

3. 小結

本調査では、中世末～近世初頭頃の掘立柱建物跡2棟と、中世末～近世初頭頃の土坑3基、近世と考えられる溝状遺構6条および調査区南東部でピットが多く検出された。当初は隣接する第146次調査区で検出された工房を構成する遺構の存在が予測されたが、工房跡に関係する明確な遺構は確認できなかった。しかしながら、工房跡と同時期の遺構である柱穴SP015から青磁の火入れや瓦質土器の火鉢とともに轍の羽口の一部が、柱穴SP022から焼土の塊が出土している。また、遺物に関しては、近世の溝状遺構SD005からは唐津産陶器の皿及び碗の破片が、その他柱穴ではSP020から肥前産の染付碗片、SP030から土師器皿C、SP034から中国産染付碗E群、土師器皿Cが出土していることから、本調査地周辺には隣接地にある工房跡に関連すると思われる掘立柱建物群が存在していたものと考えられる。

第IV章 総括

本章では、本報告書内で報告をした各調査区ならびに遺構について最後に年代ごとに整理をし、まとめとする。本報告書で報告する 16 調査区では、古墳時代から近世までの幅広い年代の遺構・遺物が確認されているが、中でも特筆される成果は、過去に刊行された横尾遺跡発掘調査報告書内で度々触れられてきた中世の大型方形館跡の規模が本報告をもって更に明確なものとなった点と古代の道路状遺構が確認されたことである。これらの報告を中心に、本報告書の総括としたい。

(1) 古墳時代 (第 123 図)

横尾遺跡が所在している大野川流域には、数多くの古墳時代の住居跡や古墳群が存在する。横尾遺跡に含まれる古墳時代中期～後期の円墳である有田古墳群もその一つである。有田古墳群は横尾地区における数少ない墳丘をもつ古墳であり、この地域の有力豪族の存在を考える上で重要な遺跡であると言える。有田古墳群から南に 1.5km の地点には古墳時代後期の竪穴建物跡約 60 基が確認された毛井遺跡が、その更に南西へ 2.5km の地点には古墳時代前期の前方後円墳・方墳・円墳からなる小牧山古墳群が所在している。これらの古墳群は、大野川から眺望できる段丘縁辺部に築造されている。

本報告書で報告した第 2 次調査地点は有田古墳群の 1 号墳・2 号墳にあたる。古墳の築造年代・墳丘の形態や性格を把握するために実施したトレンチによる調査結果から、古墳時代中期に比定される円墳であることが判明した。墳丘には葺石の痕跡が認められたが、1 号墳・2 号墳ともに主体部は盜掘により石棺が破壊され抜き取られた状態だった。また、2 号墳の裾から 5m 程離れた場所に石蓋土壙墓が検出され、古墳との関連性が強いと考えられるものである。1 号墳・2 号墳の南東約 40m の地点に位置する第 88 次調査地点では 3 号墳・4 号墳とした古墳時代後期に比定される周溝を持つ円墳の痕跡が確認されている。1 号墳・2 号墳と 3 号墳・4 号墳の周溝の有無の違いに関しては、①築造時期の差異、②築造場所の立地環境の違いなどが考えられる。さらに、3 号墳・4 号墳の南側にはマウンド 2 と呼んでいる比高差 1.5m の高まりがあり、これについても古墳であった可能性が想定されている。

なお、横尾遺跡第 2 次調査地点 (有田古墳 1 号墳・2 号墳) の南側にあたる横尾遺跡第 92 次調査地点 (『横尾遺跡 7』2013) では古代の遺構が検出されていることから、古墳の痕跡は確認されず、1 号墳・2 号墳の南側には当初から古墳は存在していないものと考えられる。また、横尾地区では七塚が存在していたという伝承があり、今回の調査成果はこうした伝承を裏付けるものと考えられる。

(2) 古代 (第 124 図)

鶴崎台地上には掘立柱建物跡をはじめとする竪穴遺構、道路状遺構、方形周溝遺構、溝状遺構、粘土採掘坑等の多種多様な遺構が分布している。

第 1 次調査地点では、9 世紀中頃～後半頃の廃棄土坑、10 世紀代の掘立柱建物跡と溝状遺構が検出された。9 世紀代の廃棄土坑は一様に調査区東側から検出されているが、調査区内から同時期の建物遺構は検出されなかった。10 世紀代の掘立柱建物跡と溝状遺構は、建物と溝状遺構の主軸がほぼ直交する関係にあり、両者の間には密接な関わりがあったことが考えられる。

第 79 次調査地点では、古代の道路状遺構 SF185 が検出された。連続して連なる柱穴がほぼ平行して 2 列に構築され、その空間を道路として使用したものである。柱穴列と柱穴列の間からは古代の遺構は検出されておらず、空閑地となっている。こうした事例としては、佐賀県神埼市の塚原遺跡^(註)において 9 世紀後半代に位置づけられる道路状遺構にも類例を見る事ができる。SF185 は調査区の北側で東西に延び、調査区中央北側で南に屈曲する。この地点の柱穴 SX135・SX140 からは柱抜き取り後に土師器壊が埋置された状態で確認された。これは古代官道をはじめとした道路状遺構の交差点や三叉路の路面中央部に認められる土器埋納行為と考えられ、東

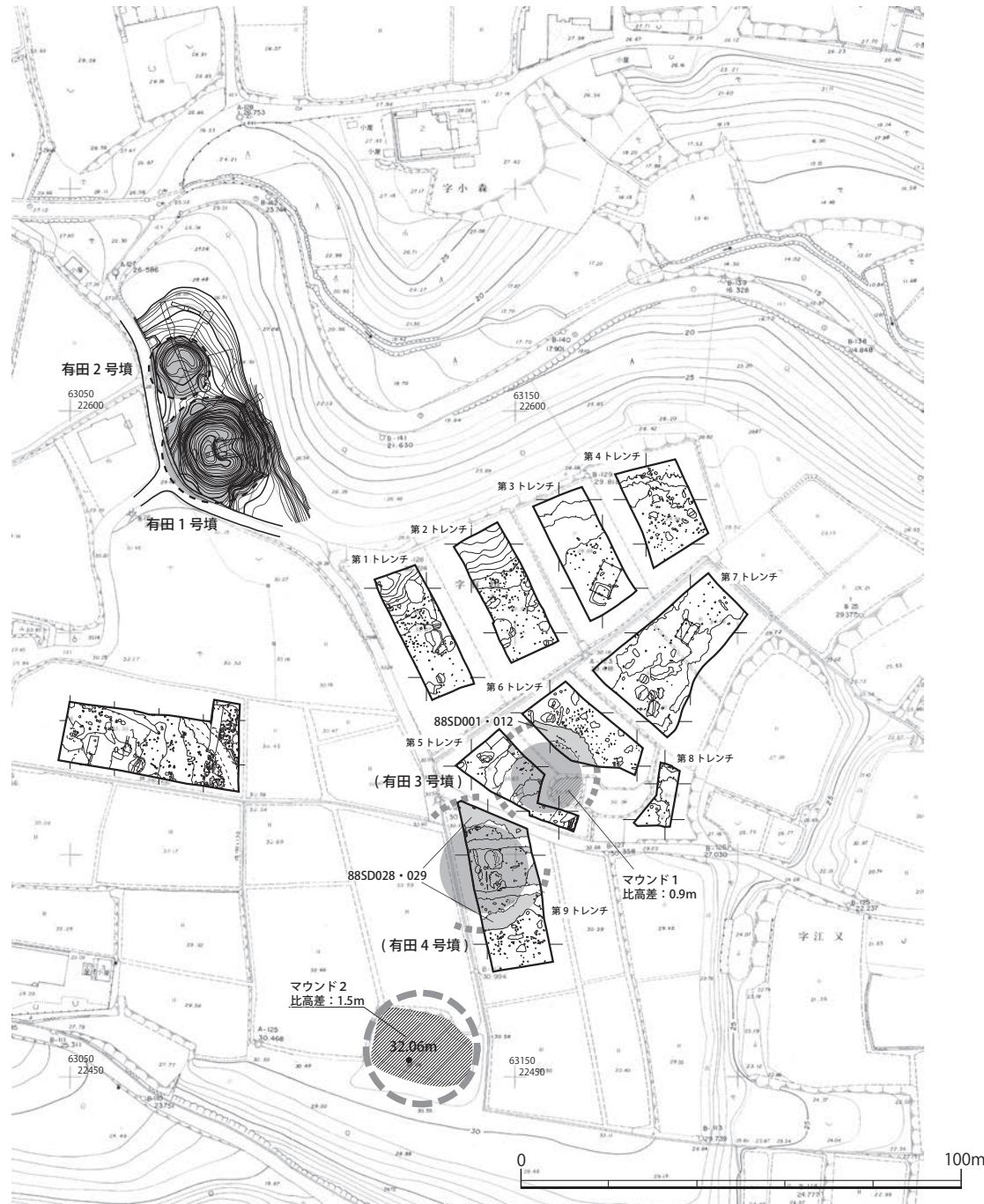
西道が南方への屈曲部から、さらに西へと延びる可能性が高い。また、南に延びたSF185の南端は、柱痕の間隔が裾広がりになっており、この地点で再び道が分岐している可能性を示唆している。また、第79次調査地点南側からは木棺墓(ST050)が検出されているが、これは道路状遺構SF185の廃絶段階に造営された墓壙である。

このような現象については、墳墓の立地を規制した「喪葬令」皇都条にある「凡皇都及道路側近。並不得葬埋。」の条文との関連が示唆される遺構である。

(註) 神埼町教育委員会 1995『塚原遺跡』神埼町文化財調査報告書 第44集

(3) 中世(第125・126図)

横尾遺跡では14世紀前半頃～16世紀後半頃まで墓域や掘立柱建物跡とその周囲に溝が付随した屋敷地等が形成され、その間に間隔をあけて戦国時代の方形館跡が分布している。これまでの調査で、戦国末期に築造された方形館は4基確認されている。



第123図 有田古墳周辺遺構配置図(1/1,500)

方形館跡②は、第 68 次調査地点・第 84 次 B 区調査地点・第 139-1 次調査地点で確認された、1 辺約 50m の館跡である。区画溝からは景德鎮窯系青花の碗・皿、中国産陶器の小壺、備前産陶器の擂鉢、土師器皿 C などが出土しており、廃絶時期は 16 世紀末と考えられる。

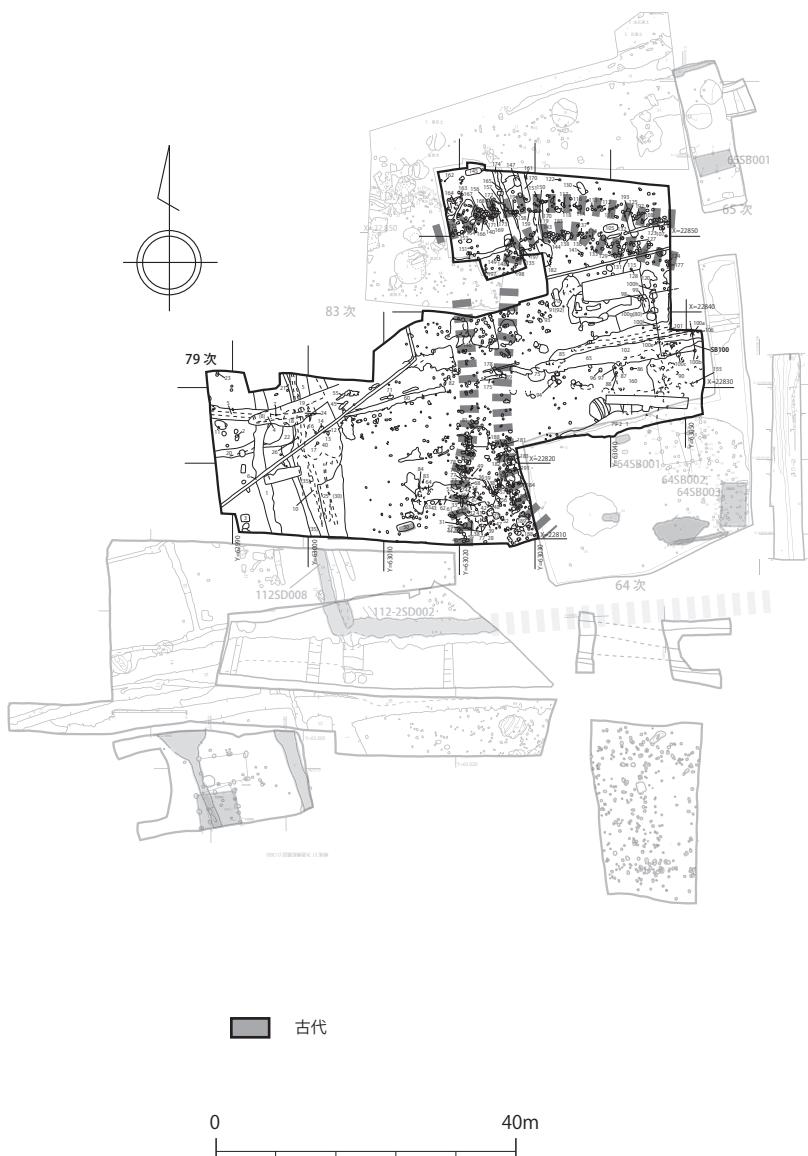
方形館③は、第 67 次調査地点・第 70 次調査地点・第 139-2 調査地点で確認された 1 辺約 30m の館跡である。他の方形館跡と比べ規模が小さく、館内の中心に掘立柱建物跡 8 棟が柱筋を揃えて重複して密集しており、建物の配置が複雑である。この建物跡群は配置状況から断続的に建て替えが行われたものと考えられる。区画溝からは景德鎮窯系青花碗・皿、龍泉窯系青磁の碗・盤・香炉、朝鮮王朝産陶器碗・瀬戸美濃産天目碗、軒平瓦・丸瓦、茶臼と考えられる石臼片などが出土しており、廃絶時期は 16 世紀後半～末頃と考えられる。

方形館④は、第 144 次調査地点で確認された館跡である。現状、館内からは身面積 70 m²を越える可能性がある大型の建物跡が検出されている。区画溝からは、土師器皿 C や中国産染付碗 E 群などが出土しており、廃絶時期は 16 世紀後半頃と考えられる。

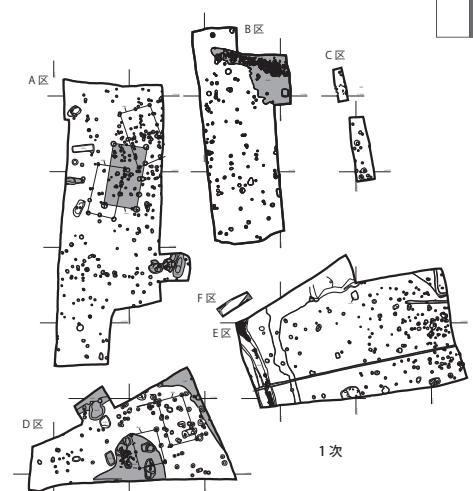
これら 3 基の方形館跡に加え、4 基の方形館跡の中でも約半町を越えると推定されていた方形館①の規模はこれまで確定されていなかった。今回報告した第 79 次調査地点と第 81 次調査地点から検出された溝は、方形館①の北側と西側の溝である。この 2 つの溝が検出されたことで、第 79 次調査地点の東側に隣接する第 64 次調査地点・第 65 次調査地点・第 66 次調査地点とさらにその東側に位置している第 63 次調査地点からは方形館の

溝は検出されていないことから、方形館①の推定規模「約半町」を越える 1 辺約 70m 四方の方形館であることが判明した。また、第 64 次調査地点、第 79 次調査地点からは平行がほぼ同じ方向を指向している中世の掘立柱建物跡が検出されており、これらの掘立柱建物跡はこの方形館①の中に築造されていた建物であると考えられる。さらに、既に過去に報告されている第 112-2 次調査地点では、方形館の南側を区切る溝の南西角が途切れ、土橋状に掘り残されていることが確認されており、方形館①の出入り口として使用されていたと考えられる。

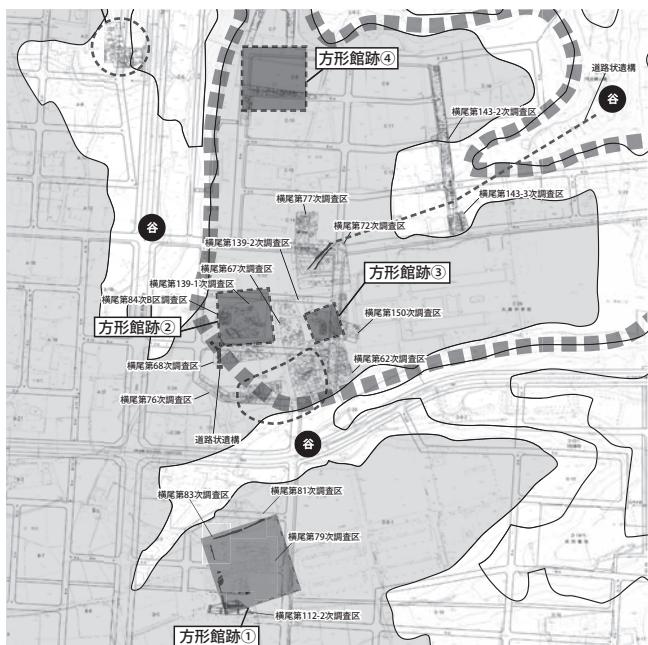
また、これら方形館跡の周辺からは同時期の道路状遺構が検出されている。第 77 次調査地点・第 78 次調査地点では、方形館跡③の北側



第 124 図 古代の遺構分布図 (1/1,000)

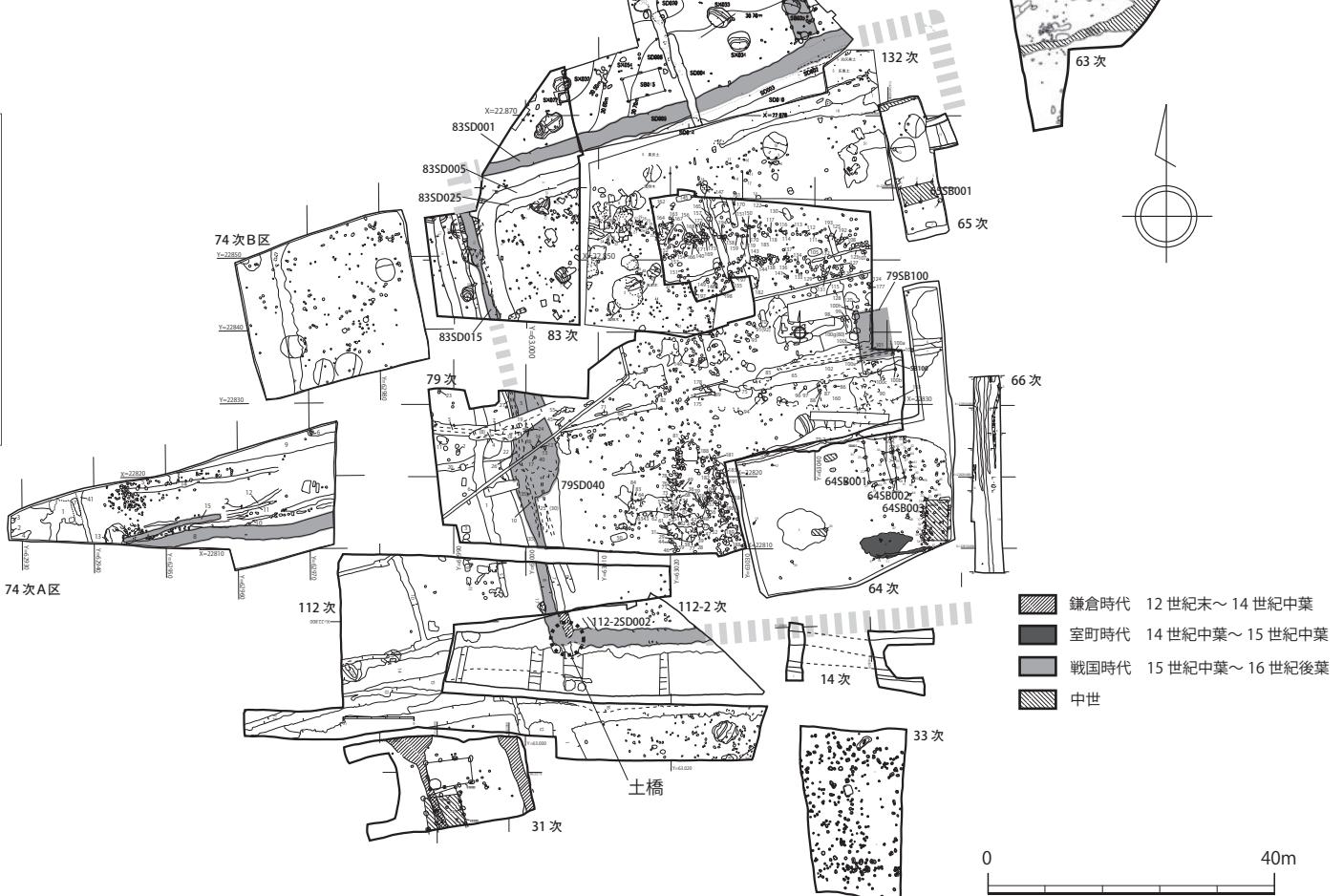
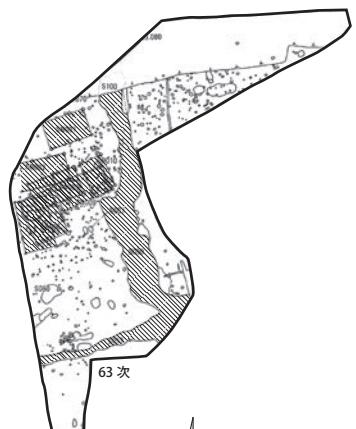


を南西から北東に斜行して延びる、16世紀後半～末頃に廃絶したと考えられる道路状遺構が検出された。この道路状遺構の延長線上には方形館跡②・③が位置している。さらに、方形館跡②の南に位置する第68次調査地点では谷に向かって南北方向に延びる、16世紀末～17世紀初頭に廃絶したと考えられる道路状遺構が検出されている。若干の時期差はあるものの、この谷へと向かう道路状遺構は谷を回り込む形で第74次調査地点で検出された溝状遺構SD008と繋がり、方形館跡①へと続く可能性も考えられる。



第125図 中世の方形館分布図

横尾遺跡には、古代の道路状遺構の他に、中世や近世、幕末期～近代の道路状遺構が存在する。第66次調査地点で検出された16世紀末～17世紀末の道路状遺構SF001は第65次調査地点から検出された溝状遺構SD011と同一の遺構であると考えられる。また、南北に延びるこの道路状遺構は第64次調査地点の東側で検出された溝状遺構SD015と切り合い関係、あるいは同一の道路であった可能性が考えられる。



第126図 中世の遺構分布図(1/1,000)

第3表 第1次調査区出土遺物観察表①

図版番号	区域	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
					口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第13図-1	A区	SB002	須恵器	碗	(12.5)	2.8+a	-	-	灰色	白色粒子	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ			R019
第13図-2	A区	SB002c (SP082)	土師器	坏	-	4.2+a	-	-	暗橙色・黒色	石英・長石・角閃石	ミガキ	ミガキ			R042
第13図-3	A区	SB002f (SP102)	黑色土器	碗C	-	3.7+a	(7.0)	-	黒色・淡黄橙色	石英・長石・角閃石・赤色粒子	ミガキ	回転ナデ・ヘラケズ り後回転ナデ・高台 貼り付け後ナデ・ ナデ	A類		R048
第13図-4	A区	SB002e (SP095)	土師器	坏	-	3.9+a	-	-	淡橙色・黒色	石英・長石	ミガキ	ミガキ			R046
第13図-5	A区	SB002e (SP095)	土師器	蓋	14.3	2.4	6.6	-	淡明黄褐色	石英・角閃石・赤色 粒子・黒雲母	不定方向のナデ・回 転ナデ	ヘラ切り離し・回転 ナデ	外面赤色塗彩の痕 跡あり		R037
第13図-6	A区	SB002g (SP091)	黑色土器	碗C	-	2.6+a	(8.4)	-	橙茶色・黒色	石英・長石・角閃石	ミガキ	ミガキ・ヨコナデ・ ケズリ	A類		R044
第13図-7	A区	SB003a (SP035)	土師器	坏	-	1.7+a	(9.8)	-	淡黄橙色	石英・角閃石・赤色 粒子	ナデ	ナデ・糸切り離し後 工具ナデ	中世		R028
第13図-8	A区	SB003k (SP036)	土師器	坏	-	1.5+a	(9.8)	-	淡灰色・ 淡黄橙色	石英・角閃石・赤色 粒子	不定方向の工具ナ デ・ヨコ方向の工具 ナデ	ヨコ方向のナデ・ナ デ			R029
第13図-9	A区	SB003d (SP022)	瓦質土器	鍋	(30.4)	9.3+a	-	-	淡灰黄色・ 暗茶褐色	角閃石	指オサエ後工具によ るヨコ方向のナデ	ヨコナデ・ナデ	外面に煤付着		R023
第13図-10	A区	SK001	土師器	皿	(18.4)	3.1	(14.6)	-	淡赤橙色	石英・長石・角閃石	ミガキ	ミガキ	塗彩か		R012
第13図-11	A区	SK001	土師器	皿	(18.3)	3.3	(14.0)	-	淡橙色	石英・長石・角閃石	ミガキ	ミガキ	塗彩か		R013
第13図-12	A区	SK001	土師器	坏	(11.3)	3.5	(7.4)	-	淡橙色	角閃石・赤色粒子	ナデ	ナデ・ヘラ切り離し 痕			R009
第13図-13	A区	SK001	土師器	坏	(13.0)	3.6	(9.8)	-	淡橙色	赤色粒子	回転ナデ	回転ナデ・赤色塗彩	外面赤色塗彩の痕 跡あり		R007
第13図-14	A区	SK001	土師器	高台付 坏	(16.0)	4.9+a	-	-	橙色	石英・長石・角閃 石・赤色粒子	回転ヨコナデ後工具 ミガキ	回転ヨコナデ後工具 ミガキ・ヘラ切り離 し痕			R008
第13図-15	A区	SK001	土師器	碗	14.0	4.5	-	-	赤橙色	石英・角閃石	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・ヘラ 切り離し後多方向の ナデ			R011
第13図-16	A区	SK001	土師器	甕	(24.4)	7.8+a	-	-	淡明褐色	石英	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ目	企救甕	甕b	R006
第13図-17	A区	SK001	土師器	甕	(29.0)	10.5+a	-	-	淡橙茶色	石英・長石・角閃 石・赤色粒子	ヨコナデ・カキ目風 コナデ・ヨコ方向の 工具ナデ	ヨコナデ・カキ目風 ハケ目			R015
第13図-18	A区	SK001	土師器	甕	-	8.6+a	-	-	暗橙色	石英・長石・角閃石	指オサエ後ナデ	ナデ			R014
第13図-19	A区	SK001	土師器	甕	-	10.7+a	-	-	淡茶黄色	石英・長石・角閃石	ヨコナデ	不定方向の工具ナ デ・摩耗			R005
第14図-20	A区	SK001	土師器	移動式 カマド	-	26.9	-	-	淡橙褐色	石英・長石・角閃 石・白色粒子	ヨコナデ	指で成形後ヨコナ デ・回転ナデ	P-1		R001
第14図-21	A区	SK001	須恵器	蓋	(19.4)	3.2	-	-	黄灰色・灰黄色	茶色粒子・白色粒子	不定方向のナデ・回 転ヨコナデ	ヘラケズリ・回転ヨ コナデ	P-2		R002
第14図-22	A区	SK001	須恵器	長頸壺	-	8.5+a	10.8	-	淡灰色	石英・長石	ヨコナデ・回転ヨコ ナデ・タタキ	回転ヨコナデ・回転 ヨコナデ後ナデ	P-3		R003
第14図-23	A区	SK001	須恵器	短頸壺	最大径 (19.0)	8.9+a	-	-	淡灰色・灰黑色	長石	指オサエ後ナデ・ヨ コナデ	工具によるヨコナ デ・回転ヨコナデ後 手持ちによる縱方向 のケズリ・不定方向 のケズリ	窓壁と自然釉が付 着		R010
第14図-24	A区	SK001	須恵器	甕	(21.4)	41.2	-	-	灰黑色	長石	タタキ・ヨコナデ	タタキ・ヨコナデ	P-6 奈良		R004
第14図-25	A区	SK002	土師器	坏	-	3.0+a	-	-	淡橙茶色	石英	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ			R016
第14図-26	A区	SK002	土師質土器	鍋	-	2.3+a	-	-	茶橙色	石英・長石	不定方向のナデ	ヨコナデ			R017
第14図-27	A区	SD001	土師器	甕	-	5.1+a	(18.5)	-	淡黄橙色	石英・角閃石・赤色 粒子	指オサエ後ヨコ方 向の工具ナデ	ヨコ方向の工具ナデ	9C代		R074
第14図-28	A区	SD001	土師器	甕	-	7.1+a	-	-	淡黄橙色	長石・角閃石・赤色 粒子	指オサエ後ナデ	ナデ	9C		R075
第14図-29	A区	SD001	土師器	甕		6.0+a	-	-	淡黄橙色・ 黄橙色	石英・赤色粒子	指オサエ後ナデ	ナデ	把手		R073
第14図-30	A区	SP018	土師器	小皿	(6.0)	1.2	(5.0)	-	淡橙黄色	石英・長石・赤色粒 子	摩耗の為不明	摩耗の為不明			R022
第14図-31	A区	SP027	土製品	土鍋	4.9	0.9	-	5.0	淡橙褐色	長石	-	ナデ・指オサエ			R025
第14図-32	A区	SP034	土製品	土鍋	3.1+a	1.1	-	5.0	淡黄橙色	長石	-	ナデ・指オサエ			R027
第15図-33	A区	SP040	白磁	碗	(9.3)	3.4+a	-	-	透明釉	精織	施釉・鉄釉か	施釉・鉄釉か	口縁部に鉄釉か		R030
第15図-34	A区	SP053	土師器	高台付 坏	-	1.0+a	(7.1)	-	赤橙色・ 明赤橙色	角閃石・赤色粒子	不定方向のナデ	回転ヨコナデ・工具 ナデ			R031
第15図-35	A区	SP056	土師器	甕	(21.6)	4.3+a	-	-	赤橙色・ 暗赤橙色	石英・角閃石	ナメ方向のハケ 目・ヨコ方向のナデ	ヨコ方向のナデ・指 オサエ後ナメ方向の ハケ目	企救甕		R032
第15図-36	A区	SP070	土製品	土鍋	4.7	1.5	-	10.0	淡明橙色	石英・長石・角閃石	-	ナデ			R034
第15図-37	A区	SP071	白磁	端反皿	(11.8)	2.3+a	-	-	透明釉	精織	施釉・露胎	施釉・露胎	口縁部端剥ぎ		R036
第15図-38	A区	SP073	土製品	土鍋	3.6+a	1.0	-	4.5	暗橙色	長石	-	ナデ			R038
第15図-39	A区	SP074	土師器	甕	-	2.6+a	(22.8)	-	暗黄橙色	石英・長石・角閃 石・赤色粒子	ヨコナデ	ヨコナデ・不定方 向のハケ目			R040
第18図-1	B区	SD002	土師器	蓋	-	2.4+a	-	-	淡明橙色	石英・長石	ナデ	ナデ	8C末~9C初頭		R058
第18図-2	B区	SD002	土師器	蓋	(19.4)	2.8+a	-	-	明赤橙色	石英・角閃石・赤色 粒子	回転ナデ	回転ナデ	9C前半		R052
第18図-3	B区	SD002	土師器	坏	(12.2)	3.5	(8.9)	-	淡明赤橙色	石英・角閃石・赤色 粒子	回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り 離し後ナデ	9C前半		R053
第18図-4	B区	SD002	土師器	坏	(15.3)	3.7	(10.8)	-	淡赤橙色・ 淡黄橙色	石英・角閃石・赤色 粒子	回転ナデ・不定方 向のナデ	回転ナデ・ヘラ切り 離し後ナデ	9C前半		R067
第18図-5	B区	SD002	土師器	坏	(14.1)	4.6	(9.8)	-	淡橙茶色	石英・角閃石・赤色 粒子	回転ナデ・不定方 向のナデ	回転ナデ・ヘラ切り 離し後ナデ			R066
第18図-6	B区	SD002	黑色土器	碗	-	2.0+a	7.0	-	淡黒色・ 淡根褐色	角閃石	ミガキか	ヨコナデ・ヘラ切り 離し後ナデ	9C	A類	R063
第18図-7	B区	SD002	土師器	壺	-	7.2+a	-	-	暗橙色	石英・長石・角閃石	ヨコ方向のナデ・ヨ コ方向のハケ目・ナ デ	ヨコ方向のナデ・指 オサエ後ヨコ方向の ハケ目・指オサエ後 ナデ	回転台使用か		R064
第18図-8	B区	SD002	土師器	壺	(27.0)	12.9+a	-	-	淡明橙色	石英・角閃石・赤色 粒子	ナデ	ナデ			R059

第4表 第1次調査区出土遺物観察表②

図版番号	区域	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
					口径/最大長	高さ/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第18図-9	B区	SD002	土師器	甕	(19.5)	8.2+α	-	-	淡根茶色・暗根茶色	長石・角閃石・白色粒子	回転ナデ	回転ナデ			R065
第18図-10	B区	SD002	土師器	移動式力マド	-	5.1+α	-	-	橙色	石英・長石・角閃石	ナデ・タテ方向のナデ	ナデ			R062
第18図-11	B区	SD002	須恵器	短頸壺	(17.3)	5.6+α	-	-	灰白色	石英	ヨコナデ	指で成形後ヨコナデ・回転ナデ			R057
第18図-12	B区	SD002	須恵器	短頸壺	-	11.7+α	12.0+α	-	灰白色	石英	回転ナデ・貼り付け 後不定方向のナデ・ 不定方向のナデ	水引き成形後回転へ ラナデ・回転ヘラケ ズリ	高台剥落		R056
第18図-13	B区	SD002	綠釉陶器	不明	-	1.5+α	-	-	綠黄色	精緻	露胎	施釉			R060
第18図-14	B区	SD002	土製品	土鍋	5.9+α	1.6	-	10.0	淡茶褐色	角閃石・赤色粒子	-	ナデ・指オサエ			R054
第18図-15	B区	SD002	土製品	土鍋	3.6	1.3	-	3.0	淡暗黄褐色	長石・赤色粒子	-	ナデ			R055
第18図-16	B区	SD002	石器	石鍔	1.8+α	0.9+α	0.2	-	灰白色	-	-	-	チャート		R071
第18図-17	B区	SP137	土師器	甕	(15.2)	4.1+α	-	-	暗茶褐色・赤褐色	石英・角閃石・赤色粒子	回転によるヨコ方向の工具ナデ・ナデ	回転ナデ・回転によるヨコ方向の工具ナデ・ナデ			R076
第18図-18	B区	SP	土師器	坏	13.0	4.0	10.0	-	淡赤褐色・赤褐色	石英・角閃石・金雲母	不定方向のナデ・回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り離し後ナデ	出土地不明		R072
第24図-1	D区	SB005g (SP154)	青白磁	蓋	(3.8)	1.6	1.7	-	淡青色	精緻	露胎・施釉	施釉	中世(前期)		R126
第24図-2	D区	SK013	土師器	高台付坏	-	2.5+α	(10.0)	-	白灰色	角閃石・赤色粒子	ナデ	摩耗の為不明			R118
第24図-3	D区	SK014	土師器	坏	(17.8)	5.2	-	-	淡赤褐色	石英・白色粒子	ヨコナデ・不定方向のナデ	ヨコナデ・ヨコ方向のナデ			R120
第24図-4	D区	SK014	土師器	甕	(17.0)	9.7+α	-	-	淡赤茶色・赤茶色	石英・長石・白色粒子	ヨコナデ	ヨコナデ・ヨコ方向の回転/ハケ目後ナデ			R119
第24図-5	D区	SD002	瓦質土器	鍋	-	4.5+α	-	-	淡灰色	白色粒子	ナデか	ナデか	内外ともに摩滅著しい		R107
第24図-6	D区	SD002	青磁	碗	(11.3)	2.4+α	-	-	淡青緑色	精緻	施釉	施釉			R106
第24図-7	D区	SX001	土師器	蓋	-	2.0+α	-	-	橙色	石英・角閃石・白色粒子・赤色粒子	ヨコナデ	ナデ			R100
第24図-8	D区	SX001	土師器	蓋	(14.7)	2.2+α	-	-	明赤褐色	石英・赤色粒子	ミガキ	回転ヘラケズリ後ミガキ・ヨコナデ	8C末～9C初頭		R095
第24図-9	D区	SX001	土師器	蓋	(19.2)	2.3+α	-	-	赤褐色	石英・角閃石・赤色粒子	回転ナデ	ミガキ	8C末～9C初頭		R096
第24図-10	D区	SX001	土師器	坏	12.9	3.8	9.1	-	明橙色	石英・長石・雲母	不定方向のナデ・回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り離し後ナデ			R078
第24図-11	D区	SX001	土師器	坏	(14.3)	3.4	(10.4)	-	淡赤褐色	石英・角閃石・金雲母	不定方向のナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラ切り離し後ナデ			R087
第24図-12	D区	SX001	土師器	坏	(16.2)	3.8	(11.1)	-	淡赤褐色	石英・角閃石・金雲母	不定方向のナデ・指オサエ・ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラ切り離し	粘土重ね痕あり		R099
第24図-13	D区	SX001	土師器	高台付坏	-	1.2+α	(9.6)	-	赤褐色	長石・角閃石・赤色粒子	回転によるミガキ・高台貼り付け後ナデ	回転によるミガキ・高台貼り付け後ナデ			R115
第24図-14	D区	SX001	土師器	高台付坏	-	2.2+α	(9.7)	-	赤褐色	石英	ヨコナデ	ヨコナデ・高台貼り付けナデ			R098
第24図-15	D区	SX001	土師器	高台付坏	(11.9)	3.6	(8.1)	-	淡緑灰色・淡灰色	角閃石・赤色粒子	回転ナデ後ヨコナデ・回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り離し後ナデ・高台貼り付け			R112
第24図-16	D区	SX001	土師器	高台付坏	(15.7)	4.3+α	(10.2)	-	淡黄橙色	石英・角閃石・赤色粒子	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り離し・高台貼り付け			R080
第24図-17	D区	SX001	土師器	高台付坏	-	2.7+α	(11.4)	-	赤褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ・ヨコナデ・ヘラ切り離し後ナデ			R092
第24図-18	D区	SX001	土師器	甕	(17.8)	12.6	-	-	淡赤褐色・赤褐色	石英・角閃石	ヨコナデ・ナメ方向のナデ・不定方向のナデとヘラによる力目	ヨコナデ・ヘラガキ・ナデ	口縁部煤付着		R090
第24図-19	D区	SX001	土師器	甕	(16.9)	5.5+α	-	-	暗黄橙色・赤褐色	石英・角閃石・赤色粒子	ナデ・回転ナデ	回転ナデ			R081
第24図-20	D区	SX001	土師器	甕	(19.0)	7.9+α	-	-	淡灰黄色・淡黄橙色	石英・角閃石・赤色粒子	ナデ・指オサエ後ヨコナメ方向のナデ	ナデ	8C後半		R093
第24図-21	D区	SX001	土師器	甕	28.9	26.4+α	-	-	淡黄橙色	石英・長石・角閃石・赤色粒子	指オサエ後タキ後ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・タキ後不定方向のナデ後回転ナデ			R082
第25図-22	D区	SX001	土師器	甕	(32.6)	7.9+α	-	-	淡黄褐色	石英・長石・赤色粒子	不定方向の工具調整後ナデ・ヨコ方向の工具調整後ナデ	ヨコ方向の工具調整後ナデ・不定方向の工具調整後ナデ			R091
第25図-23	D区	SX001	土師器	甕	(23.8)	18.3	(11.0)	-	淡黄橙色	石英・角閃石・赤色粒子	タタキ後工具によるヨコナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ヨコ方向のハケ目			R086
第25図-24	D区	SX001	土師器	甕	(16.5)	7.0+α	-	-	淡黄褐色	石英・角閃石・赤色粒子	工具によるヨコナデ	ヨコナデ・回転工具後不定方向のナデ			R083
第25図-25	D区	SX001	土師器	甕	-	3.6+α	-	-	暗赤茶色	石英・長石・雲母	ヨコ方向の工具ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ	8C末～9C初頭 企数甕		R114
第25図-26	D区	SX001	土師器	甕	-	6.0+α	(17.0)	-	赤褐色	石英・長石・角閃石	工具による調整の後ヨコ方向の工具ナデ	工具によるヨコナデ・ナメ方向のハケ目後ナデ	8C後半		R094
第25図-27	D区	SX001	土師器	甕	29.4	29.0	18.9	-	淡赤褐色	石英・角閃石・赤色粒子	タタキ(当て具)後工具による調整後不定方向の工具ナデ	回転によるヨコ方向の工具ナデ・ナデ			R089
第26図-28	D区	SX001	土師器	甕	-	18.3+α	(17.0)	-	淡黄褐色	石英・角閃石	タタキ(当て具)後ナデ指オサエ・タタキ後ナデ	不定方向の工具調整後ナデ			R088
第26図-29	D区	SX001	土師器	甕	(31.0)	25.4	(16.9)	-	淡黄橙色	石英・角閃石・赤色粒子	ナデ・タタキ後ナデ(青海波文)	ナデ・タタキ後工具ヨコナデ			R084
第26図-30	D区	SX001	土師器	甕	-	19.0+α	(17.6)	-	赤褐色・淡赤褐色	角閃石	タテ方向の工具調整	タタキ後ヨコ方向のナデ			R085
第26図-31	D区	SX001	須恵器	蓋	(13.8)	2.3	(9.8)	-	淡灰色・暗灰色	角閃石	回転ナデ	ヘラ切り離し後ナデ・回転ナデ	9C初頭		R116
第26図-32	D区	SX001	須恵器	壺	-	2.0+α	(10.9)	-	灰白色	黒色粒子・白色粒子	回転ナデ	回転ナデ・不定方向のナデ			R079
第26図-33	D区	SX001	須恵器	甕	(41.2)	6.0+α	-	-	灰色	黒色粒子・白色粒子	不定方向のナデか・回転ナデ	回転ナデ			R097

第5表 第1次調査区出土遺物観察表③

図版番号	区域	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
					口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第26図-34	D区	SX001	製塙土器		-	3.0+a	-	-	暗赤茶色	石英	布目	指オサエ	二次被熱あり		R117
第26図-35	D区	SX001	土製品	土錐	6.7	1.5	-	11.0	淡赤橙色	角閃石	-	ナデ			R101
第26図-36	D区	SX001	土製品	土錐	5.2	1.4	-	9.0	淡黄褐色	赤色粒子	-	ナデ・指オサエ			R102
第26図-37	D区	SX001	土製品	土錐	4.8	1.4	-	9.5	赤橙色	石英	-	ナデ			R103
第26図-38	D区	SX001	鉄製品	不明	7.1+a	3.8+a	0.2	50.3	-	-	-	-			R104
第26図-39	D区	SX001	石製品	砾石	5.6	4.4	2.7	-	白灰色	-	-	-	-		R105
第26図-40	D区	表土一括	須恵器	甕	(21.6)	7.0+a	-	-	灰色・褐茶色	角閃石	回転ナデ・タタキ痕	回転ナデ・タタキ痕			R123
第26図-41	D区	表土一括	石器	石鏃	2.8	1.8	0.5	-	-	-	-	-			R124
第27図-42	D区	SP164	土師器	甕	-	4.6+a	-	-	橙色	石英・長石・角閃石・橙色粒子・白色粒子・黒色粒子	ナデ	ナデ後指オサエ	把手		R177
第27図-43	D区	SP166	白磁	碗	(12.8)	3.3+a	-	-	灰白色	精緻	施釉	施釉	15~16C		R178
第27図-44	D区	SP168	龍泉窯系青磁	碗	(14.5)	3.5+a	-	-	淡青緑色	精緻	施釉	施釉	14C~		R179
第27図-45	D区	SP169	瓦質土器	鍋×鉢	-	2.9+a	-	-	暗灰茶色～淡茶色	雲母か・橙色粒子・白色粒子	ハケ目	ナデ			R180
第27図-46	D区	SP181(202)	国産陶器	天目碗	11.4	5.7	4.2	-	鉄釉	精緻	施釉	施釉・露胎			R185
第27図-47	D区	SP182	土師器	皿C	(12.0)	2.2+a	-	-	淡黄褐色	赤色粒子	ナデ	ナデ			R182
第31図-1	E区	SK019	土師器	小皿	8.2	1.4	6.5	-	淡黄褐色	金雲母・茶褐色粒子	ヨコナデ	ヨコナデ・糸切り離し			R168
第31図-2	E区	SK019	鉄製品	釘	2.3+a	0.8	-	-	-	-	-	-			R169
第31図-3	E区	SK019	鉄製品	釘	4.0+a	1.2	-	-	-	-	-	-			R170
第31図-4	E区	SK019	鉄製品	釘	3.8+a	1.0	-	-	-	-	-	-			R171
第31図-5	E区	SD003	土師器	坏	-	2.0+a	(4.8)	-	淡赤褐色	石英・角閃石・赤色粒子	ナデ・回転ヨコナデ・糸切り離し	回転ヨコナデ・糸切り離し	中世～近世		R132
第31図-6	E区	SD003	龍泉窯系青磁	碗	-	4.0+a	(5.6)	-	灰オリーブ色	精緻	施釉	施釉・露胎	高台内蛇の目釉割ぎ※釉が厚く文様不明瞭		R130
第31図-7	E区	SD003	龍泉窯系青磁	碗	-	3.1+a	(6.0)	-	淡青緑色	精緻	施釉	施釉			R137
第31図-8	E区	SD003	国産陶器	鉢	(17.7)	3.5+a	-	-	暗赤褐色	精緻	施釉・露胎	施釉			R135
第31図-9	E区	SD003	国産陶器	擂鉢	(30.8)	9.4+a	-	-	赤褐色	石英・砂粒多量	ヨコナデ・擂り目	ヨコナデ・多方向のナデ	備前		R129
第31図-10	E区	SD003	国産陶器	擂鉢	-	8.9+a	(13.4)	-	暗茶褐色	白色粒子・黒色粒子	ヨコナデ・擂り目	ヨコナデ	備前 指紋あり		R133
第31図-11	E区	SD003	国産磁器	小坏	-	1.6+a	(3.2)	-	透明釉	精緻	施釉	施釉			R134
第31図-12	E区	SD003	同安窯系青磁	碗	-	3.7+a	(5.5)	-	青緑色	精緻	施釉	施釉			R128
第31図-13	E区	SD003	国産磁器	碗	-	3.8+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉			R136
第31図-14	E区	SD003	国産磁器	碗	(11.2)	6.1	(4.0)	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	肥前		R131
第32図-15	E区	SD005	土師器	坏	(12.1)	3.2+a	-	-	赤橙色	石英・角閃石・赤色粒子	ナデ	回転ヨコナデ	中世		R143
第32図-16	E区	SD005	土師器	坏	(6.9)	2.7	(10.8)	-	暗赤褐色	長石・角閃石	ナデ	回転ヨコナデ・糸切り離し	14C代		R145
第32図-17	E区	SD005	龍泉窯系青磁	碗	-	2.2+a	(4.8)	-	淡青緑色	精緻	施釉	施釉・露胎	蓮弁文		R152
第32図-18	E区	SD005	景德鎮窯系青花	皿	-	1.6+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	高台内に焼成時付着物を剥がした痕跡あり		R150
第32図-19	E区	SD005	国産陶器	陶胎染付碗	-	3.4+a	(4.6)	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	肥前		R155
第32図-20	E区	SD005	国産陶器	擂鉢	-	4.0+a	-	-	灰色	角閃石	回転ナデ・擂り目	回転ナデ	16C代		R156
第32図-21	E区	SD005	土製品	双孔棒状土錐	4.4+a	0.9	-	-	淡赤橙色	赤色粒子	-	ナデ			R141
第32図-22	E区	SD005	土製品	双孔棒状土錐	4.7+a	1.1	-	-	淡赤橙色	赤色粒子・白色粒子	-	ナデ			R142
第32図-23	E区	SD005	土製品	土錐	4.0+a	1.0	-	5.0	淡赤褐色	白色粒子	-	ナデ	塗彩か		R139
第32図-24	E区	SD005	土製品	土錐	4.2	1.6	-	11.0	淡赤褐色	角閃石・赤色粒子	-	ナデ			R140
第32図-25	E区	SD006	白磁	皿	(13.0)	2.1+a	-	-	灰白色釉	精緻	施釉	施釉	16C 出土地不明		R163
第32図-26	E区	SD006	景德鎮窯系青花	碗	-	1.9+a	(4.2)	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	出土地不明		R157
第32図-27	E区	SD006	鉄製品	刀子	7.4	1.9	0.3	-	-	-	-	-	出土地不明		R165
第32図-28	D区	SP149	土師器	皿C	9.2	2.0	-	-	淡黄褐色	角閃石・黒色粒子	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ・指オサエ	16C		R173
第32図-29	D区	SP149	土師器	皿C	9.0	1.6	-	-	淡黄褐色	角閃石・黒色粒子	ナデ	ナデ・指オサエ			R174
第32図-30	D区	SP149	土師器	坏B×C	8.7	1.9	-	-	淡褐色	滑石粒子	ナデか	ナデか・糸切り離し			R175
第32図-31	D区	SP149	土師器	皿C	8.8	1.9	-	-	淡黄褐色	角閃石・黒色粒子	ナデ	ナデ・指オサエ	16C		R176
第32図-32	E区	南東	土師器	坏	(13.9)	3.5	(10.2)	-	赤褐色	石英・角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラ切り離し	8C代		R172

第6表 第2次調査区出土遺物観察表①

図版番号	遺構番号	種別	器種	口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)	色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
										内面	外面			
第41図-1	1トレフ	鉄製品	劍	18.6+a	3.3	0.7	-	-	-	-	-	P-2		R019
第41図-2	1トレフ	鉄製品	劍	8.7+a	2.8	0.7	-	-	-	-	-	P-1		R018
第41図-3	2トレフ北東	土師器	壺	(15.1)	4.6+a	-	-	黄褐色	石英・角閃石・金雲母・黒色粒子	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ			R002
第41図-4	5トレフ	土師器	移動式力マド	-	3.8+a	-	-	橙色	石英・長石・角閃石・白色粒子	ナデ	ナデ			R003
第41図-5	6トレフ	須恵器	壺	-	3.4+a	-	-	暗灰色～灰茶色	石英・白色粒子	回転ナデ	回転ナデ・把手・自然釉			R004
第41図-6	7トレフ	鉄製品	刀子	13.1+a	1.7	0.5	-	-	-	-	-	P-3		R021

第7表 第2次調査区出土遺物観察表②

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第41図-7	7トレフ	鉄製品	鉄矛	12.8+a	3.4	0.4	-	-	-	-	-	-		R020
第41図-8	7トレフ	石製品	勾玉	3.9	1.1	2.5	-	淡黄白色	-	-	-	メノウ製		R011
第41図-9	7トレフ	石製品	管玉	2.3	0.4	0.4	-	淡灰色	-	-	-	碧玉		R012
第41図-10	7トレフ	石製品	管玉	2.3+a	0.4	0.4	-	淡灰色	-	-	-	碧玉		R013
第41図-11	7トレフ	石製品	管玉	2.3+a	0.4	0.4	-	淡灰色	-	-	-	碧玉		R014
第41図-12	7トレフ	石製品	管玉	2.5	0.5	0.5	-	淡灰色	-	-	-	碧玉		R015
第41図-13	7トレフ	ガラス製品	ガラス玉	0.3	0.3	0.3	-	青色	-	-	-	ガラス製		R017
第41図-14	8トレフ	土師器	碗C	-	3.5+a	(8.0)	-	淡橙色	石英・長石・角閃石・赤色粒子	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・ヘラ切り離し後ナデ・ナデ			R006
第41図-15	8トレフ	須恵器	壺×はそう	-	3.8+a	-	-	暗灰色～淡灰茶色	白色粒子	回転ナデ	回転ナデ・櫛描き文・自然釉			R005
第41図-16	9トレフ	土師器	鉢	(16.1)	8.9	4.7	-	淡橙色	石英・長石・角閃石	指オサ工後不定方向のケズリ後ナデ・ナデ	指オサ工後工具によるタテ方向の調整後丁寧なナデ	3~4C		R007
第41図-17	9トレフ	須恵器	蓋	(14.0)	2.8+a	-	-	淡灰色	石英・長石・白色粒	回転ナデ	回転ナデ			R008
第41図-18	9トレフ(主体部付近盗掘坑内)	土師器	脚付鉢	-	3.7+a	(5.6)	-	暗灰色～橙色	石英・長石・角閃石・白色粒子・橙色粒子	ナデ	ナデ・指オサ工後ナデ	4C代		R009
第41図-19	1号墳北東	土師器	壺	(12.1)	5.7+a	-	-	明橙色・淡黄橙色	石英・長石・角閃石	回転ヨコナデ・指オサ工後ナデ	回転ヨコナデ・指オサ工後回転ヨコナデ	5C代		R010

第8表 第31次調査区出土遺物観察表

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第48図-1	SB002d (SP002)	国産陶器	擂鉢	-	3.6+a	-	-	暗赤茶色	白色粒子	回転ナデ	回転ナデ			R005
第48図-2	SB002e (SP001)	土師器	坏A	(12.6)	3.1	8.8	-	淡黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・糸切り離し後ナデ			R004
第48図-3	SD001	土師器	坏	(12.4)	2.8	(7.8)	-	淡橙色	長石・雲母	回転ナデ	回転ナデ・回転糸切り			R001
第48図-4	SD002	国産磁器	碗	(9.4)	3.8+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	肥前		R003
第48図-5	表採	国産磁器	碗	(12.0)	3.9+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉			R006

第9表 第34次調査区出土遺物観察表①

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第61図-1	SB002a (SP002)	土師器	坏	11.8	3.2	8.7	-	淡黄褐色	石英	工具によるヨコ方向のナデ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・糸切り離し			R082
第61図-2	SB002a (SP002)	磁器	碗か	-	1.2+a	4.4	-	透明釉	精緻	施釉	施釉			R081
第61図-3	SB002k (SP003)	弥生土器	壺	-	3.8+a	-	-	淡明黄褐色	長石・角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ			R084
第61図-4	SB002k (SP003)	白磁	皿	12.4	2.2	6.0	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	12C後半以降	白磁III-1	R083
第61図-5	SB001j (SP004)	土師器	坏	(12.7)	2.8	(8.8)	-	暗黄褐色	石英・長石・角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ・不定方向のナデ			R085
第61図-6	SK001	弥生土器	壺	-	3.5+a	-	-	淡明灰色・淡黄褐色	長石・角閃石	ヨコ方向の工具ナデ	不定方向のナデ			R077
第61図-7	SK001	弥生土器	壺	-	2.5+a	(5.4)	-	明褐色・淡褐色	長石・角閃石	指オサ工後ナデ	指オサ工後ナデ	外面赤色塗彩		R080
第61図-8	SK001	土師器	甕	(15.5)	3.6+a	-	-	淡黄褐色	長石・角閃石	指オサ工後ヨコ方向の工具ナデ	ヨコ方向の工具ナデ			R079
第61図-9	ST001	土師器	脚付皿	(11.4)	1.6+a	-	-	黄褐色	石英・角閃石・黒雲母	ナデ・ヨコナデ	指オサ工後ヨコナデ			R078
第61図-10	SD002	土師器	皿C	(11.1)	1.6+a	(6.2)	-	淡灰色～淡明黄褐色	角閃石	ナデ	ナデ			R013
第61図-11	SD002	瓦質土器	火鉢	-	4.3+a	-	-	灰色	白色粒子	回転ナデ・ケズリ後ナデ	回転ナデ			R018
第61図-12	SD002	瓦質土器	火鉢	(22.5)	12.5	18.0	-	灰色～淡橙色・淡灰色	赤色粒子・黒色粒子	多方向のナデ・ナデ	ナデ			R015
第61図-13	SD002	国産磁器	染付皿	(13.0)	3.9	(7.4)	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	肥前		R003
第61図-14	SD002	国産磁器	染付碗	(10.2)	5.0	(3.8)	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	肥前		R002
第61図-15	SD002	国産磁器	染付碗	-	5.5+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	肥前		R004
第61図-16	SD002	国産磁器	染付碗	(10.8)	8.0	(4.9)	-	明緑灰色	精緻	施釉	施釉・露胎	肥前		R001
第61図-17	SD002	国産磁器	染付碗	(9.4)	2.5+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	肥前		R011
第61図-18	SD002	国産磁器	染付碗	-	3.6+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	肥前		R010
第61図-19	SD002	国産磁器	染付碗	(10.2)	3.0+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	肥前		R008
第61図-20	SD002	国産磁器	碗	-	3.0+a	4.0	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎			R006
第61図-21	SD002	国産磁器	鉢	(35.6)	4.5+a	-	-	茶褐色・灰緑色	精緻	回転ナデ	回転ナデ			R007
第62図-22	SD002	国産陶器	蓋	(9.2)	1.9	(4.9)	-	赤褐色・茶褐色	精緻	回転ナデ・露胎	回転ナデ・施釉			R009
第62図-23	SD002	国産陶器	皿	-	1.7+a	4.8	-	黄褐色	精緻	施釉・蛇の目釉剥ぎ	施釉・露胎			R019
第62図-24	SD002	国産陶器	碗	-	2.7+a	4.1	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎			R005
第62図-25	SD002	国産陶器	碗	(8.8)	4.5+a	-	-	白・暗緑・黒釉	精緻	施釉	施釉・露胎			R012
第62図-26	SD002	国産陶器	鉢	-	6.6+a	(13.4)	-	淡橙褐色	精緻	刷毛目・施釉	施釉・露胎・重ね焼き痕	高台に2ヶ所重ね焼き痕(胎土目)あり		R014
第62図-27	SD002	国産陶器	擂鉢	-	6.5+a	(10.6)	-	茶褐色	精緻	擂り目	回転ナデ・露胎			R017
第62図-28	SD002	国産陶器	擂鉢	-	3.9+a	(15.3)	-	茶褐色	精緻	擂り目	回転ナデ・露胎			R016
第62図-29	SD003	国産磁器	小碗	-	1.8+a	2.6	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	関西系		R020
第62図-30	SD003	土製品	土鍋	3.9+a	1.0	-	-	淡赤色	黑色粒子・赤色粒子	ナデ	ナデ			R021
第62図-31	SD004	土師器	小皿A II	(7.8)	2.0	(5.6)	-	淡橙色	石英・角閃石・赤色粒子・茶褐色粒子・白色粒子	回転ナデか	回転糸切り離しか	内外ともに摩減著しい		R094
第62図-32	SD004	瓦質土器	鍋	-	5.4+a	-	-	淡黄橙色・黒茶色	赤色粒子	ヨコ方向のナデ	指オサ工後ヨコ方向の工具ナデ			R030

第10表 第34次調査区出土遺物観察表②

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第62図-33	SD004	瓦質土器	茶釜	(25.8)	3.2+a	-	-	灰白色・ 黒灰色	黒色粒子	指オサエ後ナデ	ナデ			R026
第62図-34	SD004	龍泉窯系 青磁	碗	-	3.8+a	-	-	灰緑色	精緻	施釉	施釉	蓮弁文	II-b類	R029
第62図-35	SD004	国産陶器	擂鉢	-	4.5+a	-	-	茶褐色	精緻	擂り目・回転ナデ	回転ナデ	備前		R023
第62図-36	SD004	国産磁器	碗	(12.4)	4.5	(3.8)	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	型紙刷り	底 部に焼継文 字?あり	R032
第62図-37	SD004	国産磁器	染付碗	-	4.1+a	-	-	淡灰色	精緻	施釉	施釉			R033
第62図-38	SD004	土製品	土鍤	4.3	1.1	-	4.8	淡黄橙色	赤色粒子	ナデ	ナデ			R022
第62図-39	SD004	土製品	土鍤	4.7+a	1.5	-	5.2	淡褐色	黒色粒子	ナデ	ナデ			R024
第62図-40	SD004	土製品	土鍤	2.9+a	1.2	-	2.7	淡褐色	黒色粒子・赤色粒子	ナデ	ナデ			R025
第62図-41	SD004	土製品	土鍤	4.1+a	0.9	-	3.1	灰黒色	白色粒子	ナデ	ナデ			R031
第63図-42	SD005	瓦質土器	茶釜	最大径 (27.2)	7.2+a	-	-	灰白色	長石・角閃石	指オサエ後ヨコ方向 の工具ナデ	ナデ			R037
第63図-43	SD005	瓦質土器	鉢	(28.2)	5.7+a	-	-	灰白色・ 黒褐色	黒色粒子・白色粒子	回転ナデ	回転ナデ			R045
第63図-44	SD005	瓦質土器	鉢	-	5.9+a	(16.7)	-	淡黄橙色・ 黒褐色	黒色粒子・白色粒子	不定方向のナデ	回転ナデ・ナデ			R040
第63図-45	SD005	瓦質土器	鉢か	-	7.9+a	21.3	-	灰白色	角閃石・赤色粒子	ナナメ方向のハケ後 ナデ	指オサエ後工具調整			R044
第63図-46	SD005	国産陶器	碗	-	2.1+a	4.8	-	灰白色	黒色粒子	ナデ	ナデ・露胎			R043
第63図-47	SD005	国産陶器	碗	-	3.5+a	3.7	-	淡黄緑色	精緻	施釉	施釉・露胎			R042
第63図-48	SD005	国産陶器	鉢	-	2.9+a	-	-	茶褐色	精緻	回転ナデ	回転ナデ			R038
第63図-49	SD005	国産陶器	壺	(11.6)	9.2+a	-	-	白灰色釉	黒色粒子	回転ナデ・指オサエ 後ナデ	回転ナデ・沈線文	瀬戸		R041
第63図-50	SD005	国産磁器	皿	(7.9)	2.3	3.7	-	透明釉	精緻	施釉	施釉			R035
第63図-51	SD005	国産磁器	染付小碗	-	2.3+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	肥前		R034
第63図-52	SD005	国産磁器	碗	-	2.4+a	3.5	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎			R039
第63図-53	SD006	土師器	小皿	8.1	1.4	6.0	-	淡黄褐色～ 明黄褐色	長石・角閃石	回転ナデ	回転ナデ・回転糸切 り難し			R070
第63図-54	SD006	土師器	壺	-	0.9+a	5.8	-	明黄褐色	石英・角閃石	回転ナデ	回転ヨコナデ・回転 糸切り難し			R069
第63図-55	SD006	土師器	壺	(13.2)	3.3+a	(8.4)	-	明黄褐色	石英・長石・角閃石	ヨコナデ	ヨコナデ			R071
第63図-56	SD006	弥生土器	高壺	-	10.1+a	(11.1)	-	黄茶色	石英・長石・角閃石	指オサエ後不定方向 のナデ	指オサエ後タテ方向 のハケ目			R050
第63図-57	SD006	弥生土器	甕	-	2.4+a	-	-	橙色～ 淡褐色	石英・角閃石・白色 粒子	ナデか	ナデか	内外ともに摩 滅著しい		R059
第63図-58	SD006	弥生土器	壺	-	2.9+a	-	-	淡黄褐色	石英・長石・角閃石	ヨコ方向のナデ・不 定方向のナデ	指オサエ後ナデ・ 不定方向のナデ			R066
第63図-59	SD006	弥生土器	壺	-	4.7+a	-	-	淡黄褐色	長石・角閃石	指オサエ後ナナメ方 向のナデ・指オサエ 後ヨコ方向の工具ナ デ	突帯貼付時のナデ			R049
第63図-60	SD006	弥生土器	壺	-	6.6+a	-	-	明褐色～ 暗黄茶色	石英・長石・角閃石	指オサエ後タテ方向 のナデ	突帯貼付時のナデ			R058
第63図-61	SD006	弥生土器	壺	21.7	7.4+a	-	-	淡黄褐色～ 灰黒色	長石・角閃石・黒雲 母	ヨコナデ・指オサエ 後タテ方向のナデ	指オサエ後ヨコナデ			R048
第63図-62	SD006	弥生土器	壺	(20.1)	2.8+a	-	-	淡黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	指オサエ後ナデ・ナ デ			R051
第64図-63	SD006	弥生土器	壺	-	6.7+a	-	-	黒茶色・ 明褐色	石英・長石・角閃石	指オサエ後タテ方向 のナデ	突帯貼付時のナデ・ 勾玉状浮文2個 残存			R061
第64図-64	SD006	弥生土器	壺	(17.5)	4.5+a	-	-	暗黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ・器面剥落の為 調整不明瞭	櫛描波文状・指オサ エ・ナデ			R065
第64図-65	SD006	弥生土器	壺	-	8.3+a	-	-	黄褐色・ 茶灰色	石英・長石・角閃石	指オサエ後ナデ・ナ デ・工具によるケ ズリ後ナデ			R067	
第64図-66	SD006	弥生土器	壺	-	8.2+a	-	-	茶褐色・ 暗黄褐色	石英・長石・角閃石	指オサエ後不定方向 の工具ナデ	突帯貼付時のナデ・ ナデ			R060
第64図-67	SD006	弥生土器	甕	-	8.0+a	-	-	明黄褐色	石英・長石・角閃石	指オサエ後タテ方向 のナデ	指オサエ後タテ方向 のナデ			R052
第64図-68	SD006	弥生土器	甕×壺	-	10.9+a	5.0	-	明黄褐色～ 黒茶色	石英・長石・角閃石	指オサエ後ナナメ方 向のナデ	指オサエ後ナナメ方 向のナデ・ナデ			R064
第64図-69	SD006	弥生土器	甕	-	4.0+a	3.6	-	淡黄褐色・ 明褐色	石英・長石・角閃石	タテ方向の工具ナデ	指オサエ後不定方向 の工具ナデ			R072
第64図-70	SD006	弥生土器	甕	-	9.1+a	6.1	-	淡灰色～ 淡黄褐色・ 褐色～黄褐色	石英・長石・角閃石 ・金雲母・黒雲母	指オサエ後工具ナデ	指オサエ後タテ方向 のハケ目	外面煤付着		R057
第64図-71	SD006	弥生土器	甕	-	3.3+a	5.3	-	黄褐色～灰色	石英・長石・角閃石	指オサエ後ナデ	指オサエ後ヨコナ デ・ナデ			R047
第64図-72	SD006	弥生土器	甕	-	2.0+a	4.8	-	暗褐色	石英・長石・角閃石	指オサエ後工具ナデ	工具ナデ			R053
第64図-73	SD006	弥生土器	甕	-	8.8+a	3.5	-	淡黄褐色・ 黄褐色～ 灰色	長石・角閃石・金雲 母	指オサエ後タテ方向 の工具ナデ・指オサ エ後ヨコ方向の工具 ナデ	内面煤付着			R062
第64図-74	SD006	弥生土器	甕	-	3.8+a	4.7	-	黒茶色～ 淡黄褐色	石英・長石・角閃石	指オサエ後ハケ目	指オサエ後ハケ目	黒斑あり		R073
第64図-75	SD006	弥生土器	甕	-	3.7+a	3.3	-	黄褐色・ 淡黄褐色	長石・角閃石	指オサエ後タテ方向 のナデ	指オサエ後ナナメ方 向のナデ			R056
第64図-76	SD006	朝鮮陶器	碗	-	1.7+a	(4.5)	-	淡灰白色	精緻	施釉	施釉・露胎	打ち欠きか		R086
第64図-77	SD006	国産陶器	碗	-	1.9+a	4.0	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎			R054
第64図-78	SD006	国産陶器	陶胎染付碗	-	5.4+a	-	-	淡黄灰色	精緻	施釉	施釉			R046
第64図-79	SD006	国産磁器	皿	-	2.1+a	-	-	淡緑色	精緻	施釉	施釉・露胎	型紙刷り		R055
第64図-80	SD006	国産磁器	小碗	-	2.6+a	(3.0)	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	肥前 二次被 熱の痕跡あり		R068
第64図-81	SD006	土製品	土鍤	4.4+a	1.2	-	2.8	淡黄橙色	長石・角閃石	-	ナデ			R063
第64図-82	SD006・ SD007	瓦質土器	急須	5.3+a	-	-	-	白灰色	精緻	ナデ	ナデ			R074
第64図-83	SD006・ SD007	国産陶器	擂鉢	-	5.0+a	-	-	暗褐色	赤色粒子・白色粒子	回転ナデ後擂り目	回転ナデ・ナデ	備前		R087
第64図-84	SD007	国産磁器	碗	-	1.8+a	2.8	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎			R075
第64図-85	SD007	国産磁器	碗	-	2.8+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉			R076

第11表 第63次調査区出土遺物観察表①

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・軸調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第73図-1	SB002b (SP010)	土製品	土錐	6.6	1.4	-	11.5	淡黄褐色	石英・長石・白色粒子	-	ナデ	両端の一部欠損		R005
第73図-2	SB002c (SP011)	土師器	小皿	(6.8)	1.6	(5.8)	-	明黄褐色	石英・長石・赤色粒子	ヨコナデ	ヨコナデ・糸切り離し			R006
第73図-3	SB002i (SP017)	土製品	土錐	7.4	1.6	-	11.9	淡灰褐色	石英・角閃石・橙色粒子	-	ナデ			R008
第73図-4	SB002i (SP017)	土製品	土錐	4.4+a	1.1	-	4.8	淡黄褐色～黒色	石英・橙色粒子	-	ナデ	一部黒変		R009
第73図-5	SB002i (SP017)	土製品	土錐	4.2	1.0	-	3.1	淡黄褐色・朱色	白色粒子	-	ナデ	一部赤色塗彩		R010
第73図-6	SB003c (SP020)	土師器	壺	-	1.3+a	(4.6)	-	淡赤褐色	長石・赤色粒子	ヨコ方向のナデ・ナデ	ナデ・工具による調整			R013
第73図-7	SB003d (SP021)	土師器	壺	-	1.9+a	-	-	橙色	石英・角閃石・橙色粒子	ナデか(摩滅)	ナデか(摩滅)	壺aタイプか		R014
第73図-8	SB003e (SP022)	須恵器	大甕	-	4.6+a	-	-	淡灰褐色・灰褐色	長石	ナデ	ナデ・自然釉か			R015
第73図-9	SB003e (SP022)	土製品	土錐	5.0	1.2	-	4.9	淡黄褐色	石英・白色粒子	-	ナデ	両端の一部欠損		R016
第73図-10	SB003f (SP023)	土製品	土錐	3.9	1.2	-	4.9	淡黄褐色	石英・白色粒子	-	ナデ	両端の一部欠損・一部黒斑あり		R017
第73図-11	SB003f (SP023)	土製品	土錐	4.3	1.3	-	5.8	淡黄褐色	石英・橙色粒子	-	ナデ	両端の一部欠損		R018
第73図-12	SB003g (SP024)	土師器	壺	(14.0)	4.0	(8.2)	-	淡黄茶褐色	褐色粒子	ナデ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・糸切り離し			R020
第73図-13	SB006e (SP043)	土製品	土錐	5.5	1.1	-	7.4	暗茶色～暗灰色	角閃石・白色粒子	-	ナデ・指オサエ			R025
第73図-14	SB009c (SP077)	土製品	土錐	4.1	1.1	-	4.6	黄白色・朱色	石英	-	ナデ	全体に赤色塗彩あり(一部剥離)		R065
第73図-15	SB009f (SP080)	土製品	土錐	1.7+a	1.0	-	1.2	淡黄白色・黒色・朱色	白色粒子	-	ナデ	一部赤色塗彩黒変あり		R075
第73図-16	SB009f (SP080)	土製品	土錐	4.5	1.2	-	6.0	暗灰色～黒色	石英	-	ナデ	全体黒変		R066
第73図-17	SB009f (SP080)	土製品	土錐	4.4	0.9	-	3.5	暗茶灰色	白色粒子	-	ナデ			R073
第73図-18	SB009f (SP080)	土製品	土錐	4.5	1.1	-	4.5	暗茶灰色～暗灰色	石英・白色粒子	-	ナデ			R072
第73図-19	SB009f (SP080)	土製品	土錐	4.4	1.0	-	4.9	淡黄白色～暗灰色	石英・橙色粒子	-	ナデ・指オサエ	一部黒変あり		R074
第73図-20	SB009f (SP080)	土製品	土錐	4.3	1.1	-	4.1	淡黄白色	石英・橙色粒子	-	ナデ・指オサエ			R069
第73図-21	SB009f (SP080)	土製品	土錐	4.1	1.2	-	4.5	淡灰白色・朱色	白色粒子	-	ナデ	一部赤色塗彩ありか		R067
第73図-22	SB009f (SP080)	土製品	土錐	4.5	0.9	-	2.8	淡灰茶色	石英・白色粒子	-	ナデ			R070
第73図-23	SB009f (SP080)	土製品	土錐	4.1	1.0	-	3.4	黒色～暗茶褐色	石英・角閃石・白色粒子	-	ナデ	全体的に黒変		R068
第73図-24	SB009f (SP080)	土製品	土錐	3.7	1.2	-	4.1	暗茶灰色	石英・角閃石	-	ナデ			R071
第73図-25	SB010e (SP027)	土師器	小皿	7.6	2.0	3.3	-	淡茶褐色	長石・赤色粒子	不定ナデ・ヨコナデ	ナデ・糸切り離し後ナデ			R022
第73図-26	SD050	土師質土器	鍋	(34.0)	3.3+a	-	-	淡黄褐色	長石・角閃石・赤色粒子	ヨコナデ・工具によるヨコナデ・不定方向の工具ナデ	ヨコナデ・工具によるヨコナデ・ナデ			R043
第73図-27	SD050	龍泉窯系青磁	碗	-	1.2+a	-	-	灰緑色	精緻	施釉	施釉	14C～15C前 D類		R031
第73図-28	SD050	土製品	土錐	3.4+a	1.1	-	3.7	黒色～淡黄色	白色粒子	-	ナデ			R030
第73図-29	SD050	土製品	土錐	4.3	1.2	-	5.8	暗褐色	石英・白色粒子	-	ナデ	黒変あり		R033
第74図-30	SJ001	弥生土器	壺	-	41.0+a	7.5	-	暗灰色・淡橙色	石英・長石・角閃石・橙色粒子・赤色粒子・白色粒子・黒色粒子	指オサエ後ナデ・ナデ上げか・タテ方向の強いナデ上げ	ナメ方向のハケ目・刻み目	摩滅により調整不明瞭		R001
第74図-31	SK081	土製品	土錐	4.9	2.0	-	16.8	淡茶色・朱色	角閃石・白色粒子	-	ナデ	一部赤色塗彩		R076
第74図-32	SP029	鉄製品	不明	8.1+a	3.1	1.9	56.9	-	-	-	-			R023
第74図-33	SP062	土製品	土錐	4.0	0.9	-	3.4	黒色～黄白色	角閃石・赤色粒子	-	ナデ	黒変あり		R053
第74図-34	SP066	土製品	土錐	4.4+a	1.2	-	6.1	灰色～淡橙色	石英・白色粒子	-	ナデ			R055
第74図-35	SP068	土製品	土錐	6.1	1.0	-	6.7	淡黄白色	白色粒子	-	ナデ・指オサエ			R056
第74図-36	SP068	土製品	土錐	6.9	1.1	-	8.1	淡黄色～黒色	角閃石・橙色粒子	-	ナデ・指オサエ	黒変あり		R059
第74図-37	SP068	土製品	土錐	4.2	1.0	-	4.4	灰色～黒色	石英・白色粒子	-	ナデ	黒変あり		R061
第74図-38	SP068	土製品	土錐	4.8	1.2	-	6.3	朱色・黒色～淡黄白色	角閃石・白色粒子	-	ナデ	全体に赤色塗彩あり 端部に黒変あり		R058
第74図-39	SP068	土製品	土錐	4.5	1.1	-	4.8	淡橙色～灰色	石英・白色粒子	-	ナデ			R060
第74図-40	SP068	土製品	土錐	4.3	0.9	-	3.6	淡黄白色	白色粒子	-	ナデ・指オサエ			R057
第74図-41	SP068	土製品	土錐	4.1	1.0	-	3.5	暗灰色	石英	-	ナデ			R062
第74図-42	SP089	土製品	土錐	4.3	1.3	-	6.2	朱色・暗橙色	角閃石・白色粒子	-	ナデ・ミガキか	全体に赤色塗彩あり 一部調整ミガキか		R079
第74図-43	SP089	土製品	土錐	4.3	1.3	-	6.9	淡黄色・朱色	石英・角閃石・白色粒子	-	ナデ	全体に赤色塗彩あり		R078
第74図-44	SX105	土師器	壺	(12.2)	3.2	(8.2)	-	淡黄茶褐色	石英・長石・褐色粒子	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・糸切り離し	器面剥落 出土地不明		R085
第74図-45	SX105	土製品	土錐	6.5	1.0	-	5.1	黄白色	石英	-	ナデ	出土地不明		R086
第74図-46	SX114	土師器	壺	(9.0)	3.2	-	-	暗茶褐色～淡黄色	石英・角閃石・橙色粒子・白色粒子	ナデ後工具痕か	指オサエ後ナデ	小型の擦aの可能性あり		R087

第12表 第63次調査区出土遺物観察表②

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第74図-47	表土	土師質土器	茶釜	-	4.0+α	-	-	暗灰色～淡褐色	石英・長石・角閃石・橙色粒子	指オサ工後ナデ	指オサ工後ナデ			R106
第74図-48	表土	瓦質土器	擂鉢	-	4.8+α	-	-	淡灰茶色	白色粒子・黒色粒子	擂り目	指オサ工後ナデ・摩耗のため不明瞭			R103
第74図-49	表土	龍泉窯系青磁	碗	-	3.9+α	-	-	青灰緑色	精緻	施釉	施釉		D類	R105
第74図-50	表土	国産陶器	甕	-	6.6+α	-	-	暗赤褐色	橙色粒子・白色粒子	回転ナデ・自然釉	回転ナデ・自然釉	備前		R098

第13表 第64次調査区出土遺物観察表

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第81図-1	SB001I (SP030)	土製品	土鍤	5.6	1.4	-	9.1	灰白色	石英・角閃石	-	ナデ・指オサ工			R041
第81図-2	SB001I (SP030)	土製品	土鍤	4.6	0.9	-	4.5	淡茶色	石英・白色粒子	-	ナデ・指オサ工			R042
第81図-3	SK004	土師器	小皿	(6.6)	1.1	(5.0)	-	淡黄褐色	長石・角閃石・赤色粒子	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・糸切り離し	15～16C		R020
第81図-4	SK004	土師器	小皿	(6.3)	2.1	(4.0)	-	淡白橙色	長石・角閃石	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・糸切り離し	15C前後		R023
第81図-5	SK004	土師器	小皿A	(7.4)	2.0	(4.6)	-	淡茶褐色	長石・赤色粒子	ナデ・回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・糸切り離し			R006
第81図-6	SK004	土師器	小皿	(6.7)	1.9	(3.7)	-	淡橙色～淡黄褐色	長石・角閃石	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・糸切り離し	15C前後		R024
第81図-7	SK004	瓦質土器	擂鉢	-	5.5+α	-	-	淡黄白色	石英・白色粒子・橙色粒子	ヨコ方向のハケ目・タテ方向のハケ目	煤付着			R016
第81図-8	SK004	瓦質土器	火鉢	-	4.5+α	-	-	暗茶色	石英・長石	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	脚部		R013
第81図-9	SK004	龍泉窯系青磁	碗	-	4.2+α	-	-	綠灰色	精緻	施釉	施釉	貫入あり	D類	R015
第81図-10	SK004	龍泉窯系青磁	碗	(10.8)	4.3+α	-	-	淡灰緑色	精緻	施釉	施釉		B-II類	R027
第81図-11	SK004	龍泉窯系青磁	碗	-	5.0+α	-	-	綠灰色	精緻	施釉	施釉	連弁文	II-b類	R026
第81図-12	SD006	国産陶器	仏飯器	-	2.5+α	-	-	褐釉	精緻	施釉	施釉			R030
第81図-13	SD007	国産磁器	油壺	-	4.7+α	(2.8)	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	色絵		R033
第81図-14	SD015	土師器	皿C	-	1.2+α	-	-	暗灰色～淡灰茶色	長石・赤色粒子	ヨコナデ	ヨコナデ			R059
第81図-15	SD015	国産陶器	天目碗	-	1.5+α	-	-	褐釉	精緻	施釉	施釉	瀬戸系		R058
第81図-16	SP060	瓦質土器	碗	-	3.0+α	-	-	黒色～茶灰色	長石・赤色粒子	ミガキ	ミガキ	中世後半		R049
第81図-17	SP063	土製品	土鍤	4.7	1.0	-	4.3	暗灰色	石英・長石	-	ナデ			R051
第81図-18	SP063	土製品	土鍤	5.1	1.6	-	10.5	淡茶褐色	長石・白色粒子	-	ナデ			R050
第81図-19	SP080	土師器	甕	-	3.7+α	-	-	暗褐色	石英・長石・角閃石	ナナメ方向のナデ・ヨコナデ	ナナメ方向のナデ・ヨコナデ	8C後半～企救甕		R056
第81図-20	北側トロフ	朝鮮磁器	白磁碗	-	3.3+α	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉			R060

第14表 第65次調査区出土遺物観察表

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第84図-1	南トロフ	瓦質土器	擂鉢	-	4.3+α	-	-	灰白色	石英・金雲母	擂り目・ヨコナデ	指オサ工後ナデ	防長系か		R004

第15表 第66次調査区出土遺物観察表

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第88図-1	SF001	景德鎮窯系青花	皿	-	1.8+α	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉		染付皿B2群	R015
第88図-2	SF001	国産陶器	皿	-	1.8+α	-	-	茶灰色	精緻	自然釉	自然釉・露胎	唐津系砂目皿		R008
第88図-3	SF001	国産陶器	擂鉢	-	4.0+α	-	-	暗茶色～茶灰色	石英・長石	ヨコナデ	ヨコナデ			R007
第88図-4	SF001	土製品	土鍤	5.2	1.0	-	5.9	淡橙色	石英・白色粒子	-	ナデ・指オサ工			R006
第88図-5	SF001	銅錢	寛永通寶	2.2	2.2	-	0.6/2.4g	-	-	-	-	新寛永3期以降か(1697～)		R005
第88図-6	SD003	国産陶器	皿	-	2.2+α	-	-	灰緑色	精緻	施釉	施釉・自然釉	唐津系		R016

第16表 第74次調査区出土遺物観察表

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第95図-1	SD009	龍泉窯系青磁	皿	-	1.9+α	-	-	淡青灰色	精緻	施釉	施釉	中世後期 稲花皿 貫入あり		R009
第95図-2	SD009	国産陶器	陶胎染付碗	-	3.9+α	(4.0)	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	17C末～18C後半 肥前系		R006
第95図-3	SD009	国産磁器	白磁小碗	-	1.3+α	(3.0)	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	近世		R005
第95図-4	SX001	国産陶器	陶胎染付碗	-	3.2+α	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎	17C代 貫入あり		R004
第95図-5	SX001	国産陶器	火入れ	-	2.9+α	-	-	鉄釉か	精緻	施釉・自然釉	施釉・自然釉	18C～		R001
第95図-6	検出時	龍泉窯系青磁	碗	-	1.7+α	-	-	オリーブ灰色	精緻	施釉	施釉	13C代	B類	R012

第17表 第79次調査区出土遺物観察表①

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第105図-1	SB100 f (SP100)	土師器	皿C	(13.6)	1.7+α	-	-	橙色	石英・白色粒子	ナデか・強いヨコナデか	ナデか・強いヨコナデか			R098
第105図-2	SB100g (SP080)	白磁	皿	-	2.0+α	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	貫入あり	E群	R068
第105図-3	ST050	土師器	坏	12.9	3.8	7.7	-	淡黄褐色	黒色粒子・褐色粒子・白色粒子	不定方向のナデ・ヨコナデ・口縁部形成のためのヨコナデ	口縁部形成のためのヨコナデ・ヨコナデ・ヘラ切り離し後	9C後半 供献品		R048
第105図-4	ST050	土師器	坏	12.8	3.8	6.9	-	淡橙色	黒色粒子・褐色粒子・白色粒子	不定方向のナデ・ヨコナデ・口縁端部形成のためのヨコナデ	口縁端部形成のためのヨコナデ・ヨコナデ・ヘラ切り離し後	9C後半 供献品		R047

第18表 第79次調査区出土遺物観察表②

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第105図-5	SD065	白磁	皿か	-	1.9+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉		E群	R061
第105図-6	ST050	鉄製品	刀子	3.4+a	1.3	0.4	4	-	-	-	-			R050
第105図-7	ST050	鉄製品	鉄釘	3.2+a	2.3+a	0.7	8	-	-	-	-	付着物(木質)あり		R051
第105図-8	ST050	鉄製品	鉄釘	3.9+a	2.2+a	1.0	12.8	-	-	-	-	付着物(木質)あり		R053
第105図-9	ST050	鉄製品	鉄釘	4.9+a	1.2	0.5	5.1	-	-	-	-	付着物(木質)あり		R052
第105図-10	ST050	鉄製品	鉄釘	5.1+a	1.9+a	1.2	7.1	-	-	-	-	付着物(木質)あり		R054
第105図-11	SD001	土師器	坏	-	2.0+a	(6.0)	-	橙色	石英・長石	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・回転 糸切り離し			R004
第105図-12	SD001	瓦質土器	鍋	-	4.8+a	-	-	茶黒色～ 淡灰色	角閃石・白色粒子	ナナメ方向のハケ目	ヨコナデ	煤付着 防長 系		R005
第105図-13	SD001	景德鎮窯系 青花	皿	-	1.8+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎		染付C群	R003
第105図-14	SD010	景德鎮窯系 青花	碗	-	1.5+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎		染付C群	R013
第105図-15	SD010	漳州窯系 青花	碗	-	3.3+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉		染付E群	R014
第105図-16	SD010	国産陶器	擂鉢	-	5.3+a	-	-	茶灰色	精緻	擂り目	ヨコナデ	備前		R011
第105図-17	SD030	瓦質土器	鍋	-	4.9+a	-	-	白茶色	石英・長石	ナデ	ヨコナデ・不定方向 のナデ	煤付着 濑戸 内系		R028
第105図-18	SD035	国産陶器	鉢	-	3.8+a	-	-	茶灰色	石英・長石・白色粒 子	ヨコナデ	ヨコナデ・無調整・ ナナメ方向の工具ナ デ	備前か		R030
第105図-19	SD035	瓦	平瓦	10.8+a	5.0+a	2.3	-	淡黄褐色	長石・角閃石	タテ方向のナデ	タテ方向のナデ			R031
第105図-20	SD040	土師器	皿C	-	2.9+a	-	-	淡黄褐色	石英・角閃石	ナデ・ヨコナデ	指オサエ後ナデ・ヨ コナデ			R032
第105図-21	SD040	白磁	皿	-	1.8+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉		E群	R035
第105図-22	SD040	白磁	皿	-	1.2+a	(7.0)	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎		E群	R034
第105図-23	SD040	白磁	碗	-	1.4+a	(3.9)	-	乳白色	精緻	施釉	露胎		D群	R019
第105図-24	SD040	青磁	碗	-	1.7+a	(6.0)	-	淡茶色	精緻	施釉・露胎	施釉・露胎	見込み釉剥ぎ		R020
第105図-25	SD040	朝鮮白磁	碗	-	4.3+a	5.8	-	灰白色	淡白色の精製土(気泡 多い)	施釉・砂目痕	施釉・砂目痕	16C後半 内面 に7力所の砂目 あり 底部に 砂目痕あり		R023
第105図-26	SD040	漳州窯系 青花	碗	-	3.8+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉		E群	R033
第105図-27	SD040	龍泉窯系 青磁	碗	-	5.2+a	-	-	灰緑色	精緻	施釉	施釉	貫入あり	E類	R024
第105図-28	SD040	華南三彩	水注	-	2.5+a	-	-	三彩(緑色)	精緻	施釉	施釉	華南三彩		R067
第105図-29	SD040	国産陶器	甕	-	4.3+a	-	-	淡茶色～ 淡灰茶色	長石・石英	不定方向ナデ	不定方向ナデ・ヨコ 方向の工具ナデ	備前		R038
第105図-30	SD040	国産陶器	擂鉢	-	2.8+a	-	-	灰色	精緻	擂り目	ヨコナデ・ナデ			R018
第105図-31	SD040	土製品	土鍋	4.1	1.1	-	4.5	淡橙色	石英・白色粒子	-	ナデ			R039
第105図-32	SD065	国産陶器	壺	-	3.1+a	-	-	褐色	精緻	施釉	施釉	褐色		R062
第105図-33	SD065	船製品	鉄砲玉	1.2	1.2	1.2	8.5	-	-	-	-			R064
第105図-34	SD065	鉄製品	不明	7.9+a	0.4	-	20.6	-	-	-	-			R065
第105図-35	SD085	同安窯系 青磁	碗	-	2.0+a	-	-	青緑色	精緻	施釉	施釉			R071
第105図-36	SD085	白磁	皿	-	4.2+a	-	-	黄白色	精緻	施釉・露胎	施釉・露胎	見込み釉剥ぎ		R072
第105図-37	SD085	白磁	壺	-	3.6+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	四耳壺		R070
第105図-38	SD085	国産陶器	小壺	(6.4)	3.2	(3.1)	-	淡茶白色	精緻	施釉	施釉・露胎	唐津		R076
第105図-39	SD085	国産磁器	碗	-	1.3+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	肥前 端反碗		R074
第106図-40	SD165	土製品	製塩土器	-	2.1+a	(5.0)	-	淡茶色	石英・角閃石・白色 粒子	ナデ	ナデ			R139
第106図-41	SP044	弥生土器	壺	-	1.9+a	-	-	淡黄褐色	長石・石英・角閃石	工具によるナデ	工具によるナデ・指 オサエ後ナデ	勾玉状浮文		R043
第106図-42	SP135	土師器	坏	13.0	3.4	8.4	-	橙色・黒色	白色粒子・赤色粒子	ナデ・ヨコナデ・口 縁部形成の為のヨコ ナデ	口縁部形成の為のヨ コナデ・ヨコナデ・ ヘラ切り離し後ナデ	9C後半 対面 ほぼ全面に煤 付着		R129
第106図-43	SP140	土師器	坏	12.9	3.9	8.4	-	橙色	黒色粒子・褐色粒 子・白色粒子	ヨコナデ・不定方向 のナデ・口縁部形成 のためのヨコナデ	口縁部形成の為のヨ コナデ・ヨコナデ・ ヘラ切り離し後不定 方向のナデ	9C後半 供獻 品		R130
第106図-44	SX090	土師器	皿C	(13.4)	2.0	-	-	橙茶色	石英・角閃石・白色 粒子・黒色粒子	ナデ・強いヨコナデ	強いヨコナデ・指オ サエ後ナデ			R088
第106図-45	SX090	土師器	皿C	-	2.1+a	-	-	淡橙色	石英・白色粒子・橙 色粒子	ナデ・強いヨコナ デ	ナデか・強いヨコナ デ			R089
第106図-46	SX090	瓦質土器	鍋	-	1.5+a	-	-	暗灰色～ 淡黄灰色	石英・長石・白色粒 子	ナデ・ハケ目	ナデ	一部煤付着		R092
第106図-47	SX090	白磁	皿	-	1.3+a	(6.0)	-	灰白色	精緻	施釉	施釉		皿E	R078
第106図-48	SX090	白磁	皿	-	1.8+a	-	-	淡茶白色	精緻	施釉・露胎	施釉・露胎	見込み釉剥ぎ		R083
第106図-49	SX090	景德鎮窯系 青花	皿	-	1.3+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉		皿B1群	R079
第106図-50	SX090	景德鎮窯系 青花	小壺	6.0	3.7	2.4	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	碁笥底		R077
第106図-51	SX090	国産陶器	擂鉢	-	7.0+a	-	-	暗赤褐色	白色粒子・橙色粒子	ヨコナデ・擂り目	ヨコナデ	備前		R087
第106図-52	SX160 (S095)	土師器	皿C	-	2.0+a	-	-	淡茶色・ 黒色(煤か)	石英・角閃石・白色 粒子	ナデ・強いヨコナ デ・指オサエ後ナ デ	強いヨコナデ・指オ サエ後ナデ			R104
第106図-53	SX160 (S095)	土師器	皿C	-	1.6+a	-	-	淡橙色	石英・角閃石・金雲 母・橙色粒子	強いヨコナデ・ナデ	強いヨコナデ・指オ サエ後ナデ			R106
第106図-54	SX160 (S095)	土師器	皿C	(13.8)	2.2+a	-	-	灰茶色～ 黒色	石英・角閃石・橙色 粒子・黒色粒子	強いヨコナデ・ナデ	強いヨコナデ・指オ サエ後ナデ	外面黒変か		R105
第106図-55	SX160 (S095下層)	土師器	坏	(13.0)	3.2	(5.9)	-	橙色	石英・橙色粒子・黒 色粒子	回転ナデ	回転ナデ・糸切り離 し痕			R138
第106図-56	SX160 (S095)	瓦質土器	椀	-	4.9+a	-	-	黒色	石英・橙色粒子・白 色粒子	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ			R103
第106図-57	SX160 (S095)	龍泉窯系 青磁	碗	(14.2)	5.8+a	-	-	淡緑色	精緻	施釉	施釉	E類		R099
第106図-58	SX160 (S095)	国産陶器	擂鉢	-	3.8+a	-	-	暗赤褐色	角閃石・白色粒子	ナデ後擂り目	ヨコナデ・切り離し 後無調整	備前		R101

第19表 第79次調査区出土遺物観察表③

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第106図-59	表土	銅製品	分銅	3.2+a	1.5	1.5	4.8	-	-	-	-			R001
第106図-60	黒褐色土	土製品	土錘	5.4	1.2	-	6.6	橙色	石英・橙色粒子	-	ナデ			R142
第106図-61	黒褐色土	土製品	土錘	5.2	1.4	-	9.6	淡茶色	石英・角閃石	-	ナデ・指オサエ			R143
第106図-62	79-2 SD001	石製品	石臼	34.8+a	-	10.1+a	7500	-	-	-	-			R006

第20表 第81次調査区出土遺物観察表

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第115図-1	SB035a (SP027)	土製品	土錘	4.4+a	0.9	-	3.3	橙茶色	白色粒子	-	ナデ・指オサエ			R042
第115図-2	SB035a (SP027)	土製品	土錘	3.7+a	0.9	-	3.0	淡橙灰色	角閃石・橙色粒子	-	ナデ・指オサエ			R041
第115図-3	SB035a (SP027)	土製品	土錘	5.5	0.9	-	4.5	淡橙茶色	石英・白色粒子	-	ナデ			R040
第115図-4	SB055a (SP040)	土師器	坏	-	2.6+a	-	-	淡橙色	石英・角閃石・白色粒子	摩耗の為不明	ヨコナデ			R044
第115図-5	SB055c (SP018)	土師器	坏	-	2.1+a	-	-	淡橙色	石英・長石	回転ヨコナデか	回転ヨコナデか	14~15C 摩耗著しい		R037
第115図-6	SK050	土師器	坏A	(13.2)	3.4	9.0	-	淡橙黄色	長石・角閃石	回転ヨコナデ・ナデ	回転ヨコナデ・糸糸離し	13~15C		R046
第115図-7	SD001	国産陶器	擂鉢	-	5.3+a	-	-	明茶色	精緻	擂り目・ヨコナデ	ヨコナデ	唐津		R001
第115図-8	SD001	瓦質土器	擂鉢	-	4.6+a	-	-	灰色	白色粒子	擂り目・工具によるヨコナデ・ヨコナデ	ヨコナデ	防長系		R005
第115図-9	SD001	景德鎮窯系青花	皿	-	1.5+a	(2.0)	-	透明釉	精緻	施釉	施釉		C群	R006
第115図-10	SD001	国産陶器	皿	-	2.1+a	-	-	淡灰色	精緻	施釉	施釉・露胎	唐津		R043
第115図-11	SD001	国産陶器	小碗	(6.0)	3.1	(2.8)	-	灰白色	精緻	施釉	施釉・露胎	唐津		R002
第115図-12	SD001	国産磁器	小碗	-	1.9+a	2.8	-	淡綠黄色	精緻	施釉	施釉・砂目積み痕	肥前 初期伊万里		R003
第115図-13	SD001	国産磁器	染付碗	-	3.1+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	肥前		R004
第115図-14	SD002	龍泉窯系青磁	碗	-	3.0+a	(5.6)	-	暗灰緑色	精緻	施釉	施釉・露胎		E類	R011
第115図-15	SD003	国産陶器	碗	-	3.0+a	(2.8)	-	淡黄灰色	精緻	施釉	施釉・露胎	関西系 實入あり		R014
第115図-16	SD003	国産磁器	皿	-	3.0+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	色絵		R015
第115図-17	SD003	国産磁器	染付碗	-	5.5	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	肥前		R013
第115図-18	SD003	国産磁器	染付碗	-	2.2+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	肥前 簡形碗		R012
第115図-19	SD003	銅製品	かんざし	7.8+a	0.7	0.2	3.6	-	-	-	-			R016
第115図-20	SD005	土師器	皿C	-	2.7+a	-	-	淡黄褐色	石英	強いヨコナデ・ヨコナデ	強いヨコナデ・ヨコナデ			R019
第115図-21	SD005	朝鮮陶器	碗	-	2.5+a	-	-	暗綠灰色	精緻	施釉	施釉			R022
第115図-22	SD005	国産陶器	擂鉢	-	3.5+a	-	-	暗茶色	白色粒子	擂り目	ヨコナデ	備前		R018
第115図-23	SD005	国産陶器	擂鉢	-	5.0+a	-	-	明茶褐色	石英・白色粒子	擂り目	ヨコナデ・無調整	備前		R017
第115図-24	SD005	土製品	土錘	4.0	1.1	-	3.9	淡橙色	石英・白色粒子	-	ナデ・指オサエ			R021
第115図-25	SD005	土製品	土錘	5.6	1.3	-	8.7	淡灰白色	白色粒子	-	ナデ			R020
第115図-26	SD006	土師器	坏A	-	3.5+a	-	-	淡橙色	長石・角閃石	回転ヨコナデか	回転ヨコナデか	摩耗著しい		R033
第115図-27	SD014	国産陶器	擂鉢	-	3.6+a	-	-	淡茶色	白色粒子	擂り目	ヨコナデ	備前		R038
第115図-28	SD014	瓦	平瓦	10.1+a	7.5+a	2.7	-	淡灰色	白色粒子	ナデ	ナデ			R039
第115図-29	SP048	瓦質土器	擂鉢	-	4.8+a	-	-	淡灰色	白色粒子・雲母	擂り目	摩耗の為不明	防長系		R045

第21表 第149次調査区出土遺物観察表

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第117図-1	SK005	弥生土器	甌	-	1.8+a	-	-	淡橙色	石英・角閃石・橙色粒子	ナデ・刻み目	ナデ・刻み目	口縁端部に刻み目		R002
第117図-2	SK005	弥生土器	甌	-	2.9+a	-	-	淡茶色～黒色	石英・長石・角閃石・白色粒子・赤色粒子	ナデ	ナデ・刻み目突帯	黒変あり	下城式	R001

第22表 第153次調査区出土遺物観察表

図版番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)				色調・釉調	胎土	調整・装飾		備考	分類時期	R番号
				口径/最大長	器高/最大幅	底径/最大厚	孔径/重量(g)			内面	外面			
第122図-1	SB035c (SP006)	国産陶器	碗	-	2.2+a	(4.6)	-	淡黄白色	精緻	施釉	施釉・露胎	唐津		R001
第122図-2	SK010	土師器	皿C	-	2.0+a	-	-	淡灰色～淡橙色		強いヨコナデか・ナデ	強いヨコナデか・ナデ	内外ともに摩耗		R001
第122図-3	SK010	国産陶器	瓶	-	1.3+a	(12.0)	-	暗褐色～淡灰色		ナデ	切り離し後無調整か・ナデ	焼締陶器		R002
第122図-4	SD005	国産陶器	皿	-	1.8+a	(3.9)	-	橙色・淡黄白色	精緻	施釉・砂目	露胎(一部釉だれあり)	唐津(砂目皿) 二次被熱		R001
第122図-5	SD005	国産陶器	碗	-	2.2+a	5.1	-	淡黄白色	精緻	施釉	施釉・露胎	唐津		R002
第122図-6	SP015	瓦質土器	火鉢	(13.6)	5.0	(12.0)	-	暗灰色～灰色	石英・長石・角閃石・白色粒子・橙色粒子	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・脚部貼付			R002
第122図-7	SP015	青磁	火入れ	(11.4)	6.4+a	-	-	淡橙色・灰白色	精緻	施釉・ロクロ・露胎	施釉	二次被熱		R001
第122図-8	SP020	国産磁器	染付碗	-	4.4+a	-	-	透明釉	精緻	施釉	施釉	肥前		R001
第122図-9	SP030	土師器	皿C	-	2.6+a	-	-	淡橙色	金雲母・橙色粒子	強いヨコナデか・ナデ	強いヨコナデ・指オサエ後ナデか	内外ともに摩耗		R001
第122図-10	SP034	土師器	皿C	-	2.0+a	-	-	暗灰茶色～淡橙色	石英・角閃石・赤色粒子・白色粒子	強いヨコナデか・ナデ	強いヨコナデ・指オサエ後ナデか	内外ともに摩耗		R001
第122図-11	SP034	景德鎮窯系青花	碗	-	1.7+a	4.4	-	透明釉	精緻	施釉	施釉・露胎		染付F群	R002
第122図-12	SP036	国産陶器	甌	-	6.4+a	-	-	暗褐色	石英・角閃石・白色粒子・赤色粒子	回転ヨコナデ・自然釉	回転ヨコナデ・自然釉	備前		R001
第122図-13	SP036	国産陶器	甌	-	7.0+a	-	-	暗褐色	石英・角閃石・白色粒子・橙色粒子	回転ヨコナデ・自然釉	回転ヨコナデ・自然釉	備前		R002
第122図-14	SP036	国産陶器	甌	-	4.4+a	-	-	暗褐色～暗赤褐色	石英・角閃石・白色粒子・黒色粒子	回転ヨコナデ・自然釉・ヘラ描き	回転ヨコナデ・自然釉・ヘラ描き	備前		R003

第23表 第1次調査区遺構番号一覧表

A区

遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
SD001		溝状遺構	土師器…坏、壺、瓶、瓶把手		8世紀中頃～後半頃
SK001		土坑	土師器…坏、皿、碗、壺、瓶、企救型壺、移動式カマド 須恵器…蓋、壺、長頸壺、短頸壺		8世紀中頃～後半
SK002		土坑	土師器…坏 土質土器…鍋		15世紀～16世紀代
SK004		土坑	青磁…碗		14世紀～16世紀代
SP018		ピット	土師器…坏、小皿		
SP022	SB003a柱穴	瓦質土器…鍋			
SP027	ピット	土製品…土錐			
SP034	ピット	土師器…坏 土製品…土錐			
SP035	SB003a柱穴	土師器…坏			14世紀後半～15世紀前半
SP036	SB003k柱穴	土師器…坏			
SP040		白磁…碗			
SP053	ピット	土師器…壺			
SP056	ピット	土師器…企救型壺			
SP070	ピット	土製品…土錐			
SP071	ピット	白磁…皿			
SP073	ピット	土師器…蓋 土製品土錐			
SP074	ピット	土師器…壺、瓶			
SP078	SB001b柱穴	土師器片			
SP082	SB002c柱穴	土師器…坏			
SP091	SB002g柱穴	土師器…蓋 黒色土器A類…碗			
SP095	SB002e柱穴	土師器…坏、蓋			
SP102	SB002f柱穴	土師器…壺、企救型壺 黒色土器A類…碗c			
SB001	掘立柱建物跡				10世紀代
SB002	掘立柱建物跡	須恵器…壺			10世紀代
SB003	掘立柱建物跡				15世紀～16世紀代

B・C区

遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
SD002		溝状遺構	土師器…坏、蓋、鉢、壺 移動式カマド 須恵器…短頸壺 黒色土器A類…碗c 綠釉陶器 石器…石錐 土製品…土錐		8世紀～9世紀代
SP137		ピット	土師器…壺		

D区

遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
SX001		性格不明遺構	土師器…坏、高台付坏、碗、壺、蓋、鉢×鍋、瓶 須恵器…蓋、壺、壺 土製品…土錐 不明鉄製品 石製品…砥石 製塩土器	1→SB004	8世紀中頃～後半頃
SD002		溝状遺構	瓦質土器…鍋 青磁…碗	14→2	15世紀～16世紀
SD003		溝状遺構	土師器…碗、坏 瓦質土器片 国產陶器…不明品(古瀬戸か)		15世紀～16世紀
SB004e	SB004e柱穴			1→SB004e	
SB004f	SB004f柱穴			1→SB004f	
SB004g	SB004g柱穴			1→SB004g	
SK005	土坑				
SK013	土坑	土師器…高台付坏			8世紀代
SK014	土坑	土師器…坏、壺 須恵器片		14→2	8世紀中頃～後半頃
SK015	土坑	土師器…壺、鉢			中世
SP153	SB004b柱穴	瓦質土器…壺			
SP154	SB005g柱穴	青白磁…合子蓋			
SP156	SB005f柱穴	土師器片			
SP158	SB004c柱穴	土製品…土錐			
SP159	SB004d柱穴	土師器坏片			
SP169	ピット	瓦質土器…鉢			
SP170	SB005c柱穴	土師器片			
SP173	SB005e柱穴	土師器…蓋			
SP181(202)	ピット	国產陶器…天目碗(古瀬戸 C類)			
SP186	SB005a柱穴	土師器片			
表土		土師器…鉢 須恵器…壺 石製品…石錐			
SB004	掘立柱建物跡			1→SB004	15世紀～16世紀代
SB005	掘立柱建物跡				15世紀～16世紀代

E・F区

遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
SD003		溝状遺構	土師器…坏 龍泉窯系青磁…碗 同安窯系青磁…碗 国產陶器…擂鉢(備前) 国產磁器…碗(肥前)、碗、小坏		15世紀～18世紀前半代
SD005		溝状遺構	土師器…坏、小皿、壺 須恵器…不明品 瓦質土器…擂鉢 龍泉窯系青磁…碗 景徳鎮窯系青花…皿 白磁…碗 青磁…碗 国產陶器…陶胎染付碗(肥前)、擂鉢 土製品…土錐、双孔棒状土錐		15世紀～18世紀前半代
SD006		溝状遺構	龍泉窯系青磁…碗 景徳鎮窯系青花…碗 白磁…皿 鉄製品…刀子		
SK019	土坑	土師器…皿 鉄製品…釘			14世紀代
SP149	ピット	土師器…皿C			16世紀後半～末
SP164	ピット	土師器…瓶把手			
SP166	ピット	白磁…碗			
SP168	ピット	龍泉窯系青磁…碗			
SP172	ピット	土師器…坏			
南東		土師器…坏			

第24表 第2次調査区遺構番号一覧表①

遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
1号填北東			土師器…壺		
1トレンチ	P-1		土師器…不明品		
			鉄製品…劍		
			鉄製品…劍		
2トレンチ	北東		土師器…壺		
3トレンチ			土器片 土師器…鉢 須恵器片		
4トレンチ	石蓋		土器片 土師器…鉢、移動式カマド		
5トレンチ					

第25表 第2次調査区遺構番号一覧表②

遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
6トレンチ			土器片 須恵器…壺 弥生土器…壺		
7トレンチ	P-3		鉄製品…鉄矛 石製品…勾玉、管玉 ガラス製品…ガラス玉		
8トレンチ			鉄製品…刀子		
			土器片 土師器…脚付鉢 須恵器…壺×縁 弥生土器片		
	P1		土器片 土師器…脚付鉢 須恵器…蓋		
9トレンチ	主体部付近 盗掘坑内		土師器…鉢		
10トレンチ			土師器…脚付鉢		
			土師器片 須恵器…壺		

第26表 第14次調査区遺構番号一覧表

遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
SD001		溝状遺構			

第27表 第31次調査区遺構番号一覧表

遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
SD001		溝状遺構	土師器…坏A	SD001→SB001	12世紀前半
SD002		溝状遺構	土師器…坏 国産磁器…碗(肥前)		17世紀中頃～ 18世紀前半
SP001		SB002e柱穴	土師器…坏A		11世紀前半～ 12世紀前半
SP002		SB002d柱穴	国産陶器…擂鉢(備前)		14世紀～
表探			国産陶器…碗		
SB001		掘立柱建物跡		SD001→SB001	
SB002		掘立柱建物跡			14世紀前後
SB003		掘立柱建物跡			

第28表 第34次調査区遺構番号一覧表

遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
SD001		溝状遺構	土器片 磁器片		
SD002		溝状遺構	土師器…皿 瓦質土器…火鉢、内耳鉢 国産陶器…皿、蓋、碗、鉢、鉢(肥前) 国産磁器…染付皿(肥前)、染付碗(肥前)、碗(肥前)		～18世紀代
SD003		溝状遺構	国産陶器…小碗(関西系) 土製品…土錐		17世紀末～ 18世紀前半以降
SD004		溝状遺構	土師質土器…鉢、茶釜 土師器…小皿 龍泉窯系青磁…碗 国産陶器…擂鉢 (備前) 国産磁器…染付碗(肥前) 土製品…土錐	SB001・004→ SD004 SD004→SD005	近世～近代
SD005		溝状遺構	瓦質土器…擂鉢、捏鉢、双耳金 国産陶器…四耳壺(瀬戸) 国産磁器…皿、 碗、染付小碗(肥前)、鉢 磁器…碗	SD004→SD005	中世～近世
SD006		溝状遺構	土師器…坏、小皿 弥生土器…壺、蓋、高坏 朝鮮陶器…碗 国産陶器…碗、 陶胎染付碗 国産磁器…皿、小碗(肥前) 土製品…土錐		～中世
SD006・SD007		溝状遺構	瓦質土器…急須 国産陶器…擂鉢(備前)		
SD007		溝状遺構	国産磁器…碗、小坏(肥前)		～近世
SK001		土坑	弥生土器…壺、蓋		弥生時代中期頃
ST001		土壙墓	土師器…脚付皿		10世紀代
SP002		SB002a柱穴	土師器…坏 磁器…碗		
SP003		SB002k柱穴	白磁…皿		
SP004		SB001j柱穴	土師器…坏		
SP006		SB003c柱穴	土器片 土製品…土錐		
SP007		SB004c柱穴	土師器…坏		
SP009		SB001d柱穴	瓦質土器片		
SP012		SB003b柱穴	土器片		
SP017		SB006d柱穴	土器片		
SP023		SB001I柱穴	土師器坏片		
SB001		掘立柱建物跡		SB004→SB001	14世紀代
SB002		掘立柱建物跡		SB001→SB002	14世紀代～
SB003		掘立柱建物跡		SB003→SB002	12世紀以降
SB004		掘立柱建物跡		SB004→SB001 SB001・004→ SD004	～14世紀代
SB005		掘立柱建物跡			
SB006		掘立柱建物跡			
SB007		掘立柱建物跡			

第29表 第63次調査区遺構番号一覧表①

S番号	遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
1	SJ001		土器埋納遺構	弥生土器…壺		弥生時代後期後葉
3	SP003		SB001b柱穴	土師器…坏		
10	SP010		SB002b柱穴	土師器片 土製品…土錐		
11	SP011		SB002c柱穴	土師器…小皿(糸切り)		中世
15	SP015		SB002g柱穴	土師器片		
17	SP017		SB002f柱穴	土師器…坏 土製品…土錐		
18	SP018		SB003a柱穴	土師器…坏		
19	SP019		SB003b柱穴	瓦質土器…壺		
20	SP020		SB003c柱穴	土師器…坏		中世
21	SP021		SB003d柱穴	土師器…坏		中世
22	SP022		SB003e柱穴	土師器片 須恵器…大壺 土製品…土錐		中世

第30表 第63次調査区遺構番号一覧表②

S番号	遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
23	SP023		SB003f柱穴	土師器…坏 土製品…土錐		
24	SP024		SB003g柱穴	土師器…坏		中世
25	SP025		SB003h柱穴	土師器…坏		
27	SP027		SB010e柱穴	土師器…小皿		中世
29	SP029		ピット	不明鉄製品		
41	SP041		SB006c柱穴		41→62	
42	SP042		SB006d柱穴	土師器…坏		
43	SP043		SB006e柱穴	土製品…土錐		
44	SP044		SB006f柱穴	土師器…坏		
43	SP043		ピット			
50	SD050		溝状造構	土師器…坏 土師質土器…鍋 瓦質土器…擂鉢 龍泉窯系青磁…碗(D類) 土製品…土錐	50→135	～15世紀
52	SP052		SB009b柱穴			
53	SD053		溝状造構	土師器…坏、小皿、甌		
59	SP059		SB008f柱穴	土師器片		
62	SP062		ピット	土製品…土錐	41→62	
66	SP066		ピット	土師器片 土製品…土錐		
68	SP068		ピット	土製品…土錐		
71	SP071		SB008h柱穴			
73	SP073		SB008c柱穴	土師器片		
74	SP074		SB008d柱穴	土錐		
77	SP077		SB009c柱穴	土師器片 土製品…土錐		
78	SP078		SB009d柱穴	土錐		
80	SP080		SB009f柱穴	土器片 土製品…土錐		
81	SK081		土坑	土製品…土錐	82→81	
82	SP082		SB009a柱穴	土錐	82→81	
89	SP089		ピット	土製品…土錐		
93	SP093		SB010d柱穴	土師器…小皿		
97	SP097		SB010f柱穴	土師器…小皿		
98	SP098		SB010a柱穴	土師器…坏		
105	SX105		性格不明造構	土師器…坏 土製品…土錐		
114	SX114		性格不明造構	土師器…皿C		
116	SP116		SB010c柱穴	土師器…坏		
132	SP132		SB009e柱穴	土師器…小皿 陶器…甌 瓦質土器…擂鉢 土師器…坏 土師質土器…釜 青磁…碗 土製品…土錐		
	表土			土師器…坏、茶釜 瓦質土器…擂鉢 青磁…碗 国產陶器…甌(備前) 土製品…土錐		
	SB001		掘立柱建物跡			中世
	SB002		掘立柱建物跡			15世紀後半
	SB003		掘立柱建物跡			15世紀後半
	SB006		掘立柱建物跡			中世
	SB008		掘立柱建物跡			
	SB009		掘立柱建物跡			
	SB010		掘立柱建物跡			15世紀代

第31表 第64次調査区遺構番号一覧表

S番号	遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
2	SK002		土坑	土師器片 須恵器片(中世)		15世紀～16世紀代
4	SK004		土坑	土師器…小皿A 瓦質土器…甌、擂鉢、火鉢脚部、鍋、羽釜、焰焰 黒色土器 A類…碗c 龍泉窯系青磁…碗(D類・II-b類・B-II)	4→5 4→10-11	～15世紀後半頃
6	SD006		溝状造構	国產陶器…仏飯器		
7	SD007		溝状造構	国產磁器…油壺(肥前)		
8	SK008		土坑	土師質土器…鍋×甌	3→8 20→8	
12	SK012		土坑	土師質土器…鍋 瓦質土器…鍋 青磁…碗	SB003→12	中世
15	SD015		溝状造構	土師器…皿C 国產陶器…天目碗(瀬戸)	SB001→15	18世紀代
30	SP030		SB001l柱穴	土製品…土錐	62→30	
42	SP042		SB002c柱穴	土器片		
51	SP051		SB003g柱穴	土師器片		
52	SP052		SB003f柱穴	土師器片		
53	SP053		SB003e柱穴	土師器片		
60	SP060		ピット	瓦質土器…椀		
63	SP063		ピット	土製品…土錐 瓦質土器…碗		
80	SP080		ピット	土師器…甌(企救型)	80→79	8世紀後半～
	北側トレンチ			土師器…坏 朝鮮磁器…白磁碗		中世
	SB001		掘立柱建物跡		SB001→15	
	SB002		掘立柱建物跡			
	SB003		掘立柱建物跡		SB003→12	

第32表 第65次調査区遺構番号一覧表①

S番号	遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
4	SP004		SB001d柱穴	土師器…坏		
6	SP006		SB001f柱穴	土師器…坏		中世
10	SD010		溝状造構	土師器…小皿		中世
11	SD011		溝状造構	国產磁器片		

第33表 第65次調査区遺構番号一覧表②

S番号	遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
	南1トレント			瓦質土器…擂鉢(防長系か)		14世紀～15世紀
	SB001		掘立柱建物跡			中世

第34表 第66次調査区遺構番号一覧表

S番号	遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
1	SF001		道路状遺構	土師器…小皿、カマド 瓦質土器…火鉢 景徳鎮窯系青花…皿 白磁…皿 国産陶器…皿(唐津)、蓋、陶胎染付碗、擂鉢(備前) 国産磁器…小鉢 土製品…土鍾 銅製品…銅錢	1→5 1→6 7→1	16世紀末
2	SD002		溝状遺構	土師器片	6→2	16世紀代
3	SD003		溝状遺構	土師器片 国産陶器…皿(唐津)	4→3	近世
4	SD004		溝状遺構		4→10 4→3	
5	SK005		土坑		1→5	
6	SD006		溝状遺構		1→6 6→2	
7	SK007		土坑		7→1 7→10	
10	SD010		溝状遺構		4→10 7→10	

第35表 第74次調査区遺構番号一覧表

S番号	遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
1	SX001		性格不明遺構	国産陶器…陶胎染付碗、火入れ	1→7	17世紀～18世紀
8	SD008		溝状遺構	土師器…坏	10→8	15世紀～16世紀
9	SD009		溝状遺構	龍泉窯系青磁…皿、碗 国産磁器…小碗、香炉 国産陶器…陶胎染付碗(肥前産)		～18世紀代
10	SD010		溝状遺構		10→8 10→15	15世紀代
11	SD011		溝状遺構		11→15 12→11	
14	SD014		溝状遺構		14→5	
15	SD015		溝状遺構	土師器…小皿	10→15	15世紀代
16	SD016		溝状遺構			
41	SX041		性格不明遺構			
	検出時	19-B05		龍泉窯系青磁…碗(B類)		

第36表 第79次調査区遺構番号一覧表①

S番号	遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
1	SD001		溝状遺構	土師器…小皿 瓦質土器…鍋 景徳鎮窯系青花…皿(C群)	1→5→4 20→1 21→1	
10	SD010		溝状遺構	国産陶器…擂鉢(備前) 景徳鎮窯系青花…碗(C群) 漳州窯系青花…碗(E群)	30→10 40→10 10→19→5 26→10 10→22 35→10	
15	SD015 (SD040～)		溝状遺構	龍泉窯系青磁…碗 白磁…碗(D群) 青磁…碗 華南三彩…水注 朝鮮磁器…白磁碗 国産陶器…擂鉢		
25	SD025 (SD040～)		溝状遺構			
30	SD030		溝状遺構	瓦質土器…鍋(瀬戸内系)	30→10 40→30	
35	SD035		溝状遺構	国産陶器…鉢(備前) 瓦類…平瓦	35→40 35→10	
40	SD040		溝状遺構	土師器…皿C 白磁…皿 漳州窯系青花…碗 国産陶器…壺(備前) 土製品…土鍾	35→40 40→10 40→30	～16世紀末
44	SP044		ピット	弥生土器…壺		
50	ST050		木棺墓	土師器…坏 鉄製品…刀子、釘 白磁…不明		
65	SD065		溝状遺構	白磁…不明品 国産陶器…壺 鉄製品…不明品 鉛製品…鉄砲玉	102→65 85→65 95(160)→90→65 100c→65	
70	SK070		土坑	須恵器片		
80	SP080		SB100g柱穴	白磁…皿(E群)		
85	SD085		溝状遺構	同安窯系青磁…碗 白磁…皿、壺 国産陶器…小坏(唐津) 国産磁器…碗(肥前)	85→65 100f→85	
90	SX090	掘り込み地業		景德鎮窯系青花…小坏	95(160)→90→65 90→SB100	16世紀前半～中頃
	SX090		暗茶褐ブロック	土師器…皿C 瓦質土器…鍋 白磁…皿、皿(E群) 国産陶器…擂鉢(備前) 景徳鎮窯系青花…皿(B1群)		
	SX090		暗茶黄ブロック			
95	SX095	SX160	掘り込み地業	土師器…皿C 瓦質土器…壺 龍泉窯系青磁…碗(E群) 国産陶器…擂鉢(備前)	95(160)→90→65	16世紀前半～中頃
100	SB100c		SB100c柱穴	土師器…皿C	100c→65	
	SB100f		SB100f柱穴		100f→85	
105	SK105		土坑	土器片		
125	SK125		土坑	土師器…小皿	125→123 193→125	
130	SK130		土坑	土器片		
135	SP135		ピット	土師器…坏	165→135	9世紀後半代
140	SP140		ピット	土師器…坏		9世紀後半代
145	SK145		土坑			
147	SK147		土坑	土師器…坏	170→147	15世紀以降
150	SK150		土坑			
155	SK155		土坑			
160	SX160	SX095下層	掘り込み地業		95(160)→90→65	16世紀前半～中頃
165	SD165		溝状遺構	製塩土器…製塩土器	165→35	

第37表 第79次調査区遺構番号一覧表②

S番号	遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
185	SF185		道路状遺構			9世紀後半代
	表土			土製品…土錐 銅製品…分銅		
	黒褐土					
	SB100		掘立柱建物跡		90→SB100	16世紀後半

79次-2

S番号	遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
1	SD001		溝状遺構	石製品…石臼		

第38表 第81次調査区遺構番号一覧表

S番号	遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
1	SD001		溝状遺構	瓦質土器…擂鉢(防長系) 国産陶器…皿(唐津)、小碗(唐津)、擂鉢(唐津) 景徳鎮窯系青花…皿(C群) 国産磁器…染付碗(肥前)、小碗(肥前)	1→4 2→1	18世紀後半以降
2	SD002		溝状遺構	龍泉窯系青磁…碗	2→1 2→4 3→2	
3	SD003		溝状遺構	国産陶器…碗(関西系) 国産磁器…色絵皿、染付碗(肥前) 銅製品…簪	3→2	18世紀前後
5	SD005		溝状遺構	土師器…皿C 朝鮮陶器…碗 国産陶器…擂鉢(備前) 土製品…土錐	5→4	16世紀末
6	SD006		溝状遺構	土師器…坏A	6→4 51→6 46→45→6	
10	SD010		溝状遺構	国産陶器…瓶 II A 銅製品…鈴	10→3	17世紀前半
14	SD014		溝状遺構	国産陶器…擂鉢(備前) 瓦類…平瓦	4→14	
17	SP017	SB055b柱穴			48→17	
18	SP018	SB055c柱穴	土師器…坏			
19	SK019	SX054内土坑	土師器蓋片			古代
22	SX022		集石遺構			縄文早期
23	SP023	SB035d柱穴				
25	SK025	土坑				
27	SP027	SB035a柱穴	土製品…土錐			
	SB035c	SB035c柱穴	中国染付…碗(E群) 土製品…土錐			
35	SB035g	SB035g柱穴			42→41→35g	
	SB035h	SB035h柱穴			42→41→35h	
40	SP040	SB055a柱穴	土師器…坏		50→40(55a)	
48	SP048	ビット	瓦質土器…擂鉢(防長系)		48→17	
50	SK050	土坑	土師器…坏A		50→40(55a)	13世紀後半頃
54	SX054	性格不明遺構				
55	SB055d	SB055d柱穴	土師器…坏			
	SB015	掘立柱建物跡				
	SB035	掘立柱建物跡				16世紀中頃
	SB055	掘立柱建物跡				14世紀以降

第39表 第149次調査区遺構番号一覧表

S番号	遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時期
5	SK005	土坑	弥生土器…壺 石器…石錐(姫島産)			弥生時代中期

第40表 第153次調査区遺構番号一覧表

S番号	遺構番号	グリットP番/層位など	種別	出土遺物	切り合い	時代
5	SD005	茶灰色土	溝状遺構	国産陶器…碗、皿(唐津)		17世紀前半
6	SP006 (SB035)	暗茶褐色 粘質土	SB035c柱穴	国産陶器…碗(唐津)	6→不定形土坑	17世紀前半
9	SK009	茶灰色土	土坑		9→攪乱	近世初頭
10	SK010	灰茶色土	土坑	中国陶器…瓶(焼締) 土師器…皿C		16世紀後半～末頃
15	SP015	暗茶灰色 粘質土	柱穴	瓦質土器…火鉢 青磁…火入れ 編…羽口	15→26	
17	SP017		SB040h柱穴	中国青花片 国産陶器…備前破片、把手(唐津)		
20	SP020	茶褐色粘質土	柱穴	国産磁器…染付碗(肥前)	37→20→17	18世紀以降
22	SP022		SB040b柱穴	土器片 烧土	30→22	
24	SK024	暗茶灰色 粘質土	土坑			中世末～近世初頭
26	SP026		SB040g柱穴		15→26	
30	SP030	暗茶褐色 粘質土	柱穴	土師器…皿C	30→22	16世紀後半
34	SP034	茶灰色粘質土	ビット	土師器…皿C 景徳鎮窯系青花…碗(染付E群)		17世紀初頭
35	SB035		掘立柱建物跡			17世紀前半頃
36	SP036	暗灰褐色 粘質土	柱穴	国産陶器…壺(備前)		
	SB040		掘立柱建物跡			16世紀末～17世紀初頭

写真図版 1



1 横尾地区遠景(南より)



2 第2次(有田古墳)調査区全景(北東より)

写真図版 2



1 有田古墳群を望む(北より)



2 第2次(有田古墳)4トレンチ石蓋出土状況(西より)

写真図版 3



1 第34次調査区全景(北より)



2 第34次掘立柱建物群全景(西より)

写真図版 4



1 第63次調査区全景(南より)



2 第64次調査区全景(東より)



1 第65次調査区完掘状況(南より)



2 第74次調査区全景(南より)

写真図版 6



1 第 79 次調査区全景(南より)



2 第 81 次調査区遠景(北より)

写真図版 7



1 横尾 1次調査区全景(南より)



2 第1次 A区 完掘状況(西より)



3 第1次 B区 完掘状況全景(南より)



4 第1次 C区 完掘状況全景(南より)



5 第1次 D区 完掘状況全景(北東より)



6 第1次 E区 完掘状況全景(東より)



7 第2次(有田古墳) 1号墳 葦石出土状況(東より)



8 第4次 完掘状況(北より)

写真図版8



1 第31次 調査区全景(東より)



2 第33次 調査区全景(北より)



3 第34次 ST001 半截状況(北より)



4 第34次 SP027 掘り下げ状況(北より)



5 第63次 SB001 完掘状況(東より)



6 第63次 SB002 完掘状況(東より)



7 第63次 SB003g(SP024) 遺物出土状況(南より)



8 第63次 SB003 完掘状況(東より)

写真図版 9



1 第63次 SB010 完掘状況(北西より)



2 第63次 SJ001 遺物出土状況(西より)



3 第64次 SB001 完掘状況(北より)



4 第64次 SB002 完掘状況(東より)



5 第74次 A区全景(南より)



6 第74次 B区全景(南より)



7 第79次 SB100 完掘状況(南より)



8 第79次 ST050 遺物出土状況(北より)

写真図版 10



1 第79次 ST050 完掘状況(北より)



2 第79次 SF185 完掘状況(東より)



3 第79次 SP135 遺物出土状況(南東より)



4 第79次 SP140 遺物出土状況(南西より)



5 第81次 SB035c 遺物出土状況(東より)



6 第81次 SB035 完掘状況(北より)



7 第81次 SX022 集石出土状況(南より)



8 第153次 調査区全景(北西より)

写真図版 11



第13図-2



第13図-5



第13図-6



第14図-20



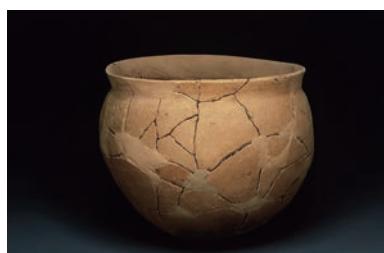
第14図-21



第14図-24



第18図-13



第24図-21



第26図-28



第26図-41



第41図-1



第41図-2



第41図-6



第41図-7



第41図-8



第41図-9



第41図-10

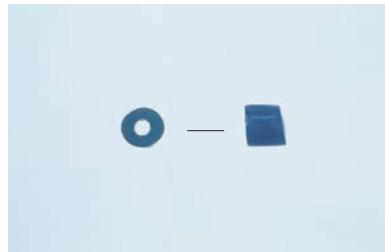


第41図-11

写真図版 12



第 41 図 -12



第 41 図 -13



第 48 図 -1



第 48 図 -3



第 61 図 -13



第 61 図 -16



第 62 図 -33



第 62 図 -34



第 63 図 -49



第 63 図 -51



第 63 図 -53



第 63 図 -55



第 63 図 -56



第 64 図 -63



第 64 図 -64



第 64 図 -66



第 64 図 -76



第 64 図 -78

写真図版 13



第73図-12



第73図-15~24



第73図-25



第74図-30



第74図-35~41



第81図-3



第81図-5



第81図-6



第81図-8



第81図-9



第81図-10



第88図-5



第95図-1



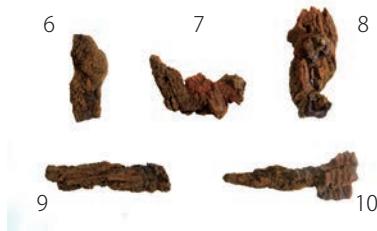
第105図-2



第105図-3



第105図-4



第105図-6~10



第105図-13

写真図版 14



第 105 図 -14



第 105 図 -25



第 105 図 -26



第 105 図 -28



第 105 図 -32



第 106 図 -40



第 106 図 -42



第 106 図 -43



第 106 図 -44



第 106 図 -47



第 106 図 -49



第 106 図 -50



第 106 図 -52 ~ 54



第 106 図 -57



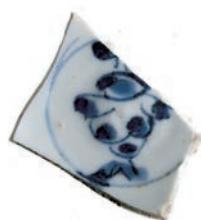
第 106 図 -62



第 115 図 -22



第 115 図 -23



第 122 図 -11

報 告 書 抄 錄

ふりがな	よこいせき						
書名	横尾遺跡10						
副書名	大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第140集						
編著者名	池邊千太郎 永井美香 木村藍子(株式会社九州文化財総合研究所)						
編集機関	大分市教育委員会						
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL(097)534-6111 FAX(097)534-0435						
発行年月日	西暦2016年3月16日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積(m ²)	発掘原因
よこいせき 横尾遺跡1次	よこいせきしょあさよこお 大分市大字横尾	44201 322158	33° 12' 24"	131° 40' 28"	19910501～19910930	1,400	区画整理事業
横尾遺跡2次	"	"	33° 12' 19"	131° 40' 27"	19910901～19911227	1,095	区画整理事業
横尾遺跡4次	"	"	33° 12' 32"	131° 40' 17"	19920521～19920526	52	区画整理事業
横尾遺跡14次	"	"	33° 12' 25"	131° 40' 26"	19930519～19930521	54	区画整理事業
横尾遺跡31次	"	"	33° 12' 24"	131° 40' 24"	19940602～19940707	300	区画整理事業
横尾遺跡33次	"	"	33° 12' 24"	131° 40' 26"	19940715～19940801	310	区画整理事業
横尾遺跡34次	"	"	33° 12' 23"	131° 40' 32"	19940711～19941025	2,000	区画整理事業
横尾遺跡63次	"	"	33° 12' 28"	131° 40' 26"	19970818～19971101	915	区画整理事業
横尾遺跡64次	"	"	33° 12' 26"	131° 40' 26"	19971015～19971211	610	区画整理事業
横尾遺跡65次	"	"	33° 12' 27"	131° 40' 26"	19971217～19971222	130	区画整理事業
横尾遺跡66次	"	"	33° 12' 26"	131° 40' 26"	19980120～19980202	200	区画整理事業
横尾遺跡74次	"	"	33° 12' 26"	131° 40' 23"	19990216～19990331	1,010	区画整理事業
横尾遺跡79次	"	"	33° 12' 20"	131° 40' 25"	20000605～20000830	1,700	区画整理事業
横尾遺跡81次	"	"	33° 12' 28"	131° 40' 25"	20000930～20001102	744	区画整理事業
横尾遺跡149次	"	"	33° 12' 40"	131° 40' 30"	20120820～20120821	15	区画整理事業
横尾遺跡153次	"	"	33° 12' 42"	131° 40' 19"	20150302～20150327	240	区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
横尾遺跡1次	集落	古代・中世	掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構	土師器・須恵器・瓦質土器・黒色土器・龍泉窯系青磁碗・景德鎮窯系青花皿・国産陶磁器・移動式カマド・製塩土器・土錐・石錐			
横尾遺跡2次	集落	古墳	円墳2基・石蓋土壙墓	土師器・須恵器・鉄劍・鉄刀子・瑪瑙製勾玉・碧玉製管玉・ガラス玉			
横尾遺跡4次	集落	近世	土坑・ピット	土師器破片・瓦質土器・近世陶磁器			
横尾遺跡14次	集落	近世	溝状遺構	土師器破片・瓦質土器・近世陶磁器・土錐			
横尾遺跡31次	集落	中世・近世	掘立柱建物跡・溝状遺構・ピット	土師器・国産陶器・国産磁器			
横尾遺跡33次	集落		土坑・ピット	弥生土器片・土師器坏			
横尾遺跡34次	集落	弥生・中世・近世	掘立柱建物跡・土坑・土壙墓・土坑・溝状遺構	土師器・瓦質土器・弥生土器・龍泉窯系青磁碗・白磁皿・朝鮮陶器碗・国産陶磁器			
横尾遺跡63次	集落	弥生・中世	掘立柱建物跡・土器埋設遺構・溝状遺構・地層横転遺構	弥生土器・土師器・瓦質土器・須恵器・龍泉窯青磁碗・国産陶器・土錐			
横尾遺跡64次	集落	中世・近世	掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・溝状遺構・ピット・地層横転遺構	土師器・瓦質土器・瓦器碗・龍泉窯系青磁碗・朝鮮白磁碗・国産陶磁器・土錐			
横尾遺跡65次	集落	中世	掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構・地層横転遺構	土師器破片・瓦質土器			
横尾遺跡66次	集落	中世	土坑・溝状遺構・ピット	景德鎮窯系青花皿・国産陶器・土錐・銅錢			
横尾遺跡74次	集落	中世・近世	溝状遺構・ピット・性格不明遺構・地層横転遺構	龍泉窯系青磁碗・国産陶磁器			
横尾遺跡79次	集落	古代・中世・近世	掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構・道路状遺構・柱穴・掘り込み地業	弥生土器・土師器・瓦質土器・龍泉窯系青磁碗・同安窯系青磁碗・景德鎮窯系青花・国産陶磁器・製塩土器・平瓦・鉄釘・鉄砲玉・土錐			
横尾遺跡81次	集落	縄文・中世・近世	掘立柱建物跡・土坑・土器埋設遺構・溝状遺構・ピット・集石遺構・地層横転遺構	土師器・瓦質土器・龍泉窯系青磁碗・朝鮮陶器碗・国産陶磁器・瓦・土錐			
横尾遺跡149次	集落	弥生	土坑・ピット	弥生土器			
横尾遺跡153次	集落	中世・近世	掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構・ピット	土師器・瓦質土器・国産陶磁器			

本書は、平成3年度から平成26年度に行なった、発掘調査のうち16地点の成果を所収する。今回の調査では、主に古墳時代・古代・中世の時期の遺構が占める。古墳時代の遺構については、第2次調査区において有田古墳の確認を行い、2基の円墳(1号墳・2号墳)を確認した。古墳の形態や構造を把握するためにトレンチによる最小限の調査を実施したが、2基ともに盗掘を受けていたため副葬品などの出土遺物は少なく、また1号墳主体部で検出された石棺は盗掘時に破壊され原形を留めていなかった。古代の遺構については、第79次調査区において、道路状遺構を確認した。道路状遺構は調査区の東側から西へ延び、途中で南へと分岐する。その分岐点となる2か所の柱穴から土師器の埋納が確認された。中世の遺構については、第79次調査区と第81次調査区から検出された溝は方形館に伴う北側と西側の溝にあたり、館の規模が約半町規模であったことが確認された。また第64次調査区、第79次調査区から行がほぼ同一方向の掘立柱建物跡が検出された。この建物群は方形館の中に構造された建物であると考えられる。

要約

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第140集

横尾遺跡10

—大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年3月16日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2-31